くノ一秘図

早乙女貢

長編忍法小説

くノ一秘図

早乙女貢

青樹社

0093—110617—3828　￥600

くノ一秘図

早乙女貢

長編忍法小説

早乙女貢

青樹社

0093—110617—3828　￥600

九州の名家である大友家の当主・義鑑のために、無惨な生涯をとげた父の恨みを、小菊は忘れることが出来なかった。しかし軽輩の小菊に義鑑を討つ手段がない。その為に、けがれのない処女の肌を、野獣のような欲望の前に供しても忍法習得は必要であった。荒々しい男の手によって肉体は見事なまでに開かれてしまった。肉を引裂く苦痛の中で、小菊は恍惚も陶酔もなく、ひたすら復讐を思い、歯をくいしばって耐えていた。屈辱と辛苦のくノ一忍者はこうして出来上ったが、大友家の当主を討つ事は、やはり大変な事であった。

早乙女　貢の大長編忍法！

好評発売中！

風魔忍法帖

本書は巨匠の著者が五年の歳月と二千枚を費して風魔忍者達の生涯を見事なまでに描き上げた忍法小説の決定版である。

軽装判・八八〇円

くノ一秘図
定価 600円
昭和48年12月25日発行

著　者　早乙女　貢
発行人　土井　勇

発行所　株式会社 青樹社
東京都千代田区三崎町2－6－7
振替口座　東京　47648
TEL (03) 261—9766・263—7267

落丁・乱丁はお取りかえいたします

くノ一秘図

長編忍法小説

早乙女貢

青樹社

くノ一秘図

早乙女貢

青樹社

くノ一秘図

目次

くノ一秘図　五
外法血ノ菊　八
狂い忍者　三
霞一党　三
翔ける肌　三
くの一誕生　六
淫夢の章　八
大友二階崩れ　九
忍法・猿がすみ　二三
闇に呻く肌　二元
影の匂い　三八
穴　四
忍法・さざなみ　五

くぐつ忍法帖

幻の女　一六
傀儡囃子　九
くノ一香　二〇
月の滴く肌　三
忍秘・濡れ褥　三元
魔笛若衆　三三
淫夢ふかく　三六
忍秒戦さ駒　三八
眠り毒花　四〇
忍法一夜茸　四三
黒い渦　四九
地獄の門　五二

装幀　村上　豊

外法血ノ菊

一

この日のために、特にえらんだ大輪の菊が、蓬庵のなかで異様なほど、はげしい匂いをふり撒いていた。

その芳香を嗅ぎ、その清純な花のすがたを見て——菊のなかにおのれを没我させることによって、苦しみを、怒りを、怨みを忘れようとした。

男の、熱いいまわしい、そのかたまりが、はじめてからだのなかに雪崩れこんだとき、小菊は、あまりの疼痛に、噛みしめた唇からさけびをほとばしらせた。

剛い髭が、頬を刺した。

ぬめった男の襞肉の唇が、なにかけものじみた声を洩らして、噛みつくように襲ってきた——

誰一人訪う者とてなく、窺う目とてない。幽谷の山房。独居修験の房内に、この無垢の肌の蕾をひらく喜びは、この壮漢ならずとも、とらえてはなすまい。

強いたのではない。

おとめのほうから来た。菊の花を持って……

この日を心待ちにして、すでに半年を経ている。彦山修験者大日坊道円の血は躍った。

おとめが、静かに身を横たえると、永年の修業も、木石と化する霊妙の験も、すべてを投げうって、ただの凡愚な情慾におのれを叛りたてた。

おとめにとっては、ただの野獣。いや、野獣と誹るのは、いささか酷かもしれぬ。

道円には、このいたいけないおとめの肌を、神聖と見る感情があり、それをいつくしむだけの気持はあった。

蕾を散らせるには、まず、唇と舌をもって愛撫する手間をかけたのは、淫らがましいとの非難をのぞけば、愛というにはばからない。

事実、人間ならばそうせずにはおれない、清らかさが、小菊にはあった。

まだ十四歳。

洗いたての葱かなんぞのように、やや蒼みを帯びて、あわれに痛々しく白い脚はさすがにひらくに難かった。

道円の唇と舌は、根気よく、その丘のふもとの泉を吸い、潤おした。

おとめが、花ひらくとき、よく動く舌と唾液にまさるものはないという。

羞恥と、困惑と、不安と、憎しみと——おとめの胸を波立たせる感情を、理知が抑制していた。

すべてを投げだすことのいさぎよさと、この屈辱と苦痛のかなたに彼岸を見出すかたい決意。

おのれを虚しくすることが、いまの小菊の頭を占めていた。

菊を見、香りに陶酔しようとした。

そのために持参したのである。いうならば毒消しの芳香であり、すがすがしい花弁の感触であらねばならなかった。

が、それを見る目、嗅ぐ鼻の機能も、あらあらしく浸入してくる男の肉体のまえには、力を失い、ただ朦朧たる混乱につつまれてしまう。

すがるように凝視する眼のなかで、菊のすがたがぼやけ、黄のいろが、霧散した。

男の、動物的な唇を、唇に受けるのはもとより、はじめてである。

それは、快感というには、あまりにも遠かった。

あるいは、世の男女のように、心が通い、情をからだでたしかめあう場合なら、それなりの感動があったかもしれぬ。

おのれを切り苛むようなこの破瓜は、生理の嫌悪と悲しみをもたらすにすぎない。

それでも——

瞥はひらいた。

どれくらい経ったかわからない。

汗臭い道円の巨体が、歓を尽くして動きをやめてからも、小菊は平常心をとりもどすまでに、かなりの時間を要した。

そのあいだじゅう、かっかっと熱気が頭を包み、眼は視覚を失ったように、靄がかかり、冷水と、熱湯を交互に浴びているような、気持の悪さだけが、残った。

はげしく、あさましい呻きを発して、ぐたりと巨体は動きをやめたが、しかし、かれの行為は、それで終ったのではなかった。

しっかりと、柔肌を抱きしめたまま、放そうともせず、

「——愛しや」

と、痴語を口走った。

「まことの、むすめじゃ、神の肌のようよのウ」

「……」

「もはや、放さぬわッ」

飽くなき力と昂ぶりで、唇をもとめ、ひとつかみで折れそうな、細いくびすじへ、ぬらぬらと舌を這わせる。

唾液はもう、枯渇していた。

二

その唇を舌に、全身を這いまわられて、蛇かなめくじにとらわれたような気味の悪さが残っていた。

小菊は、突きのけたいような、憎しみと、焦立ちをおぼえながら、

(——がまんしなければ……)

と、自分に言いきかせた。

(おんなのいのちを捨てたのが、なんにもならなくなる)

十四歳の幼なさながら、思案はおとなのものだった。

あどけない容貌、清純な肌、世馴れぬ物腰——外目には無邪気な童心のむすめそのものながら、心は冷たく、笑いを失っていた。

小菊が笑いを失ってどのくらいになるだろう。

笑うということすら、もはや遠い過去の夢のなかの出来事でしかなくなっている。

そうだ、もう五年あまりも——

道円の唇が、あきずに、胸にすべって小さくかたいふくらみを含もうとするとさすがに耐えきれず、

「行かなければ……」

と、拒んだ。

「これ、そう急がずとも」
「いいえ、あたし……」
おかし難い否定で、
「あのこと、約束してくれるのね」
「あん？」
と、道円は呆けた顔で問いかえしたが、すぐと、
「おう、あのことか。よいとも、よいとも。大日坊道円は嘘はつかぬ。そなたのような娘をだますようなことはせぬ。忍ノ術も教えよう」
「忍ノ術……」
小菊はつぶやいた。
「おぼえたい」
「さしたることはない。僅かの間に、そなたなら、一人前になれる」
「ほんとうに」
「この若さじゃけにな」
と、手が、柔肌をまさぐって、
「稚木のうちなら、なんぼにもひねりは利くものよ。辛棒するか、両三年」

そういう男の目には、毎日、この柔肌を抱けるという思いが、淫火をあさましく燃えたたせている。
「三年も！」
悲しげに、小菊は、首をふって、
「待てない」
「なに、すぐじゃよ」
「でも、もう二年も待ったのだもの……」
「三年ぐらい、なんじゃ。二年待ったのならあと三年……いやさ、それほどに急ぐのなら一年でもよい。半人前にはなれよう、仕込んでくれるほどに」
「だめです、ひと月でも！」
そう言ったとき、小菊の双眸をうるませて、露が盛り上ってきた。
悲しみに耐えるように、唇を噛んだ。瞼にいっぱいに盛りあがった涙は、玻璃を張ったように、眸を蔽い、ぴたりと閉じると、ながい睫毛のあいだからほとばしるようにふきこぼれた。
「これさ、泣くことはない」

道円はあわてて、
「何分にも、力になってくれようというのじゃ、泣かずともよい。おれは約束を守るぞ」
「——うれしい……」
小菊は涙を拭いた。
普通の女のように泣きじゃくり、甘えることを知らなかった。
真摯な眸で、
「——十日ほどのうちに、折を見て」
「……」
「そのときにお力を借して下さいまし。それだけでいいの」
「よいとも」
と、男は、裸の胸をたたいて、
「わしには日子の大権現、並に不動明王の加護がある」
「……」
小菊は身をおこした。
みだれた髪をかきあげる手つきに、少女から〝おんな〟になった変化のようなものが見えた。

道円もかすかに、胸の痛みを感じた。
おんなになったといっても、汚れた部分を、むこうをむいて拭い始末する姿体は、不馴れだけに手間どり、羞恥がいっぱいだった。
まるで、夢寝にそそうしたむすめが、父母の目をはばかって始末するような、そんなにいたいけなさがあった。
布には——べっとりと鮮血がしみた。
破瓜の刹那、噴いたのであろう。
小菊は、しかし、緘くはならない。むしろ、蒼ざめた。
丸太作りの粗末な山房は、巨体が吼哮し動くたびに軋み、戸を立てていたが、そのせいか、彼女が持参した大輪の菊は、花を散らしていた。
その花びらの幾つかに、小菊の体内から噴いた血がついて、むざんにべったり床に貼りついていた。
あたかも、ひとりけだかく清香を放つには、もはや汚辱にまみれたように——小菊はふるえる指で、そっとつまみあげたとき、また胸をしめつけ

てこみあげるものを感じた。
それをせめても救ったのは、
（――忍びのワザが助けてくれる！……）

三

山が、丘が、杉林が――颯々たる風のなかで、うしろへ飛んでゆく。
豊後富士の称ある由布岳の中腹から、鶴見岳の山峡を、小菊のからだは、雲に乗った如くに走った。
大日坊道円の姿も、常人の目にはとまらぬ。
柿いろの衣は風にひるがえり、さながら、一片の衣のみが、飛翔するかのような速度であった。
「送ってゆこう」
そういったかと思うと、小菊は軽々と片手抱きに抱きあげられたのである。
風に乗ったとき――
すでに道円は痴夢に狂う凡庸の男ではなかった。
豊前豊後筑前三国にまたがる霊山、大英彦山の峻峰、寒冷の岩上に刻苦研鑽の果て鳴動噴火、湧泉雲霧の変幻に測るべからざる神秘を会得、入我々入の境に達した修験者の忍法は、山も谷も、そのかみの役ノ行者のように走るのである。
由布岳から豊後の府内（大分市）まで、六里弱。
道円の跋渉ノ術は、半刻を要しなかった。
府内の東、長浜に小菊の家がある。
道円は府内の西口、毘沙門川に近い駄ノ原までくると、小菊をそっとおろして、
「約定は果す、高崎山でノロシを焚くがよい」
そして、風のように去った。
小菊は暫く、動けなかった。
下半身が、しくしく痛む。はじめて男に触れた疼痛であった。
いや、触れたというには、あまりに、むざんすぎる。
男のそれは、灼けつくような熱さで、鉄棒のように、固く、雄々しく、女の秘所にわけ入るや、陰核を弄ぶように、波打ち、呻き、躍り狂った。

やはり、忘れようと思っても、忘れられるものではない。
記憶は、その痛みが、判然とよみがえらすのである。
（――これというのも、お屋形の女に……）
秋草のなかに横たわっていたが、やがて、小菊はのろのろと起きて、府内へもどってゆくのだった。
秋の陽はつるべおとしという。
黄ばんだ陽が、かっと府内城の壁面を照らしていた。
城といっても、後世のそれとはいささか違う広大な地域に深い濠をめぐらし、石垣を築いてあるが、後のような天守閣などはない。
足組みの高い望楼、矢倉が四方に立ち、居館は豪奢な二階櫓で、その大屋根は府中の周辺どこからでも見えた。
防壁のある部分は甎瓦塀になっている。
他国では見られない。新しい建築様式であり、所々の矢はざまが、丸や三角の銃眼になっているのも、日本では初めてであった。
源頼朝の子孫と号し、九州第一の名流を誇る大友氏の居城である。
もっとも、その強豪ぶりは、府内に敵勢の土足を印したことがなく、壁や屋根に、矢尻の痕跡はない。
当主の大友義鑑にしても、一族老臣たちにしても、これだけの堅固美麗な城館が矢弾を受けるときは、
「落城の時」
の意気で、
「戦さは外へ出てするものぞ」
と、言い、三十里四十里の外へ転戦して悔いなかった。
府内城を見ている小菊の眼には、憎悪と怨恨の炎が黒く燃えあがる。
（きっと仇を討つ……お父上、草葉のかげで見ていて下さいまし）
十四歳のおとめは――いや、もはや、おとめではない。

異常な決意に女夜叉となった〝おんな〟である。小菊のからだは、その期待と闘志でわなわなと顫えた。

長浜の家へ帰ってくると、

「おや、小菊ぼうじゃねいか、どこへ行っていたね」

胴間声がした。

隣家の久六。紫垣の上から裸身がのぞいている。腰から上である。

巨漢であった。六尺五寸はあろう、肩巾あくまで広く、胸も厚い。雲つくばかりの巨漢だ。

こういう大男は、たいていそうであるように、少し頭が足りない。父親の久太は足軽だが、この男三十近くなって、足軽にもなれぬようだ。

身分は鉄炮方の小者。種ヶ島ともいわれる鉄炮が伝来したのは永正ごろで、大友家でも数年前から、これの入手と製造に熱を入れ、数百挺の鉄炮を備えるに至っている。大友の勢威が劣えず、薩摩の島津に抵抗して譲らぬのも、この新式火器によるところが多い。

久六は、片手では持てぬほどの重い鉄炮を一人で十挺も担ぐ。

怪力の持主だった。この力のおかげで、鉄炮方のお扶持にありついている。

「さっきまで、浜ノ市から人が見えて、待ってござったぞ」

「……」

「どこへ行ってたね」

やにっこく吸いつくような視線が、小菊の胸から腰へまつわりついた。

四

小菊は赧くなった。

大日坊の凌辱にも耐えた身も、それをのぞかれたような狼狽で、かっと全身が熱くなった。

魯鈍な男の、淫靡な眼は、ねばっこい。いつも唇にしまりがなく、時々、唾が唇の端で泡をため、顎を濡らすこともある。

それを手の甲で拭ってにやりとする。その唾は、小菊にあの——栗の花の臭いを放つ男の白い

粘液を思いださせた。

下腹部から頭の芯までえぐられたような疼きと、屈辱が、彼女をとらえた。

あわてて、我が家に駈けこもうとするのを、

「あれ、待たんかね、ことづけがあるだ」

久六はどなった。

小菊が立ちどまると、

「急ぐこともあるめ。丁度、お母が菜飯を作っただ、食ってゆけや」

小菊は、怒りにわなわなした。うす馬鹿のくせに、かけひきは心得ている。

「それがことづけですか」

と、冷たく問い返した。

「ひでえ、そう怒ることはねいだね。菜飯でも食うて」

「いらない」

小菊はさっと背をむけた。

そのうしろ姿の、まるい腰が欲情を誘ったかのように、久六は、ふいに、柴垣を飛び越えたのである。

「あっ！」

男のはげしい息を背後に感じて、小菊は逃げようとした。

庭は広い。といっても軽格の武士だからしれているが、それでも二百坪あった。その大半が、菊で埋まっている。

いま盛りで、黄菊白菊が乱れ咲いている。

逃れようとして、小菊がたたらを踏んだのは、この父の遺愛の菊を踏みにじることはできなかったからである。

父亡きあとも、この菊だけが、父の忘れ形身と思って、見よう見真似で育ててきた。

小菊という名をつけられたのも、父の菊への愛着を示している。

その菊を一枚でも踏みしだくことはできない。

その、ためらう小菊へ久六の手がのびようとしたとき、

〈——久六……〉

どこかで声がした。

それは、さして高くはなく、強くもなかったが、

妙にねばっこく、陰にこもって、情慾に釣られた男の足をひきとめた。

「だ、だれじゃ、邪魔だてするのは?!」

足をとめただけではなかった。

首に縄をつけられたように、たたたっとうしろ歩きに、引きもどされている。

宵闇の迫った菊畑のなかに、ぼんやりと、白い影が浮び上った。

ふりかえった小菊はぎょっとした。

幽鬼のような白い影は、手をあげ、久六をひきもどしているではないか。

(女!……)

黒髪が夕風にあふられて、おどろに舞いあがっている。

愕然とすると、小菊は次の瞬間、恐怖に襲われた。おもてを蔽って、よろよろと、その場に崩れおれ、突っ伏してしまった。

その耳に、久六の恐怖的な悲鳴が聞えた。愚鈍な男の小供っぽい、泣き声だった。

それが、ばたりと絶えたとき、

〈どうなされた?〉

のんびりした声がした。

おづおづと、小菊は顔をあげた。

菊畑のほうを見たのは、いうまでもない。

残照が消え、忍び寄るに早い秋の宵闇は、すでに庭ぜんたいに夕霧を漂よわせている。

乱菊のとりどりの花のいろが、とりどりの花弁が、異様なばかりに咲きほこっているだけで、亡霊のような影はない。

(目のあやまり……?)

ではない。

たしかに居た。久六が四肢をひき吊らしたように仰向けにのびてるのが、何よりの証拠だ。

だが、目に入るものは——

菊、菊、菊、燎乱たる菊ノ花。大輪が多かった。おおむね白と黄であったが、黒味の映えた明るい紅や、紫もあった。姿かたちもとりどりで、やわやわとふくよかな「走り」に支えられたような厚物、みだれ髪の羞じらいを見せた太管、ばさらな細管、奇嬌を誇る真管——厚物の一文字、美

濃菊、肥後菊、あらゆる菊が一苑に集められた観があった。

菊のように清楚に、菊のように香り高く、と、女人の心得を姿で教えられて育った小菊であった。

ぼんやりと見まわす小菊の耳に、あの声がまた聲えてきた。

〈早よう、家のなかへもどるがよい……〉

「え?!……」

〈そなたは疲れている〉

小菊は、ぎょっとした。

肉体の変化を見ぬかれたような、大日坊に抱かれている姿を見られたような——羞恥で居たたまれなくなった。

「だ、だれ?……」

五

陰の声は、応えるかわりにくりかえした。

〈そなたは疲れている。休むがよい〉

「……」

「休むがよい」

「だれ?」

〈英彦山修験に忍法を習おうなどと、考えをおこさぬがよい〉

あっ、と小菊は、息を引いた。

知っている!

そのおどろきに、さらにかぶせて、

〈忍法をおぼえて何とする?〉

「……」

小菊は身を固くした。あきらかに、その陰の声は、小菊のすべてを知っている。

道円にともなわれて、彦山忍法の真髄風に乗った行動を、常人が知るはずはなかった。

とすれば、その〝陰ノ目〟は、小菊を看視していたのではないのか。

〈やめるがよい〉

さとすように、その声は言った。

〈主君に怨み霽らしなどとは……やめることだ〉

久六の行為を忍法をもってやめさせたのは、好意ではなかったようである。

その意見を与えるためだったのか。
呆然としながらも、小菊は菊畑から、目をそらさない。
声は、そこから聞えてくるような気がする。
さっきの〝白い影〟の残像が網膜にあるからだろうか。声はたしかに菊畑の、どこからか聞えてくる……すでに庭は昏れていて、白や黄の波色だけが、仄白く浮いているのであった。
〈大それた考えをおこすと……そなたも無事でいられない〉
「え?! でも、父の仇……」
〈その考えを、おやめ〉
ふっと、そのとき、小菊は奇妙なことに、語尾に女のそれを感じたのである。
正常の声ではなかった。忍者のみが使うという〝風音〟であろう。たとえ、久六の意識が恢復しても、いまの声は、かれの耳には聞えないであろうと思われた。
ひろびろとした菊畑の、どこから、その声が流れてくるのか、するどい箭のように、彼女の耳にだけ、とびこんでくるのか。
〈所詮は蟷螂の斧、傷つくのは、そなたじゃほどに〉
語尾が、すーっと、遠去かってゆくようであった。
「あ、待って……」
菊畑にわけ入ろうとした小菊の目のなかで乱菊が、ぼやけて、すーっと消えようとした。
立ちくらみに似ていた。
しかし、それは、ほんの数弾指にすぎなかった。
はっと我にかえったとき、宵闇は、黄菊白菊をゆるやかに揺すっているだけで、人の気配は全くなかった。
「あ、どこに……」
小菊は表の通りを見、走りもどって裏の露地をのぞいた。
垣根越しの竹林と雑木にはさまれた暗い道を、投げ頭巾の針売りが遠去かってゆくところだった。
(あ、あの男は……)

見たことがある。
針売りだった。その男がしかし、久六を眠らせ、彼女に忠告を与えた忍者だろうか?
(気さくな針売り……)
としか思えなかったが、口の達者な、女のようにうすっぺらな男だった。
ふた月ほど前、盛夏に小菊は、乱菊にかくれるように盥を持ちだして行水をつかうことがあった。
そんなある日、この針売りが来て、
「おとなりの仁王さまが、昨日、妙なことをしていましたよ」
と、教えた。
「垣のところからこちらをのぞきながら……ね」
淫らな手つきをしてみせた。
久六が自慰にふけっていたというのだ。時刻は丁度、彼女が行水をしていたころになる。
小菊は肌をけがされたように、ぞっとしたのをおぼえている。
(むすめ一人と思って、みんなで、馬鹿にする……)
おとめの潔癖は、無性に腹が立った。
これも、父母が死んでしまったからだ、と思った。
小菊が記憶している父の姿は、菊の世話をしているところばかりだ。
花を愛する者に悪人はいない。父の藤兵衛は軽格でおもてむき役職は御庭番頭であった。
花を愛するせいか、と単純に小菊は思っていた。世間でもそう見ていたようである。
乱世には珍らしい温厚な人がらと、近所ではほめていた。
かなり親しく見る者でも、
「若年の折には、戦場往来の強者であったがのう、兜首をあげたことも尠くはないしの……老境に入って人間が丸うなってか」
などと、酒機嫌でいうことがあった。
小菊は晩年の子である。したがって、よく父のことは知らない——
父もまた、小菊には、もう一つの自分を、隠し

ていた。

あるいは、かれが天寿を全うしたなら、小菊は他の多くの同僚などと同じように知らずにすんだかもしれない。

藤兵衛は、主君義鑑の直属の隠し目付――忍びノ者だったのである。

狂い忍者

一

小菊の父藤兵衛が、命じられた役目というのは、嫡男義鎮を殺せ、ということだった。

いかに乱世でも非道な下命である。

大友家の由来は前にちょっと述べたが、頼朝の後裔かどうかは別としても、鎌倉時代にすでに九州では比肩する者のない名家だったのは事実だ。

南朝の菊池武朝と交戦七十二回に及び、遂に勝ってから名実ともに九州の覇者となった。

中興の祖、親世である。かくて豊前、豊後、筑前、筑後、肥前、肥後の六ケ国を治め、九州探題職を獲得した。

義鑑は、数代の裔である。はじめ親安、次に親教、後に将軍足利義澄の諱字を賜い、義鑑とあらためた。母は阿蘇大宮司の娘で従四位下に叙され馬頭修理太夫に任じた。豊前、豊後、筑後、肥後を治め巨富を擁した。南蛮船の入港を府近近郊の神宮寺浦に許し、交易でさらに富裕となっていたが、懐が温かくなれば、身内に思い生ずで、家庭内にごたごたが起きた。

というのも、義鑑が後妻に巻かれてしまったことに発する。

対外的には偉大な政治家、事業家でも、家庭では意外に弱い者が多い。ことに後妻となると、たいてい、若く、きれいで、甘やかしすぎるせいもあって、お家騒動のもとになる。

この例も、それには洩れない。

義鑑にはすでに、正妻坊城氏とのあいだに嫡子義鎮があったが、早くに歿り、二度目に娶った妻も一子をもうけて亡くなり、三度目の妻に、また

三男が出来た。

後妻にしてみれば、わが子を嫡子にしたいから、義鎮のことを悪しざまに言う。豪勇の義鑑も褥の上では女の言いなりになってしまう。

その子聡明を次代に決め、義鎮を廃嫡しようとした。

もっとも凡愚な道に踏みこんだわけである。

ところが名家だけに、老臣重臣が多い。義鎮は気が荒く殺伐を好む若殿だが、乱世には、こうした気性は大名たるもの必須なことで、廃嫡の理由にならぬ。

(いっそ面倒じゃ、殺ってしまえ)

一婦人にそそのかされて、長子を殺させようというのだから、いかに乱世の異常な時代とはいえ、女の口は恐ろしい。

義鑑は藤兵衛にひそかに命じた。

「殺せ。ただし、変死を装わせるのじゃ」

至難であった。が、藤兵衛は黙々と、拝揖している。

変死は毒殺に如くはない。が、義鎮のほうでも、その点油断はない。一度ならず失敗した藤兵衛は、ついに、義鎮の愛馬に手を加えて、暴走させようとした。

ところが、これが義鎮方の忍者の目に止ったのである。

馬が暴れだした刹那、忍者の《八方縄》が暴走をとめ、

「彼奴だ!」

と、藤兵衛へ殺到した。

藤兵衛が圧えられたのを見るや、義鑑は、

「乱心しおったか、こやつ!」

馬をあおって、蹴殺してしまったのである。

いうまでもなく、責め問いされる前に、口をふさいだのだ。

あるいは、逃げようと思えば、逃走できたかもしれない。

藤兵衛が死に甘んじたのは、忍者としての失敗を恥じたからにほかならない。

藤兵衛は、乱心者として、主君の馬蹄を顔、胸に受け、血へどを吐いて死んだのである。

小菊が、その事実を知ったのは、三月と経たないうちに、母があとを追うようにして死んだときだった。

家中の冷たい目に耐えきれず——事実を秘めておかねばならぬ苦しさも、負担だったのであろう、母は気が狂ったようにして死んだ。

が、臨終に小菊にだけは、藤兵衛が主君の隠し目付だったことを話して、安心したように死んでいった。

小菊が、幼な心にも、

（ひどい殿さま……）

と、復讐を誓ったのは、こうした理由からであった。

（あたしにとっては、優しい花好きの父なのに……）

菊の世話をしているとき、小菊は悲しみを忘れた。

父と一緒に、作業しているような安らぎと楽しみがあった。菊は彼女に、もの言い、問いかける。花との語らいは優しく、美しく、けがれがない。

虚構も、虚栄も衒いも、なかった。手入れが悪ければ、花の育ちが悪い。手塩にかけて育てればいい花が咲く。

真実だけが介在する。菊花が与えてくれる安らぎは、汚辱と、血なまぐさい乱世の様相から、彼女を救った。

だが——

いま、菊花と顔をあわせられないような、忸怩たるものが、小菊の裡にあった。

（——あたしはもう、けがれてしまった。来年は、もう菊が咲かない……）

いや、どうせ、来年まで生きていないのだ。

小菊は部屋に入ると、鎧櫃から一ふりの脇差をとりだした。

銘はないが、父が大事にしていたものである。すらりと抜くと、厚重ね鍛えの、素人目にもかなりの作と思える刀身が、斜陽の余光を微かに吸って、淡く光った。

「お父さま、必ず……」

刀身の光りも、小菊の眼に燃えあがったきらめきのまえには鈍いものだった。

二

愚図愚図してはおれない。

久六が言った、浜ノ市のひと、というのは、遠縁に当る回船問屋で、大小数十艘の船を持ち、豊前豊後の沿岸一帯に、手びろく商売をしている国東屋伝右衛門の手代、足助にちがいなかった。

今年の春ごろから、

「一人住いでは何かと不自由であろ、国東屋にくるがよい」

と、親切ごかしに手をさしのべてきていたのだが、伝右衛門の好色は誰知らぬ者はない。肚のうちはわかっている。御屋形の御用達として、金も力もある。これと思った女は、娘であれ、人妻であれ、ものにせずにはおかないという。

生前、父の藤兵衛は、やつは人間の皮をかぶったけだものじゃ、と嫌い、一族ながら交際せず、清貧に甘んじていたのである。

小菊の美貌に目をつけて、親切ごかしの誘いのうちはまだよかった。

優しい顔にも似合わず、父の一徹な気性を受けついだ小菊は頑として誘いの手に乗らないと見ると、

「藤兵衛どのには、貸銀があった」

などと、古証文を持ち出してきたのだ。

真偽はわからない。藤兵衛の筆だといわれれば、似ていないこともない。公事訴訟となれば、こちらは軽格、乱心者の遺児だし、むこうは顔がある。苞苴を惜しまない。国東屋の勝ちは目に見えている。

親の借財は、子が払うのが慣わしで、

「旦那の世話になれば、この借銀のことなど棒引きじゃ。お言葉に甘えたほうが、なんぼよいことか」

と、足助は苦労人らしい攻め上手で、じわじわと、小菊の手足をからめてきたのだった。

そうして、とうとうひと月後の八月末日までに銀六貫目が払えなければ、国東屋の世話を受けるということに話が決ってしまったのである。

足助がくるのも支度のことや、後始末のおためごかしで、看視をかねてのことだった。

以前、府内で幻妖の術を見せて、

「彦山の天狗やし」

と、恐れと好奇の眼で見られていた修験者大日坊道円に、処女の身を投げだしたのも、その切羽つまった気持のあらわれだった。

一昨年、父母の死後間もなく、小菊は、忍のワザを、道円に乞うている。

が、この幼ない美少女を、道円は笑って受けつけず、

「そなたが、おとめの蕾を、おれにくれるなら、話に乗ろう」

と、一蹴していた。したがって先日、突然その条件で頼みに来たとき、道円は驚き、そして喜んだものだった。

もうあといくらもない。

愚図愚図してはおれなかった。

小菊は御屋形——大友左馬頭修理太夫義鑑の動静をさぐりはじめた。

あの忍者の忠告は、忘れた。

(どうせいのちはもう……)

捨てたのだ。恐くはない。

義鑑が、城内にいるかぎり、手は出せない。他出を待つしかない。

義鑑は、戦国荒大名らしく、鷹野、猪狩りなど、大いに好む。武将たるもの、山野疾駆と指揮の勘と鋭気を養うとして、徳川家康や織田信長も大いに好んだが、義鑑まだ五十前だから、壮年の気持だ。

季節におかまいなく、飛びだす。

が、間の悪いときはしかたがない。義鑑は先月末から、煩に疔を患らって閉じこもっている。

三日と寝たことがない壮強の身では全く珍らしい。

小菊はじりじりする思いで、待った。

(——三日経った……)

(——七日経った、ああ、早く治ってくれないかしら……)

(十二日……もう、半月しか残っていない)

(二十日！　あと七日しかない……)

祈るような気持だった。

事実、神仏に祈った。

その祈りがかなえられたかどうか、あと五日というときになって、漸く面疔が治癒したらしい。

元気になると、もう健康なからだは、秋日の山野を馳けめぐりたくなる。

この二十八日に、義鑑が鷹野に出ることを突き止めた。

その前日、小菊は高崎山へ行った。高崎山は府内の北方二里。山というより丘に近いが、突兀たる山容である。その頂上で、小菊は狼煙を焚いた。

狼煙の焚き方は大日坊に教えられている。狼糞をもって薪に加えれば、煙よく立ちて烈風あるも斜めならずという。

その法、竹三本を結びてこれに藁を懸け上に薪を盛り、火を下に置き、しばしば水を注ぎてその燃焼を制す。

あるいは、生木の葉を推積して、狼糞を和して点火するもので、これに樺皮、松花等を加えて、色ノロシとなし、あらかじめ定めた合図を送るわけだ。

小菊が焚いた狼煙は、いうまでもなく決行を伝えるものだ。

彼女は、先に二度あげた。

間を置いて、一度——返事を待った。

が、返しの狼煙はあがらなかったのである。

秋晴れのいい天気。遠望は利いた。空はあくまでも澄みきって、青空に白雲が浮いている。

こちらの狼煙はまっすぐに立ち昇っている。見えないはずはなかった。しかし、返事はなかった。いつまで待っても——

「ああ……」

小菊はよろよろと崩れ伏した。

三

明日！

明朝に迫っているのだ。彼女の足は、ここへくるまでが精一杯だった。

先日、悲壮な決心で由布岳の山房を訪れたときは、二日がかりで行っている。

（――ああ、もう父上の仇は討てない……）

絶望が彼女をとらえた。涙も出ない気持だった。

そのとき、ふいに誰か近寄る気配がした。

「――あっ?!」

ふりかえった眼の中で、久六の魯鈍な顔がにやりとした。

「何をしているだね?」

「……」

「何のノロシだね?」

久六は大きなからだでしゃがんだ。

あの菊畑での醜態に懲りもせず、小菊を狙っていたのか。こんなところまで尾行して来るのは、大変なことだ。馬鹿だから出来るのか? 小菊への執着の強さも否定できない。

久六は目脂のたまった眼で、小菊をのぞきこみ、まだぶすぶすと燻っている薪を見、舐めるように、視線をもどした。

「さっきから見ていただ」

「……」

「様子が変だで、あとをつけてきただあな。どこに合図しただね」

鈍い頭でもそれくらいはわかるらしい。

軍中合図の方法でノロシは最も多く使われている。

「どうしたの、それが」

と、小菊は怒りのまま、

「誰にだっていい。おまえなんか知らないこと」

さっさとこの場を離れようとした。

山頂にはほかに人影はない。むしろ、この動物的な男が、これまで黙って見ていたのが不思議なほどだ。

「こ、小菊ぼう」

烈しいあえぎが迫った。

おんなにはなっていても、世故にうとい。あっと、身をひこうとしたときは、巨きな腕で、抱えこまれていた。目の前に、汗臭い胸があった。

「あれ、何をするの!」

「おめえが好きじゃけん」

理屈も情緒もなかった。

慾情だけが、炎を噴き、牙を剝いて、柔肌を襲った。

人並みはずれた巨体と、可憐なばかりの小鳩だ。猛禽に見込まれたにひとしい。その巨大で兇々しい爪にがっきりとつかまれて身動きならない。

「お放しッ」

「お、おら、前からおめいが好きで、それで、このあいだも、あんなことに……」

胸は固かった。からだは重かった。まるで巨岩か、小岩にのしかかられているような。

あばれる小菊をおさえて、手が裾をわけた。

叫んでも泣いても、救いはこない。人里離れた山頂だ。

淫猥な涎れにぬらぬらした唇が目の前に迫ったとき、小菊の胸に女の知慧がひらめいた。

「久六、お待ち!」

それは放して、という拒否とは違って聞えた。

情慾に狂いかけた男の耳にも、甘美なものに聞えた。

「――こんなところでは、いや!」

「こ、小菊!」

「ね、おねがい、ここでは……いや」

「おめい、どこならいいんじゃい、わしゃもう……」

「こんなところで、そんな。おねがい、待って、ね、逃げやしない、逃げやしないから」

「逃げるんじゃろ、小菊ぼうは悧口じゃもんな」

「逃げやしない。ただ、こんなところでは……」

「誰も来るもンけ」

「木樵りにでも見られたら……」

「な、なあに……来んて、来んて」

「いいえ、見られます」

小菊の声は、喘けるようなひびきを帯びていた。

「おまえも見られています」

「え?! なんのことじゃい」

手がゆるんだ。

「この夏……」

「ふうん」
「柴垣からのぞいているのを」
「え?!」
「木樵りではない」
久六は水を浴びたような顔になった。
「針売りよ……」
「……」
「見られたのよ、おまえのみっともない姿を」
「そ、それも、おめいを好きで、しょうがないもんに……」
久六は、自分の言葉にあふられたように、あの夏の日の、菊葉のかげの白い肌を思いだしたように、歯を剝きだして、くびすじへ顔をこすりつけてきた。
〈——させるがいい……〉
そのとき、また、あの声が聞えたのである。

四

あの声にまぎれもなかった。府内の城下なら知らず、誰一人、目撃者などいようはずがない。小山の山頂なのに。あの、風の吹きぬけるような声が、
〈思いのままにさせるがよい〉
と、言ったのだ。
小菊がぎょっとしたのへ、その声は、さらに揶揄をこめて、
〈させるがよい、抱かせるがよい……〉
と、言った。
〈その枯木なと〉
声は、小菊にだけ聞えるのか、久六は言われる通りに、倒れた枯木に抱きついた。
〈ふっふっふ……忍法《うつろ木》たっぷりと、淫に狂うがよい〉
呆然とした小菊にだけ聞える声なのだ。
小菊は、裾をなおし、衣紋のみだれをなおして、飛び離れたが、その声はどの方向から聞えてくるのかもわからぬ。彼女のたたずむ杉の梢か、足もとの草むらか。はたまた、巨岩のかげか。
あさましい久六の姿体は、およそ、娘の目には正視できないものだった。

小菊は逃げるように走りだした。
その耳に、あの声は追いかけてきた。
〈大それた望みは捨てるがよい、主君を討とうなどとは考えぬが、身のためじゃ……〉
小菊は耳をふさいだ。走った。
そんなことがあったにも関わらず、小菊は、久六の前にからだを投げだしている。
賢しらな知慧とはいうまい。
大日坊道円に裏切られたと思った小菊には、父の仇を討つに必要な助力者をもとめるのに女の操を投げだすことには悔いがなかった。いや、それしか、手はなかったのだ。
十代も半ばの娘が、九州一の大々名を討つためには、惜しんでいいものなどあろうはずはない。
いうなれば、あの奇妙な声——奇ッ怪な忍法は、いらぬ邪魔をしてくれたようなものだった。
小菊にとって敵か味方かわからない。
主君といっているところでは義鑑の扶持を受けているのか。ならば、小菊の野望をなぜ傍視しているのか、乱世なのだ。疑わしいというだけで殺されても当然の時代に、看過しているのみか、凌辱されそうになるのを二度までも助けている。
あれが、大日坊でないことは、はっきりいえる。
大日坊の関係でないことも。
その真意を詮索しているひまも、小菊にはなかった。
久六にねじ伏せられて、
「こんなところではいや」
そう叫んだ言葉に嘘はない。
同じことなら、自分に納得できる場所で。そして、その汚辱が、目的に力を藉すものでなければならなかった。
小菊が、ふたたび、その汚辱の刻に甘んじたのは、長浜の家の菊畑の見えるへやだった。
男の前にからだを投げだし、目は菊を見、心は仇敵を呪っていた。
その呪いだけでも、義鑑が狂死するかもしれないほど。
星明りが、菊の群れを、おぼろに浮かしてい

る。

厚物咲を見まもっている小菊の瞼が、時おり、ぴぴッと、痙攣するのは、狂ったような久六の歓喜が、女体のいつくしみを忘れたときだった。

大日坊に触れられ、ひらかれた——最初のときの、未知なものへの恐怖や、不安や、かすかな期待などのすべてが失われていた。昂奮も、羞恥すらも、かなぐり捨てていた。

執念が、いたいけない少女を、復讐の鬼と化していたのである。むしろ憐れでいたましい。

女体の生理の微妙さは、したがって、ただ被虐の感覚でしかなかった。浅ましい嵐の吹き過ぎるのを、小菊はひたすら唇を噛んで、待った。

「——おう、おう、よい嫁御じゃ、おらの嫁御」

久六は、うつつに、そんな言葉を発した。

褥に身を横たえるとき、

「夫婦になろうよ」

と、言いだしたのは、小菊のほうである。

「おまえにはじめてのものをあげるのだもの」

そう、嘘を吐いた。

「なるかえ、夫婦に」

「おう、おう、なるともよう、三国一の花嫁じゃ、久六はなんと過報者だわな」

たらたら涎れを垂らして、久六に否やはない。

「夫婦なら、あたしの頼みを聞いてくれるかえ」

「なんでもいうがええ、なんでもするぞな」

「ほんとうに」

「ほんとうじゃ」

「ほんとうね……」

「く、くどいわな。このいのちでもくれてやるわな」

久六はもう意馬心猿を制禦出来ない。みにくく前を突っ張らせていたが、許しを得るや赤張った肉塊を露出して、奔馬のように、襲いかかってきた。

男というけだものは、なんと哀しく、あさましいものか。だが、この男の力を利用しなければ小菊の望みはとげられない。

五

（——讐を討つために）

この淫靡な嵐を甘受しなければ、所詮、ひとたび大日坊の手に汚された肌である。

（一人も二人も同じことだもの……）

しかし、自棄ではない。

目的のために、信念がますます固められていた。雨が降って地が固まるという。その雨か。淫雨に甘んじねばならぬのは、うら若い娘の身の宿命だった。

嵐は、はげしく、そして短かかった。

おぼろ闇のなかの乱菊が、哭き、揺さぶられ、眼の中で消えたとき——それは、終った。

馬鹿力があるだけで、その痴呆を噛われている久六は、いままで、まともな愛を得たことがない。

況や、小菊ほどの美女が、それも一生に一度の処女を与えてくれた！

その感激は、小菊の計算よりもはるかに深い。

愚鈍だが、それだけに純粋でもある。久六は、時々、狂喜したとき以外は、小菊の肌をこわれものにでもふれるように、いたわった。

ことが済んでから、あと始末を入念にした。揉み紙をつかい、布をつかい、さらに、唇と舌をつかった——

犬のように。

忠実な犬になっていた。巨きな犬。

その行為が、〝凌辱〟の意識から小菊を救ったといえる。

褥から身を起したとき、小菊は、藤兵衛の娘としての威厳をとりもどしていた。

「——久六」

肉体の交わりあった仲のみが持つ親しみと、悲壮な目的意識のいかめしさが、小菊の双眸に複雑ないろをたたえていた。

「夫婦の仲となったからには、わたしにいのちをくれるといいましたね」

「ああ、ああ、おら嘘はいわぬ」

久六は嬉しげに叫んだ。

「おめいのためなら、英彦山の天狗でも相手にするぞな」

胸をはだけると、ばっしばっしと、両手で打ち、隆々たる力こぶを作ってみせる。
「力なぞ。いくらあっても役に立たない」
「へ……そうかいの」
「おまえは、鉄炮が撃てるでしょ」
「そう……撃てるわな」
「鉄炮を二挺、ぬすんできておくれ」
「げッ、て、鉄炮を二挺！　な、なにするだね」
「玉薬とやらもです」
「ふう……そりゃ、おめえさまのためなら、のう。じゃけんど、鉄炮蔵はとてもきびしゅうての」
「持っておいで」
小菊はくりかえした。

そのアテにした鉄炮がどうしても持ち出せぬとなったとき、もう時刻は残り少くなっていた。
「――おら、蔵番をしめ殺しても、と思ったがよ、五人も六人もいたで、それで……」
穴があれば入りたいように、大きなからだをすくめて、おどおどしている。

小菊は血が引くような気がした。
「ああ、どうしよう……」
おもてを蔽って、うずくまってしまった。

六

大友義鑑はそのころ、府内城を出た。
近習小姓鷹匠など二十余名の供廻りで、西方、一里賀来のあたりを猟場と決めていた。
鷹野には、あらかじめ鳥見衆が獲物の多そうなところを探してくる。
鳥見役、案内、と呼ばれる小者たちは、いつも近在をめぐって鳥の群れとぶさまを見、その種類などを記して、下命あり次第ただちに返事できる態勢をととのえている。
ことに、このたびは、病気快癒の祝いをかねているから、鳥見役、鷹匠も張りきっている。
府内川（大分川）の上流で、丘陵が秋空の下にうねり、早くも紅葉をちらつかせた秋山のすがたは、義鑑に久かたぶりの爽快さを与えた。
「よい天気」

何度か空を仰いでこう言ったのは、よほど屋形に閉じこもっていたのが苦痛だったらしい。
「日本晴れだの」
「御意」
「吹雪めも喜んでおるわ」
愛鷹の胸をなでてやりながら、義鑑は上機嫌だった。
獲物も尠くなかった。
早朝に府内城を出て、猟場の賀来についてから二刻ほどのあいだに、十数羽を得た上、兎までおまけがついた。
鷹の仕止めた獲物を拾いに疎林の中へ駈けこんだ犬におどろいて野兎が飛びだしてきたのだ。
犬は畜生のあさましさで、兎を追いはじめた。
兎は方向を誤り、義鑑のほうにむかって、ぴょんぴょんはねてきた。
「ソレ、よきもの」
小姓たちが駈けだそうとするのを、
「弓！」
義鑑はどなった。

「は！」
ついと、重藤の弓を一人がさし出す。
手に触れた。が、その小さな動物を、矢刺しにするのは、大人げないと思いかえしたか、
「要らぬ」
言下に馬におどりあがった。
馬腹を蹴って栗毛を走らせると、兎も、はっと気がついて、方向を変える。
兎も早いが、馬にはかなわない。たちまち追いすがった。義鑑は、左手で栗毛を馭しながら、さっと手を翻えす。
手裡から、キラリと何やらほとばしった。
兎はもんどりうって、段落を転々したが、灌木にぶつかって、ばたりと、倒れた。
走ってきた小姓が、拾ってくる。
「殿、み、耳が……」
兎の両耳をみごとに小柄が縫いとめていたのである。
小姓はこのワザに恐れ入ったように、瞠目して言葉もないようだ。

「ははは、片耳はずれたと思うたが」
義鑑は肥躯をゆすり、得意を満面にあらわしてはばからない。からだを揺すって豪快な哄笑をふり撒くと、
「数馬、汝れが女中どもに手をつけでもすると、かくの通り両耳縫うてくれるぞ、ははははは」
「おたわむれを」
数馬と呼ばれた小姓は、女に見まほしい顔に朱を散らして、うつむいた。
兎の耳から、小柄をぐいと引きぬいて、
「拭え」
と、差し出す。
その瞬間、ぎくりとしたように、眼が小柄に吸いよせられたのである。
「や、これは……」
愕然とした。
違う。愛用の小柄ではない。見たこともない銀象嵌の瑞雲模様。義鑑のものは、杏葉紋をちりばめた金象嵌で華麗な大名道具だ。
「おれのものではないぞ」
あわただしく、義鑑はそのあたりを見まわした。
「どやつが！」
小姓か近習が小生意気な手出しをしたのかと咄嗟に思った。
そう思うのが当然であり、それ以外には考えられなかった。
御狩場は堅く御法度仰せ付られ、御狩ならでは猟師入ることなし、とされている。
不埒ないたずら者が入っていることなどあり得ない。
「どやつがやったぞ、名乗り出ろ！」
そうどなりながら、家臣の誰でもないことを、よく知っていた。
そういう僭越なことをする者もいなければ、それだけの腕前のある者もいない。
近習たちはばらばらっと走り寄って、主君を守る態勢になった。
これも、不意の矢弾を警戒したのである。
「乱波か?!……」

義鑑は目をむいた。
手練れの忍法。姿もなく影も見せず、義鑑の腕を嘲笑うように、小柄を飛ばし、兎の耳を縫いとめたのだ。
「おれの小柄は?……」
探す目にキリラと光って応えている。なさけないことに雑木の根方に突っ立っているではないか。
「ぬッ、こけにしおって」
顎をしゃくった。
数馬がすっ飛んでいった。手拭で拭いながら馳せもどってきた。
受けとった義鑑は一瞥するなり、さらに渋面つくった。
小柄にはあきらかに、金属の掠めた傷があった。
兎にとどく寸前、あやしの小柄は、これをはねとばして、両耳を貫ぬいたのである。

霞一党

一

「霞、霞ノ者は居らぬか！」
思いだしたように、義鑑は喚いた。
疎林に風が走った。
〈これに……〉
窪地のあたりで声がした。草むらが動いて一人の老人があらわれた。
朽葉いろ道服を着、竹笠をかぶっている。そこらの隠居が、散策にでも行った帰りとも見える姿である。
忍者は、義鑑以外の者の前では決して素顔を見せない。竹笠の下は、手拭でくるんでいる。
「汝れは、何をしておったのじゃ、いかようなやつが、ひそんでいたぞ」
〈重々、お詫び仕りまする。耳助が走ってござる〉

「いかようなやつか」
老人の竹笠が揺れた。見なかったというのであろう。
その笠の前と左がバッサリ割れている。
それは切口も妙に生々しく見え、不埒の乱破者が、刀をふるって逃げた次第を想像させた。
さして深いとはいえない林の奥で、その葛藤があったのか。
耳助が追っているとは、すなわち取逃したことだ。
義鑑の身辺を常に守る立場にある霞ノ一門にして、これは落度である。
たとえ、その瑞雲の柄が、義鑑を狙わなかったとはいえ、これは、あきらかに挑戦であり、豊後守護たる大友二十代当主義鑑を侮辱した行為にちがいないのだ。
その忍者のひそみと、そして不遜な行為を阻止できなかったのは、霞ノ忍者たるもの、責めを負わねばならぬ。
「かならず、ひっとらえい」
と、割れ笠を叩きつけるように厳命して、義鑑は馬首をかえすと、ぱっと走りだした。
「ソレ」
馬腹を蹴りざまに、投げ捨てたその小柄は、笠をかすめている。
身をひねって、さっと受けた老人は、ふかぶかと拝揖した。
馬を追って近臣たちが走り去ったあと、老人は身を起した。
手の小柄へ視線をおとすと、首をかしげた。
〈——蔵人〉
一もとの槇から、影がはがれた。
これは一つ刀を差した牢人風の壮者である。
〈その小柄、見おぼえないか〉
〈——見たような気もするが……〉
〈われらの眼を掠めるとは、恐るべきやつじゃ、いずれの忍法と見たぞ〉
〈わからぬ〉
〈まさか、左様なやつが潜んでいようとは、まことに不覚であったわい〉

〈霞ノ忍法……裏をかかれたのう、烏よ〉
〈感心してもおれぬわ〉
吐きだすように、烏は言った。
霞ノ忍者。
その連中のことを、馬を走らせながら、義鑑は漠然と考えている。
(忍びノ者か……奇妙な化け者どもよ)
義鑑が忍びノ者を使うようになったのは、古いことではない。
この霞ノ一門は、大友氏の被官朽網下野守親満の手飼の者だった。
天文十三年——すなわち五年前、親満は義鑑の暴虐に耐えずとして突如烽火をあげ、律院府内の御館に押し寄せた。
親満としては、軍勢の多寡では大友氏にかなうべくもないが、奇襲と、そして、霞一党の変幻出没のワザをもってすれば、叛逆は可能と見たのであろう。
だが計画は狂った。霞一党が当初の命令を無視して、動かなかったのである。
朽網の軍勢は押返され、高崎城へ退き上げ、籠城することになった。
霞一党の長老蔵人は、朽網一門の端くれで家来すじではない。にもかかわらず、一世一代の叛逆に踏みきるに際し、親満は、霞ノ蔵人の妻子を人質とした。
万一を慮ったのである。
闇に生き、闇に死ぬる者同志が、結びつくのは、信義のみである。
危険な綱渡りにひとしい行動には、なかまへの不信や疑念が一点、存在しても、成功を阻む。
親満が信じぬのならば、われらも信じまい。とて、妻子を救い出すや、出砦を占拠して、沈黙したのである。
出砦はたいてい、本城へ敵の迫るとき、側面より撃つに適したところにある。
だが、霞ノ一党は、敵味方の戦局を高見の見物した。
はじめは謀略かと疑っていた大友勢も、本城が火に包まれ、親満らの首があげられると、出砦が

すみやかに開城したことで、その真意が判然とした。

おいおい馳せ参じた諸将の軍勢は二万余になっていたが、もしも霞一党が親満に与力していたら、勝敗はどうなったかわかない。

お屋形に返り忠したわけではないが、この中立はそれだけの意味があった。

すなわち賞として、霞一党、を召抱えることにした。

身分は「庭先小者」である。

「こんど戦さがあれば、われらが手がらを立てるわ。すりゃ、一躍、お目見得以上になれよう」

不満を洩らす若忍たちを、霞ノ蔵人はこう言ってなだめている。

そして五年——

隣国の情報収集や、豊前豊後に侵入の乱波細作を捕え、あるいは鏖すなど功をたてること勘くなかったが、依然として、一党の身分は、「庭先小者」を出でなかった。

二

（忍者など、人間ではない。魑魅魍魎のたぐいじゃ、士分になろうとは、烏滸の沙汰）

義鑑の本心だった。

せっかくの鷹野が、とんだことで興ざめになってしまった。義鑑は府内近くまで帰ってきたが、どうにもこのまま帰城するのが、いまいましい。遊び足りない気持だ。

ふいに義鑑は、馬をとめていった。

「野津原には鹿がいたな」

「は、はあ……」

何を言いだしたのかと御鷹匠の石丸左金吾がけげんな顔をする。

「鹿狩にまいろうぞ」

「そ、それは、チト」

「勢子か」

「はあ、勢子がおりませねば、狩りだしに手間どりましょうほどに」

「かまわぬ。鹿の姿をさえ見れば」

「鹿が居りますかどうか」

「ええい、こやつ、鷹匠は鷹のことだけ考えて居ればよい。余事に口だしするな」

「恐れ入りまする」

「恐れ入ったら、さっさと鷹部屋に戻って、糞尿の世話でもしていろ」

これはいささか主君でも暴言すぎた。

むっとした金吾が平伏すると、さっと栗毛が走り出す。

主君の気まぐれに一々腹を立てていては、宮仕えはできない。小姓近習、表情をころしてあとに続く。

その予定の変更が、意外な椿事をひきおこすことになろうとは。

鷹匠は見習や鳥見など三四人で、城へ引きかえしかけた。

そのとき、傍の農家のかげから、一人の女が出てきた。

「アノ、ちょっとお訊ねいたしまするが」

畑仕事をしていたのか、土ほこりで顔が汚れていたし、腰がひくく、ほとんどおもてをあげず、

「杵太の家の者ですが、用ができまして……おもどりは遅いのでしょうか」

杵太というのは馬の口取りだ。

左金吾はふりかえった。もう主従一行の姿は、竹林のかなたに消えている。

「野津原に鹿追いじゃ、おもどりは夜に入ってしまうかもしれぬ」

と、吐きだすように、かれは言った。

「有難うございました」

暫く行ってから、ふと、左金吾は鳥見に、

「杵太にあんな妹がいたかな」

「さあ」

鳥見もあいまいな顔をした。

口取り草履とりなど下人の家族構成など誰も気にかけてはいない。左金吾はお鷹匠の誇りを踏みつけにするような主君の言動だけが、頭に残っていた。

その汚れた女の顔を洗いおとせば、小菊の美貌があらわれようとは露ほども気づかなかったので

ある。

鹿はいなかった。疎林のなかで、ちらりと姿を見たように思ったが、目のあやまりかもしれぬ。やはり勢子をつかって一カ所に、袋の口をしぼるように追いこんでいないと、楽しい鹿狩りはできない。

と、悟ったのは、秋の日も暮れ近くなってからだった。

せめて鹿一頭でもと思っていたのだが、走りまわって、まるっきりでは気がいらだってくる。

手ぶらで帰るのも、大守の沽券にかかわるような気がする。

日いっぱい、鹿を追いもとめて時刻の移るのも気がつかなかったので、秋の日が、つるべ落しに暮れるのは、思いがけず早かった。

義鑑はすっかり不興になっていた。

なろうことなら、百獣屋(ももんじや)で買いもとめてでも、持ち帰りたいほどだった。

秋陽が黄ばみはじめると、近習たちはそわそわして、

「何分、お供の人数もすくなければ、万一の不慮の事態を」

慮かるのは家臣の役目だ。

もっとも意地張っただけに、さすがに義鑑も疲れていた。

「帰る」

と、いうと、みんなほっとした顔になった。

「二三日うちに、またまいるぞ、足軽どもを勢子にして、鹿どもを追いこんでおけ」

未練げに、廻栖野(ますの)の林から霊山、障子岳の山容をふりかえっている。

その山脈も、いまはもう蒼氓のなかに濃紫に黒ずんできて、気の早い一番星が、草原の蛇の眼のように光りはじめている。

山裾のはざまになっているところに、一行がさしかかったときだ。

突然、山崩れが起った。

三

あまりにも、突然だった。豪雨のあとでもなければ、岩棚でもゆるんでいることはない。大軍ならいざ知らず、この小人数で、馬蹄のひびきや、足音では雪崩れもおこるまいのに。

突然、頭上から巨岩が転りおちてきたのだ。轟々と山肌をふるわせ、凄まじい速度で落下してくる。

巨岩は、その当ったところの岩を砕き、山肌を掘り、無数の小岩をはじき飛ばし、一行を叩き潰さんとして落下してきた。

「わあっ！」

「逃げろ」

「潰されるな！」

あわてふためいて、一行は散った。

あるいは前へ走り、あるいは後退し、あるいは崖の下にもぐりこみ、主従もくそもない。いのち大事に逃げる。突発的な出来事だし、本能的な恐怖がさせたのであろう。

山に吼え、地に唸って、なだれた乱石乱岩に、数人が重軽傷を負ったが、

「殿は?!」

「御無事だ」

よかったよかった、主君が無事だったとわかると、漸く、武士の使命が甦ったか、

「なんたることじゃ?」

「尋常ではない、山頂にゆけ、不埒者のしわざと見ゆるぞ」

「そうじゃ、鷹野のこととといい、誰かが、殿を狙うて……」

「行け、行け」

負傷者を捨てたまま、わらわらと走りだした。

乱世だから、鷹野にも、槍は持参している。鉄炮は一挺、弓二張だ。

刀を抜き放ち、槍をかいこみ、弓に矢をつがえて、供侍たちは走った。裏手へまわる者、坂をのぼる者。

小姓たちが義鑑のまわりを固める。鉄炮足軽が火薬を火皿にそそぎ、火縄に点火する。

わーっわーっという喚声が、山を包んだが、ほどなく、悲鳴と怒号が聞えたのは、下手人を発見したのか。

義鑑は緊張に蒼ざめ、唇をわなわなと痙攣させていたが、

「ええい、霞ノ者どもはいったい何をしているのか。小柄のやつを探しまわって、わしのほうを留守にするとは、役に立たぬ影守りめ」

霞ノ忍者たちは、まことに悪いクジを引いた。

いかなる場合でも、常時、主君の身辺を警護せねばならぬという鉄則を忘れて、謎の影を追っていたのか。

いや、一人は居た。

南雲、という霞十人衆の一人。

かれは十間ほどの間隔を置いて、常に義鑑を見守っていたのだが、宵のころから、妙に怪しい影が、つかず離れずするのを感じていた。

（あるいは）

と、思って、探ろうとするうちに、居なくなった。

用心はしていたのだ。が、山の上までは、いかに霞ノ忍者でも目はとどかぬ。

巨岩の落下を見るや、山上へむかって霎のような乱石の下を走っていたのである。

義鑑はそれを知らないから、

「このほうはよい。数馬、金弥、行け」

「は、でも……」

「行け、いかなることがあっても逃がすな、ふ、不埒なやつ、八つ裂きにしてくれる」

義鑑の暴虐は知っている。この主人なら、極刑を与えるだろう。

数馬と金弥は、主人の護衛をしていたかったが、命令だ。鯉口をきって走りだした。

そのとき、中腹に一人の男があらわれた。

巨躯と半裸の逞しい体躯と——脇差を一本ぶちこんだその姿は、もとより見おぼえがある。

根のついた樹を横たえている。

そこらで引っこぬいたのであろう。

「あいつ！」

口取りの杵太が唾を飛ばして、

「鉄炮方の小者でござります」

「ぬう！」

義鑑にも記憶がある。小者のくせに目ざわりな巨きさを、いつか不快に感じたことがある。

「あやつが、謀叛を！」

「大それたやつ、周防の手が動いたかもしれません」

そのあいだにも、斬りかかった供侍たちを樹で叩きつけ、ふり飛ばし、撫ぎ倒している。

獅子奮迅、阿修羅の働きだ。

「仕止めまする」

鉄炮足軽が、片膝ついて狙いをつけた。

火縄のブスブス燻る煙りが、義鑑の鼻先をかすめる。

「よし、撃ち殺せ」

義鑑はうなずいたが、

「いや、殺すな」

と、言いなおした。刹那、轟然と鉄炮は火を吹いた。

三

久六が一瞬棒立ちになり、樹を両手でふりかざしたまま、がくんと、膝を折った。その半面が、さっと血に染まったのが見えた。

「やった！」

思わず義鑑は鞭を鳴らした。

そのとたん、背後から刃唸りとともにぶつかってきた影がある。

驚いた馬が、どっと動いた。ために、刃は流れ、義鑑の腰のあたりを裂き、肘を切った。

あやうく身をひねって逃れたが、しゅッと氷のような冷たいものを感じたと思うと、左腕に痛みが走った。

「ぬう、痴れ者！」

翻転して鞭を叩きつける。

女だ、と知ったのは、鞭が頭を包んだ手拭頭巾をはねとばし、長い黒髪がばさっと風にひるがえったからである。

「やあ、この女！」

杵太が脇差ぬいて斬りかかるのを、小菊は初太刀の失敗に呻きながら、掬い斬りに仆している。

女ながらも、乱世に生きて、一応の腕はある。

復讐の一念は、さらに磨きをかけていた。

かえり血が、ぱっと、頬にしぶいた。さらに、踏みこんで、

「かたき！」

と、斬りつけるのを、

「退れ！　推参な」

と、鉄炮足軽が、そのまま、ぶーんと脚を殴ってきた。

先込めの火縄銃だから、二発目をこめるひまはなかったのである。

「あれッ」

気丈でも、やわな脚だ。双腕を撫がれると、脛が折れたような痛打で、どうっとつんのめっている。

手から血刀がおちた。

草履とりの孝平が、飛びかかった。

たちまち小菊は両手を縛されてしまった。

久六はしかし、すぐに立ち上っている。銃弾は頬を掠め、右耳を吹っ千切っただけであった。

常人なら、これだけでも、かなりの痛手であろう。が、この仁王の生れ損いのような男には、蚊に食われたほどにしか感じなかったのか、

「さあ来い、みな殺しだわな」

と、喚いて、大木をふりまわしている。

すさまじい鮮血に、人の二倍はある大きな顔を染めているだけに、なんとも凄まじい形相だ。

近習たちは、そのもの凄さに、思わず、あとずさりする。

人数も少なくなっている。

そのとき、岩肌を這って何やら、黒い紐のようなものが、するするとおりてきた。

青黒いなめらかさが、

（蛇！）

毒蛇だ。

岩肌を伝うと、赤土の斜面をおそろしい勢いですべって、久六に襲いかかろうとした。

「けッ、長虫め」

ぶーんと、大木を一振りすると、目測をあやまって、ぐわあっと、そこらの木々を殴りつけた。

いずれも楓だった。馬鹿力のせいかどうか、はらはらと紅葉が散った。風がある。葉は舞い上り、渦を巻き、いのちあるもののごとく、集団となって、サーッと、久六の顔面を襲った。

無慮数百枚の葉っぱである。その群れ飛ぶさまは、一陣の紅煙か、紅霧か、

久六は目の前が、真赤になったような気がした。

かれの眼には、空も下界も一様に、紅塵に蔽れたように見えた。

頬に噴いた鮮血を、その紅葉の舞いは、吹きあげ、塗り伏せ、貼りつけて、眼を蔽ってしまったのである。

炎のような紅い世界のなかで、久六は大木を投げ捨て、よろよろと崩れた。

「してやったり」

どどっと餓狼のように襲いかかる近習たち。

高手小手に縛りあげる久六の耳に、嘲けりをこめた奇妙な声が聞えてきた。

〈霞ノ忍法《紅がすみ》どうじゃ、紅にまみれたかい、うふッうふッうふッ〉

久六の朦朧となった意識には何かその声は、遠い夢幻のそれのように聞えた。

五

朋輩を打ち殺され、半殺しにされた怨みで近習たちは、峰打ちしたり、ぶすぶすと全身を狂ったように突いた。

「よせよせ、殺してはならん」

「かまうものか」

「いや待て」と、金弥が言った、「数馬も聞いたぞ、のう、殺してはならぬと仰せじゃ」

「そうだ、お仕置は殿が遊ばされる。引っ立てろ」

だが、久六は立てなくなっている。

ふてくされたのか、ほんとうに関接がどうかしたのか、全身朱に染まって、久六は転がったまま、立とうとしない。

「こやつ、わざと立てぬふりをしている」

「くそっ、ひきずってゆけ」

何しろ重い。だが、傷がつこうと、皮がスリ剝けようと、死にさえしなければかまわないのだか

ら、髪をつかむやら、足に縄をからめたり、うしろのやつは槍の石突で丸太でも転すように、こじあげては、突きたて突き立てして、御前へ。

「こやつか」

義鑑は、馬の蹄をあげて蹴らせた。

「うッ！」

久六はくるくるっと、二三回転った。軽く蹴らせたつもりでもやはり馬蹄だ。

どっと鼻血が噴きだした。

「よくもおれを、圧し潰そうとしたな。こやつ…なんという名だったかな」

「久六めにございます」

「左様であった。やい久六、おれへの無礼、家来どもを殺傷した罪、八つ裂きにされても、なお、つぐなえぬぞ」

「……」

「累代の恩を忘れおって、くそ」

馬上から、身をのばしざまに、一打二打。鞭がおちた。

久六の顔。もう、それは、顔というより、血達磨といったほうがよかった。

目も鼻も唇も、血にまみれ、血の中に僅かにそれらしいものが見えたにすぎない。

意地悪く、義鑑の鞭は、鉄炮傷の上に、打ちおろされ、凝固しかけた血のかたまりを飛ばし、傷口をはね、えぐり、さらにひろげた。

「申せ、一言の詫びもないか」

ううッと、圧えようもない呻きが洩れるだけで、悔いも、したがって詫びもない。

一言半句も饒舌ろうとしない。かたく口を結んでいるのは、この愚鈍な男を知っている者には解せないことだった。

義鑑は、この巨大な動物、熊か、象を思わせる男の打擲に疲れたように、荒い息を吐きながら、小菊に視線を移した。

この巨漢と美女のとりあわせは、いかにも不自然だったが、考えようによっては、納得できないこともない。

義鑑は、おのれの焦だちが、この女に負わせられた傷にあることを思った。

幸い薄傷ではあったが、かなり痛む。

「この下司めが、おれを害しようなどとは、理由もない」

「……」

「金のためか？　周防か、薩摩か、肥前あたりから、なんぼか貰うての細作か」

「……」

「それとも、この女のためか？　この女……この女は？」

と、義鑑は混乱していた。

見たことはある。記憶にはある顔。姿体。だが判然と思いだせなかった。

「こやつは？　こりゃ、女、直答せい、名は？」

小菊は無言だった。

失敗した以上、いのちはない。どうせのことには一言も饒舌るまいと思っていた。

数馬が言った。

「藤兵衛の娘でございます」

「藤兵衛？」

けげんな顔をした。

「御庭奉公をつとめておりました」

「――うむ。うむ、あいつか、そうであったな……」

ちらと、不快な色が――それは決して悔いや愧々ではなかった――肉の厚い頬をかすめて、

「そうか、さか怨みじゃな」

「……」

「曳け。屋形へもどって、糾明してくれる」

「殺して！」

ふいに小菊が叫んだ。

「どうせ殺すのでしょ。殺して！」

「ふむ……死にたいか」

「死んで……地獄から呪ってやる」

「こいつ、口の減らぬ」

殺すのは簡単だ。抵抗はない。斬りかけた刃を見たとき、殺す気が沸いた。その手から刃がおちたとき、その気持に微妙な変化があったのも事実である。

が、女の口から、そう言われると、

（殺すのも楽しい）

と、思う一方、ムザと死骸にしてしまうのも惜しくなった。

いたいたしいほどの繊い白い肌、優しい顔なのに、眼だけがきらきらと輝やいて、牝豹の烈しさが義鑑を睨らんでいる。

「――歯ごたえのありそうな女だの」

肘の痛みに眉をしかめながら、義鑑はいった。あらたな興味がこの暴虐な武将の胸にうごいたようである。

六

殺して！

そう喚いた女の顔がいつまでも瞼の裡に残っていた。

本心から言って藤兵衛のことは確かに忘れていた。

伜を謀殺しようとしての失敗だけに、藤兵衛を踏み殺したことは、当座はいやな気持で、澱りが残っていたが、そうしたことに悶々するには、義鑑は血すじも、身分も高すぎた。

この戦乱絶えまない時代に、武将として、守護大名として二十代も、連綿たる家がらは、六十余州ひろしといえども、五指を出ない。

その大名貴族の血というものは、庶民感情とは、あまりにも隔絶していたのである。

一忍者の死など、いつまでもこだわっていては政治も出来ない。

そのうえ、義鑑が留意しなければならぬことが多すぎた。いうまでもなく伜義鎮の気持である。

伜の気持が忖度できぬようでは、父親としても失格だが、ことに、

（あやつは、おれの子だが、子ではないような）

一言にしていえば荒すぎた。

義鑑も荒大名だから、気性の荒いのは、望むべきところだが、おのれ以上、ということが気にくわない。

大友興廃記には、左のように記してある。

――五郎御曹司義鎮公、御幼少の時分は、御行跡あらく手習にも御心を入られず、朝夕兵法の早わざにすかせ給ひて、御近辺に召仕わるる若侍を、

皆其頃はやる体捨流（剣法）の弟子になし、常々仕相（合）をさせごらんぜらるる。又御自身の御仕合には、初太刀より極意に通用する御利根にて、疵をばうくる者多かりき……。

――御年十四五の時分、いかにもかんつよき馬を御このみ被レ成、いまだ手綱の秘術を御相伝なくして、御気に任せられ無理に乗りこなさんと被レ成事毎度なり。何事に付ても、をぢをそれ（怯怖）をしらせ給はず、さあるに依て、老中並に御近辺衆等に申さるるは、余りに強過たる大将は、却てしかるべからず。歯牙落舌猶存と言事あり。比御行儀にては、代々御連続の家、五郎御曹司の御代に如何とぞ申あわれぬ。しかれども心安く御異見申上る事はならざりき……

義鑑謀殺の一件は、御妻の示唆による、と先に書いたが、老臣たちの異見も、かなり五郎廃嫡に似ていたようである。

あまりにも強過ぎる。

老臣たちの目にもそう写るのだ。父の義鑑が、それを感じるや、当今はやりの〝下剋上〟や、〝武辺たる者、親子兄弟の情を超ゆるこそしかるべき〟とする風潮を、わが身の恐怖でもって受けとめたのもわかるような気がする。

そうした関係が、一忍者藤兵衛の死をあっさりと忘れさせてしまったのだ。

この小菊の根性も、そういえば、

（忍者の血……）

女色にも男色にも飽いた中年男が、この烈しい気性の女に、食指をそそられたのは無理からぬ。

それは、久六への憎しみに、反比例したようであった。

（この、阿呆めが、小菊に忠実すぎるのでは、すでに……）

小菊の悲壮な決心と、久六の忠誠は、肉体的な結びつきのほかには、考えられなかったのである。

「うぬは小菊に頼まれたのであろう」

と、責めた。

「ありていに吐け」

そして、小者に命じて、

「白状するまで拷問をつづけい。容赦するな」

血を見ること、水を見るにひとしい時代だ。ことに、人並はずれた巨漢だから、同情はしない。憐愍の感情はあらゆる面で弱い個所に働くのである。

責め場の、牢番、囚獄方の小者たちにしても、日ごろ久六の膂力にはコンプレックスをおぼえていた連中だから、

「累代の鴻恩を忘れるに剰さえあるに、害し奉らんとは、犬畜生に劣るやつ」

手加減しない。

鞭打ち、弓打ちなどと、生やさしいものではない。笞打ち、ササラ打ち、錐揉み、算盤責め、水漬け、松明焼き、鼻黒——

この最後の一章は、松明焼きにちょっと似ているが、そうではない。灯火で、鼻を焼くのだ。聞いただけで気の弱い者なら、貧血を起しそうな拷問が久六のからだに加えられた。

七

ササラ打ちなど、握り太の青竹でめった打ちにしたあげく、竹が割れたまま打つ。

打つにしたがい、竹はますます細く割れる。

そのササラとなったやつが、一打ちごとに肉に食いこみ、皮膚を破り、血が噴き、肉片をさき、こそぎとる。

血と肉とがあたりに飛び、その凄惨さは目を蔽うばかりだ。

算盤責めは、後世よく用いられたものだが、松明焼きは、勢いよく燃えさかる松明で、頭を殴ったり、顔を殴ったりするのだ。そのたびに髪が燃え眉毛が燃える。これに交互に水をぶっかける。水火の責めだからたまらない。

こんな拷問にあっても久六は一言も洩らさぬ。ために髪は焼け千切れ、顔面は切傷のうえに火傷で、切傷はかえってふさがったものの、人相が変ってしまった。ふた目と見られない異相だが、なお口を噤じている。

はじめ、小菊に口どめされたことを、忠実に守っている。

奇襲が失敗し、小菊まで捕われた以上、黙する必要もないことだが、そこは愚鈍の一図さで、ひたすら約束を守っているのだ。

府内の城士たちには、藤兵衛の一件はまだ目新しい。記憶は生々しかった。

その内情は知らぬから、小菊が逆うらみしているとしか思っていない。

義鑑のほうでも、

(やつは事実を語るひまはなかったはずだ)

と、おのれの卑劣さが知られていないと思っている。

たとえばれたとしても、証拠はない。

当人は、すぐさま殺してしまったのだ。

事実を書き遺すことも、他人に怨みつらみを語ることもなく、死んでいる。

(あるいは妻子は聞いていたかもしれん……が、誹謗で片づけてしまえばよい)

義鑑の地位では、それも可能であった。

霞ノ一族のように横のつながりがない〝陰ノ臣〟だったことが、義鑑には幸いした。

尋常な人間たちではない。忍者のことを〝草〟とも〝ノキ猿〟ともいう。すなわち、地虫のように、何時間でも草むらにひそみ、あるいは雨露に濡れ風に耐えて屋上に忍び、軒を這う——非人間的な行動は、たしかに草、あるいは草虫でありノキ猿であった。

忍者は、それらの代名詞に甘んじている。

むしろ、誇りにすら思っている。周知のように、越後の豪将上杉謙信は、厠で殺されている。忍者は糞虫になり代って、時を待ったのである。いうまでもなく汲取口しか潜入の個所はない。かれは織田信長の密命を受けた甲賀者で、この手がらにより、甲賀多羅尾の近辺の一谷をもって賞として永代地子銀を免じられた。かれらはここに住み、地名を久兵衛とした。久兵ノ谷——糞谷である。

自嘲のひびきは免れないが、忍者として糞になり終せたのは、誇ってよいことであった。

が、しかし、常人の神経からは、これには耐えられないことだ。

義鑑の安堵感は、藤兵衛の孤立にあった。

忍のなかまが多ければ、何を考えだすかわからない。霞ノ一族はその点で、全面的な信頼は抱いていない。

いつでも主君を殺そうと思えば殺せる。忍者を飼っておくことは、両刃の剣を抱き寝するにひとしい。義鑑のほうでも油断はなかった。

ことに、嫡男の暗殺なのだ。他国を侵させるのとは違う。忍者は敵の手で捕まっても、主人の名は洩らさない。脱出が不可能と知れば、自ら死を選ぶ。たとえ洩らしたとしてもこちらは、知らぬ、と突っ張ればそれでよいことであった。

お互いに暗黙裡に了承している。江戸時代まで、これはつづいている。むろん、侵入者には死が、すべての代償だった。

内紛の場合は、それだけでは済まない。お互いによく知りすぎているからだ。

義鑑があわてて殺してしまったのは、そのためである。

久六を責めたのも、

(あるいは……)

と、思ったからだ。

これまでも、かれの暴戻にあって死を賜わった家臣は尠くない。が、その家族で叛逆の刃をむけた者はない。

それだけ義鑑の威勢は、蟷螂の鹵だたぬ斧であったわけだが、また、藤兵衛ほど間尺のあわない殺されかたも無かったのだ。

女だてらに、小菊の反抗は、理解の範囲を越えている。

久六が、事実を知っているかどうか？

拷問の人数をきわめて少くしぼったのは、他へ秘密が洩れぬためであった。

「――まだ饒舌らぬか」

三日ののち、義鑑はしびれを切らしたように言った。

「責め問いが足りぬのではないか」

「はあ、やっているのですが、何しろ、こたえぬやつで」

「耳を切れ」

「は？」

「片耳残っていたな。左がわか、あれを切ってやれ」

「……」

「それでも言わねば、鼻だ」

「……」

「鼻を削げ」

命令を受けている牢番頭のほうが蒼ざめている。

小菊の閉じこめられている牢と、久六の土牢とは半丁ほどしか離れていない。

残った耳を切られたとき、さすがに久六は絶叫した。

その声を聞くと、小菊は慚愧に胸がふるえた。

「久六を責めないで！」

牢格子にしがみついて、哀願した。

「あの男は何も知りませぬ。ただ、あたしの頼みを行なっただけなんです、許してやって」

牢番は、すぐさま義鑑にこれを報告した。間もなく戻ってきて、責め問いはやめ、死を賜わる、と言った。小菊はそれを聞くと、身をふるわせて、

「若殿を殺せと仰せられた殿じゃ、仕ものにかけ損じた父さまを、馬で踏み殺して口をふさがれたおつもりでも、悪虐非道はいつかは、ばれずには済みませぬ。ええ、殺すがいい、殺しても、罪は消えない。父さまは忍びの身で黙って死になされた。でも、でも、あたしは黙らない。忍びノ者藤兵衛の娘ですよ、ほほほほ、あたしも殺すがいい、何もかも、殿の悪事を知っている者を、みんな殺してしまうがいい、ほほほほ、ほほほほ」

狂笑し、かん高い声で義鑑の奸悪を叫ぶ小菊の言葉を耳にしたのは、牢番だけではなかった――

翔ける肌

一

瓜生島は府内の北、府内川の河口を扼すように、半里の海水をへだてて横たわっている。

河口のあたりは、深くえぐれているが、往古は

陸つづきであったらしく引汐のときは河口の東方が浅瀬になる。

この浅瀬に水鳥の走るような、しぶきが、ぱっ、ぱっ、とあがった。

九月朔日。月はない。金砂をちりばめたような星のきらめきが頭上にある。

干潮時は子ノ刻。その小半刻前である。

浅瀬を一線にするような、白いしぶきは、二度、三度……十六度まであがった。

もとより、その怪奇な影の水走りを知るものは、河口のあたりに、かぼそく鳴く千鳥くらいであったろう。

河口の今津留の村と向いあっているそのあたりは、沖ノ浜と呼ばれていた。

白い渚からすぐに松林がつづいている。磯馴松の林のなかに社がある。住吉ノ社で、旧記によれば、祭神は上筒男神、底筒男神、息長帯姫神という。

影が、社に近づくと、蝙蝠が、ぱっと舞い上った。

〈霞……〉

ぴしりと鞭打つような声が、影の足をとめた。

〈黒〉

と、その影は応えている。

社の裏手へ吸いこまれるように消えた。と、待つほどもなく、次の影が入ってきた。

霞の声がかかるや、

〈弓！〉

その次に来たのは、

〈亀！〉

と、応えている。

それが最後だったらしい。社の裏手の窪地に地虫のうごめくように、一群れの影が人数の集るのを待っていた。

すべて十六人。その数が、寂として声もない。

勘のよい盲法師が傍らを通りすぎても、この人数の蟠居には気づかなかったろう。

忍者の初歩は、息をころすことを習う。生物が、おのれの影とするには、呼気など五気十官をころすことからはじまる。

十六人——いずれも霞の一党であった。

霞ノ蔵人より、牒をもって嘯集したのである。

しんがりの三人は、すなわちササ黒、弓蔵、亀次。いずれも十人衆に数えられている。

〈そろうたか〉

霞ノ蔵人はみんなを見わたした。

〈そろうてござる〉

鳥が答えた。

〈汝らを呼んだのは、ほかでもない。われら忍びノ身にとって、容易ならざることを耳にしたからじゃ〉

蔵人の声は思いなしか、沈鬱であった。

〈われらはいままで、重大なことは、一族談合して決めてきた〉

その通り、というように黒い影の群れはうなずいた。

〈先年の高崎城に於ける砦こもりも、皆の意志であった……府内お屋形扶の持を受くるに就いても、皆の総意であった〉

〈蔵人ぬし〉

誰かが言った。

〈いまさら、たしかめることは何もござらぬ。われらの道はわれらで決めてきたこと、あらためて言うことはない〉

〈言わんでいいことなら、言いはせぬ。こたび、汝らにまた考えて貰わねばならぬことが出来したのじゃ〉

〈戦さか〉

〈さて……まず、耳から聞けい〉

耳とは耳次のことである。

かれは立ち上った。

〈ことは、みなノ衆も知っての通り、藤兵衛の娘小菊がこと。今日、意外なことを聞いたのじゃ……藤兵衛は忍びであったというぞ〉

〈なんと！〉

ざわと——はじめて黒い影が動いた。

二

〈お屋形の隠し目付であり、隠し乱破——知る者はほとんどなかったのじゃ……〉

動揺を鎮めるだけの力があった。語気ではない。忍びのワザをもって、捨扶持なりとも仕えている霞ノ忍者たちにとって、それはゆるがせにできない事実だったことである。

〈お屋形と和子との確執は存じておろう。お屋形はあのような御仁じゃ。和子どのを亡きものにせんとして藤兵衛に命じなされたと……それはよい。藤兵衛は仕ものにかけ損じてしもうた……それもよい。やむを得まい。われらなら、自ら死をえらぶ。藤兵衛も、その気ではいたろう、が、そのひまを、お屋形は与えざったのじゃ〉

〈……〉

〈藤兵衛の口を、御手ずからふさいだのよ。馬の蹄にかけて、のう〉

沈黙が流れた。

思いだしたように、虫の音が、周囲の闇をふるわした。高く低く、秋夜のわびしさをなげくような声であった。

〈その話、事実か〉

一人が、押し出すように、息ふとく言った。

〈多分……〉

と、耳次の答えは正確だった。忍者の報告は感情をまじえない。

〈あの小娘の言うこと、鵜のみにするのは、如何かとも思われるが……したが、あの復讐の存念、尋常ではない〉

〈おれも、そう思う〉

と、蔵人が口をはさんだ。

〈ただ、事実とせば、なぜ、和子に申し上げぬか、じゃ。総領たるにもかかわらず、ないがしろな仕打ちを受けていなさる和子が、それを知れば……〉

〈そこまでは、才覚がまわらなかったのであろう。下手に直訴すれば、いかなることになるか、十四五のおとめには、不安であったろうな。それより、一刀でもむくいればとけなげに思うたのであろうよ〉

〈ともあれ、真偽の如何によって、われらの進退考えねばならぬ〉

烏が言った。

〈われらは、われらの信義を踏みにじった朽綱どのへ、仕かえしをした。府内のお屋形は御身分と申し、御血すじと申し、左様な卑劣なことはなさるまじ、主従の縁とはいかなるものか、御存知とこそ見たればこそ、仕えるようになったのじゃ。おのれに都合悪しきとなれば、草履虫ほどにもお考えにならぬ……〉

〈ばかな！〉

と、叫ぶ者があった。

〈われらは、それほどに恩を蒙ってはいないわい〉

〈そうだ、数年の扶持にすぎぬ。……それとても目くされ金ではないか。草履虫に甘んじることはない〉

十五人の霞一党の忿懣のさまを、頭領の蔵人は、凝っと見まもっていた。

かれらにも妻子がある。軽々な行動は許されない。真の総意が奈辺にあるか。それを確実に把握するのが、頭領に課せられた責務なのだ。

ややあって、蔵人は言った。

〈汝らの申し条、よくわかった〉

黒影は、また静寂を保った。

〈小菊の言葉の真偽を知ることが先じゃな〉

〈さいで〉

〈小菊の命は、今夕に迫っている〉

〈それは！〉

〈お屋形は小菊を磔刑（ハタモノ）におかけなさるであろう〉

〈助けねば……〉

〈ゆけ、両三人……飛八！〉

〈へい〉

〈耳次、南雲〉

〈これに〉

〈小菊をさろうてこよ。万一、偽言あるによっては、牢へもどさねばならぬ。よって、牢番夜廻りどもを眠らすにとどめよ〉

夜風が草むらに渦をかき、黒影を走らした。

三つの影は、たちまち一つと化し、住吉ノ社から、沖ノ浜を、水際へ。幸いと、まだ子ノ刻を四半刻すぎたばかり、潮は満ちる前の静謐を入江にたたえ、浅瀬を残していた。奇怪な岩礁が賽ノ河

原のような無気味な影を見せている浅瀬に、またもや三条のしぶきが、走った。

しかし——

三人は失望しなければならなかったのである。

小菊の姿は、牢内にはなかった。牢番は、仄白く、蝶の舞うような忍者の指の動きで、容易に催眠して、こう吐露した。

「お屋形の仰せでござりまするか、へいへい、ただいま小菊めを曳いて参りまする、ただいま、ただいま……」

三

その義鑑の寝所に、小菊の姿があったのは、少し前。

義鑑は、

「何を血迷うてか、おれがとくと糾明してくれる」

と言い、小菊を引っ立ててくるように命じたのである。

（——知っていた！）

その衝動は尠くなかった。

狼狽は同時に、

（口をふさがねば）

必要に迫られた。

家臣の人気が、嫡男の五郎義鎮にあることに、全然気がつかぬ義鑑ではない。

あの事実が義鎮か、側近に洩れ聞えると、どんな事態を惹起するかも知れぬ。

（口をふさぐには、斬るか……側女にするかじゃ）

義鑑が、まず後者をとったのは、必ずしも美貌に目がくらんだわけではない。

その手をこころみてからでも、斬るのは遅くない、と思ったからである。

（証拠はないのじゃ……）

万一のときは、小菊が発狂してあらぬことを口走ったという理由も成立つ。

義鎮暗殺は、口頭で命令している。書いたものもなければ、小姓も知らぬ。藤兵衛を乱心者として蹴殺したのだから、小菊を狂人の血すじとして

始末しても不自然ではない。

「——召し連れましてございます」

牢番がきざはしの下から言上すると、義鑑は、簀ノ子へ出ていった。

「糾明はおれがする。汝らは退っておれ」

鉄扇で蠅でも追い払うように、牢番から小姓まで追い出した。

小菊は両手をうしろで縛されたまま、昂然とうなじをそらして、義鑑を睨らんでいる。

篝火が二基、火ノ粉をほしいままに吹きあげている、白洲である。仄赤く染まった小菊のおもては、その優雅な顔立ちが、怒りと憎しみでひき吊り、凄艶だった。

牢番は役得とばかり、なぶったであろう、白い胸もとがはだかって、両乳のふくらみが、半ば顔をだしているのが、その凄艶さを一層、あおっていた。

（歯ごたえのありそうな女）

と、先日感じたことが、なまなましい血のどよめきで甦ってきた。

肘と背腰の傷はまだ治癒していない。その痛みが、直接的に、小菊とのつながりを感じさせた。

義鑑は、小菊の前を、ゆきつもどりつしながら、

「藤兵衛めをおれがわざと殺したなどと申した由、いかなる存念じゃ」

「……」

「ありもせぬことを申し立て、おのれの罪を糊塗せんがためか」

「ほほほほ、誰よりも、御存知であろうに」

唇だけが、大仰に笑い、双眸は憤怒を燃えたたせて、

「それとも、都合の悪いことは忘れてか。ほほほほ」

「こやつ！」

鉄扇をふりあげたが、びくともしない小菊の性根に負けたように、渋々とおろして、

「うぬは、当て推量もほどにせい。藤兵衛の乱心のほど、うぬは幼なくして知らざったこと」

「いいえ、父さまは、そのようなこと一度もなか

った。和子を殺せとの御諚ありと、あの前夜、ずいぶんとお苦しみなされたとのこと、母さまより聞いたわえ」

「……」

義鑑は苦汁を呑んだように顔をしかめた。

「ほほほほ、そのお顔、どうなされたえ、胸が痛んだことであろうえ」

「うぬ！　うぬは……その話を信じておるのか」

「母さまも父さまも、嘘など吐くお方ではないもの」

「嘘じゃ！」

義鑑は喚いた。思わず、鉄扇が肩を打ち据えている。かすかな悲鳴を洩らして、小菊は、横に倒れた。

さすがに、義鑑もはっとしている。手荒にすぎた。核芯を衝かれた狼狽が、つい手荒にしてしまったのだ。かなりの痛みだったろう。小菊は、倒れたまま、胸をあえがしている。

黒髪がばっさりと白洲にひろがって、胸乳のふくらみ、腰の意外なゆたかさも、そして白い腿…

…あらわなその姿態が、義鑑の情感を刺戟した。篝火のあかりのもとに、その姿態は、さながら、男を誘う姿態とも通じていた。

「――小菊……」

義鑑はかがみこんだ。みだれた衣紋からこぼれた乳房に手がいった――

四

「あ……」

小菊は身をひねった。

が、両手は縛されている。打ち倒された痛みが、機敏さを失わせていた。もがく拍子にかえって、乳房は、義鑑の手におさめられ、ふとももが股のつけねまでむきだしになった。

「こりゃ、小菊、そなたは夢を見ていたのであろう……」

義鑑は乳房の感触を楽しみながら、片手はふとももをなめらかさに誘われたように、内股にすべらせた。

「父母恋しさのあまり、埒もない夢を……おれが五郎を害せしめようなどと……ははははは、くだらぬ。五郎はおれの伜ではないか」

「……」

「のう、小菊。そちゃ若い。殺すのは惜しいわい。埒もない夢を忘れて、おれが女となれい」

「いやじゃ！」

小菊は身をふるわした。乳房をつかんだ男の手を逃れようとしながら、不思議なことに、いいしれぬ官能のうずきがせりあがってくるのが憤おろしかった。

「いやじゃ、放して！」

「こりゃ、よく聞け。思いのままに栄耀栄華をさせてくれようと申すのに……」

もの馴れた男の指は、とうとう柔毛の丘を這いふもとの泉をさぐりあてている。

「いやじゃ、いっそ死んだがマシじゃ」

小菊は、かッと、唾を吐いた。唇を吸おうとのぞきこんだおもてに、ぱっと、唾がかかった。

「うッ、わりゃ何をさらす」

のけぞったところを、小菊は思いきり脚をあげて蹴った。

まさか、小菊がそんな行動に出るとは思っていなかったのだろう。もろに、腰の傷を蹴られて、げえっと叫んで、のけぞった。

その醜態に、

〈ふっふっふっ、よい恰好じゃナ〉

嘲けりの呟きが、闇の中に揺れたのを、義鑑は知らない。

惑乱していた。自尊心を辱しめられた怒りと異常なばかりの慾情と――

「小菊！」

喚いた眼のまえが、真っ暗になった。

妖しい一陣の風が、二基の篝火をはたと吹き消したのである。

「や、や？……」

突風にしては面妖な。いうなれば、ぼるとがるの坊主が着ている黒いカンガという外套でもって、ぱっと火籠を蔽ってしまったかのような消えかたであった。

「やあ、なんとした、異変ぞ、出会え、出合え」

大声で義鑑は呼ばわった。
待っていたように木戸の外で応諾の声が聞え、近習らが駈けつける様子。
消えたのが突然であったように、篝火は、ぱっとまた燃えはじめ、あたりが火明りに明るくなった。
小菊が逃げようとしている。
「こりゃ、どこへ失せる」
義鑑は、はねおきて、背後から組みついた。
情慾にかられて、時と場所を忘れている。痴呆のような眼で、
「こ、小菊……」
と首すじへ舌を這わせつつ、秘所をさぐろうとしている。
「わッ、何をなさいますぞ」
「お屋形！　お屋形！」
「お気をたしかになされませい」
そんな声を遠くに聞いていた。遠い夢の中で聞いているような……
はっと我にかえったとき、義鑑は、むさい牢番に抱きついているのを知った。
「う……こりゃ、なんと」
小姓、近習、牢番たちが、心配そうにのぞきこんでいた。
そして、小菊の姿は無かったのである。
「お、女はどうした」
義鑑は、きょときょと見まわして、
「女はどこへやった」
「――存じませぬ。お屋形のお声によってまいりましたときは」
逃げたのか。
篝火の異常な消え方といい――はじめて、妖異な忍法にまどわされたことがわかった。
（忍者霞ノ者どもか？）
だが、霞ノ者たち十六人が、瓜生島で密会していたことは、読者の知る通りである。
そして、その霞ノ一門、耳次、飛八、南雲の三人ともまた、このさまを目撃している。
（――一足ちがいで……）
（どやつが？）

三人の顔にあらわれた失望は、疲労のいろさえ滲み出させていた。
そして、かれらも義鑑も、
（怪しの忍びノ者……）
という思いは、あの瑞雲模様の小柄の持主にしぼられたのであった。

五

庭前での奇怪な出来事は、しかし、義鑑ひとりの目くらましで成し得ることであった。
本丸の汐見矢倉のそばで、油を売っていた雑兵らは、その怪しの影を目撃している。
「や、ありゃ何じゃい」
黒影――異様な姿であった。
篝火の遠あかりに、さながら、伝説に聞く天狗とやらそのままに見えた。
羽衣を着、赤茶けた蓬髪がおどろにひるがえり、雄偉な鼻が――恐怖と動揺は視覚をゆがませるものか。しかし、その小脇にかかえられた女の姿。
半裸にひとしい乱れた姿で、宙を泳いだ。その速さは、黒髪が流れて落ちぬさまを見ても、およそわかる。
「で、出合え、出合え」
「く、くせものじゃア、皆の衆」
その叫びも、しかし、奥御殿の騒ぎのほうに、宿直侍は気をとられて、僅かに内濠をへだてた二ノ丸の見廻りをはっとさせたくらいである。
反射的に矢を放った者がある。だが、その矢の白羽の闇を縫って追ったが、矢よりも早く、天狗は闇を駈けた。
二ノ丸の濠を、竹林の大きくしなう竹を利用して飛んだのには、あざやかというほかなく、ただあれよあれよというまにその姿は闇の中に溶け去ってしまったのだ。
三ノ丸の門扉がもっとも固く、外敵の侵入をはばむようになっているが、この門番三人が死んでいるのが発見された。
三人とも一様に後頭部に一撃を受けている。死体のかたわらに三鈷が転っていた。
仏具の一つで煩悩をうち破るとされていたもの

だが、もともとは天竺で護身用の武器として発達したという。

霞ノ蔵人がその由来を知っていたのである。

「――が、さて」と、かれは首をひねって、「本朝では武器として用いたためしは……」

あとは咽喉でかみころした。烏は、その意味を暗黙裡に感得して、うなずいた。

嘗つて後白河法皇をして、朕のままにならぬものは賀茂の流れと叡山の僧兵……と、歎ぜしめた悪虐の僧の〝飛道具〟として独鈷の威力、五鈷の飛車が、兵法つかい、忍びノ者のあいだでは伝説的に語りつがれた。

霞ノ忍者が、しかし、目のあたりにしたのは、はじめてだったのである。

義鑑は、手にとって妙な顔をした。

「――天狗じゃと」

天狗のしわざか。篝火が消えた。あと数瞬のあいだに、小菊が牢番に変じてしまっていたのだ。

いかさま天狗のしわざででもなければ、ああはいくまい。

〈――様子が変ったナ〉

歩きながら、烏が言った。

〈ウム……天狗とはな。多分……〉

蔵人はふりかえった。乾のかたを見やった。むろん、夜の空は星のきらめきだけで山脈も見えはしない。

〈英彦山か……〉

烏はうなずいた。

〈英彦山でござるわな〉

蔵人が、眉をひそめてふりかえったのは、烏の言葉が確信に充ちたものであったことである。

大友義鑑としても、是が非でも小菊はとりもどさねばならなかった。たった一人の小娘をおめおめと逃してしまったとあっては、今後の御屋形としての権威にかかわる。

常時、隣国では、内情を窺っているのだ。天狗云々は、あなどりを買うしかない。

「うぬ！　草の根をわけても探しだせ」

切歯して命令を下した。

屋形侍たちは、皆叩き起され、府内の御朱引内、すなわち城下住いの家人ゆかりの者など、小者に至るまで残らず動員された。

「見つけ出した者には恩賞をとらすぞ。女を捕えた者には五十貫、天狗めを見つけた者は二十貫、斬った者は三十貫じゃ」

恩賞をつけるのは、こうした場合、珍らしいことではない。

後世のように身分職制と出世の段階が判然と確約された時代ではない。主君のために不惜身命という思想は一般的ではなかった。

生きることを第一義として、慾望の満足がもたされねば、誰も主取りなどしない。

合戦に勝つには、雑兵足軽たちの慾望を満足させてやらねばならない。

勝者が敗者の財宝を劫掠し、婦女子を辱しめるのは、当然の時代だった。それだけ生きることに純粋だったともいえる。

恩賞の額を聞いて、皆ふるいたったのは浅ましいながら、もっともなことだ。

まず、長浜の小菊の家が土足に蹂躙された。が、無駄骨だった。小菊はもどっていない。

久六の両親一族は、あれ以来、押しこめられているから、ついでに久六の家も捜索されたが、せまい家のなかのことだ。なんにもない。無駄骨折ったのを腹立てて、散々に打ち破って出ていった。

小菊丹精の菊も、怒りにあってめちゃめちゃにされてしまった。

義鑑は、はじめから長浜には目をつけていなかった、

「天狗じゃ」

そして、蔵人の意見にしたがった。

「英彦山に逃げたのであろう」

英彦山は、音字で、彦山、とも書く。

豊前、筑前、筑後の三国の境に聳立する北九州の最高峰、海抜四千尺を越え、耀石安山岩よりなる峨々たる山容は、役ノ行者によって開かれたという、昔から霊場として栄えている。

中世以後、修験者の行場となり、一時は山中三

千坊を数えた。こうした山徒のたいていがそうであるように、固い結束を持ち、他の諸侯に匹敵する勢力を誇っていた。

六

「いつかは討たねばならんと思うていたのだ、山坊主ども、みな殺しにしてしまえ」

義鑑はいきまいた。

坊主はただお経をあげて葬いの世話をしていればいい、と放言してやまぬ義鑑には、もっとも、この山徒の隠然たる勢力は、癌腫のように、気にかかっていた存在だったのである。

坊主にして坊主ではない。神人にして神人ではない。神仏混淆の絶対的自然の威力に挑戦するがごとき修験者たちが、下界の守護だの大名だのという権力を一笑に附すのは当然だし、また、おのれの領国内は、山上にてあれ沼の底であれ、おのれの意のままにせねば満足せぬ義鑑とは、いずれ衝突しなければならない運命だった。

祭神は天忍穂命（あめのおしほのみこと）、この嶮峻の山は、一口に四千尺というが等しからず、頂き三つにわかれて、谷を刻み峰を削る稜々たる山骨の上に猪の如くに樹々を茂らせている。

後世、谷文晁あらわすところの日本名山図絵によると、いかに他の山に比べて英彦山が嶮しいかがわかる。

画家の象徴性を端的にあらわした構図だが、特に怪奇性を誇張していて、この世ならぬすさまじさだ。

蘇鉄の幹の分れたような、乃至は竜の爪を張ったような山勢米点を畳んで真っ黒にかたまっている相は、まことに天狗棲むという伝説もほんとうらしい。

説によると、天狗は「役の行者」が使役したといわれ、不動金縛りの術、跋渉ノ術――それらに、祭神の天忍穂命の〝天ノ忍〟の意が忍びワザの護り神とさえ飛躍的ながら信じられ、あるむきには信仰を蒐めていたのである。

英彦山の天狗伝説には、一に豊前坊と呼ばれ、いまも豊前坊祠には参詣者が絶えない。近古、木

練坊という大力の山伏がその祠の前に棲んでいて、天狗の手助けをしたとも伝えられる。木練坊を、豊前坊の眷族だとも、化身だともいう人がある。九州は、ことに天狗が多い。肥後の阿蘇山には阿闍利坊、日向には尾畑新蔵坊、薩摩海門岳にも薩摩天坊というのがいて勢力をふるっていて――ますます余談にわたるが、幕末に桐野利秋の父が天狗嘯集罪という罪名で切腹させられているのを見ても、天狗と山伏の関係が、かなり密接に信じられ、恐れられていたのかわかる。

この浄々たる九州天狗のなかで、英彦山の豊前坊が、九州天狗の総帥とされていたのはその格による。

熊野、吉野を結ぶいわゆる大峰入りの山伏には本山派と当山派の別があって、山伏といえば、どちらかに属したが、英彦山の山伏は、彦山派と呼ばれて、前二者に並ぶ由緒がある。そのゆえであろう。

この山を捜索するのだ。義鑑の権勢をもってしても、容易ではない。

「だが、やる！　やらねばならん」

一小菊の問題ではなくなっている。

大友のお屋形としての面目。力だけが正義の時代に、その力を疑われることは、大友二十代の由緒ある家名の存廃にもかかわることだった。

小菊を助けたのは、いうまでもなく大日坊道円である。

あのノロシのとき、丁度道円は北西の巌窟に参籠していた。南北例講の儀に合わせての自戒である。

お屋形襲撃の噂を聞き、由布岳からひと跳びに府内へ来た。小菊との約定を果すべく城内御殿に侵入したのである。

役ノ行者の流れを汲む山伏たちは、声字堂相の法門、阿字不生ノ観法たる宗旨で上求菩提下化衆生を志し、即身成仏と決定する。ただ山岳に籠っての修業ではない。小角十一世の法孫、法蓮和尚天台にて座主たりしときに勅願寺となり、弘仁皇帝（嵯峨天皇）より鉄印を賜わって、一山一臈の

僧は法印に叙されている。そのほかの山徒には講堂別当あって七十州を鎮めて海字の豊かなることを祈るという。

したがって正法堅固に檀度を修す山徒は、他山とちがい卜筮呪術を禁じている。

修験の密教が外法に通じるのは事実だが、彦山大権現としては禁じて、禁を破った者は山を逐われる。

大日坊道円は外法に興味を持ち、ひそかに修法しているを知られて、外道たり、として逐われたのである。

彦山を望む由布岳に棲むのはやはり彦山から遠去かることのできない修験者の心底、推察すべきであろう。

「――おかげさまで助かりました」

いまさら、ノロシのことを怨んでもはじまらない。

小菊は礼を言った。道円は真実すまないと思っているらしく、もはや情慾を剝きだしにすることもなく、

「なんの、礼を言われると面目ない。そなたの仇討ちのこと、聞いた。やはり両三年の修業あるがよいと思うが」

いまは、その言葉に甘えるしかない。

(――あたしも、女天狗になる)

山伏のはげしい修業に耐えて、忍すなわち下界に於て忍びのワザと称される術法を会得すれば、久六の怪力などを、肌を許してまで頼みにすることはないのだ。

小菊の決意はかたかった。

だが、情勢はそれを許さなかったようである。

由布岳に棲む山伏道円の庵に、若い女の修行者の姿を見た、という木樵りの注進で、

「さてこそ、天狗めと小菊じゃ」

義鑑は、はったと膝を打った。

賞するに銀二十貫を与え、大軍をさしむけた。

侍大将一万田弾正の率いる五千の軍兵がえいえい押しに由布岳にむかった。弾正は、謀将として聞えている。

「芙蓉山を討つぞ」

と、号して二隊にわけ、まず彦山に向うごとくに駈け、先手の隊由布岳の北方に出るや一転由布岳をおし包んだのである。

この大軍を見やって、

「しもうた、発見されたぞ」

道円は、呵々と哄笑した。

南方もすでに、ひしひしと軍兵が固め蟻の這い出るすきもない。

「軍兵五千とは、大変な戦さよのう、わしの外法をもって抜けるや否な、やってみようかい」

「天狗さまなれば」

小菊は微笑した。

「なるほど、天狗か。天とは光明の義、自在の義、狗とは癡闇の義、不自在の義という習いあり、魔すなわち仏界じゃ、真言秘密の修法に乗って天狗となって飛翔するか」

轟々たる矢弾が、山房を襲った。

山を崩し、峰々にひびく炮音と、五千の軍兵の喚声。山麓を固めて火矢が射こまれ、どっと山房は炎を吹きあげた。

小さな山房である。忽ちに紅蓮の炎に包まれて焼け落ちてしまったが、天狗の姿も、小菊の姿もなかった。火は樹々に燃え移り、かわききった疎林は梢をもって炎を導き、またたくまに火竜の躁躙は山峡一帯に及び、休火山たる由布岳は、火と化してゆく。

くノ一誕生

一

小菊の生死は不明だった。

この由布岳焼打ちは三日三晩にわたって燃えつづけ、豪雨によってやっとおさまったが、その当初、豊後富士と称される形のよい山嶺から、軍勢の喊声に煽られたように二箇の魔影が天空を飛翔し去るのを見たという者があった。

炎上飛散する樹ノ葉の舞うのを見あやまったのかどうか。由布岳の五分の一ほどを焼け肌として、鎮火したあとに、二箇の人体らしき死体が発

見されたが、むざんに焼けて道円か小菊か識別することもできない。山歩きの木樵りか猟師かもしれない。もしも天狗の影が、かれらだとすると、本身が焼かれて魂だけが英彦山にむかって飛んだのかもしれなかった。

大友義鑑は、この由布岳焼打ちによって、漸く安堵したようである。かれは不埒の天狗を焼き殺したと号して、彦山修験者に法度十ケ条を与え、牽制した。

そのせいかどうか。以来、ふっつりと、義鑑の身辺には、怪しの沙汰はなくなった。

「余の威光、漸くに海内にあまねくゆきわたりつるか」

呵々大笑したが、その年があらたまって、翌春、急に暗雲が府内を蔽うに至った。

前にも述べたように、義鑑が嫡男義鎮を嫌っていたのは、末弟聡明（または到明）の母へ惑溺したためである。

べつだんとりたてて発明とか才子とかのひらめきがあるわけではない。

すでに義鎮は二十一。当時ではすでに青年の域を出ている。粗暴なきらいはあるが豪勇で決断に富んでいる。廃嫡すべき理由もない。

むしろ、聡明は十歳にもならない。海のものとも山のものともわからないし、甘やかされているから、凡庸な育ちであったろうことが頷かれる。

逸脱した母性愛は、義鑑にすすめて、生さぬ仲の継子を廃嫡し、聡明に後を継がせることを策した。

義鑑と、この三番目の妻は親娘ほども年が離れている。

若く美しい後妻に五十男が鼻毛を読まれるのは古今東西ありがちのことだ。加えて、聡明という末子。これも年齢的には孫みたいなものだから、愚かな情愛では、ついその気になる。

「うム、それもいいが、まあ、そう急ぐこともあるまい」

と、なかなか決心がつかない。

後妻は気が気ではない。

義鎮は日一日と逞しく、侍大将としての素質をあらわしてくる。それにつれて家臣の信望も、日増に、義鎮に傾いてゆくように、気のせいか見える。もっとも、それが自然なのだが。

事実、家臣にとっては強い主人は魅力的だ。

（これはいけない。なんとかしなければ……）

彼女は聡明を抱きしめて考えた。

有力な味方をつくらねばならない。だが、へたをすると、藪を突っ突くことになる。

誰かれと考えた末、彼女は、家老の入田丹後守親真に白羽の矢を立てた。

親真は文武二道を兼たる剛ノ者で、家中にも勢力がある。

親真と結びつく可能性は二つあった。

一つは、彼女のうぬぼれかもしれないが、親真が、主君の正室という以上の敬愛を示していることである。もっともうぬぼれるだけの美貌ではあった。

いま一つは、親真が、義鎮に恨みを含んでいることだ。

嘗つて、義鎮が五郎といったころ、親真は、義鑑の命によって、付人となった。

訓育の役目である。

「忠節を存じ、度々手柄の式篇をとげ、謀深く神変をいたす分別者、折々諫め申し、御作法御直し被レ成やうに仕候へとて付置るる」

とある。

親真は義鑑の信任が厚い。謀臣であり、隠密方を差配していた。小菊の父、藤兵衛も隠し目付としては、親真の支配を受けていたのである。豊後では外法をよく識り軍学にたけている。〃神変をいたす〃とは、かならずしも、本人が幻妙不可思議のワザを持つことではない。おそらく、忍者どもを駆使して、おのれを尊しと見せていたのではあるまいか。

親真の性向は、多分に尊大倨傲で人を陥れて喜ぶ、いやな面がある。

単純な義鑑には、そうしたことも、乱世に貴重な才智に見えたのであろう。

付人といっても、義鑑の真意は御意見番になれというのだから、親真も遠慮しない。

前に述べたように、義鎮も乱世の英雄に共通した粗暴の振舞いが多い。

他の老臣の津久井、田口、斎藤、小佐井らは、義鎮の気色を窺って、鼻息に媚びている、

としか、親真にはうつらず、

「へつらい者」

と思い、口にも出した。

「悪虐無道の身を以って、何事も御意見に随い、御異見申上る事もなく」

と、義鑑に言いつけている。

義鎮のほうは、けむったくてしかたがない。かれの男色も女色も、その一々を、忍者をつかって見とどけさせ、痛いところを衝くのだ。

あるいは、こうした親真の卑劣さとその行動から見ると、義鎮を討つことを進言したのは親真のほうではないかとすら思われる。義鎮を討てば暗愚な二子義長は問題ではない。況や、義鑑を老衰と称して葬り去れば、豊後第一の勢力家となり、聡明の後見となり、後室と通じ、ゆくゆくは、おのれが広大な版図を掌におさめ得たかもしれない。

義鎮がきらったのは、ただ、けむったい御意見番というだけの理由ではないようだ。

よく知られている挿話がある。

気性の荒い義鎮は、大太刀を好み、差料にと、三尺五寸の刀を高田村の名工糾ノ新太夫貞盛に打たせたことがある。

前記の四家老に見せると、みんな舌を巻き、

「あっぱれ帯佩や御物数寄やかようの刀は誰もほしく御座候」

「此刀にては、たとえ石地蔵なりとも打破しつべく覚え候」

「御手に似合たる恰好に候」

四人とも口々にほめそやすのを、親真は苦々しい顔で聞いていたから、

「丹後、そちには、手にあうまい。重すぎるか」

と、義鎮はいどむように笑った。

親真は進み出て、

「名刀とお見うけいたしまするが、これほどのきたえにても、敵五騎か十騎に相当りまするれば刃こぼれいたしましょう。殿の御身なれば、これにまさる大太刀の物切りこそ、必要と思いまするが、まず和子にふさわしからずと存じまする」

上からかぶせてきた。

義鎮はサッと顔色を変えたが、親真は気づかぬふうに、

「なぜなれば、国を治めたまう御大将なれば、近習外様高き賤しきおしなべて、御情を深くかけられ、御憐愍の御心持が肝要に候、人の善悪を能御覧じ分られ、善をすすめ、あしきを退け、重き科をばかろしめ、かろき忠節を重くなされ、昼夜諸人の思いつき奉るように万事執行され、民百姓に生到るまで慕い奉り申様こそ、大の物きれの刃にてはござりませぬか。

また、ことさら大太刀をつかい、五人三人に相当らん事を存ずるは賤しき者のしわざ、大将の本意ではありませぬ」

縷々として強諫したので、義鎮はぷいと、座を立ってしまった。

それ以来、親真を傍に召すことはなかった。

こうした主従の仲が、陰謀には、願ってもないことだったのである。

夫人は、しかし、慎重だった。

まず、おのれの侍女の心利いたる者を入田丹後の庭に近づけさせ、狎れさせた上で丹後の妻に口説かせ、

(内々に談合の議これあり、時刻場所を御勘考あられたし)

とて、懐剣をしるしとして届けさせた。

女の身を護るための懐剣を預ける、という意味だからことは重大だ。丹後の妻は受けとる手をぶるぶる顫わせた。

親真はこの由を聞き、これを見ると、

「なるほどナ。とうとう御決心遊ばされたと見ゆる」

と、呟いている。妻が蒼い顔で、

「まあ、何事でございます、大事出来で」

「そちの知らぬことだ。黙っていよ。このこと、

口外してはならぬぞ、お方さまと和子の命にかかわることじゃ」

固く口止めした上で、思案をめぐらした。

二人の密談は、数日後に行われた。

正月十九日が、先々代藩主、備前守親治。法名見友の詳月命日だ。墓は万寿寺にある。

義鑑の祖父になるわけだが、義鑑は線香の臭いがきらいだといって、父母の命日にしか詣でない。夫人が代参する。

その機会を利用したのである。

万寿寺は創叡の年月つまびらかならずと伝える。嵯峨天皇の御宇国司百々若大臣（稚麿）その愛姫万寿姫の冥福のために建立し其名をやがて寺号としたもので、蔣山の由来は、百々若の身替りになって、蔣り池に投身したというによる。久しく廃寺になっていたのを大友貞親其旧址に一寺を興し直翁禅師を筑前から招いて開山とし、蔣山万寿寺を号した縁起にある。

山門の榜額「蔣山」の二大字は趙子昂の筆になるもので、直翁師かつて元に遊び翰林学士趙子昂と交り厚く乃て、書を寄せて其の筆跡を乞いしに子昂ただちにこれを書して贈り来れるものという。

鎮西禅林の名刹と称され、堂宇門楼壮麗をきわめ十余区の僧房を有し七堂伽藍の碧丹を点綴する境内は、竹樹鬱蒼として閑雅幽邃の浄北だ。

密談は、境内十景の一つ、万年松の林中北方、白蓮池の亭で行われている。

三

寺僧に案内きれて青雲橋を渡ってくる夫人の姿を見ると、親真は、あやしい胸のときめきをおぼえた。

妻は五十に手がとどく。若いころは美貌であったが、ちかごろでは見るかげもない。いくら手入れをよくしても、若さは、金で買えない。男というものは勝手なものだ。おのれの年齢は忘れて、美女には胸をときめかせている。

身分ちがいの、許されぬ想いだ。

（二人だけの秘密を持つ……）

わくわくしていた。

夫人のほうは男の気持がよくわかっている。

遠目に、亭のなかに男の姿を見ると、わざと、冷たくとり澄ました顔で歩いてくる。

橋を渡りきると青坊主に何やら言って帰した。

それからも、すぐには亭に来ずに、そのあたりを、静かに見まわし、池のほとりにしゃがんで水面を見たりしている。

親真はじりじりしてきた。

（何をしてござるのだ）

焦らされているとは思わなかった。

（用心なさっていられる……）

後妻の立場として、何を目論んでのことか親真にはわかりすぎるほどわかっているのだ。

（無理もない……御親子の情だ、さもあろう）

理解しながらも、早く間近く接したくて、五十男の血は、音を立てて流れている。

こちらから行くべきか、と思ったとき、漸く、夫人は立ち上った。

楚々たる歩みで亭に近づいてくる。

「――御方さま」

と、親真は平伏した。

「お待ちかえ」

つとめて平静に言う。女の狡智。いま気づいたような声音であり、表情であった。

親真は、いや何ほども、と言い顔をあげた。

大輪の白牡丹がゆらぐように、目の中いっぱいにひろがり、年甲斐もなく、親真は目まいすら感じた。

息苦しかった。秘密のあいびきである。それが夫人の野望であったとしても、男の胸には、ひそかごとの緊張と不安裡に、不埒な期待がさらに、息苦しい情感でもってひしひしと胸を責める。

その男の烈しい気持がわかりながら、夫人は、冷たい顔で、無言のまま榻に腰をおろした。

亭は、山茶花の茂みにかくれている。白い小さな花を点綴した灌木は、網代の腰張りとあいまって、二人の姿を人目から隠した。

親真の呼吸の荒さが、夫人をかえって平静にしたともいえる。浮き心がないではない。が、それ

と、野心を引きかえにするほど、渇えているわけではないのだ。

むしろ、男の慾望を最大限に利用することを考えている。

「わたくしの心、おわかりかえ」

夫人は言った。

「は……潜越とは存じまするが、常日ごろより拝察……」

「うれしい」

「おいたわしく存じまする。御親子の情、かくあるべきかと」

「うれしゅう思います」

つと、夫人は手をだした。

すがりつくように、男の手が、それをはさんだ。

重いもの一つ持ったことのない手は、たおやかで、冷たく、親真のふとい指、厚い掌のなかで、溶けてしまいそうであった。

親真は唇をよせた。

触れたかどうか——すっと、手はひかれた。

「いけませぬ、まだ……」

まだ……後ならいいというのか。

見あげる親真の目に、切れの長い、妖しい微笑を含んだ眼が、うなずいた。暗黙裡の意志の通じあいとも見えたのである。

四

「のう、丹後どの」

語気を変え、夫人は哀しげにまばたいた。笑ったと思うと泣く、はげしい女の変化が、五十男には活々として感じられる。

「和子の身の立つように計ろうてくりゃれ、あの荒けき五郎どのが、当主となられるなれば、和子はひどい仕打ちを受けるは必定……それが不憫で夜の目も眠れぬこのごろじゃほどに」

「御心中お察しいたしまする。それがしも前々より思うておりましたること。五郎御曹子の御行儀にては、代々名誉の御家も、いかがなることかと」

「わらわも、それが案じられて……」

「したが、かかることはわれらのみの勘考にても一歩を誤りますれば取かえしがつきませぬ。お屋形におかせられては、いかがなることを」

「たびたび申し上げるなれど、いまだ、廃嫡とまでは踏みきれぬ御様子」

「ちかごろ、五郎御曹子には、ずんと用心深くおなりでござれば」

と、親真は片笑いをして、

「いままでの御乱行もどこへやら、奇妙に身を慎んでおられるせいでございましょう、お屋形におかせられても、廃嫡の理由を数えるにはいささか弱いかと」

「で、どうすればよいと申すのじゃ」

「左様……豊後の大守にふさわしからぬ行状があればようござりまするな」

「……」

「ただの荒々しい御所行には、家中でも侍大将たる者かくあらねば、などとほめそやす者もおりまする。が……」

「そ、それは……」

「方策……この丹後におまかせ下さりませ」

「いかような方策か、チト気がかりな」

「御安心を、両三日のうちには、定めまする。霞ノ者を、つかいまする」

「忍者を！」

夫人はあわてた。

「大丈夫かえ、あの者などをつかうて……」

「御心配なく。かれらは、地虫でござる」

「地虫……」

「いや、ノキ猿、草とも、蝙蝠とも梟とも。ははは、とにかく、並の人間ではござらぬ」

「……」

「武士ではござらぬ。われら武門の盛衰のそとに居り申すゆえ」

「でも……」

心配がぬけないらしい。

その愁い顔を、親真はうっとりと見つめている。

美しい女は、泣いても怒っても美しい。西施のひそみにならうという譬えがあるくらいだ。

夫人の愁い顔は、さながら雨にうたれた白芙蓉

を思わせる。
（このお方のために……）
あらたな思いがこみあげて、観真は、うつつなままにくりかえしていた。
「それがし、いのちに代えましても……お心丈夫に！」
やがて、二人が別々に立ち去ると、亭と山茶花のかげをうつした池の面が、ぽかりと割れて、波紋のなかに頭が出たが。
〈ふふふ……地虫か〉
自嘲するように、その影は常人にはわからぬ声でつぶやきを洩らしている。
〈たんと並べおったのう、ノキ猿、草、蝙蝠、梟か、ふふふふ、もう一つ、魚とはいわざったな、ふふふふ〉
すぽりと頭はまた池中に沈んだ。波紋はやがて鎮まり、万寿寺は浄界に還った。
その藻草ノ亀次が、夫人の前にあらわれたのは、中二日置いた日の朝である。
夫人は毎朝、池の鯉に餌をやる。

その朝も、春とは名のみで寒気がきびしく、庭にはうすく、霜を置いていた。
麩を持って、池の土橋にしゃがむと、緋鯉真鯉が、するりと寄ってくる。
夫人はいつものように麩を投げ与えていたが、その群れ鯉のなかに、人間の顔が見えたので、ぎょっとした。
咄嗟に、自分の顔が写っているのかと思ったのである。
が、違った。
夫人が、恐怖を感じて色を失ったとき、その顔はニヤッと笑ったのである。
「まっ……」
思わず、手から残りの麩がおちた。
わっと、鯉が集まる。と——水面に突風が吹いたように、すーっと、麩が走って八方で散った。
あとに、ぽかりと、その顔が出た。
「——御無礼お許しを」
これは藻草ノ亀次とは知らぬ。
「そちは……」

「霞ノ者」
と、亀次はこたえた。
「れいのこと、明後日、行いますれば」
「おお……」
漸く、丹後守の言葉が思いだされた。
「明後日……」
「若殿は、狩りにお出でなされまする」
「存じています」
と、夫人は声をひそめて、
「佐伯辺にとのこと」
「仰せのおもむき、たしかに……」
それ以上は言わなかったが、成算ありげであった。
「お待ち、そなたにあげるものがあります」
夫人はそう言って、居室へかえると、銀子を五百匁ばかり、手早く袱紗につつんで池畔へとってかえす——
池をのぞきこんだとき、
〈頂きました〉
と、その声が言った。

「何を言いやる？」
はっとした。懐中が軽くなっていた。夫人がぎょっとしたのは、胸のあたりが、いつの間にか濡れていたことである。
濡れた手で、袱紗包みを引き出したとしか見えなかった。
（いつの間に……）
夫人は呆然としていた。その胸の底から、
（あれほどの忍びのワザがあれば……）
期待に応えてくれるだろう。夫人の頬に、匂うような微笑がゆれた。

五

父にうとまれているという気持が、義鎮を府内からなるべく遠去けようとする。
鷹野や川狩、猪狩などに遠出させた。戦さがなければ一日も生甲斐がないように見えた。
その日、義鎮が赴いたのは、佐伯表であった。
ここは度々行くので、前嶋、柴田、釜戸崎の三ケ所は、卜野（標野）となっていて、猟師は御法

度だ。

前もって、佐伯の領主佐伯紀伊介惟教に右の由を仰出されていたから、御諚をかしこまって、紀伊介は用意を怠りない。

佐伯は府内から十三四里南方になる。

豊後大守の嫡男だから、紀伊介は丁重に馳走する。宮ノ内というところに仮屋を立てた。

その間づもりは、

一、御広間十五間、一遠侍九間、一寝所五間、一御台所六間、一御鷹部屋二十間、一御馬屋二十間、一御長屋六十間——御仮屋といいながら、結構な広さである。

供奉の大名は津久井美作で、あとは若手の大名、臼杵鑑速の子息勝之太郎統景、田原勝之四郎親虎。

両人ともまだ若年で、〃御寵愛浅からず〃とあるから、男色の仲だったのであろう。

ことに親虎のほうは、名こそ猛々しいが、公卿の柳原殿公達の生れで田原近江守親堅入道貂忍養子となった者だ。紅顔黒瞳の美少年だったのであろう。

津久井美作が供奉したのは、かれの領地が道すじであるせいもあった。

夜の酒宴の座興にと、金剛、金吾、観世、宝昌(生)など能役者も召し連れられた。

その日は御仮屋に泊って、夜は酒宴がひらかれた。

御囃子があり、五番行われて、人々は浮き立った。

義鎮も、府内にいるときとは別人のようにはしゃいで、秘術をつくしての乱舞を賞して黄金や時服などを賜わる。

翌二十五日は、朝から前島での鹿狩。

大入嶋ともいい、周囲三里、南北に長く、水鳥のようなかたちをしている、その首にあたるところに、鹿垣ができている。

平生から卜野で鹿が多い。義鎮はここに立って弓に矢をつがえる。

御鹿垣の内は御小姓衆其外廻り御近辺衆の鹿垣で其近所にうしろ射手が並ぶ。

勢子は島の南から入って鹿を追い立てたが、牛馬の牧もあって、牛馬が鹿にまじってくる。これを追いかえして、鹿だけを狙う。

祐筆灘尾左衛門の手記〃卜野之簪〃によると、——矢ごろ能く追いかけ奉る故、御矢先違わず、殊に御弓勢強く御座あるに依り、遊ばしたる鹿とどまらずという事なし。其日の猟鹿五十七頭留る。比類なき御慰みなり。云々——

その夕方、宮ノ内の御仮屋附近で、紀伊介の足軽が、怪しい男たちを発見している。

畔道に焚火が見えた。蓑笠の百姓が二人、のんびりと火に当っている。

足軽三人が近よって、

「こりゃ、何処の者だ。汝ら御達しを聞かなんだのか」

頭から怒鳴りつけた。

「若殿のお目ざわり、卒爾があれば、うぬも家族一統死罪をまぬがれまいぞ」

「うるさい！」

百姓はじろりと見上げた。

一人は何か小壺を持ち火にあたためては、ゆっくりとかきまわしている。何やら薬のように見えたと、後に述べている。

「う、うるさいじゃと！」

「ああ、うるさい。すっこんでおれ」

「な、なに！　この胡乱なやつらめ」

三人が槍をとりなおすのにも平気で、

「おい嘉兵衛」

と、一人の顔を見つめて、

「えらさうな口を利くな」

「う……なんとて、わしの名を……」

「存じておるとも。われらにはなんでもわかる。きさまが三日前、誰やらとナニしたかもな」

「げっ……どうしてそんなことを」

足軽は蒼くなった。たしかに、その日、隣家の人妻とつい垣を越してしまったのだ。

誰にも見られたはずはないのに——

百姓はにたりと笑った。

「図星じゃろ、その前は明神前の何とやらいう子守を手ごめにしたな。あんな阿漕な真似はよろし

くないぞ」
　足軽は話半ばから、眼を白黒させていたが、他の二人にも漸く、意味がわかったらしく、
「こ、これは府内の……」
「朽綱の霞ノ方々でござりましたか」
「お見それいたしました。何分にもあのことは御内聞に」
　忍者の眼は恐ろしい。どこまで見透しているかわからない。
　足軽らは、ぺこぺこして、逃げるように立ち去った。
　百姓二人——霞ノ道平とすぼけノ磯次。
「ふふふ、泡くって行きおった」
　磯次が言った。
　小壺をかきまぜながら、道平が、
「おぬしも人が悪い」
「なに、あれくらい威かしてやったほうがよい。ああいう小者は禄高で人を見るからな。われらを小莫迦にするといかん」
「三日前のことか、子守のことなど、よく存じているな」
「地獄耳」
　うっそりと磯次は言った。かれは数日前から佐伯表へサグリに入っていたのである。

六

　二人の霞ノ者が、この場にあらわれたことは別段、異としない。
　五郎御曹子義鎮の陰守り、という目的は当然、頷かれるところである。
　が、御帰邸を待っているような霞ノ者の素振りには、いささか守護の気がまえとことなっていたようである。
「霧作は忍にかかったかの」
「多分な……」
　と、道平は手を止め、顔をあげた。
「おもどりは六ツになろう、それまでに手をかけていたほうがよい。それに……」
　空を見上げた。
　磯次、つられたように目をあげるのへ、
「よし。もしも降ったら、抱かせるか」
「いやだ」
「ははは、負けるからだな」
「そうじゃない。でも、そんなのいやだから」
「勝てばよいではないか、首を賭けても」
「そうね……いいよ」
　よほど自信があるらしい。
「磯、おぼえておいてくれ、賭けたぞ」
「おいおい、おんしが負けたら、どうする」
「う、うむ……おれのモノを貸す」
　とたんに、ぱっと、小菊のからだが、とびあがった。しなやかな脚が、道平の顔を蹴る。
　反射的にのけぞり顔をふって道平はさけたが、そのまま、
「あ……」
　と、目を白黒した。
　顔が動かなくなっていた。髪が槇ノ木にひたと貼りついたような。目にもとまらぬ早さで、小菊の手から飛んだ鉄菱が、道平の髪を三ケ所、幹に止め打ちにしたのである。
「夜半には一降り、くるかもしれぬ」
　その呟やきに答えるように、
「降らないよ、今夜は」
　女の声がした。頭上の槇ノ木からひらりと影が飛びおりてきた。
　放布利髪を束ねて、腰きり布子に裸足の女だ。ほそおもての整った顔に、眼がキラキラ光っている。まだ若い——これは、小菊だったのである。
　あの繊細な、窈窕たる美女だった小菊とは別人かと思われるほど、発剌としている。剝きだしになった四肢も、ほそくしなやかながら、羚羊のすんなりと健やかで強靱なすがただった。
「なんだ小菊か」
　と、磯次は、目をほそめて、
「雨が降らないとは」
「あの雲行きでは降らない。賭けてもいいよ」
「おもしろい、おりゃ降ると思うぞ」と、道平は、
「何を賭ける」
「なんでも」

「わ、冗談だ、許せ」
道平は悲鳴をあげた。
「ほほほほ、ほほほほほ」
小菊の笑い声も、曇り空にかん高くひびいている。
そんな少女を磯次はあきれるような、ほのぼのとした目で見まもって、
「変ったのう、小菊も……去年の秋に由布岳から助けたときは、笑い声を立てるのさえできなかったがのう」
磯次の歎息も大仰ではない。
事実、九死に一生を救われたときは、助かるかどうか懸念されたものだが、霞ノ忍法に延命法がある。その故かどうかわからない。
小菊の若さが、死の手を払いのけたのか。
霞ノ忍者たちが、小菊を助けながら、義鑑のもとに差出そうとしなかったのは、深い意味がある。
義鑑の格別の恩を蒙っていないことは前に述べた。
小菊が由布岳で焼死んだらしいという噂で、義鑑が得心したとすれば、霞ノ忍者にとって、小菊を助けたのは、よき女忍の卵を得たことになる。
これまで、霞ノ忍者たちにとって、唯一の欠点とされたのは、〝くノ一〟の手がうすかったことだ。
義鑑の家来たる霞ノ一党の、その保護を受けることになった小菊は、執念に憑かれたように、忍法を習った。
霞ノ一党のほうでは、小菊も英彦山の天狗に見こまれただけに、素質があると見たのか。義鑑へ対する陰靡な抵抗だったかもしれない。天狗の人さらいと、神隠しということが信じられた時代である。神隠しにあった子は、神通力を得てもどると信じられていた。
あるいは小菊にも多少、その錯覚が作用したのかもしれない。
修行は生やさしいものではなかったが、小菊はわき目もふらず、忍の道を進んだ。
磯次たちが呆れるほど、短時日のうちに、目ざましい進境だったのである。
磯次が道平の髪を打ち止めた鉄菱を一つ一つはずしてやると、
「ところで、今宵の手はずじゃが、小菊よ、分け身ノ術を忘れまい」
「犬丈夫」
にっと酷い歯を見せて小菊は、
「お登世ノ方は、きれいだけど、年上だから……」
そして、口の中で呟やいた、「霞ノ忍法《乳房分け身》……」

淫夢の章

一

義鎮が御仮屋にもどってきたのは六ツ刻少し過ぎていたが、汗と埃りを流すために御湯殿の支度が出来ていた。
ざっと流して上ると、もう能舞台がしつらえられて庭前には今日の獲物が並べられ、星打ちの順に賞される段取りになる。
星打ち、というのは、鹿の眉間を一番星とし、心ノ臓を二番星とし、順次あたり、急所を外れていたずらに傷つけ苦しませるのを下としたもので、矢にはそれぞれの名が入っているから、賞罰とも、受けることになる。
時服や盃を賜わるなど、段々の式次が終ると、御酒宴となって、能舞台では、小原木の道行。踏子女の出立にて、肌には朽葉のねりを着て、ぬきかけにして、白をくくりほらし、その端を長く下げる。前垂は金襴。桜の作り花の枝に、真紅の縄にて結び付けて、かざして踊る。
見所には、ずらりと居流れて見物するのだが、馳走役の紀伊介は、何かと指図して、夫人のお登世ノ方も、義鎮の接待に大わらわだ。
三十路に手が届く年ごろだが、嘗つて、義鑑が三度目の夫人を娶るときに望んだというだけあって、その美貌は、奇妙に妖しい魅力がある。
どちらかというと、瓜実型の豊頬で、鈍くよどんだような皮膚のいろと、描いたように上下のふ

くらみを持った唇。右の眼がやや斜視がかっているせいか、凝っと焦点を合わせるように覗きこまれると、男の気持は、かすかに騒いだ。

義鎮は乱暴者だが、家臣の妻や娘に狼藉することはない。その必要はなかった。固執しなければ、慾望を満足させる女若に不自由はしない。

舞台では、澄んだ声で小原木の道行を踊り唄う声が流れてくる。

〽小原木小原木召せや
黒木召せ黒木召せ
小原しづ原せれらノ原
おぼろの清水のかげ
早瀬の里人
知らぬ梅の匂うや
この里の春風……

義鎮は、うっとりとなっていた。耳はその唄を聞き、眼は舞台ではなく、お登世ノ方を見まもっている。見るだけは無遠慮だった。

お登世ノ方は、その視線を頬に感じると、狼狽と羞恥で、ぽっと上気した。白くふくよかな頬に、血がにじむようにうすくひろがってくるのが、初々しい感じで、ふと人妻ということも、三十路近い年齢も忘れさせた。

やがての後——

宴果てて、お登世ノ方も疲れをおぼえ、設けの小屋に退ってゆくと、あとを追ってきた侍が、

「——お屋形さまのお召しにござります」

圧えつけるように言う。

その語尾に、否やを言わせぬ強いものが感じられた。女の性であろうか。お登世ノ方は、義鎮の熱っぽい眼を、思いだした。胸が高鳴った。

「——何の御用でございましょう?」

ゆるやかな微笑を含んで、もう遅うございますゆえ……と、固辞しようとしながら、その言葉が声にならなかった。

「お召しでござる」

侍は、さらに重ねた。

その眼が、強く光ると、お登世ノ方は、すーっと、引き寄せられるような気がした。気がしただけではなかった。無意識に、ふらふらと歩きだし

ていた。

あわてて、侍女二人が従おうとするのを、侍は、低い声だったが、

「お控えなさるがよろしかろう」

と、言った。

それは、ある意味を匂わせていた。

お登世ノ方が寝所の近くまで行ったとき、すっと、かたわらの戸が開いた。

もうそのときは、お登世は夢遊病者のような気持になっていた。ふらふらと、中へ入った。

そのまま、立くらみしたように崩れた。

と——

数弾指の後に、するりと出た女がある。

お登世ノ方——と、見えた。

不思議なのは、呼びに来た侍である。あたりを見廻していたが、〝お登世ノ方〟が、寝所へ入ると、さっと、御次の板戸へ身を寄せた。

お小姓が待っている。侍は小さな竹筒を咥えると、フッと何やら吹いた。灰いろの粉煙が噴き出す。それは、静かに渦を巻いて、お小姓のまわりに漂よい、かれをとらえた。

こっくり、と首が垂れた。居眠りをはじめたのである。

〈かかったな……〉

侍はにんまりと、闇のなかで嗤った。

〈ふッふッふッ忍法《邯鄲台》……ちくとは喰めぬぞ〉

二

眠りは浅かった。

鹿狩はこころよい疲労をもたらしている。二十歳という年齢も、祖父譲りの壮躯も、不眠ということを知らぬ。

酒も美味かったし、小原木踊りも楽しかった。こころよい熟睡が得られるはずだった。

が、奇妙に頭が冴えて、寝つきは悪かった。

瞼を閉じると、白い面輪が浮ぶ。お登世ノ方である。

(ばかな、紀伊介が妻にてあるものを)

打ち消そうと思えば思うほど、あの微笑が、は

にかみを含んだ唇がほころび、無意識ではあろうが蠱惑的な黒い眸が——胸を騒がせる。

かれは妻を想おうとした。二十歳にして、すでに妻を持っている。世間並以上に愛情は感じていない。大名なれば早くに娶っただけである。

妻の面影は、浮んでこなかった。

（小姓を……）

と思ったが、その興も沸かぬ。

お登世ノ方にそれだけ気を惹かれていると悟ったとき、うつらうつらと、頭に靄がかかってきた。

ほとんど同時である。

かすかに、かれが、ある匂いを感じたのは。

その匂いは、けむりのように、忍びこんできた。

色はない。渦を巻いて、ゆるやかに流れこみ、義鎮にかぶさり、くるんだ。

うつつに——浅い眠りのなかで、義鎮は、お登世ノ方の匂いを嗅いだように思った。

その姿が、ふっと浮んだが、霧のなかに、溶けこむように霞んだ。五体は眠気にしびれている。

義鎮は何か言おうとしたが、声が出なかった。急に部屋中が昏くなったように感じた。燈火が昏くなったのは事実である。帳台の中で、義鎮は何やら、寝言を洩らしている。

唾魔に誘惑されているようなこころよさであった。義鎮は抵抗なく、ひきこまれそうになる。

かれは、瞼の外を、何やら、明るいかげが掠めたように思った。

この邯鄲の夢枕に、ある快感がかれをとらえたのである。

その快感は、はじめ何かわからなかった。

幼いころ、乳母の手で着換えをさせられたときのような——半ば眠ったままで、ゆるやかな官能の目ざめがあった。

その快感は——

かれの意志ではなしにもたらされている。

夢うつつに、かれは女を抱いているような幻覚におち入っていた。

義鎮の股間に、何やら黒灰に包まれた一箇の影

がうずくまっていた。その影がもたらす快感。

かれの玉茎は、温かい壺にすべりこんだような、甘い刺戟の快美感のなかで、熱く火照り、呻きをあげた。

義鎮の口から、ある声が洩れた。

意味をなさぬその声は、将軍も非人も、ひとしい人間であることを意識させる、同じものだった。

義鎮はその快感のなかで、記憶をたどろうとしている。

鹿狩——御仮屋——酒宴——女……紀伊介の妻、お登世……

かれは見た。

一穂の灯あかりもない部屋のなかに女が浮んでいる。

女身は——お登世ノ方を思わせた。かれの幻覚は、白い透きとおるばかりの女体を、一糸まとわぬ裸身を描いているではないか。

（——まさか、あの淑やかな人妻が……）

否定しようとするから、そのすがたが、強烈にかれの心を乱していった。

妖しく身をくねらせて、美しい裸身をほこらしげに舞っているのは、宵の小原木——現実の記憶と夢幻の裸女との交錯が、義鎮を射精せしめたようであった。

いかなる場合でも、爾後の処置は自らの手を汚さない。女若を問わず、他の手が始末することに馴れているだけに、射精の後もその影に委ねたままだ。

〃お登世ノ方〃の白い背にあふれるばかりのゆたかな黒髪が舞いおどっている。

胸のふくらみは、まだ娘のそれを思わせて形よくひきしまっていて、思わず義鎮の手を差しのべさせた。

乳房からなだらかな起伏をもつ下腹部のその丘には、毳毛の一刷がけむっていた。うす墨を流したほどもない。その微細なかげりは、そのまま甘肌のやわらかい感触を想わせた。

繊い首すじの、たよりないまでの弱々しさといい、しなやかな肌の、ものうい動きは、艶麗を競

って厚化粧と豪奢な衣裳にくるまれた妻や妾たちにはない、清新ですがすがしい色香といえた。
すでに紀伊介の妻となって十余年——子が二人もあるひとにして、この若さは、むしろ異様であった。
が、現実と夢幻の混沌たるなかでは、その矛盾も、女体のけだるい舞いの妖艶さのなかに霧散してしまう。
（幻覚なのだ……夢を見ているのだ……）
そう思おうとしながら、かれをとらえた甘美な恍惚感は、虚脱するまでに強烈であった。
義鎮が、女の名を呼んで、手をさしのべたとき、股間にうずくまっていた影が、なめくじの溶けるように、消えた。

三

義鎮はそのことに気がつかぬ。双眸は熱を帯びて瞠らかれ、火を吹くばかりになっている。
「——お登世……」
いつ果てるともない、ものうげな舞いをつづける裸女を呼びかける声も、うつろなものだったが、
「あい」
答えた女の声もうつろであった。
女体が白いけむりのように義鎮にかぶさってきた。甘酸っぱい体臭と、黒髪のたわむれにぶるっとふるえた——
それが記憶の最後である。義鎮は深い奈落に沈んでいった。
どれくらいたったかわからない。
正気にかえったとき、義鎮は、三尺と離れぬところに打ち伏した女を見た。
裸身でこそなかったが、
（お登世！）
愕然としたのである。
夢寝に得た陶酔が、錯綜して甦ってきた。
（なんということを、しでかしてしもうたか）
咄嗟に、かれは父義鑑の顔を思った。
義母の喞けりの表情を思った。紀伊介の怒りと、そしてあきらめの姿が、描かれた。
（夢ではないか、夢でありたい……）

おのれの前をひらいてみた。
だらりと裸根は凋んでいる。青年の気さかんな義鎮である。いかに前夜、女若を弄んでも、翌朝、凋れるということはなかった。
このなさけないありさまは、昨夜のすさまじいまでの交合を端的に物語っている。
お登世ノ方も漸く目ざめて、うつろな表情であたりを見まわしていたが、閨房のありさまを見、義鎮の目とあうと、はっとなって、とびすさって平伏した。
「あたくし……卒爾を……お許し給わりませ」
お登世ノ方はさっと赧くなったが、事の重大さが、すぐに全身をふるわしてきた。みるみる蒼ざめた。
「いや、わしが……いささか悪酔いしての狼藉であった。許せ」
「——御免下さりませ」
分秒もこの場に居たたまれないようにお登世ノ方は小走りに立ち去った。
夜はまだ明けていなかった。
とり乱したお登世ノ方の姿を凝っと見送る眼が、松の梢にあった。
〈うまくいったな……〉
一人が言った。これは、あの近習に扮した侍——実は霧作と呼ばれる忍びであった。
〈——わりと、良い肌であったわ〉
ペロリと舌なめずりをした。
〈ばか〉
小菊は横目で睨んだ。
〈そうような、浮わついた気では、忍びノ道は……〉
〈よせ、釈迦に説法じゃ〉
〈ちがうよ。馬の耳に念仏だろう。そんなふうではいつか失敗るからね〉
〈生を申すな。そなた、どうじゃ、御曹子の味は？　女どもは御曹子と申すと眼のいろを変える。《乳房分け身》で御方に変じたとは申せ、御曹子に抱かれた現身じゃ、さぞ、とろけたことであろ〉
〈ばか！　ぶつよ〉

〈ははは、そなたになら、ぶたれても咬まれても痛くないわさ〉

そろりと手が、腰へのびて、

〈いちど、そなたとしっぽり濡れたいと思うていたのじゃ、一仕事終ったあとのまぐわいは又格別ぞ、ナ……〉

執こく、片手は乳房へ、片手は下腹部へまさぐりのびてくる。

ぱっと梢から飛鳥のように、小菊ははねた。

〈ちッ……〉

霧作の両手に数本ずつ、銀糸のような針が突っ立っていた。吹き針だった。

〈眼をつぶされないだけ有難いとお思い〉

〈うひひ、思うぞ、思うぞ〉

返事もせず、小菊の影は、木ノ葉の突風に吹かれたように、闇の澱んだ地上を走った。

御仮屋から五町ほど離れたあたり、亭々たる杉木立に囲繞された明神の社がある。その社殿の屋根を蔽うようにして、梢をひろげた巨大な榎。五ツ抱えもありそうなふとさで、三尺も盛りあがった根瘤が、奇怪な姿を暁闇にうずくまらせている。

小菊の影が入ってゆくと、

〈霧か〉

榎が投げ問いしてきた。

〈菊！〉

と、応えるや、小菊は、ぱっと根瘤に駈け上っている。

四

根瘤の上に洞がある。影が動いた。

洞の中は、猿のように、影が二つ、膝を抱いてうずくまっていた。道平と磯次である。

「済んだかや」

道平が言った。酒の匂いがした。

「ええ……済んだ」

小菊は、うなずいた。頬が赧くなったようだ。

闇がせめても、幸いする。まだ、しごとだと割切るほどに成長していない。

「ははは、ははは、一段落」

と、道平は瓢箪に手を出した。

「よかったな。御曹子もとうとう、紀伊介の奥方に手をだしたかや」

「酒だ。まず祝え」

道平は、瓢箪に口をつけ、ごくごく咽喉を鳴らして飲む。息もつかずに、二合あまりを飲み干して、ふーっと息を吐いた。

忍者が酒に淫することは、拙の拙たるものとされている、一仕事終えたあとに、したがって、咽喉を満足させる。

「これで、御曹子の評判はたしかに悪くなるな」

「紀伊介が黙っているかな。謀叛せぬかな」

「せまい。泣き寝入りであろう。だが、家中が穏やかなるまい。誰でも、わが妻を寝とられれば、平気でおれまいて」

「御屋形も、五郎どの廃嫡が容易になるという寸法か」

「左様……で、明日は？」

「おれがやる」

声がした。

いつの間にか、根瘤の途中に影がついていた。

霧作だった。

「おお、もどったかい」

「今日の明日じゃ、明日もおれにまかせてくれい」

「一人占めか」

「霧ノ一党にとっての大事。ワザのたつ者がやるほうがよい」

「こやつ！　おぬしのワザとばかりは申せまいに」

「うム、小菊のくノ一、分け身のワザはたしかであったわい。まこと、お登世ノ方そっくりに変形してのう」

「ほ。見たかったの」

「とくに、裸がな」

「見たかった」

道平は又言った。

「およし、ばか」

その小菊の肘を、ひょいと道平がつかんで、

「とっとと……投げ菱は勘忍」

「声が高い」
霧作は成功に酔っていた。
「明日はな、お湯殿を狙うつもりじゃ」
「なるほど」
「お湯殿のかかりには、楓という女がいる。これは好き者ゆえ、造作はない。それに、兄がならず者での、噂がすぐひろがるじゃろ」
「あたしは、御用済みかえ」
「うム……連れ忍び、するか」
「する」
「なら、好都合」
道平が首をすくめて、
「また小菊の裸が拝めるのか。なれば、おれがやる」
「よせ」と、とめたのは霧作、
「菊の吹針は目にくるぞ。おりゃ両手で済んだがのう」
「見せろ」
両手の甲に血の点々が浮いていた。
もう、忍者の夜目でなくとも、それが見えるほど、夜は白みかけている。
「冗談はそれくらいにせい」と、磯次は、外を見まわした。「よし、明日——いや今日はそうせい、お狩は三日にわたる。その次は？」
「おりゃ……考えるがの、厠はどうかい」
「うム、なるほどな、厠か」
「厠となれば、いよいよ、噂は高くなろう。五郎御曹子が、御家老の紀伊介の妻女を犯し、次に湯殿の女を犯し、さらに厠で女を……か、こりゃ国で騒ぐじゃろ」
「——われらにも鳥目がたんまりと、な」
その笑いも、あきらかに見えてくる。春の朝がきていた。

五

その夜明けに津久井美作は、お召しと聞いて駈けつけると、義鎮は寝召しのまま、御仮屋の囲いの内の竹林を一人、歩いていた。
小姓を十数歩うしろに遠ざけているのは、考えごとをしているせいだった。
美作が近づくと、義鎮はふりかえって、うなずいた。無言だった。精悍な眉宇が愁いに閉されているのを、美作は見た。
この若殿にしては、これほど沈鬱な表情をしているのを見たのははじめてだった。
津久井は、胸をふさがれる思いがした。
（昨夜……何かあったのだ）
と、思った。
義鎮は、一度ふりかえっただけで、そのまま、歩を運んでいる。竹林のほそい径であった。
「美作」
ふいに、かれは言った。
「聞いたか？」
「は——何ごとでございましょう」
「聞かぬか」
「は、なにも」
「紀伊とは、逢うてか」
「いや、未だ……」
「おれの口からは申し難い……が、申さねばならぬ」
「……」
「おれは……」
と、言いさして、やはり、口ごもった。
竹林を出、白梅のみごとなあたりに来た義鎮は、決心したように足をとめた。
「昨夜は酔っていたか？」
「は……いえ、何ほどもおすごしならぬように見うけましたるが」
「であろう。だのに、奇体なことが……詭弁ではないぞ、惑乱とも覚えぬが……」
義鎮は、昨夜の一件を話した。
津久井は胸襟をひらける重臣の一人である。
「——無理強いしたのではないぞ、お登世どのが……われから肌を見せたのじゃ。おれも男ゆえ……」
津久井は、思慮深い顔で拝聴していたが、
「恐れながら、これまでも左様な幻を御覧になったことは」
「ない」
「はあ……」

「はじめてのこと」
「――その女人は」お登世ノ方とは言わずに、
「裸で舞いを舞うておりましたと？」
「幻と思うた。それが、まことであったものよ。現身であったとはのう」
「それにしても、左様なことが……信じられませぬな、いささか面妖なこと」
津久井は思案げに目を伏せたが、
「心当り、ないこともございませぬ」
と、言った。
その日、義鎮は気分悪しきため、と称して、御狩は中止。一日、漫然と過した。
噂はその日のうちにひろがった。侍女の口から洩れたのである。
たとえ、それが虚妄であったとしても、不名誉にはちがいない。
狐に化かされたのなら、またそれで、武将としての威名がおちる。どちらにしても、義鎮には不利であった。
その夜――

昼下りから雨になった。春雨である。柔らかい雨が、梅樹に降りそそいで、白梅を濡らし、馥郁たる香りを部屋に流れこませた。
日暮れ少し前に義鎮は湯殿へ入った。
湯は仮屋のことですい風呂である。蒸風呂ではない。
入湯にも作法がある。お付の女中は、板ノ間に二人控え、中の二人が、湯をかける者、垢をする者――垢掻きというのがよく間違われるのだが、指の腹で、少しずつ垢を縒り出したのである。
さて、この日、湯をかける女に変じたのは小菊である。
湯気が忍法を救けた。忍法は常に外的条件を最大限に応用することによってその効果があがる。
檜の香が匂に立つ湯殿で、義鎮は、昨日と同じ、官能のくすぐりに襲われた。
かかりの女楓が目の前で帯をとき、するすると肌着を脱ぎ、腰のものを脱ぎおとしたのである。
湯気のなかには、妖しい匂いがただよい、かれの男の気をそそった。媚薬――それは先日道平が

小壺で掻き交ぜていた、あの秘薬に相違なかった。
官能の目ざめは、おのれの意識そこになくとも、裸根に直接な刺戟を加え、潜在意識の欲情をそそるにある。
（どうしたことだ）
義鎮は、がらにもなく、赧らめた。勃起したのである。
同時に、はげしい睡魔の誘いを感じた。
（どうしたことだ？……）
おのれでおのれの動きがわからなかった。
かれは、いつしか、侍女楓をとらえ、将に犯さんとしていた。楓のほうも、おののく手を義鎮の股間にのばし、艶笑を投げている。もはや、あさましい色情の迷夢のなかで、自失、忍法に支配されているにすぎなかった。
そのとき、突然、絶叫が噴いた。
もう一人の女――ゆきに紛れた小菊であった。
突然、どこからか飛来した手裡剣が、その肩を貫ぬいたのである。

混沌たる湯気のなかで、小菊がぶっ倒れるや、義鎮の迷夢は、さめた。愕然として楓から離れている。
「和子！　御注意！」
叫んだ声は津久井美作。
ばりっと、羽目板が数枚、はずれた。そこから宵風とともに、数人の屈強の男たちが雪崩れこんできた。
肩を貫ぬいた。手裡剣が柱に刺さり、小菊の忍法では、身動きもならなかったのである。

大友二階崩れ

一

捕われたのは小菊だけだった。
霧作は逃げた。津久井の家来、原左内は大力を以って聞えた男である。天井裏にひそんで、義鎮に目くらましをかけた男をつかまえることはつかまえた。

足場が悪く辛うじて腕をつかんだ。左腕だった。

そやつは、僅か五寸の隙間から逃走しようとしていたのである。忍者が五体の間接を自らはずして、常人の想像もつかない僅少の間隙をスリ抜けるのは知られている。

左内はまた人並はずれた肥躯だ。

腕をつかんで、ひきずり出そうとしたが、ならぬ。

「誰か、こやつを」

喚いたが、左内のからだだけで、いっぱいに口がふさがっているから、助勢のしようがない。

「出い」と、原左内は喚いた。「出てこねば、この腕、ねじ切ってくれるぞ」

うふふふ、と絶望的な笑い声がこれに応えて、

〈切ってみろやい〉

「ぬう、こやつ！」

原左内は後の大隅守である。その大力に就ては角力の故事にいろいろと引き合いに出されるほどで逸話が多い。

余談にわたるが、人口に膾炙したものでは、石火矢（大砲）の話がある。

――肥後国戸ノ口迄、南蛮国より石火矢五百挺渡る。一挺を十六人にて、臼杵丹生之嶋（城）迄召寄せ、広庭にならべ置きたるを、宗麟公（義鎮）大隅守を召して、一人して持て見よと仰出さる。大隅守御諚にまかせ、筒先より起し肩に載せ、広庭を二三べん廻りて元の所におろし置く。宗麟公猶力を御覧ぜられん為めに、自然石の大いなる手水鉢のすへようのふりを御好み被レ成、直し候へと御諚あれば、一盃有る水をこぼれざる様に置き直したりしかば御感の御言葉を下し給う――

また、かくれなき大男の武宮武蔵守というのが八尺の巨躯であったが、城中で座敷の上下をゆずりあったとき、大隅守は、〃両手にそろりとすくひ手のはらにすへ、我より座上に直したり〃一座みな唖然として、声がなかったという。

これほどの大力である。

その力に摑まれたのは、不運とあきらめるしかあるまい。

「よし、ねじきるぞ」

ぐーっと、ひねりあげた。間接はすでに自らはずしている。皮膚だけが奇妙に、よじれた。

原左内としては、ねじ切る気はなかったろう。痛みを与えて降参させるつもりだったにちがいない。

男の顔――霧作の顔がはげしく歪み、苦悶したのは、暗がりと頭巾に蔽われて、もとより、原左内には見えない。

「こりゃ、まだ抗うか、ほんとうにねじ切るぞ」

〈切れ！〉

かすれた声がした。

言下に、しゅっと凄まじい血しぶきが、原左内の顔に噴いた。

すぽっと、腕がはなれて、左内は力あまってひっくりかえっている。左腕を残したまま――忍者は隙間をくぐりぬけて、姿を消した。

その男の死体が発見されたのは翌朝である。

あの明神の社の近く、田の畔から、半ばずりおちていた。左腕がむざんに切りおとされている上に、顔が無かった。縦横無尽に切り苛なまれて、眼玉も眉毛も、鼻も削ぎ落され、唇は五つに裂けていて、人相は判別すべくもない。それは、もはや顔というよりは、血まみれの〃肉塊〃にすぎなかった。

「霞ノ者であろう」

と、推測はついたが、確証はない。

義鑑しか、その内情は知らぬ。扶持は霞ノ蔵人に与えられ、一党は、蔵人から直接になにがしかを貰い、衣食住を保証されている。

その人数が一人や二人の増減は、外部から窺いようはなかった。

「あの女を責め問いせい」

義鎮は厳命した。

津久井美作はこれにこたえて、

「恐れながら、その儀は如何かと存じまする。あの女は、先年、御屋形の蹄にかかりて果てましたる藤兵衛が娘にて小菊と申し、去年の由布岳焼打ちの折、山伏りの某とともに焼死たると思われていた者にござりまする」

「フム……そのようなやつか」
「英彦山の山伏から霊妙なる幻術をも習得いたしたものかとも思われまするが、それがしの耳にこれまで入ってきておりましたるところでは、あの女、霞ノ者どもに救われこれまで、ひそかに庇護されていたる由」
「なに！　叛逆の者を、あの化性の者どもが……」
「はい」
「なぜ、早くに申さざったぞ」
「恐れ入りまする。いまだ確証をつかんでからと愚考しておりましたゆえに……漸くこれで判然といたしましたが。と申すのも、御尾形の扶持を受くる霞ノ者どもが、叛逆人を保護するとは、合点がゆきませなんだ」
「おれも、そう思うが」
「どちらにしても、あの女の口をひらかせるにはすじ縄ではまいりません」
「……」
義鎮も思案顔になった。
「なんとすればよい？」
「――小菊とやら、あの女忍を放すのでございます」

二

津久井美作の言葉はあまりに衝撃的だった。智略縦横のこの武将の言にしても、義鎮を驚かすに充分だった。
「なんと申す?!　あの無礼者を……」
「放すのでござる」と、美作はますます冷静に、
「ここで一番、和子の度量をしろしめすのでござる。和子こそは、この乱れし世の守護となるべき御方。忍者ずれに指一本させるものではないこと、御威勢のほどを見せるに如くはありませぬ」
義鎮はまた歩きだしていた。
そのあとに従いながら、
「あの女忍め、他国の手と考えるには疑点が多すぎる。まず、他国の者ならば、お屋形を狙うのが至当かと」
「ウム……」
「霞ノ者どもは、お屋形の扶持を受ける身とは申

せ、先年の朽綱攻め以来なれば、嘗て陪臣とはいえ、返り新参……未だ、その腹中、分明ではありませぬ」
「信はおけぬが……使いようでは役立つ」
「両刃の剣でござる。うっかりすると、けがをいたしまする」
「それくらいはやむを得まい。所詮……毒をもって毒を制するのたぐいじゃ」
「御意。その刃を、その毒をいかに処理するかが、勝敗の鍵でございましょうな。悍馬を馭する者、よく女を馭すとやら申しまする」
「ははは……女か」
義鎮は笑い半ばで口をつぐんだ。
お登世ノ方との交情が、思いだされたのである。おのれの破廉恥なふるまい。
（問題は、むしろ、紀伊介の思惟だ……）
いまや、宿老重臣らの動向が、父につくか、おのれにつくか、その去就に心すべきときであった。
紀伊介を失うことは、義鎮にとって痛かったのである。
その夜――
小菊は義鎮の前に引きだされた。
恐怖はなかった。医師に肩の傷の手当てを受けたが、思いがけなく丁寧で、親切だったことである。
「殺しておくれ」
小菊はそのとき言った。
「生きてはいられない、殺しておくれ」
「若い身そらで死に急ぎすることはあるまい。御仁慈に感謝するがよい」
侍医はそう言った。
――御仁慈……
義鎮の言いつけなのか。その疑念は、夕方になって、熱も下ってから御前に引きだされ、義鎮の微笑を含んだ顔を見たとき、判然とした。
「傷はどうじゃ」
義鎮は言った。
「痛むか？」
「……」

「ははは、睨むことはない。痛むかと聞いておる」

小菊はなおも黙っていた。

「こりゃ！」と、足軽が、「御答えせぬか」

だが、小菊は、唇を噛みしめた。

「ははは、よいよい、ものを言いたくなくば言うな。痛むのであろう。女の身では、痛いのが当然。したが、忍法のワザ、巧みであったな……すっかり目くらまされたぞ」

それから、義鎮は手をふった。

「みな、遠慮せい」

「は……」

と、いぶかしげに近習頭が、

「この者は、人外の化性の者にて」

「ばかな。美しい女子ではないか。いささか、常人のできぬワザを習得せしまでのこと、案じるな」

近習や足軽らが、憂い顔ながら幕外に立ち去ったあと、義鎮は、砂利の上におりてきた。

「小菊とやら、僅かの間に、よくぞ、かほどのワザを覚えたな」

「……」

「あまりに巧みすぎたゆえ、おれは甚だ迷惑」

「殺すがいい」

はじめて、小菊は言った。

「殺すがいい、どうせ、生きては帰れませぬ」

「なるほど、なかまのもとへ帰れぬとな。霞ノ蔵人めが、命じたか」

「……」

「んや、それを詮索するのではなかった。実はな、小菊、そちに頼みがある」

「？……」

「そちの忍法は、目くらましであろ、おれは紀伊が女房に、何もせざったつもりじゃ……おれが抱いたのは、そちであろ、そうではないか？」

「……」

「忍法のありのままを、紀伊介に話せ」

言葉は尊大であったが、語気は穏やかなひびきだったことである。

「それで許してやろ」

「……」

「何の詮索もせぬ。罪も咎めまい。放してやろう……どうじゃ、紀伊にすべてを打ち明けるか？」

三

そのころ、府内の城では、義鑑が不安な表情で、盃を重ねていた。

入田丹後のもとに、報告が入ったのである。

磯次が伝えてきたのである。

「――では、紀伊介の女房を犯したというわけじゃな」

義鑑は、うすく片笑いをして、

「紀伊のみか、老人ども、さぞ立腹することであろう。もはや、義鎮廃嫡を決めても苦情をいう者はいまい」

と、夫人をかえり見た。

夫人は黙ったまま、にこりと会釈をかえし、聡明の頭を撫でている。こんなときは一言も口をさしはさまないほうが賢明な態度だと知っている。

丹後が小用に立ったとき、厠のかげから、

〈霞でござる〉

と、忍び声がした。

「お……」

と、丹後はあたりを見まわして、

「どうした」

〈其の後のことを〉

「む、案じていた」

〈用心せねばなりませぬ。和子には……〉

厠の外、手洗鉢のわきにやぶこうじが、赤い実を蒐めている。

宵闇の迫った庭先である。やぶこうじのかげは暗く、うす墨を一ケ所ぽとりとにじませたように、影がうずくまっていた。

霞ノ道平であった。

〈和子はお斬りなされる御意志にて候えども、津久井どのが〉

〈美作が……〉

〈津久井美作どの申しまするよう、太守たるの貫禄を見せ、囚人を解き放つべきと〉

「おお、そのように」

丹後は唇をひんまげた。
「して、和子のほうは」
〈多分……美作どのの奨めに従うかと〉
丹後はしだいに不安に駈られてきた。
「その女忍めが裏切るおそれがある。早やばやと殺せ」
〈恐れながら〉
道平が顔を上げて、
〈忍びには血の誓いがござる。裏切るなどとは……〉
「わかるものか。いったい、なんだ。そちの家人か」
〈はあ……〉
道平は口を噤んだ。
小菊の素姓は最後まで秘さねばならなかった。
丹後は道平を御前にともない、差しさわりのないところ、あらましを述べさせたあと、
「ともあれ、霞ノ者どもにねぎらいの御酒なと給わりましては、如何でござりましょう。その女忍のこと、いずれよき思案も浮びましょうほどに」
と、提案した。
義鑑は苦い顔で、珍陀酒をくれてやれ、と、顎をしゃくった。
恐畏して退出する道平と御下賜の酒瓶が同道した。
霞ノ者たちは城外穴井町にお長屋を給わっている。
「――御下賜の酒でございます」
使者が霞ノ蔵人に告げた。
蔵人は恐縮した。かれの忍者の頭領としての認識からすれば、佐伯での一件は、失敗に属する。たとえ、義鎮をして女犯の目くらましは成功しても、霧作が死に、小菊が捕われたことは、忍者の手ノ内をさらけたにひとしい。
この失敗は、義鑑の前に伺候することさえ出来かねたほどだ。
「ただただ感泣いたすのみでござる。お屋形にはよしなにお伝え下されい」
「承わりました」と、使者の楠村某は言った。「では、習わし通り、毒見させて頂きまする」

と、一口飲んだ。
いわゆる戦国時代の主従関係は、江戸時代のように、儒教思想に支えられたものではない。主従関係はきわめて功利的で、ギブ・アンド・テイクの関係がはっきりしている。常に背反の危険を孕んでいるのだから、猜疑や威圧も自然だ。それだけに、毒見も常識になっている。
楠村某は一口飲んだが、別段のことはない。霞ノ忍者一党、安堵して盃をあげた。珍陀酒はぼるとがるからもたらされたものである。忍者たちでも、容易に飲めるものではなかった。
蔵人のもとに集った霞ノ忍者たちは、赤い酒を味わいながら、小菊の救出を相談した。
一方、毒見した楠村某は、役目を果して、帰途に就いた。
サイノミ神の玉垣に沿って角をまがると、西ノ小路になる。町かどには木戸が設けられて通行改めをきびしくしてあるのも、当時としては珍らしい。
楠村は軽く声をかけて、脇門からくぐって行った。
四五間行きすぎてからだった。
突然、うっ、と呻いて、棒立ちになるとのどをかきむしるようにして、もがきながら崩れ折れた。
「ど、毒酒……」
駈けつけた木戸番の足軽が聞いたのは、それだけである。
楠村某の顔は赤黒く苦悶に歪み、医者が呼ばれてきたときは、顔にもからだにも、無数の索斑が浮き出ていた。

四

それから一刻と経たないうちに、忍者屋敷は、入田丹後の総指揮のもとに包囲されている。
「忍びノ者ども、お屋形へ謀叛の兆しあり、一人余さず打ち殺せ」
霞ノ忍者の奇体なワザに就いては、屋形侍たちは先入観念がある。その恐怖を打ち砕いたのは、霞ノ忍者たちのおびただしい変死体だった。

生残ったのは、かんぜない子供たちと、老人婦女である。

忍者の妻娘だから、忍ノ道に進むとはかぎらぬ。ことに霞ノ忍者の組織が、女忍を含まぬことは前に述べた。女忍の存在を、

「くノ一のワザあれば必要なし」

とした、先代の頭領、霞ノ空斎の意図が、導法されていた故でもある。

むろん、くノ一のワザを、男から女身への変化とする忍法の原則にしがみついては居れないことを、蔵人たちは、骨身にしみて感じていたからこそ、小菊を育成したのである。

手練れの忍者たちが、毒酒で仆れたあと、老幼婦女は、

「お屋形の罠にかかってぞ、逃散しようぞ」

こうしたことを慮ってか、屋敷には、抜け穴が掘ってある。

身の廻り質素に、身動き迅速たるべきことは、忍ノ家人たるもの、常識である。

ただちに、忍者秘伝書、位牌、忍具などを持っただけで地下道へ走りこむ。

寄手が喊声をあげて、塀を踏み倒し雪崩れこんできたとき、お長屋には黒猫が一匹、銀の眼を光らして、ひらりと屋根へとびあがっただけであった。

「やっ、逃げおったぞ」

「探せ、そこらにひそんでいるはず」

天井へ槍を突き刺す、床下をぶすぶす刺してまわる。

しかし、それは、数分を出なかった。いかなる仕掛けがあったか、轟然たる大音響とともに、お長屋五棟が、連鎖的に飛んだのである。

寄手の雑兵ら数十人とともに、霞ノ忍者の死体も四散した。

このすさまじい大爆発を、大智院外の森から眺める老幼婦女の一団があった。いうまでもなく、地下道を脱けた家族たちであった。

「忍に生き、忍に死する。粉々となっていっそ、さっぱりしたであろうわい」

足萎えの老人が、呟やいた。

忍者の法悦だったかどうか。霞ノ一族はそのまま、夜に消え去った——

釈放された小菊が戻ってきたのは、その夜が明けぬうちだったが、この事態を見ると、すぐに姿を消している。義鑑の仮借ない魔手が身辺にのびることは予想されたのである。

義鎮のほうでは、父と継母の差金との疑いを持たざるを得なかったから、佐伯の一件は表沙汰にしようとしなかったが、義鑑は、気にやんで、

「忍びノ者が、不埒を働いたゆえ、霞ノ者も謀叛とこそ睨んだ。始末をしてくれたわ」

義鑑は頭からかぶせてきた。義鎮はうすく笑っただけである。

その不敵な面がまえが、手の内を見透しているといわんばかりで、義鑑は、

(こやつ……)

憎悪の炎を胸に燃えたたせた。

もっとも心配したのは夫人だ。入田丹後とまた忍び逢うと、

「これは急がねばなりませぬ。わたしからお屋形に申し上げるゆえ、そなたからも、お奨めしておくれ」

焦った。

夫人たちの陰謀は、義鎮とその君側にはうすうす洩れているにちがいない。急がねばならなかった。

ことに、霞ノ忍者たちを失い、その家族たちを流亡に追いやったお屋形の行為は、直情的な性格とはいえ、

(まずかった)

との思いを夫人たちに与えたのである。

二人の狙っていた機会は間もなく来た。

義鎮が面疔を患い、別府に湯治に行きたいと、願い出たのである。

別府の湯は府内(大分)からすぐだから別段、否むこともない。むしろ、幸いだと、頷くところがあった。

五

義鎮が供廻り二三十人で別府に出立したあと、義鑑は、入田丹後守親真を呼んで、義鎮の廃嫡を相談した。

「さきごろから考えていたのだが、やはり、義鎮を廃嫡して、聡明をあとめに立てたほうがいいと思うが」

「御存念、もっともと存じまする。御名の通り聡明にあらせられますれば」

「他の老職にも計って早急に布令いたすとしようぞ」

老職は他に四人いる。田口蔵人、小佐井大和、津久井美作、斎藤播磨らである。四人とも、義鎮びいきのことは前に述べた。

これを説伏するのが、一仕事だ。

義鑑は四人を呼び寄せて、

「大友二十一代は、聡明に譲ることに決めたぞ、左様に心得よ」

頭ごなしに言った。

いくら家臣に対してでも、こんな言い方は極端すぎる。義鑑としては、とかく面倒な老職どもを、威圧するほうがいいと思ったのだろう。

四人は驚ろきの顔を見合わした。

津久井は、

(さてこそ)

と、思ったが、他の三人には寝耳に水だ、

「これは異なことを承わりまする」

年長の小佐井が膝を進めて、

「お屋形さまのお言葉とも聞えませぬ。由来、ものには順序と申すこともあり、長幼の序を守るこそ、人倫の正道かと存じまする」

「義鎮さまに大守たるの資質無き場合はイザ知らず、御勇武はいうもさらなり、御英邁にわたらせられ、ひとたび定められたのを廃嫡なされます理由が、われらには解しかねまする」

四人は口々に難色を示した。

義鑑は、こうまで反対されようとは思っていなかったので、気色を損じて、プイと立った。

入田丹後が早速、伺候すると、

「やつら、呑みおったぞ」

吐き出すように、

「不埒なやつら。おれに意見をしおった」

「お屋形さまに背くなどとは、神をも恐れぬ仕打ちにござりまする。このまま捨ておいては、別府へも右の由を通じ、大事に至るやもしれませぬ」

「そうじゃな、殺ってしまえ」

こうなっては、功臣も老職もない。

ただちに、討手がむけられた。

御前を退出した四人は、大手前の本光寺に立ち寄って休息した。

いうまでもなく前後策の協議だった。

「ともあれ、お知らせを」

「非情なお屋形のなされようじゃ、この上ともに用心せねばならぬ」

「おてまえ方は、ただちに屋敷へもどって一族を糾合し、別府へ走りなされ、われらは、御番なれば、城中へ詰めて様子を窺うことにする」

津久井と田口は先に一たん屋敷へかえり、家の子郎党に仔細をつげて腹に小札を縫いこんだ刺子ようのものを巻きつけ刀の目釘をしめして、城中へとってかえす。

裏門から入ったのが幸いした。

いれちがいに、討手が本光寺へ走っていたのである。

まさか、こうまで短兵急に討手がくるとは思わなかったから、斎藤と小佐井は各地の被官大名に手紙を書いているところだった。

どかどかっと入ってきた屈強の壮漢らが、

「上意でござる」

槍をひねりだした。

「来たかっ」

斎藤は、たっと筆を投げつけ、顔をそむける刹那に、ケラ首を抜き打ちに切って放つ。

片膝立ての抜き打ちである。だが、左から来た薙刀をさけて飛びのこうとして、袴の裾を踏んでよろめいたところを、大太刀に、ぐゎッと肩先を斬り割られた。

ほんの二三瞬の間である。小佐井は老体だけに逃げ足は鈍かった。抜刀はしたが、方向を詭った。須弥壇のほうに走り、まごついて火燈窓から逃れようとした。

手をかけたところを、回廊から、明り障子を破って突き出された槍にもろに胸板を貫ぬかれていた。

「もろいやつらじゃ」

指揮は竹田津佐渡守の伜六郎左衛門尉である。二人の首を打ちおとすと小袖に包んで御前へ持ち帰った。

「かくのごとくにござりまする」

義鑑は血まみれた首を一瞥すると、

「よくやった。あとの二人は」

「悉皆、境内を捜しましたるが、姿が見あたりませぬ。風を喰うて逃げたものと思われまする」

「屋敷であろう、追え」

昂奮のあまり、御番だということを忘れている。

義鑑は首実験を済ませてから、居間に入ると、夫人が、

「斎藤と小佐井にちがいありませぬか」

「うむ」

「津久井と田口の首はまだでございますか」

「卒爾な」

義鑑はあわてていましめた。

上意討は迅速に行わねばならぬ。相手に防戦の用意をさせずに討つ。斎藤と小佐井が討たれても、田口と津久井にまで兇刃が及ぶとは決っていない。

この夫人の卒爾な言葉は、局の女の一人が唐紙ごしに聞いて顔色を変えた。

さりげなく、その場を離れると、裏門へ走った。

裏門の近くの詰所には、津久井美作の子孫太郎が控えていた。

六

「玉藻か」

「あい、大事でございます。早ようお知らせせねば……」

夫人とお屋形の肚裡がそうときまっていれば、もはや手ぬるい対策はしておれない。

「よし、そなたの帷子小袖をこれへ」

「なんとなされまする」

「急ぐ。なんでもよい早く」

孫太郎は、父の美作と田口蔵人にことの次第をつげると、

「よし、やってこまそう」

美作の弟尾張守も、柄頭を撫してうなずいた。

玉藻が持ってきた被衣におもてを隠すと、御番所の次の間を通り、二階座敷に駈け上った。

義鑑は夫人を擁して、すでに褥にあったが、津久井らは、やにわに、次ノ間に踏みこんでいった。

後世江戸時代の城内配置からいえば、中奥にあたる。

女ばかりである。老女から、少女まで、侍女たちが夜の支度をしていたが、そこに乱入してきたのだ。

ぱっと被衣を脱ぎ捨てると、

「奸婦を誅戮いたす。邪魔ひろぐやつは容赦せぬぞ」

大声に喚きつつ、唐紙を蹴放して斬って入った。

さすがに義鑑は、

「推参なり」

と太刀をつかんだが、抜きあわせひまも与えず、尾張守が拝み討ちに一太刀あびせた。

夫人も黄色い声をあげて守り刀を抜き、聡明のほうに走り寄ろうとするのを、背後から孫太郎が逆袈裟に斬り下げ、のけぞるところを、田口蔵人が後頭部へ一太刀。津久井美作は一直線に、聡明のところに進んだ。これは侍女が抱いて逃げようとしていたのを、もろに斬って放し、返す刀で幼ない首をすばっと斬りおとした。

「狼藉！　狼藉でございます」

「お出合いなされ」

奥女中たちの、たまぎるような悲鳴が、城内につんざく。

津久井、田口らは、阿修羅のような働きで、泣き喚く女たちを手当りしだいに、斬り伏せ、突き殺す。

夫人と聡明を殺したことで、半ば目的は遂げたという気の弛みが、逃げるのを忘れさせたのかも

しれない。
その間に、宿直の武士が駈けつける。れいの討手の者たちもひきかえしてくる。
城内は大混乱に陥った。
乱世の武士にしてはしかし、津久井もいささか心得が足りなかった。
いかなる名刀でも、二三人斬れば、刀は血脂で斬れ味が悪くなる。それ以上無理をすれば刃がねぶれる。心得のある者は無抵抗の者は斬らぬ。慈悲のゆえばかりではない。イザの大事に、血脂で鈍刀と化すことを恐れるからにほならない。
刃むかう者は斬っても、逃げる者まで血を追いもとめたのは、軽率といえよう。
宗像民部、田北将監、竹田津佐渡守、同六郎左衛門尉、森寿阿弥らの豪ノ者が、駈けつけて、
「謀叛人を逃すまい」
「討て、討て」
二階の御座ノ間から、勾欄、階段、下ノ間にいたるあいだ、淋漓と鮮血が流れ、斬られた腕が、手首が、髪が、片足が、飛び散り、惨胆たるありさまのなかで、津久井、田口らは乱刃をあびて、仆れた。
奥女中たちは、ほとんど斬られ、死傷おびただしかったが、この中で、かすり傷も負わなかった者がある。
義鎮の夫人である。
夫人は丹後一色殿の姫君だったが、ただ一人、難を免かれた。
後に、
(御屋形を弑逆し奉りし元兇は、五郎御曹司に候わん、津久井田口らは、そのお手先となりて斬死したらん)
と流言なす者があったが、その疑いをかけられたのは、夫人が掠り傷を負わなかったから、あやしい、という単純なものだった。
その理由を、西国盛衰記、大友興廃記などには、こう書いてある。
——仔細あり。霄に斎藤、小佐井が首参るに付て、さわぐにあらねども、天魔のわざにや、さわぎ相ける簾中迄も聞えて、義鎮公の御簾中御しうとめにのたまいけるは、何とやらん物さわがしく候、かかる時は女も具足を着て然るべくや候わん。其御覚悟相成候えと御申あるに、此国は左様なる気遣有事はなきとの御返答にて、御用意なし。丹後の姫君ばかり着こみを召たる故に、一人助かりたまう……
悧発さが、いのちを救ったというにしては少々出来すぎるような気もする。
義鎮の魔手が働いていたかどうか、しかしこの挿話だけで判断するのも、性急であろう。
ただ、一つ、不思議なことがあった。
傷ついた義鑑を田北将監らが守護して、三階へ逃した。三階は望楼である。汐見櫓とも称されていた。天守閣初期の形態であったが、その名称は使われていない。
「み、水をもて」
義鑑は、傷のせいか渇を訴えているので、将監が、
「誰かある。お屋形さまに水を」
と、怒鳴った。
「心得ました」
暗がりで女が返事をした。
被衣すがたが、するすると階段をのぼった。そのとき、将監は、津久井らが被衣して奥女中や宿直の目をあざむいたことを思いだし、
「待て、そなたは」
と、薙刀で、ぱっと、被衣をはねあげた。
黒髪が舞いあがり、ふりむいた白いおもわは、疑いもなく女だったのである。
「お……行け」
将監はほっとしたが、血の中を二三間行きかけて、その女の顔に見おぼえがないことに気がついた。
厚化粧の白いおもわは整っていたが、妙に冷たく、ただに緊張と恐怖のためとはいえないものがあったのである。
(あるいは?)
ひきかえした。
階段を昇りかけたとき、絶叫が噴いた。
「うッ、うぬは?!」

「父母のかたき、思い知るがよい」
その女の声。と知ったときは遅かった。凄まじい勢いで、巨体が転落してきたのである。
義鑑の巨体は、階段の板を折り、てすりの一部を毀して、将監のからだにぶつかった。
その巾ひろい胸に、ふかぶかと、短刀が突き刺さっているのを、暗がりのなかで将監は見た。
「やはり、おのれは」
「ほほほほ、ほほほほ、かたきじゃもの、討たではおかない、ほほほほ、ほほほほ、父さま、成仏なされませ」
女の声は、この世のものとも思われないような、果てしない笑いに、楼上をゆすった。
ちらと、笑顔がほの白くのぞいたのが将監の見た最後である。ふわりと羽衣の舞うかのように、楼上から、被衣が舞いあがり、夜空を飛び去った。

忍法・猿がすみ

一

世にいわゆる「大友二階崩れ」と喧伝されたこの事件によって、由緒ある大友家は、義鎮の掌握するところとなった。
この事件は、正史はもとより野史野乗のたぐいを見ても、いずれも、津久井と田口の謀叛というふうに片付けられている。
かれらが斬死したことで、その真意は知る由もないが、義鎮があまりにうまい汁を吸う結果になったことが、具眼の士の疑惑を買ったのはしかたがない。
夫人の一色氏の言動も、その疑いを深めている。
さらに、別府から府内へもどってきた義鎮の措置は、あざやかだった。
領内に、大友二十一代目を布令するとともに、被官大名らに向背を問い、入田丹後守親真の行方

を捜した。
あの混乱の際に府内を脱出していたのである。入田丹後は、妻の岳父が肥後の阿蘇大宮司家の惟豊だったので、肥後へ落ちて行くと、惟豊は激怒して、
「武士たる者、おのれのなしたること善悪是非に関らず、責を負うべき也」
として首を斬り、義鎮のところへ送ってきた、という。
別の説もある。
入田の家老が、肥後へ落ちることを奨めたが、
「殷の対正の賢臣箕子は去ぬ、微子は奴となりぬ、比干は諫て死す」
と言い、つかむれノ城を去らず、遂に日田玖珠の軍勢を差しむけられたにより、収容として切腹した、というのだ。
どちらが事実かわからないが、ともあれ、入田丹後も首となって、事件は落着した。
義鎮が入湯中も気にかかっていたことに、れいの佐伯紀伊介惟教のことがある。
妻を寝とられたと信じていたかどうか。
小菊がくノ一忍法をもって目くらましたにすぎないことを白状したのだが、心にしみついた疑惑は消えるものではない。
はからずもそれを試すことになったのが、事件当夜である。
急を聞いて別府からひきかえした義鎮を老臣らは大事をとって一時、立石というところに守護した。
佐伯紀伊介が軍勢を率いて参向したと聞くと、義鎮は春日ノ松原というところまで使いを遣って、
「府内に在って、町人どもの騒ぎを鎮めよ」
と命じた。
向背の意を見るためであった。紀伊介はただちに御意にまかせて引きかえしている。その行動には妻のことを根に持っているふうはない。
府内では御屋形の斬り合いを洩れ聞き、すわ戦さぞ、と、家財を積み抱え、妻子の手を引いて避難に上を下への大騒ぎになっていたのだ。

紀伊介の重臣高畑民部少輔ほか心利いた武士らは馬をはやめ、大路小路をはせまわり、大事なし、鎮まれ鎮まれ、と下知して流言をなす者を斬って捨てたので、漸く、城下の騒ぎはおさまった。

すべてに、義鎮にはいい星がついてまわったといえる。

少くとも、表面的には、親殺しの汚名を免かれて、版図を掌握できたのだ。

ことおさまって半年ほどのちのことである。

義鎮は毎朝の日課にしている早朝の遠乗りの帰途、長浜に道を変えた。

栗毛をとめたのは小菊の家だった。

ずっと廃屋になっていたのが、お代替りにともない、手入れされて、小菊の姿を見かけるようになっていたのである。

「おれだ」

義鎮は磊落な調子で腕木門から入っていった。

小菊は、すっかり荒れた庭を手入れして、昔のように黄菊白菊の繚乱たる庭にするつもりだった。

「――小菊、聞いたぞ」

平伏した小菊に、義鎮は頭から浴びせた。

「田北将監が見たという、父を弑したのは女人だとな」

「……」

「異なる女人だとな。妖異なるワザを心得た女人……女忍だと、おれは睨んだが……」

「……」

「三階から、天女の舞うように、羽衣が飛んだという……おまえだな、小菊」

冷たい表情がふり仰いだ。

「あたくし、存じませぬ」

「隠すな。責めているのではない。また、罪に問おうというのではない」

それでも、小菊の表情は変らなかった。

「存じませぬ」

「強情なやつ！……まあよい、知らぬなら、そうとしておこう。今日参ったのは、そのことではない。おまえの忍法、役立てずに朽ちさせるのは惜しい。おれに仕えぬか」

「――ふつつかなるワザを？」

「おれが目くらまされたのだ。臣下することはない。ずんと、手当てをつかわそう、どうじゃ」

「……」

「おれの望みは、九州九ケ国、四国から中国すじ、すべて併呑するつもりよ。おまえの忍法、なかなかにものの用に立つ」

小菊は平伏していた。即座に直答しない慎重さも、むしろ、かれの意にかなうものだったのである。

義鎮は淡白に笑って、

「よかろう。考えよ、気がむいたら、来い」

鞭を鳴らして大股に腕木門を出て行く義鎮だった。

二

一年たった。

天文時代は二十年を閲した。

秋――小菊の家は、ふたたびみごとな菊を咲かせ、道ゆく人々の眼を驚かせた。

不思議なのは、この屋敷で小菊の姿を見た者がないことだった。すでに一年の間、誰も見た者はいない。

空屋敷にひとしかったが、屋敷の内外はいつも綺麗に清掃されていたのである。

れいの由布岳の天狗の噂がふたたび人々の口の端にのぼり、天狗が来て掃除するのじゃ、と、恐れられ、人々を近寄らせなかった。

ただの野菊の乱れ咲くのではない。

厚物や細管、太管、一文字のみごとなものであった。大輪の風雨には弱いこれらの菊花が、野生で開花するとは常識では考えられぬことだ。

「長浜の乱菊屋敷」

「天狗の菊」

と人々はささやいた。

天狗のしわざか、魔性のワザを得た小菊が飛翔してきて、菊の手入れをし、飛び去るのだと、まことしやかに言う者もいた。

誰もしかし、その姿を見た者はない。

菊だけが咲き乱れ、清香は府内に流れた。
天狗のしわざであるにせよ、菊花のすがすがしい香りと、その美しいすがたは、やはり知る者の胸に、小菊の容姿を思い浮べさせるのである。

この一年半の間に、義鎮の身辺はあわただしかった。
領内の統治に全精力をそそぎこむこそ許さぬ世間の様相であった。
食うか食われるかの時代である。
いうなれば白刃を向けあい、あるいは、白刃と白刃が嚙みあったまま、互角の力を認識しあうことによって、辛うじて平衡を保っているにすぎないのだ。
義鎮はまず薩摩と肥前に対峙しなければならなかった。
薩摩の島津と肥前の竜造寺は、西方と南方の狼であり虎であった。その他、菊池氏、筑前には秋月氏がいる。
もっとも、竜造寺などにいわせれば、

「義鎮めは狼じゃ」
と、いうことになる。
戦国時代の戦さは、それぞれ対外的に恰好のよい、そして内には士気を鼓舞するにふさわしい理由をもうけてはいるが、所詮、お互いに口実にすぎない。
強い者が正義という論理は、こうした時代だけに、通用する。したがって攻撃が最大の防禦ということも。
義鎮が、粗暴にして豪放な性格に見えながら、その実、冷静で緻密な才智を働かせる男であることは、佐伯でのことといい、疑問符つきではあるが、「二階崩れ」のときのアリバイ証明といい、片鱗を窺うに足る。
義鎮は九州全域の併呑を号し、その威勢を示しながら、真の眼は北へむけていた。国東半島を越えて周防灘のかなた、すなわち、周防の大内氏である。
周防の山口に蟠居する大内義隆は、父祖代々から、八幡船を駆使したり、領内の鉱山の発掘による利潤などで、戦乱の世にひとり、富裕を誇っていたが、義隆の代になると、さらに、明国と接衝して勘合船を送り、正常の貿易をはじめた。金銀銅ほか物と物の交易である。
金銀の比率の違いだけでも、莫大な利益になったから、六十余州の乱雲などどこふく風と、その領内は富み栄え、金銀の偉力は、外敵の侵入を知るや、たちどころに大軍を動員して駆逐し得た。
京が度重なる兵燹で焼亡し、月卿雲客の多くは、理由をもうけては山口へ遊び、そのまま滞在する者が増えてくる。
ちかごろも、日野、三条、冷泉卿などが上臈姫君女房その他眷族を連れてすっかり腰をおちつけてしまっている。
公卿好きの義隆は大いに歓迎するし、そのお礼心か、兵部卿とし二位に叙されて、噂では将軍も天子も、京をぬけて山口を都にするらしいという。
単に噂だけとしても、いかに山口が、当時の大都邑となっていたかわかる。

(——おれがそっくり貰おうか)
義鎮は、盃を含みながら、思案している。
もとより、大内氏の所領を狙う者は、近隣に拠くない。
が、それだけの力を持った者は、少ない。
芸州の毛利元就いまだその力に及ばず、大内の被官に甘んじているし、薩摩の島津は遠すぎるし、肥前の竜造寺は、まず筑前の大内氏の被官を相手にせねばならない。
伊予の河野氏は海賊大将軍を号しているが、せいぜい勘合船を狙うぐらいで、山口を襲撃する力にはほど遠い。
(おごれる平家は久しからず、公卿の生活に逸楽に流れている大内氏は、近いうちに亡ぶ……とすれば、おれが貰うのが妥当だろうな)
義鎮、若冠二十二歳。その所領の勢力からいっても、気鋭の点でも、老大国に挑むに不足はない。
(だが……正面きってはやらぬ)
ごくりと盃を干して、
(悧口な虎は、腹がくちいような顔をして、時機

を待つ。ふふふ）

そんな義鎮を見張る眼が、身辺に動いていたのを、はたして知っていたかどうか。

三

陰暦七月なかば——豊後の山々に影をおとす白雲は仲秋の気を孕んでいる。

府内の城を囲繞した濠端に、日なた猫のようにうずくまっていた足なえが何を聞いたかひょいと顔をあげた。

お城の門から、数人の足軽が出てきた。

小具足に身を固め、槍をかついだ者たち。かれらだけではなかった。先供であろう。十人ばかりのあとから、一挺の手輿が担ぎだされた。

多門もそのあとにつづくのも女である。

輿の中は女人と知れる。守護の女中たちは、足ごしらえを固く、市女笠を持ち、青竹の杖のかわりに、袋鞘の薙刀をかいこんでいる。よほどの長道中であろう。

行列のあとから、唐櫃やつづらの荷をふりわけにした馬が七八頭。さらに、殿りに弓鉄炮を携えた足軽が十人ばかり。

一行が大手の橋を渡って行くのを大手前御所小路の町人たちが見送って、額をよせあい、ひそひそと囁き交している。

足萎えは身を起した。道ばたを這っていざってゆくのを誰も気にする者はいない。

「——おいたわしいことよのう」

「何ほどのことがおわしたか知らぬがのう、御屋形も冷たいなされかたじゃ」

「これ、声が大きい」

「左様とも、お屋形は気の荒いお方じゃ、めったなことは申すまいぞ」

「それにしても、はるばる丹後ノ国からお輿入れなされた御簾中をのう、酷いことじゃて」

町人たちのひそひそ話に加わっている男がある。

見たこともない男の顔が五六人のなかに一人入っていても、誰も気にもとめない。

ついいまさき、お濠の河岸を逼っていた足なえの乞食だとは、気がつかない。あまりにも早い変りようであった。

「——全くのう、わしらには出来ぬことじゃての」

「それもさ、御簾中がかたわとか、尻軽だとかなら、まあ、話もわかるがさ、なんでも、御祝いの膳部のことがどうとか、つまらんことが、因じゃそうな」

「わしが聞いたのは、お局に意地悪なのがいてどうとか……」

「解せぬこっちゃ……」

話はまた、もとへもどった。

我が身に関りのない噂話だと、どこまでも際限もなくつづくものだ。

その場を離れた足なえは、暫くの後に城内に忍びこんでいた。

庖丁人や水仕の女たちが、やはり丹後殿の姫君の噂をしているところであった。

「——お局のなされようは、柄のないところへ柄をすげるようなものではないかえ」

「雁の汁が、アダになってのう」

「あぁこれこれ、わしはここのところ臥せっておったゆえ、事情をよく知らぬ。詳しゅう話してくれ」

武士が顔を出した。

「はい。左様でございますか、もはや、お帰りになされたことで、大事あるまいと存じますゆえ、申し上げますが、実はこのたび、晴英(後の義長)さま御婚姻の祝膳に、御簾中のお指図にて、雁の汁、つまに芹を加えられたのでございます」

「——ふむ、それで」

「すると、お局がそれを見て、雁は芹を食うて帰るものなれば、この縁辺の末如何と、のたまわれしゆえ、先さまも御不快になされて、縁談とのわず、お屋形の御不興を買うに至ったのでございます」

「ほう。雁は芹を食いて帰るとのう」

「はい。吉岡下総さまなどは、お局の申しようは分別有て才覚まわりたるように見えて、その実、

心せまく不才覚の義なり、仰せられて、お怒りなされましたが、お取上げなられませなんだ」
「ほ、その仔細は」
「雁は来ては帰り、帰りてはまた来る。幾年幾年もかくの如くにて、いつか日本国を離るることなし、かく考えれば、局も何かそしるところあるべき物毎に家々の儀式にいわれあることなり、不吉を吉事にとりなすこそ、深き智恵なれ……と仰せられましたが……」
「そうじゃ、こうも仰せられたぞ」
庖丁人の頭が、もの識り顔に、
「されば、その昔、宗の武帝、往亡日を以って兵をおこしなされたが、軍師が諫めて今日は往亡日なりと奏聞した。とき、帝曰く、我往きて彼亡びんとの綸言にて、ついに其の戦さに勝ちたまいぬ、とかようにじゃ」
「ははア、それでも、お屋形の御不興はおさまらずとかえ」
「はい。御離別で」
「面妖じゃナ」
「はい、面妖で……」
うっかり釣られて返事をしたが、
(はてな?……)
おかしい、と気がついたときは、その男の姿は、かき消すように消えていた。
「はて、いまのお方は……」
「あれ、どこへ行かしゃったかいの」
「見たことのないおひとじゃが……なんじゃら、おかしいのう」
「猿に似たお顔だったわいの」
その猿に似た顔の武士は城内から悠々と出て、万寿寺へ入っていったが、暫くの後万寿寺の北側の門から出てきた影は、あの足なえの乞食だった。

四

周防のくに山口——
その繁栄にこたえるように、空はあくまでも澄み、秋陽はあくまでも明るかった。
午さがりの一刻、残暑がぶりかえしたような強烈な陽ざしが、この屋敷を照らしていた。二位ノ殿大内義隆の築山ノ屋形に隣りした相良遠江守武任の屋敷である。
庭に面した書院。栗いろに磨きあげられた床の上に繻子縁のたたみが敷かれている。
陽に灼かれたたたみの匂いを愉しむように、遠江守は巨駆を長々と横たえていた。
はだけられた胸に、ちぢれた剛毛がとぐろを巻き、さっさから、金蠅が汗を慕ってぶんぶん唸っている。
「——うるさい!」
ぱっと、巨きな手が払った。
が、瞬間に金蠅は舞いあがっている。
「くそ!」
いまいましげに呻くのを、
「あの……なにか」足もとで弱々しい声がして、
「卒爾をいたしましたか」
小姓が顔をあげている。
足の爪を剪らせていたのである。
遠江守の癇癪と残忍さは知悉している。おどおどと眼をあげている。
なまじ美しい蒼白い頬が、遠江守の嗜虐性を煽ったようであった。
「汝(わ)れではないわい」
「は、はい……」
ほっとしたように、うつむいて爪を剪りはじめる。
よくきれる鋏で、さくっさくっと剪ってゆく。
うつむいて、深爪しないように、全神経を指先に集めている。
その、脅えたほそい肩や、白いうなじ、女のように、ほんのりとうす紅に赧らんだ頬などを見ていると、遠江守の荒々しい血は、かっと熱してきた。
「四郎、下手じゃ」
「は?」
「痛いと申しておる」
右足をひっこめる。
「あ、お許しを」
「爪ひとつ満足に剪れぬか」

「い、いいえ、心いたしまする。お許し給わりませ」
「よし、やれい」
左足をだす。
「は、はい……」
恐る恐る、左足を頂くように膝の上に乗せて剪りはじめる。
と、また、ひょい、とひっこめる。
「あ……」
「早くせい」
と、こんどはまた右足が出た。
あわてて、その足を頂こうとする。
こんどはひっこまなかった。そのかわり、鋏をあてようとすると、踵が、股間にふかく沈んだ。
「……」
四郎は赧くなった。
踵が股間のものに触れたからである。
遠江守の口辺に、淫猥な翳りが泛んだ。無言のまま、ぐりぐりっと踵を動かしている。
四郎は髪の中まで赧くなって、しきりに耐えている。爪を剪ろうとするのだが、足がくりくり動くので、鋏が動かせないのだ。
この遊戯は、荒々しい戦国武将の変態的な血をかきたてたようである。
「早く、剪らぬか」
と、急かせる遠江守の声は、渇いたようにかすれ、
「こりゃ……」
ふいに身を起すと、腕をつかんだ。
ほそい手首である。指から鋏がはずれ落ちて、繻子縁を傷つけるように突っ立った。
「あ……」
抗いは僅かだった。
それを許さぬ主君の気性は、知りすぎるほど知っている。
ずるずるっと引き寄せられた。ほそい、折れそうな首すじを片手がつかんだ。
「愛いやつ」
荒々しい動作であり、兇々しいまでの息吹きであった。

なまぐさい五十男の息が顔を襲い、ひしゃげるばかりにつかまれて、のけぞったおもてに、その赤ら顔がおちてきた。
はじめてではなかった。
が、分厚い、猪肉の切り身のような遠江守の唇を、唇に感じると、悪感が四郎の背すじを走った。

五

清ノ四郎は、もともと大内義隆の寵童だった。
それが先ごろ遠江守の賜わるところとなったのである。
まるで品物のような——または側女にもひとしい扱いだが、小姓といい条、男色の対象物である以上、これは珍らしいこととともいえない。
男色そのものは、当時、変態ではない。
上下僧俗を問わず流行している。室町時代ほど男色物語りの多く書かれた時代はない。
西洋でも、かなり盛んだったようだが、カソリックでは男色（ソドミ）を禁止している点、仏教の寛大さと違う。
この少し前、フランシスコ・ザビエルが来日して、初めて山口を訪れたとき、驕奢淫逸に堕した世相に一驚し、ことに男色の弊風が、上下を蔽っているのを憂えて、はげしい言葉で非難したのがいたく義隆はじめ家中の怒りを買って追放の憂目を見ている。
ザビエルはこれに懲りて、一たん平戸へ帰り、ふたたび珍奇な献上品を携えてきて、こんどは義隆の機嫌をとって、ようやく布教の許しを得た。
現に平戸から招かれた伴天連（ばてれん）コスメ・デ・トレスと伊留満（いるまん）ジョアン・フェルナンデスが布教に専念している。
この新しい教えは、たちまち信者を蒐め、半年ほどのあいだに、三千余人（日本西教史）を獲得するという隆盛ぶりだったが、しかし、栄華の美味に酔い痴れた貴族や上士たちには、無用の説教であった。
話がそれたが、人間の情慾は宗教心で左右されるものではない。

幼時から男色の対象物に馴らされた性格は、そのことを別段嫌悪してはいない。

嫌悪は、あくまでも主君遠江守そのひとにむけられたものである。

豪放磊落なつもりでいるが、性、陰険陋劣老獪で執拗、残忍にして冷酷——およそ主人にも友人にも持ちたくない遠江守武任であった。

清ノ四郎は、祖父の代から大内氏に仕えていて、生れながらの主従の縁は断ち切りようがなかった。生来の美貌が、運命を定めたともいえる。玉のような幼童のころから、義隆に目をつけられていて、十二の時、召されて稚小姓となり、枕席に侍った。

その最初の夜の恐怖と羞恥と屈辱は、忘れ難い。

生涯、いまわしい傷痕となって四郎の胸に残るだろう。

品物のように、下賜されたことが、さらにかれから、自由意志を奪い、遠江守の乱暴な手に扱われるにしたがい、すべて畏怖に支配されるようになっている。

条件反射というやつだ。遠江守の手も、唇も、卑猥で、猛々しい眼も、毛むくじゃらの脛も、分厚な胸も、そして、鼻下に八の字を描いた剛い毛も、すべてが、清ノ四郎にはいまわしい獣慾の象徴のように見えた。そのどれもが、少年を掠ませ、女性化させてしまうのである。

あくなき荒大名の愛撫は、愛撫という言葉には、あまりにふさわしくない。

それは、犠牲の小羊に示される猛獣の殺戮というほうが近い。

清ノ四郎は、命じられたままに、うしろをむき、あるいは、股間にうずくまって、唯々と命令に従う。

主従の関係が、主君の馬前に死ぬことを前提として成り立っている以上、その奉仕には区別のあろうはずがなかった。

主君の思いのままになるのが、臣下であり、否定は死を意味した。

相良遠江守は、戦さも好きだが、色の道に於ても、女若の区別がない。

両方とも好きなのだ。

体躯は、戦場を馳駆して二十斤の大薙刀を竿撃のようにふりまわす逞しさで、斗酒なお辞せず、一升飯を啖い、寵妾三人を一夜にこなしてけろりとしている男だ。

筑前花尾に城があり、山口にあるときはおおむねこの屋敷に居る。

義隆の寵臣で、

「三大名」

または、

「三人衆」

の一に数えられている。

陶隆房、杉伯耆と並ぶ勢力家であった。

当時の堕落した風潮とかれらの勢力のさまを評して、

——其ころ遊興に長じ、武人の舌頭にて云、今俗に口兵法と成て、自己の習うて熟するなれ、偶々武心の人ありても、杉、相良の心に叶わねば、賞美することもなし……

と、ある。専横のほどが察せられる。おのれの武勇を誇り、他には追従者へつらい者を重用したのである。

雄偉な体躯に波うつ血は、野獣のそれであり、猛禽のそれであり、権力を守るには毒蛇の狡智をもってした。

もとより——

そうした主君の下にある家臣のいずれもが威服はしていても、心服しているのではないことを、誰よりも、当人が一番よく知っている。

屋敷の裏小路にどこからともなくあらわれた男が、ひょい、と見越しの松に飛びついた。

さながら、猿のような——左様、松の梢のあいだから、尾行の有無をたしかめるように小路を見おろしたのは、猿のように小兵で、しわだらけの顔、おちくぼんだ金壺眼。

これは、豊後府内で〝足なえ〟にやつしてサグっていた男にまぎれもなかった。

六

あくまでも明るい白昼。卓抜な忍者とはいえ、おのれの影を消すことは至難であった。白昼、さんさんたる陽光のもとで、おのれを消すのは、光りの裡に溶けよ、と忍法秘巻は教えている。光りはそれ自体に陰はない。地上の物体に照射されるとき、微粒の砂でも陰が生じる。同時に、光りには反射がある。第三者の目をその反射をもって眩まし、裡に走る。すなわち〝光りの裡に溶ける〟のである。

猿のようなその男、白砂に足音も印さず、一颯の影を地上に刷いて、奥庭へ——中仕切を跳びこえている。

寝殿作りの形態を残した武家作りである。

猿のような男は、ゆっくりと、縁側に近よった。

太陽を恐れぬ淫らな構図が、そこにあった。

遠江守には、しかし、太陽も神仏も恐ろしくはないのだ。慾情のおもむくままに、時と場所を選ばず行い、

「大道無門じゃ」

と、笑いとばす。

陣中でも、河原でも、女体をひきよせることに恬として羞じない男だから白昼とはいえ、おのれの城内、控え屋敷の内とあれば、遠慮するものは何もなかった。

荒々しい、恥しらずの手が、清ノ四郎の袴をひき剝がし、襦袢も下帯も脱がしてゆき、

「ふるえることはない」

と、抱きすくめる。

情慾にぎらつく眼は、虜囚を集めて生胴を試し斬りしたり、槍のしなえぶりを見んとて俵投げに串刺し投げたりする際のそれと全くひとしかった。

この遠江守の情慾にわななく手と怒漲した肉体のまえに、四郎の脆弱な肉体は、さながら、小鳩のようなものだった。

全裸にひん剝いた肌の感触を遠江守の手が楽しもうとしたとき、沓脱ぎ石のちかくに、その侵入者の影が、うずくまったのであった。

無言。

足音もなく、呼吸の気配もなかった。影、そのものだった。

「……」

ぎょっとして遠江守は手をとめた。

影は、うずくまったままであったが、その異な姿は、うつろになった眼にも、すぐ思いだされた。

「猿か」

息をふとく、遠江守は言った。

「ねい」

平伏したまま、

「カマリ相済みましてござる」

「あとで聴こう」

うるさげに追い払おうとしたが、すぐと思いかえした。

「いや、いまでよい。どうであったぞ、丹後の姫が離別のことは」

「噂通りにござりました」

ぼそぼそと、猿は言った。

猿とは言い得て妙であった。マシラというのが異名である。猿ノ彦と呼ばれている。

「姫ばかりではない。姫の一行に、忍者は入っていないのはたしかか」

「ねい」

「些細な理由によって正室を離別し、御当家領内を横断した一行にサグリの眼が入っていると睨んだが……したが、大友には、霞ノ忍法の流れを汲む女忍の群れがいると聞く。こたびのことは御当家をあざむく謀みではないのだな」

「——そのように、見うけまする」

陰気な男である。

小兵で両肩が盛りあがっているので、首はうずくまっている。

顔のところが影になっている。黒々としたおのれの影の陰におもてを伏せるようにして上眼づかいに、ちろり、ちろり、と主君を見上げている。

卑屈などという言葉は、もはやこの男にはふさわしくなかった。卑屈という語は、かれの意識にはなかったろう。

黙々として命令に従う。ただ、命令に従うため

だけに生きてきたようであった。
汚れた猿のように、頬がげそりと削げて、唇が大きい。白い歯が牙のように出て下唇を噛んでいる。鼻はあるかないかわからないように低く、鼻腔だけが上をむいてあいていた。
脅えは、その凹んだ金壺眼に覆いようもなかった。
だが、この眼が、夜の闇も、白昼にひとしくものを見る力をひそめているのである。
この男の生殺与奪の権を握りながら、遠江守はなお、面とむかうと、無気味なものを感じているのは、超人的なその忍びのワザにあった。
猿彦はちろちろと白眼をさまよわせながら、
「大友の眼は肥筑にむいておりまする」
「ふむ……」
「出陣の気配もござります」
「ふむ、それならば、まず……だが、義鎮めは、腹の知れぬやつ。われらの眼をくらます手かもしれぬ」
「……」
「この上とも、サグれ」
「ねい」
敬虔に、猿ノ彦は一揖した。
そして、顔をあげたと思うと、ひょいと、床ノ間を見た。
何気なしに、遠江守もふりかえった。
刀架から刀が落ちていたのである。
(はて……)
いつ落ちたか。
眉をひそめて、顔をもどしたとき、沓脱ぎ石のそばに、猿ノ彦の影はなかった。
ほんの一瞬であった。
そこに、つい、いままで凋れた猿のような男がうずくまっていたとも思いない。
白砂には、人の居たあとの——凹みもないのである。
遠江守は、白昼夢を見たように、呆然となった。
「素早いやつ……」
まるで、煙りのようであった。

そのつぶやきには、驚ろきと失笑が混っていたが、毒気をぬかれたのは否めない。
遠江守は、四郎の裸身を見ながら、急速に情慾がさめてゆくのを感じていた。
「着ろ!」
と、おのれがひき剝いだものを忘れたように、小袖を柔らかい肌に叩きつけて、
「見苦し」
と、横をむいた。
羞恥と畏怖とで、清ノ四郎の肌は、ほんのりと色づき、本来ならば、ふるいつきたいほどのなまめかしさだったのである。
忍者、猿ノ彦が残していった臭気といおうか、妖気であろうか。遠江守の情慾が霧散してしまったのも事実だった。

闇に呻く肌

一

匂うばかりの、女に見まほしい肌を、しかし、そのとき梢から、凝るように見つめていた眼があったのである。
もはや、疾くに山口から遠去かったと思われた猿ノ彦であった。
(なんとのう、美しいわえ……)
その醜く大きな唇をぬらりと光らせて、涎れがしたたった。
いたいたしいまでの美しい、清ノ四郎の肌が、人外人の猿ノ彦の心をとらえたのは、不思議としない。
遠江守ばかりではなく、他の誰にも、足軽小者にいたるまで、猿ノ彦を人間扱いしてくれない。
畏怖し、敬遠しながら、陰口をきいているのだ。

いつぞやも、こんなのを耳にした。
「猿公じゃいの」
「あれでも人間の言葉、饒舌るから不思議さね」
「飯も啖えば、糞もひる」
「阿呆め、猿でもするわな」
「女も抱くべえ」
「猿でもな……うんにゃ、猿ノ彦が女を抱いたのを見た者はないぞな」
「ひひひ、女のほうでいやじゃとよ」
「じゃとしても」
「衆道けえ」
「男ならなおさらじゃ」
「いえっへへへ、皮つるみかいの」
「さて。忍びのワザでよ、寝ている間にやるのかもしれぬさ」
「なるほど。おぬしの女房どのも、用心したほうがええわな」
「もう遅いかもしれん」
「何を吐かす」
「城下中の女ども、みんなやられているかもしれぬということさ。姫も女房も、はははははは」
「殿の御愛妾もか」
「かもしれん。おっと、ぶるぶる、いまいうたのはわしではないぞよ」
そんな陰口を囁かれているのに、一々、腹を立ててはいられない。
猿ノ彦の干し固められた褌のような体のなかに、清ノ四郎への執着が沸いていたのを、知る者はない。
清ノ四郎の気の弱さが、猿ノ彦に同病相憐れむに似た共感を、ふとした視線の中にあらわしていたのかもしれなかった。
渇えた動物が、砂漠の中でオアシスを嗅ぎあてるように、猿ノ彦は、冷たい群集のなかで、清ノ四郎の眼に、温かさを見たのかもしれなかった。
むろん、親近感ばかりではない。
女にも、男にも相手にされない身が、一図に四郎に異常な恋着をおぼえたのも、不思議ではない。
異常に強烈な恋情であった。

その夜、ふたたび、城内にその矮躯の影はあらわれている。
一日に四十里をゆく早足は、赤間ケ関に至ったのが、昼間見た四郎の肌に、矢も楯もたまらなくなって、引きかえしてきたのである。
四郎は、鷹部屋つづきの小間に寝ているはずだった。
遠江守の居間からは、渡廊下を経て、十間ばかりのところである。
長局と鍵の手になっていて、宿直の詰め所が間にある。
寵童といっても一人ではない。四郎のような稚小姓は五六人いる。二間にわかれている。
主君の夜を守るのは、交替であり、枕の塵を払うのは、その夜その夜によって、遠江守の気まぐれな情感しだい。お名ざしである。
その日、昼間のことが、反動的に遠江守に衆道をうとましくさせたのか、
お若という女を傍へ召した。
二十歳になるやならず。もう三年も遠江守の寵を受けている。新鮮さをもとめるより、気安さのほうが、その夜の遠江守にはほしかったのであろう。
猿ノ彦にとっては、僥倖だったともいえる。
何をしようという、はっきりした目的があったわけではない。強いていえば、醜悪な容姿にも宿っている〝人恋し〟の心が、役目も立場も忘れさせ、その行動に駈りたてのだ。
庭を横切って、彦は池泉に身を沈じた。
静かな波紋がひろがった。
その波紋のひろがりに気づかぬ影が、鷹部屋のうしろにあった。
影は二つ——
匂い袋から洩れる甘い香り、髪油の伽羅も強く、夜気のなかに漂ってた。
ぽかりと、水面に頭が出た。
魚鱗のような光る眼。
猿ノ彦である。
その双眸が、しわしわとまたたいた。哀しげに。

二人を見たのだ、平絹に桔梗を摺箔した派手小袖に青い紗の被衣した女は、やはり寵妾の一人。一番年若の鈴乃という美女で、男は、清ノ四郎にまぎれもなかった。

二

上弦の月が、中天にあった。七八日ばかりの月である。

秋夜の空は澄みまさって、明月は碧い光りを投げている。

奥庭のただ虫の音にばかりに占められた静けさのなかに、若い男女の姿は、一幅の絵であった。

清ノ四郎の前髪姿も、月のしずくに濡れたように美しく、二人がよりそい、愛の囁きを交している姿は、不倫の臭いはない。

「――四郎さま」

甘く、哀しいほどに澄んだ声であった。

「ずっと、お慕いしておりました」

鈴乃は、あえぐ口を寄せて、

「お殿さまの目が恐ろしいばかりに、想いを圧えてまいりましたの、今宵、お目もじできるなど、まるで、夢のよう……」

「わたくしも、鈴乃どの」

と、四郎の声も浮いている。

「まるで、夢心地なのです。いまもって、雲の上を歩いているような……このような喜びが、四郎にもたらされようとは、これは夢ではないのか、現世なのか……」

「四郎さま！」

感きわまって、せつなげに身をよじりながら、二人は寄り添った。

恋の情熱とは、磁石のように、牽引するものがあるのか。二人はひしと抱きあった。

猿ノ彦は、眼を閉じた。

その表情は、深い哀しみを湛えて、くしゃくしゃに歪んでいる。

清ノ四郎は、女体を抱きすくめると、むさぼるように、唇を吸っている。

女の手も、男の背を抱きしめ、荒く肩をあえがしていた。

情火に燃えた肌には、紗の被衣も邪魔っけなように、もだえるからだからずりおちた。

鈴乃も四郎も、それに気がつかない。

唇も舌も、ひとつになって、狂ほしいまでの抱擁だった。

そして、二人は、抱きあったまま、草むらに崩れたのである。

おのれが忍者の身を忘れて、水中で、わなわなしていた猿ノ彦は、そのとき、はじめて、びくりと、耳を動かしている。

忍びよる足音を聞いたのである。

それは常人の耳には聞えない小ささであったが、しかし、二人に気をとられた猿ノ彦としては、日ごろのワザのほどでもなかった。

日ごろなら、もっと早く気がついていたはず。

（遅かった！）

彦は、水からとびだした。

忍法をもって、目くらますには、遅かったのである。

〈四郎どの！〉

低く、口笛するように、箭のような声で、

〈四郎どの、これさ、逃げろ〉

「う？……」

はっと、うつつから醒めて、はじめて、四郎はきき耳を立てた。

その異な声は、さらに、囁く。

〈殿じゃ！〉

「なに……」

〈逃げろ！　見つかってぞ〉

あっ、と四郎は鈴乃をはなして、飛び起きた。

「ま、どうなされて」

と、まだ夢見心地のままの鈴乃を、

「と、殿が……」

四郎は、女を抱えるようにして走り出しかけたが、たしかに、すでに遅かった。

「こりゃ！　汝ら」

雷のような、遠江守の怒号がおちた。

「何をいたしておる！　逃げるな」

ぎらりと、佩刀を抜き放った。

白綸子の寝召に黄金作りの太刀をひっさげ、凄

まじい形相だった。
清ノ四郎は、そのまま、へなへなと崩れ折れた。

三

激怒したら、手のつけられない遠江守である。
直情径行などという生やさしいものではない。憤怒の血が、目にのぼって視力を失わせるのかもしれなかった。人も物も見さかいがつかなくなる。手当りしだいに、そこら中、叩き毀し、叩き斬る。
三尺の佩刀をふりかぶったとき、四郎は観念した。
「お許しを、お許しを……」
泣くように叫びながら、ひれ伏した頭上に、
「許さぬ！」
白刃が落ちようとした。
と——
「う……何やつ！」
遠江守は、うしろから引きもどされたように、のけぞった。よろよろとなった。
その力は、不思議なことに、刀にも、腕にも、髪にも、首にも、腰にも——全身に及ぼしたのである。
一瞬の立ちくらみに似ていた。
遠江守の目の中で、半月が、ぐらりと揺れたように思った。
「ぬ！　きさま……」
刹那、それとわかったのである。
「猿！」
と、口走った。
「さ、猿だな！　うぬ、わしの恩を忘れてか！」
その一言が利いたようであった。
ふっと、束縛が解けた。
遠江守は身軽になると、反動のように、片膝ついた。
そのまえに、影が流れた。
猿ノ彦が膝まずいていた。
「うぬ……やはり、うぬだな」
「——ねい」
彦の目はおどおどと見上げている。

おのれの意志というものを失った、木偶の姿だった。
「豊後には行かざったのか！」
「——帰ってまいりました」
ぼそりと言う。
「帰ってきたと？　急ぎの用なれば、なぜ、わしのところへ来ぬ？　かようなところで、一体、なにをしておったのか」
「……」
嘘のつけない猿ノ彦は、黙っているしかない。
その様子を見、四郎を見ていた遠江守は、ふいに、豪快な声をあげて哄笑した。
「わかったぞ、わかったぞ、猿めが、ははは、ははは」
おかしくてたまらないように、月を仰いで笑い、目に涙さえため、足踏みして哄笑した。
猿ノ彦はぎくりとして目を伏せ、四郎と鈴乃はわけがわからずに、おずおずと狂笑する主君を見上げている。
その高笑いが、ふっと熄んだと思うと、
「四郎！」
べっと、唾を飛ばした。
「うぬは、鈴乃と乳くりおうていたな。おれの目を掠めて、女を盗もうとは……いかなる目にあうか存じてのことじゃな」
「——お、お許したまわりませ」
泣かんばかりに四郎は、
「で、出来心にござりまする」
「こやつ、言いぬけするか」
「いいえ、いいえ……今日の、殿の……殿のお仕打ちのつれなさに」
「なに、なんと申す」
「は、はい、左様でござりますとも、殿は、今日、わたくしめを寵愛なさろうとしながら、おやめなされた」
「……」
「つれない仕打ちにござりまする。それゆえ、それゆえ……」
「こやつ、詭弁を弄しおる」
「いいえ、いいえ、まことにござりまする。四郎

が胸中、お察し下されませ」

なんとかして一命を助かりたい思いなのだ。

人間はこうまで卑屈になれるものなのか。

謀反気をおこして、女体を抱いてみたものの、発見されてしまうと、命が惜しくなる。

「つれない殿……」

女のようにしなさえつくって、怨みがましい眼をむける。

どこまで演技かわからない。

半ば演技、半ば真実だったのかもしれない。

受動的な性戯に変質した人間は、助かるためには、屈辱を忘れてしまったか。

そんな美少年に、にやりと笑ったと思うと、遠江守は、どうと足をあげて蹴倒していた。

「四郎、その言葉に嘘はないか」

「まこと、まことでござります。この胸を断ち割ってお見せしたいほどに」

「ふむ。女に惚れたのではないと申すか」

「はい、女など、女など、生涯無用でございますものを」

「――その言葉を忘れぬな」

念をおすように言い、遠江守は、猿ノ彦に視線を移した。

「猿！　手伝うてやれ」

「は？……」

けげんな眼をあげるのへ、

「これじゃ」

白刃の先で、猿ノ彦の脇差の先端をとんと軽く打った。

先端には紐がついている。鍔は並の倍ほどもある。鐺りは鉄で三角に尖った、忍び刀である。

「これを？……」

「抜け」

「え?!……」

「抜け」

「え?!……」

「四郎が無用のモノ、切ってやれ」

四

相良遠江守武任の言葉は否やを許さぬ。猿ノ彦

のほうにも、その言葉に対する抗体が生来なかったのである。

「汝を拾うたのは、猿田峠の森の中じゃったと父上が申していた。父上が拾うてやらねば、汝はいまでも猿の群れにいたわけじゃ、人間の言葉も解さずにのう」

時折、思いだしたように、遠江守は言った。

「猿に人語を教えるのは難い。父上の股肱であった忍びノ者、雲ケ峯の鹿又に汝を預けた。忍者のほうが、われらより猿に近いゆえにの」

そこでいつも遠江守は、ふわっふわっと笑いだす。

「五年か十年か、おれは知らぬ。汝が来たとき、父上は、よき忍びノ者が一人増えた、と仰せられた。よき忍びノ者が、ふっふっふっ……なるほどな」

猿のなかで泣いていた子。

たしかに猿ノ彦は、遠江守の父によって、猿から人間になった。恩は忘れぬ。忍者によって育てられ、自然、忍びのワザを身につけて恩報じにと仕えるようになった。

遠江守の横暴にも、唯々として従うのはこうした理由があったのである。

ひれ伏して、主君の裾にすがらんばかりに哀願する清ノ四郎を、

「斬れ」

と、彦は命じられたのだ。

「こやつには無用のモノをな、斬ってやれ」

「……」

「女は嫌いじゃと言うた。されば、前についていても無用の長物、スッパリと斬りとってやれい」

ぎょっとなって、清ノ四郎は腰を浮かした。

遠江守の言葉が、はじめて判然としたようである。

鈴乃も、顔色を変えた。

「し、四郎さま！」

すがりつくのを、他の小姓近習が飛びかかっておさえた。

四郎は逃げだそうとした。

その袴の裾を、ぶっすり、遠江守の刃が地に縫

いつけて、
「猿！　早くせい！　せぬか、せぬか!!」
怒号した。
彦の眼がうるみ、四郎を見た。
哀しげな眼の色は、この運命の皮肉さをひたすらに詫びていた。
「む、むごい……」
わっと鈴乃が泣き伏す。
四郎の色を失った唇は、まるで死人の、そこだけが未練を叫んでいるかのように、わなわなと、痙攣しているだけで、声が出なかった。
「猿！」
遠江守が促した。
「ねい……」
ぎらりと、忍び刀が抜き放たれると、
「よ、よせ！　彦！　おまえ、さっきは、わたしを助けようとしてくれたじゃないか」
こんどは、猿ノ彦に哀願しようとする浅ましさ。彦の眼から、血のように一条の涙が、
「お、仰せでござる」
白刃が走った。
ぎぇーっと、怪鳥のような叫びをあげて、四郎はのけぞった。その股間から、しゅっと血が噴くのを見ると、鈴乃はおもてを蔽って崩れた。
さすがに、遠江守も、息を呑んだ。
猿ノ彦の左手が、血だるまの中から、異様な肉塊をつかみだしたのを見ると、遠江守はぷいと背をむけて、寝所へ去っていった。

影の匂い

一

清ノ四郎の性格が一変した。忍法に《ふぐり抜き》というのがある。陰嚢から睾丸を抜きとるワザである。が、この場合、遠江守は四郎の陰茎を切らしめている。普通こうしたことは、たいてい死を招くものだが、忍法には秘薬がある。猿ノ彦の爾後措置がよかったのであろう。三日間呻吟しただけで四郎は恢復した。

厳密には恢復とはいえない。一度切った男根は、妖異、神変不可思議をもってしても元にはつながらない。
四郎は、おのれの肉体の一部の行方を知らぬ。失神してしまったからである。
気がついたときは、三日後だった。そして朦朧たる三日間は、女になったような妖しい夢を見つづけ、もがき苦しんだ。
悪夢からさめ、生を確めたとき、男の資格を失っているおのれを発見したのである。
その衝撃が、四郎の性格を激変させた。
かれは、めっきりと口数が少くなった。
前から饒舌のほうではなかったが、それでも必要な、そして有効な阿諛などが巧みだった。
一日中、一言も饒舌らぬことがあった。
それで用が足りたせいもある。遠江守は何も言わない。さすがに気が咎めるのか。四郎が平癒して出仕したことについて、つとめて無視している。
小姓という地位は主人の身のまわりの世話から常に近侍しているのだから、無視されていることはたまらない。
数人で交替に近侍する。
前に述べたように、夜伽は指名である。これは遠江守のその日の夜の好みあり、ただ命令に従うだけだ。
以来——遠江守が、一言も与えなかったのは、四郎が居ずらくなって、逃げだすことをこそ望んでいたのではないか。
他の朋輩たちが聞えよがしに、
「よくも図々しく居れるものじゃ」
「面の皮が厚いことよな」
「女になったならば、両刀差すことはあるまいに」
「イザという際、御馬前に斬死することが出来ようかな、あれで」
「切ると……精気が失くなるというが、もはや、刀を持てないのではないか」
「左様……なんやらこう、からだつきも、まるきり女人になったような……」

そんな悪口のなかで、平静を装っている清ノ四郎であった。

そのうちに、奇怪なことが起るようになった。小姓らが次々に変死していったのである。

玉置主水という十六歳の少年が、内濠で変死していたのが最初だった。

一応の水練は出来る。水死とは解せなかった。月のない夜で、暗闇にあやまってすべり落ちたのであろう、ということになった。

その次には、木下求馬という十八歳の小姓、これは両眼をえぐられて、裏門の石垣にすがりついていた。

猛禽の嘴のあとだ、と知った顔をする者もいたが、医者は納得し兼ねる、といった。

「いうなれば、手で、眼玉をつかみだしたような……」

「手で？　人間の手でか」

「左様……そう見えまするな」

不明瞭な殺人事件は、人心を不安に陥れた。

三人目は、浮島宮内。これは十五歳で、花のような美貌だったが、顔に数十創を浴び、目鼻もわからぬ凄惨な血みどろの首になって死んでいた。

このころから、漸く、変質者の仕わざにちがいないと、噂が流れるようになった。

「どやつが、かようなことを」

遠江守は激怒した。

小姓たちは、かれが一度ならず寵愛した者たちである。

これは明らかに、遠江守への挑戦といってよかった。

小姓や中小姓、近習らのあいだに不安がひろがった。

「御馬前に討死にするなら本望じゃが、こんな死に方はのウ」

「よほどの狂人であろうか、一人歩きせぬことだ」

かれらは戦々兢々として、朋輩とつるんで歩くようになり、夜道も出ないようにした。

（彼奴かもしれん……）

遠江守が、四郎をマークしはじめたのは、むしろ遅きに失した感があった。

二

二人目あたりから、近習たちのあいだで、

「清ノ四郎があやしい」

と、いう声は出ていた。

群集の偏見が、大多数の日常生活に疎遠な者に悪意を、そして、敵意すら持つのは、無智な社会の共通した現象である。

四郎の挙動に不審があったわけではない。

その推定犯行の時刻に、四郎の姿を見かけた者が少くない。

二度目には、

「言葉は交しませなんだが、たしかに、清ノ四郎どのでした」

祇園社の禰宜が言った。禰宜は信のおける人である。老齢いささか耳目が遠いが、間違いない、と言い張られては、遠江守も信用するしかない。

だが、こう事件が重なっては、世上の聞えもある。義隆の信任を失ってしまう。せっかく築きあげた、

「大内氏筆頭の大名」

たる名声に傷がつく。

「彼奴を見張れ」

近習の大木と窪田に命じた。

二人とも膂力自慢の男である。四六時中、かならず、二人のどちらかが見張ることにした。

ところが、三日と経たぬうちに、また事件は起った。

四人目の被害者は、山鹿次郎三郎、これも小姓で紅を塗ったような、紅唇が自慢の男だ。

長局の廊下で、これは全裸で首を吊って果てていたとのことだ。

ところもあろうに、遠江守の愛妾おでんノ方の部屋の前であった。

「こんどこそ、彼奴の仕わざにちがいない。糾明して……」

「いえ、それが……」

と、番に当っていた大木甚五郎は、

「てまえが見張っておりましたわい、一歩も四郎

は他行しておりませぬ」
「なに！　まさか……」
「たしかでございます。五ツ時分まで書見をしておりましたが、一度小用に立っただけで……」
四郎は厠へ入った。間もなく出てきた。
茂みにひそんだ大木はそのとき、異様な想像をめぐらしている。男根を失った男が、どうやって小用を足すのか、ということである。
出てきた四郎は、茂みの眼に気づく様子もなく、寝に就いた。
大木は、虫の音を聞きながら、さっきの想像のつづきをめぐらしはじめた。ただ見張るという仕事は退屈なものだ。
時間的には、その少しあとに、次郎三郎が死んでいる。
小半刻ごとに長局を宿直の夜番が見廻る。これは女である。刀を帯びた膂力すぐれた女で、その見廻りの間に、次郎三郎の裸身がぶらさがっていたのだ。時刻は、したがって、小半刻（三十分）の間ということになる。

「うぬは、まさか居眠ったのではあるまいな」
「いいえ、滅相もない。ちゃんと昼間眠っておりまするゆえ、左様なことは。たしかに、小用をすませて寝所へ」
——寝所からどうやって脱けだしたか。
遠江守は、四郎以外には下手人が考えられなかった。
——忍法つかいでもなければ、見張りの眼をかすめて脱けられまい。
何食わぬ顔で出仕している清ノ四郎を見ると、合点がゆかなかった。
「猿を呼べ」
ひそかに大木に命じた。
忍者なら、出しぬかれることはあるまい。
猿ノ彦はこのところ、ずっと山口に居る。
大友義鎮の動向が、心配ないとすると、あと、遠江守の猜疑の眼は、毛利元就と、陶隆房にむけられているだけで、この両者には別に雲ノ流れとも白雲とも称される鹿又の下忍をそれぞれ派遣してある。いうまでもなく、忍法の流れは、猿ノ彦

と同じである。ちょっと断っておくと、当時は忍法の流派というものも、明確な名称はなかった。ゆかりある地名や人名やワザの代表的なものを時に呼び、したがって、それが口から口へ伝わるにすぎなかった。剣法に於ては、塚原卜伝の〝当流〟〝新当流〟なども、当方の流儀すなわち、わが流儀、という程度の意味が、固有名詞化され喧伝されたのである。ちなみに、卜伝は生前、一度も〝卜伝流〟などという言葉は口にしなかった。その歿後、弟子たちが、おのれの師尊し、として、勝手に鼓吹したにすぎない。もっとも、いずれの場でも、流儀とか名称とかはそんなかたちで、できあがるものかもしれない。
余談になったが、ついでに書き添えると、鹿又の下忍の身分は、後世、伊賀における、上忍、中忍、下忍の階級別の場合とかなり違う。名称は同じでも、まるきり別であることを断っておく。一言でいえば、伊賀の場合は下僕の意味が強く、雲ノ流れのほうは、弟子の意味が勝っている。
さて、呼ばれて参上した猿ノ彦へ、遠江守は命じた。
「四郎めがどうにも怪しいわい。汝、やつから目を離すな」
「ねい……」
猿ノ彦は拝揖して闇へ消えた。
ところが、その夜、また変死人が出た。やはり小姓であった。馬場雪之進という。
夜伽を仰せつかって、寝所へ伺候した。金屏風をめぐらした内で、厚い褥が敷かれている。遠江守は雪之進に口を用いさせ、一応の満足をしたあと、小用に立った。
出てくると、手洗の柄杓を持って待っているはずなのが、居ない。
「お雪、なんとした」
怒鳴った。
眠りこけたのだと思った。寵愛に狎れおって！
と足音荒く寝所に入った遠江守は、異臭を嗅いでぎょっとした。
雪之進の白い胸に、遠江守の黄金作りの佩刀が、垂直に突っ立っていたのである。

三

それが、しかし最後だった。ほかにまだ小姓や寵妃はいたが、もはや変事は起らない。

遠江守は、ほっとした。

（魔風が去った……）

そうとしか思えなかった。

下手人と見た清ノ四郎の様子には、何ら異なるところはなかったが、やはり、猿ノ彦の看視が効を奏したのか。

それにしては、雪之進の死は、もっとも、端的で、もっとも、遠江守に挑戦的だったことである。あれで、気が済んだというのであろうか。

ともあれ、清ノ四郎の行動や表情に、異るところがなかった——と、遠江守には見えた。

が、実は、雪之進の死んだ夜、四郎の運命を一変することが起っていたのだ。

すでに賢明な読者は気づいているだろう。命令とはいえ、心を寄せる四郎の男根を斬らざるを得なかった猿ノ彦が、忍法をもって目くらましの助けとし、清ノ四郎に復讐を遂げさせていたことを。

雪之進を刺すや、庭に走り出た清ノ四郎は奥庭から中仕切を超えた。行手の梢に影があった。

（こちらへ）

と、手招きしている。

瞬間、四郎は、猿ノ彦だと思った。常に彦が助けてくれている。が、このとき、彦は〝誘い〟に乗っていた。清ノ四郎と引き離す〝手〟が動いていたのである。

四郎は彦の影だと思い、中庭から塀外へ。お濠を渡った。寺の陰に馬が止っていた。

これはいままでにないことだった。彦のワザにまかせておけば、あざやかに目くらましてくれた。

これは、度重なる不祥事に警戒がきびしくなったためと思われた。

陰険な遠江守は、四郎を彦に看視させるとともに、その彦をまた誰かに見張らせているのかもしれなかった。

馬に乗ると、先へ走りだしたのへ続いた。

南へ、大路を飛ばしてゆく。月末で幸い月はなかった。

湯田のあたりまで来て、はじめて不審が沸いた。馬を寄せながら、

「彦、もはや大丈夫。いまごろは大騒ぎになっているかもしれない。姿を見せないと、疑いがかけられる」

「その心配は無用」

黒装束に身を包んだ男は言った。

「遠州は、一刻がほどは気がつくまい。薬で眠らせたわ」

あっと、清ノ四郎は驚いた。この男、猿ノ彦ではない。

それに遠江守を眠らせたとは。計画的だったのだ。怪しの忍者が、この男一人でないことは知れたが、清ノ四郎が、

「おぬし、何者だ」

馬を止めようとすると、いつの間にか、背後からも数頭の騎馬が追って来ていて、

「止めてはならぬ」

きびしい調子で、

「そのまま、行かれることだ」

「なに！」

「案じなさるな。われらは、おぬしの敵ではない」

「ならばなぜ……かような」

「その説明は、われら主人がいたす。さ、これへ」

小路へ折れた。

このあたりは、もう山口の町はずれである。竹藪があったり、林が深く、小川からは何の鳥か、馬蹄にあわてて、羽音高く飛び立ったりした。

小路からさらに竹藪の中のほそ径を一丁ほど入ったところに、雀のお宿といったていの茅葺き屋根の蓬庵があった。

「ここだ」

馬をおりる。

こうなったらしかたはない。

なりゆきにまかせるよりなかった。それにこの

一団の態度が、言葉通りに敵意を見せなかったことである。

一穂の灯がともっているだけの室内にかれを入れると、黒装束の連中は外に出た。

人気のないと見えた室内に、そのとき、声がした。

「お待ちしていたぞ、清ノ四郎どの」

「――あなたは……」

「名乗る前に、そなたの心底を聞きたい」

「……」

「そなたは二位ノ殿より、遠州へ品物のように賜わった身」

「……」

「遠州の暴虐により、羅切の憂目を見、剰さえ、同輩より羞しめを受けたわけじゃな。それで怒った……さもあろう、怒らぬ者はない」

「――あなたは」

どこかで聞いたことがある声、と思った。

答えずに、その声は、語をつづけた。

「わしも二位ノ殿と、遠州には怨みがある。どうじゃ、わしに仕えぬか」

「は……はい。でも……」

咄嗟に、決断はできかねた。

「いや、迷うことはない。そなたは、いままで通り、遠州の小姓づかえしておるがよい。わしが陰の主となろう、手当ては充分にくれようぞ」

「あ、あなたさまは？」

その眼の前で、ふっと、灯が消えた。

風が吹きこんだ様子もなかったのである。

ぎょっとなって、身をひいた清ノ四郎の目の前に、影があらわれた。腰屏風のかげにいた声の主であった。

中肉中背と見えた。容貌はわからない。その影は、無言で、四郎の前へ立ちふさがった。

判然としないが、かなりの年配であろう。声の落着きといい、小兵のわりに貫禄がある。

四郎は坐ったままだ。

その前に、からだがふれるくらいに、近々と突っ立ったのである。

この体位は、反射的に、四郎にある行為を連想させた。寵童としての受動的な感覚である。

だが、その次に聞いた言葉は、主君の横柄で残忍なものではなく、優しくまろやかなものだった。

「許す、まさぐってみよ」

「え？……」

「せい」

それだけでは、稚小姓でなければ意味がわからなかったろう。

清ノ四郎は、手をのばしていた。そのひとは袴を穿いていなかった。

あるべきはずのところに、あるべきものが、おのれのそれと同じく、むざんに羅切されているさまを、四郎は手に触れて、愕然としたのだった。

自嘲のかすれた笑いとともに、そのひとは言った。

「わかったか、わしの申す意味が」

「は、はい……」

「陶（すえ）ノ隆房じゃ」

聞いたような声、と思ったのも道理。

「あなたさまも？」

「二位ノ殿にのう……」

清ノ四郎は、彦もまたこの陰のちぎりに賛同してくれるであろうと思った。

穴

一

「――猿ノ彦、か……妙な名のやつ」

と、義鎮は呟やいて闇の中で眼をひらいた。

周防の山口郊外で、陶ノ隆房と清ノ四郎が〝陰ノ主従〟のちぎりを結んだ夜から、十日ほどの後である。

この豊後の府内は、ここ五日ばかり、風雨が荒れくるい、城の石垣が崩れたり、陋屋が倒壊し、大津波で磯近い漁師の家や舟番所などが流されたりした。

漸く昨日からおさまって、城下はその復旧に大童になっている。

この風雨の中に、その奇妙な猿のような忍者が忽然とあらわれたのであった。

〈お屋形さまは、七分一ノ殿になりたくはござりませぬかい〉

突然のことである。

あわてず騒ぐことのなかったのは、義鎮が放胆な武将だったからだ。

「おかしなことを申すやつ。このねずみめが、何を夢歩きしおって」

〈天下に大名は多ござる〉

平然として言う。

〈が、九分一ノ殿と称われるお方は、一人しかおりませぬ。御存知でござりましょうがな？〉

「む、大内がことか」

〈御意。大内公は六十余州のうち七ケ国を占むるゆえ、九分一ノ殿〉

「それがどうした！」

怒鳴りつけたが、その影は、びくともしない。

天井に貼りついているのである。

「無礼者め、おりてこい」

〈かように……〉

言下に、はらりと、影がおちてきた。

義鎮は、片膝立てに抜き討った。ばしっと影が切れた。いや、切れたのは黒装束だけ。

物体は、へやの隅にうすぎたない猿のようにうずくまっていた。

猿のような顔をむきだしにしたまま。

「あざやかだ」

太守の貫禄を見せて、義鎮は太刀をおさめた。

その老猿の姿は、言葉ばかりではなくかれに害を与えに来たとも見えなかったからである。

危害を加えるのが目的なら、天井から如何なることでも出来たはずだった。

「その忍のワザでおれを七分ノ一殿にしてくれると申すか、ははは、英彦山の天狗にも嫌われたおれじゃ」

〈七分ノ一殿になりたくはおざりませぬかい〉

「成るわ。おれはこの手で、ほしいものはとる」

〈お膳立てが要りまする〉

「ふっ……汝れがととのえるとか」

〈ねい……〉

老猿はするするっと、近寄った。ひょいと封書を差し出した。と思うと、すーっと、またもとの位置にもどっている。

書状には、署名がなかった。

ただ、こうあった。

——宿怨久しく山口なる築木山屋形を撃たんとす。私の怨みなれば、版図を望まず、仍て、御舎弟をもって大内を襲封せしめられんことを。

棚から牡丹餅の誘いである。が、戦国権謀の世だ。うかつには乗れない。

思案顔を見て猿は言った。

〈明夜、参上仕る〉

ぱっと長押へ飛んだ。と、見えた。

「あ、待て」

呼び止めたが、それは、影にすぎなかった。

彦の本体はすでに外へ——暗い回廊をすべっていた。

その夜から毎晩、かれは現われた。そして五日目——

〈御思案がつきませねば、いずれ御返事を〉

と、言って姿を消したのである。

もとより、義鎮に、大国を得ることを遠慮する殊勝さがあろうはずがない。ただ、懸念は、これが策略ではないかという一事だった。

大友家から軍勢を出さずともよい。ただ万一の場合のうしろ楯になってくれるだけでよい。御舎弟——晴英をもって、義隆のあとめに立てさせるというのだから、これは罠ではなさそうであった。

現在、大内氏の版図は、七ケ国に及んでいる。これを斬りとって折半しようというのか。

義鎮の勢力は六ケ国に及ぶが、実質は四ケ国分くらいだから、七分ノ一殿にするというには、周防など五ケ国をくれるという、嘘のような話だ。むろん、弟の晴英を大内氏の後嗣とするなら、それは現実化する。

（誰かだ、あの忍者を使うているやつ）

毛利元就か？

最初に浮んだのはその名だった。その次に、義

鎮の返事を受けとる場所として三田尻の烏帽子岩を指摘してきたことから、

（近臣の誰かじゃナ……）

ここに、陶ノ隆房の名が、胸に泛んできたのである。

謀叛人が、身近にいるとわかると、この陰謀は、ひどく現実味を帯びてきた。

将軍、天子を迎えて遷都すら、云々されるほどの大国も、その風、殿上の長袖流に堕しているとすると、案外、内部の窮りは甚しいかもしれない。

その脆弱さをもっともよく知っている近臣が叛乱を起すなら、その確実性は、期して待つものがある。

（陶か……陶かもしれん）

義鎮は首をひねった。

二

陶ノ隆房は、大内氏の一族で、先祖が同国吉敷郡陶邑にいたので、その地名を名乗ったという説が、強い。

代々、大内氏の宿老の家がらとして、権勢をほこり、隆房の代になってからもっとも盛んで、伝来の所領富田郷のほかに佐波郡徳地に三千貫、熊毛郡の小周防に百丁を領するようになっている。

隆房は聡氏の一族向田紀伊守の子に生れ幼名五郎（奇しくも義鎮と同じだ）といったが、性悧発にして玲瓏玉をあざむく美貌のゆえに、伯父（母の兄）鑑尾張守興明入道道麒の養子に貰われた。

道麒に子が無かったわけではない。それも男子があったが、少年期に死んでいる。これも黒い靄がかかっているのだが長くなるので一まず置く。

陶ノ五郎が元服して隆房と名乗ったのは、義隆の一字を下賜され、いわゆる偏諱を賜わったものであることは、誰でもわかる。

主君の名を頂戴するのは、大変な名誉であり、主従の関係を密接にするものだが、戦功もたてぬ幼年に、元服のはなむけとされたのだ。この主従の情交のほどもしのばれる。

義隆が、いかに陶ノ五郎を寵愛したかに就ては、

有名な逸話がある。漢書の「佞幸伝」にある〝断袖〟の仲を思わせるものだが長くなるので割愛する。

その仲が、異常なばかり烈しかったことをつけくわえるにとどめるが、こうした仲は、成長した場合、二つに別れる。より一層、親密になるか、顔を見るのもいやになるか、どちらかだ。

同性愛は、男女のそれよりも一層、強烈でしたがって、憎しみもまた、さらに激しくなる。

陶ノ隆房が、近ごろ義隆と仲が悪くなり、ずっと、領地の城に引きこもっているという噂は、ザビエルの消息とともに、義鎮の耳にも入っている。

さらにそれを煽っているのは相良遠江守武任だということも。

（――陶だとすると、この謀叛、成功の可能性が大きい。一味するに如くはない……）

義鎮は舌なめずりした。

風雨とともに来り、暗雨とともに去った、奇妙な忍者のもたらした夢は、大きく義鎮の胸の中でふくれあがったのである。

（――だが、陶の忍者だとすると、相良の手が動いていないともいえぬ。いや、もはや、そやつらが、おれの動向を窺っているのかもしれぬ……）

義鎮は四方の闇に忍者の眼を意識した。

かれが肥後国へ発足の意を表明して、人数備えの次第を定めたのは翌日のことである。

総勢およそ二万三千余。八段の備えをもってした。

先陣の侍大将は佐伯惟教、志賀親安両人、二番備えの侍大将、白丹の志賀鑑高、朽綱鑑安、大野、直入の諸勢皆これに与力して三段の備えとする。大分郡、並に国東、速見郡の勢は田原近江守に組することとし、御旗本は、玖珠、日田両郡、その軍勢六千余。二段の備えで二頭とする。

陣立てした上で、阿蘇家、両坂足、津江、五条、高森以下の地侍ら、以前からの被官与力者に牒を飛ばして参集を命じるとともに、三舟、甲斐宗運など、かねてから、府内に内通していた大名小名らに参陣を命じるなど、肥後進発の準備は整

った。

進発の気がまえを、ことさらに大仰にしたのは、一つには、暴風でいためつけられた城下の者たちの士気をふるいおこし、一つには、大内義隆の透破の耳目を慮ってのことである。

ある意味での陽動作戦ともいえる。

事実――相良遠江守武任の密命を受けた〝雲ノ衆〟鹿又の下忍数名が、豊後に潜入してきていたのである。

義鎮の配慮は正しかったといえる。

〝影〟は、猿ノ彦ではなかった。運命はしばしば皮肉な様相をもたらすものだ。

遠江守は、猿に陶ノ隆房の看視を命じ、それまで、隆房を見張っていた者たちを、豊後に送りこんだのである。

さて、そのあとに、義鎮に残された課題は、いかなる方法で、謀叛に応諾の牌を、周防に送るかだけであった。

三

すでに宵のくちから二升ほど、由布酒の強いやつをあけ、珍陀酒を皮袋に三分ノ一ほど飲んでいる。

小姓や近習はお相伴だから、さして飲めない。しかたなしに、舐めるように飲んでいるのに、この若い主人は鯨飲というにふさわしかった。

子ノ刻を待ったのは、しかし、どういう意味があるのか。

子ノ刻といえば、深更である。義鎮にはいつも、これからが夜の狂宴であった。何しろ若い。加えて健康。斗酒なお辞さぬ強健な体格は大友家の血統であろうか。

「局へまいるぞ」

と、立ち上った。小姓が佩刀を捧げてあとに従う。

長局は、別棟になっていた。

それも奇妙な配置になっている。武家屋敷といっても、まだ公家の寝殿作りの影響を破風やくれ縁や、泉殿などに残していて、対ノ屋まがいのものもある。

御屋形のほぼ中央がおつぼになっていて、池がある。

かなり広い。濠という感じだ。その中に建物がある。そこは男子禁制はもとより、侍女でも義鎮の許しなしに近づくことはできなかった。

義鎮自身、そこへゆくには小舟で渡るのである。

濠の中には、数条にわたって、鳴子仕掛け、小舟針、蛸壺、虎落がらみ、など、潜入を阻む仕掛が完璧であった。

深さはたかだか二丈ほどのものではあるが、たとえ忍者でも水底を這うのも許さない。

それを慮った義鎮は、水底を地獄沼とした。すなわち、沼の深さ一丈。もしも、水底を這う者あらば、底無し沼のように、ずるずると呑みこませる。

これほどの周套さは、義鎮の人間不信から来ている。

かれは、君側の小姓や近習ですら信じていなかったのである。

自鳴鐘がけだるく間のびした音を立てた。

子ノ刻であった。

城内の奥殿では、深沈たる夜気のなかで、思案に盃をかさねていた義鎮が、ふと瞠めたように、盃を置いた。

「もはや、時刻か」

と、自鳴鐘を見やった。

「は……」

御相伴にうんざりしていた近習は、眠たけに赤く腫らした眼で、ほっとしたように、床ノ間を見た。

「子ノ刻にござります」

「間違って早く鳴ったのではないか。まだと思うていたが」

「とてもに。伴天連の献上品でござりますれば、正確なこと、太陽のごとくで」

「小賢しいことを申す」

と、義鎮は機嫌がよく、

「冷水をもて」

小姓をふりかえった。

豪放磊落に見えて、細心の注意を持ち、常に損得を考えて、巧みに行動する義鎮の生涯は、父にうとまれた幼少期につちかわれたものにちがいない。

ここには、愛妾十人がそれぞれの部屋を与えられていた。

ほどよく酔った義鎮の顔は、しかし秋の夜の風に頬をなでられると、急にひきしまったものになった。

女を抱きに紅閨に行く男の、それは表情にしてはいささかいぶかしい。

義鎮が小舟に乗ると、小姓が竿をとる。

そのとき、小姓は、ふと、とまどいを見せている。

「どうした?」

義鎮の語気に、小姓は狼狽して、

「アノ、いいえ……」

小姓はそのときはっきりというべきであったかもしれない。

小舟にふっと重みを感じたのである。

だが、眠気のせいかと思った。咎められたと思い、叱責を恐れるほうが先に立った。

あわてて竿をさした。

空には月がある。立待の月が皓々と水面に照り映えている。

義鎮は中ノ島に着くと、小姓を残して上っていった。ここはもう女護が島であった。十人の寵妾と、その侍女、腕におぼえの刀女たちが、蟻の這い入る隙もなく見張っている。

おのれの屋形の中で、これほどの厳重な忍び防ぎがあるにも関らず、さらに〝閤ノ眼〟〝閤ノ手〟を警戒するのは尋常ではなかった。

四

義鎮が局へ入ると、ずらりと寵妾たちが出迎えた。

すでに、意は通じてあるらしい。その意とは、夜毎のそれとは違う。常にない、ものものしい空気が支配していた。

「——先刻申したようにいたせ」

「はい……」

十人の女たちはいっせいに平伏する。十五六から十八九、とっても二十歳にはならぬいずれ劣らぬ美女であった。この荒大名の意のままに従うように馴されている。

女たちが下ると、義鎮は寝所に入った。

火燈窓の経机に筆墨がある。

義鎮は一応、部屋の中を見まわしてから、蠟燭をともした。そして、小さな紙片に何やらしたためた。

ほそく丸めた。

紙は強靱な羊皮紙であった。

当時、日本では珍らしい。蠟燭ともに珍品とされている。舶載の品であった。ぼるとがる船が薩摩へ入ったとき、もたらしたものである。

義鎮がしたことは、そのほそく丸めたものを、さらに、蠟でかためる——

蠟燭はこのためであった。

それで用意はととのったらしい。かれは小さな鈴を振った。秋の夜の静寂に、冴えた、さわやかな音がひろがった。

返事はなかった。

いや、きゅッきゅッと、廊下が鶯鳴きした。それが、返事であった。

「——御免下されませ」

恥じらいの声を閾のそとで聞かせて、一人ずつ部屋に入ってくる。

いずれも、この秋の夜には寒すぎる、一糸まとわぬ裸身だったのである。

そのころ——

小舟で見張っていた小姓が、睡魔にとらわれていた。

夜霧に肩をすぼめた小姓は、水面に何やら動くものを見た。

十七日の月が光っている。

あるかなしの夜風がさやさやと、ちりめん皺を描き、月かげを歪めている。

その月の反射が、ふいに割れて、さざ波が起った。

「あっ……」

ふいに、突風でも吹いてきた感じであった。
ぎょっとなって、眼を凝らすと、水面はふたたび、もとの静けさに還った。
さざ波は、おさまり、月がもとのまるさを取りもどしている。
目の迷いか、と思った。
眠気がさしてきた。水面の月は、ちりめん皺に微笑むかと思えば、さざ波に怒り、次の瞬間には、幽谷の古沼のようなとろりとした表情になる。
そのくりかえしのうちに、小姓は睡魔にとらわれたのである。
小舟の中にかれがうずくまり伏せると、ぽかりと月が割れた。
黒い頭が出た。
舟人のいう、海坊主のような。すぼりと黒い頭巾をかぶった男である。双眸だけがくりぬかれたように光っている。
岸辺へ音もなく泳ぎつく。ふふふと息をついた。
それが、失敗だった。
ひゅッ、どこからともなく飛んできた礫が、ぼくっ、と眉間に食いこんだ。
〈……〉
ほとんど、呻きも洩れぬ。
岸辺の草をつかもうとした手が、ずるずるとすべって、池の中へ沈んだ。
月明りは、木陰の暗がりにも余照を与えている。忍者の眼は、冷静に、おのれのワザの成果を見きわめる。手ごたえも適格。手裡剣がふかぶかと眉間を貫いたのを見た。
「ふふふふ、思った通り」
ひらりと屋根から、黒猫のように飛びおりた影。しなやかな身ごなしで、すべるように岸辺に来た。
ひらりと頭巾をとったのは、小菊だった。
凝っと水面を透かし見る。待つほどもなく、水面に、黒いものが浮び上った。
その眉間には、十字手裡剣が、半ばを埋めて突っ立っていた。
小菊は片笑いすると、身を翻えした。

義鎮が、小菊の声を聞いたのは、小舟の小姓が、天下泰平な、安息の呼気を十と立てぬうちである。
〈お屋形さま……〉
「ウム」
〈菊にござります。ただいま、くせもの一匹仕止めました〉
「やはり……」
〈はい。御用心を。まだ他にいるやもしれぬほどに……〉
「ム……早く済ませ」
小菊が床下から返事をしているとき、池中の忍者の死体のわきに、しわしわと、またたちりめん皺が寄ったではないか。
眼が動いた。水面下に、二つ眼玉が動いている。仰臥したまま泳いでくるのである。
〈ふふふ、愚かなくノ一め、雲ノ忍法《孕子流れ》には気づかなかったろ〉
仕止められた忍者の胸腹部にぴたりと抱きついての孕子流れ——瀬戸の水軍にその泳法秘伝があると聞くが、いまだに詳らかにしない。雲ノ忍法ではすでにその秘伝を取り入れていたものとみえる。
小菊ほどの女忍にして、気がつかなかったのである。
刀女たちの眼にとまろうはずはなかった。その忍者は、眠り伏した小姓には一瞥もくれず、刀女たちの眼をさけ、小舟のかげから草むらを這いのぼった。
いささか気息が乱れ、手がわないているのは、池の中に仕掛けられた、刃に傷ついているのか。月光をさけ、灌木の下草を蛇のように進む影を目にとめた者はいない——

五

そのとき、義鎮はおのれ智恵に満足しながら、ふっと、蠟燭を吹き消している。
たちまち、ぬばたまの闇が、十人の裸女と室内を包みこんだ。
遠明りもなく、月光の余照もささぬ。

用心ぶかい義鎮の閨は四囲に控え部屋をとっている。さらに廊下がこれをとり囲む。

その廊下は、いかに忍びノ者が壁ぎわを這おうとも、無言は許さない。精巧な鶯鳴きを生じる。

するりと、唐紙があいた。次の間から、ふっと入ってきた気配。

「菊か」

「あい……」

これは予定の行動だったのである。

小菊は、忍法装束を脱ぎ、やはり裸身になっている。すなわち、十人の女たちと同じように。

小菊が入ってくると、十人の女たちはあらかじめ命じられていたのであろう。同時に立ち上った。ぐるぐると、閨のなかをまわりはじめた。いうまでもなく、小菊の裸身はその中にまぎれこんでいる。

その動きは、ほんの僅かの間であった。ふたたび、独楽が動きを止めるように、しずかに坐ると、もはや、小菊の姿は、神さまでも気がつかないであろう。じわじわと、どこから沸くか、異様な、芳香が漂よい、女たちを恍惚のなかに導いていった。

義鎮が待っていたのは、その〝時〟である。

「よいか、これから、わしのすること、静かに受け入れよ」

と、かれは重い口調で言った。

「いずこに敵方の眼があるやもしれぬ。声を立ててはならぬ」

「……」

「坐ったまま、膝をヒラクのじゃ」

「……」

「動いてはならぬ。よいな……」

こういうと、義鎮は手近の女ににじり寄った。

漆黒の閨とはいえ、眼が馴れてくると、おぼろに裸身は見えてくる。

人相、表情まではわからない。多少、肉のつきかたにちがいはあるが、好みの女のかたは一つだから、よく似ている。

白い肉体が十一。閨のなかに適当な間隔を置いて並んでいるのは、異様な光景であった。若い女

の呼吸が、甘酸っぱいような体臭が、しめきった室内にむれるように漂よっている。

義鎮が近よると、その女は、おずおずと膝を左右にひらいた。

かれの手は、遠慮なく、股間ふかく、入った。

女は、はっとしたように思わず、叫びを洩らしそうになるのを、唇で蓋した。

片手で背を抱き、唇をかさぬ、右手を下腹部の茂咲の丘のふもとに沈めているのを、たとえ、どこかで見まもる眼があったとしても、指と指の間にはさまれたものの有無まではわからない。

あ……と、女のうめきが咽喉で洩れた。

それは声にならぬ。義鎮の口がひたとふさぎ、吸いとっている。

指は容謝なかった。

常の愛撫ではない。愛撫の指に馴れたその柔襞は、異質の指を拒むかのように、かわいていた。が、それも長いものではない。義鎮の指に須臾にして、おんなは濡れてきた。

つとめて感じまいとしていても、若い肉体は、自ずと、燃えてくる。

ゆたかな胸があえぎ、義鎮を圧した。義鎮はそのとき、指先が亀頭に変じたかのような異様な感覚——性感を覚えたのである。

かっと、慾情に血がふくれあがった。

ふいに、酔いが発したようであった。それを圧えるだけの逞しさが、この武将にはある。

かれは、女を放し、その場を離れた。

次の女に近よる。

同じことをくりかえしたのである。

一人ずつ、片っ端から、順々に、抱き、唇を吸い、股間をまさぐった。

十一人の女に同じことをしていったのである。

義鎮の手にある羊皮紙が、なまあたたかい濡れ穴に吸いこまれるように、するりと奥へ入ったのは、小菊のそこであったのは、いうまでもあるまい。

あの芳香は、霞ノ忍法くノ一変化にいうところの《色分け身》閨のなかでは、ひとしくなべて同じように見せたのである。

義鎮にしても、おぼろげな女の顔ながら、小菊を見わけることは難かしい。

それと知ったのは、唇をあわせたときである。

愛妾たちは、いずれも、義鎮の暴発的な性格に畏怖している。唇に蓋をされても、ただどうなることかと、すくんでいるだけだった。

小菊は、そのとき、唇の中で囁いたのである。

〈早く入れて〉

と。

六

唇と舌と——なま温い唾液にくるまれ舌が義鎮の口中にすべりこんできて、そう囁いたのである。

囁いた、と思った。忍法でいうところの、《舌咬み》交互に舌を咬みあって饒舌る。かたわらに透破の耳があっても、聞えぬ。敵地へ潜入した男と女とが、たわむれを装って情報を交換するに用いられる。これは伊豆相模の風魔忍衆に発すると伝えられる。

小菊の膣内にそれをすべりこませたあとも、義鎮は何くわぬ顔で、あとの女たちに、同じ行為をつづけている。

が、さすがに、忍者の眼は、それの虚しさを見ぬいている。

閨の中に——杞憂したように、海坊主の眼が光っていたのである。

義鎮はむろんのこと、小菊もそれに気づかなかったのは、体内に忍ばせられた羊皮紙の異物感のせいか。

(あの女か！)

忍衆の畑眼も、しかし、義鎮の二指がはさんだ羊皮紙を小菊のそこに挿入したのを目撃したわけではない。

むしろ、小菊の動きにあった。

小菊には、他の妾たちのような、被虐症がない。

さきに、英彦山の天狗山伏に開眼させられ、後に霞ノ流れを汲んで、すなわち女忍としてのワザをもち、義鎮に仕えている。

仇を、討ったのみか、その子義鎮に扶持される

という、まわりあわせに、素直に身を投げている。あくまでも、主従である。ワザあればこそ主君が雇う。その関係が、小菊をして義鎮のまえで、ものおじさせなかった。

あるいは佐伯紀伊介の妻を犯す錯覚を生じせしめるなどしたことによる、優越感があったからかもしれぬ。

その、妾たちとの違いが、はしなくも、その場で、あらわれたのである。

小菊ほどのワザの持ち主でも、そのとき、おのれの心身をして、

(義鎮の妾)

の気を失念していたところに、失敗がある。

夜の閨に、山猫のように光った眼が、

(あの女)

と、とらえながら、一つの機会は、孕子流れ、のワザを阻む白刃の池中林によって深傷を負っていたことだ。

(残念じゃ、せっかく突きとめながら……)

眼は、濡れた光りを放った。

ここまで閨を這ってき、それを見とどけただけで精一杯だったとは。忍者のしごとは、暗殺などならば、相手を殺したとき、役目をはたしたことになる。しかし、この場合、義鎮が何やらを、その女に挿入したのを見とどけただけでは、役目がつとまらぬ。

(——死ねぬ……)

このまま死ねば、見なかったと同じだった。

(——伝えねば。伝えて、あれを奪わねば)

目的はそこにあった。

兇々しい眼が光っているとは知らず、義鎮は十一人目の女から離れると、

「——済んだ」

と、言った。

女たちが目をあき、居ずまいをなおす気配がした。

閨に目が馴れてくると、十一箇の裸身は、白いけむりのように、ぼうっと、浮んで見える。

「本日、申した通りに」と、義鎮は女たちのかげを見まわしながら言った、「そのほうらに旅立っ

て貰おう。いうまでもないが、敵の目をくらますためじゃ。おのおのが、わしの墨付を持っているかに、装うことじゃ」

闇に緊張の吐息が流れた。

「船と陸地とにわかれよ。クジを引いてさだめい。出立は夜明けじゃ」

すでにそれから先のことは、通じてある。

義鎮は命じおわると、矢は放たれた、といわんばかりに、未練なく立った。

かれの夫人はこの局にはいない、表といわれる日ごろの居間つづきに、御座ノ間がある。

丹後ノくに一色殿の娘を離別してから、一族で家臣の田原氏の娘を夫人にしていた。

義鎮が小舟にもどると、小姓はぼんやりした顔であたりを見まわしていたが、あわてて竿をつかんだ。

その眠りが、奇妙な、さざ波の誘いにあったように、眼が醒めたのも、波の声だった。

小姓は、義鎮を乗せて竿をつかってもどるあいだも、まだ夢心地だった。

「あっ！」

と、声を洩らした。

死体を見たのである。眉間に手裡剣を打ちこまれた死体。

「あれか」

と、義鎮は小菊の言葉を思いだしてうなずいた。

「大事ない。死んでおる……透破じゃ」

義鎮がいつになく心地よげだったのは、その忍者たちの裏をかく、おのれの才覚に酔っていたからだ。

たしかに、あの十一人の女たちの肌にふれて、酔いがにじみ出していた。こころよい眠気であった。

忍法・さざなみ

一

眠気がさめた小姓は、その舟を漕いでいるあいだ、

（重い……）

と、感じた。舟足である。

が、不審を口にしなかったのは、自分の体調の変化だと思ったからだ。

重いのも道理。舟底に、海坊主が貼りついていたのである。

だが、巧緻な水の刃、水の罠は、いかに身を水平に保とうとしても、無事には通れなかった。

さきに、池中の白刃林で深傷を負った上に、水母針を全身に浴びた。

義鎮と小姓が気づかずに去ったあとに、海坊主——いな、雲ノ忍者は、岸へあがった。

もはや、歩行もかなわぬ。

池の畔りの草むらに身を横たえた。虫の声が、ふっと止む。巨松の太枝のかげになっていて、月の光りはとどかぬが、草の虫は敏い。

はじめてのように、かれはふとい息をついた。

その目の近くに、血を流したような花がある。真紅の蔓珠沙華だった。義鎮が好きなのか、夫人の好みか、真紅の毒々しいばかりのその花は、あたり一面に群れ咲いていた。

この忍者が、花を見て、まず感じたのは、

（忍び除けか？）

と、いうことだった。

それから四半刻——

やがて、死んだように息をひそめた忍者に安心したものか、虫の音もしだいに高く、あたりを占めてきたが、その虫の音にまじって笛を吹くような、声が聞えてきた。

奇妙な——というしかない。

高く、低く、ほそく、長く、その声は、草むらを這うかと見れば、あげひばりのように宙に舞いあがる……

虫の音とまぎれて、常人には聞えよう。それは明らかに忍びノ者のなかまとの呼び合いだった。

草かげに倒れていた男は、うすく目をあいた。

（来た！……）

ほっと、喜色が僅かに、そのおもてに横切った。

それは、ほとんど、空を飛ぶ鳥の影が翳ったにひとしい。忍者のおもては、すでに死相がにじみ出ている——

その唇がすぼめられた。その奇妙な笛に似た声が、色を失った口から洩れた。

相手の呼び声が、熄んだ。夜風が草を薙ぎ伏せるように走った。

影は、檜皮葺きの中間の屋根から、ひらりと地上へおりたち、馳せ寄ったのである。

〈宇陀よ〉

〈四斗米か〉

二つ鎖つなぎ、という透破の四人組みによって潜入してきたのである。

四斗米と呼ばれる男と、赤風と異名で通る男が外で待っていた。

宇陀と水尾、の二人がいつまでたってももどらぬので、様子を見に入ってきたのである。

駈けよる四斗米へ、

〈待て、花を……〉

宇陀は叫んだ。

〈は、花を踏むまいぞ〉

〈む……〉

四斗米も気づいた。

救けがいたことを義鎮に気づかれてはならぬ。忍者二人、潜入して、死んだ。その事実だけを残さねば。死ぬにも、忍者は気を平にはできなかった。

先に白刃林に深傷を負ったときもおのれの手で傷口を早縫いし、さらに水母針を全身に浴びて、それを抜かなかったのは、流血を圧えるためであった。

針は一呼吸ごとに、体内に進み、血管の中を心臓に向ってゆく。

曼珠沙華をさけて、四斗米はそばへ来た。

〈やられたな〉

と、言ったきりだ。

二

〈水尾はすでに？〉

〈む……〉

〈——ぬし……〉

言いさして、四斗米は語尾を断った。もはや慰めの言葉も、励しもない。その心要はなかった。同情や憐愍は何のたしにもならぬ。

〈密使は？〉

ずばりと核芯にふれて、

〈やはり、多数の中にまぎれてか〉

〈む。昼間の……〉

義鎮の命令はすでに知るところだったのである。

〈して、その者は？〉

死相のあらわれた宇陀から、寸秒も早く、一言でもよけいに聞き出そうとする四斗米。

〈ウム。やはり……くノ一〉

〈そうか、して名前は？〉

〈知らぬ……〉

〈なんと！　名がわからぬでは。年齢は〉

〈それも〉

〈たわけな！　何を見たのじゃ〉

〈にはちか、いや、もっと若いか？……〉

〈十五六とな。それで、その女、なんぞ、特徴があってか？〉

〈さて……〉

宇陀の眼は、死魚のように、生気を失い、どろんと曇っている。その眼は、女の特徴を思いだそうとしているのか、死の淵をすべりおちてゆくのか、四斗米にはもどかしい時間だった。

〈思いだせ。なんぞ……〉

〈——う、う……〉

〈死ぬな。恥を知れ！　雲ノ忍衆か、それでも！〉

〈み、密書は……〉

〈密書は？〉

〈お、おんなの……隠しどころに!!〉

ふわっと、四斗米は嗤った。

〈聞いたぞ。よくやった〉

いままさに死のうとするなかまを見ながら、しかし、隠し場所さえわかれば、という快心の笑みだった。

四斗米は耳を宇陀の胸にあてた。

どぼッどぼッと、濁った、不規則な鼓動は死の

時がそこに迫ったことを物語っている。

〈もう一言〉

と、耳を嚙むように、かれは言った。

〈女ども、やはり十人か〉

〈十、一人……〉

〈なんと！　十一人とは？〉

はたと、壁に突き当った。

〈十一人の女……むう。こりゃ難いぞ、その女、やはり、特徴は、なしか〉

月の位置が変り、松の梢洩れる光りが、宇陀の蒼い顔を照らした。

その眼のなかで、月がぼけ、曇っていった。雲が遮ったのではない。かれの視力が衰え——そしてまったく失われたのだ。

それでも息はあった。

生と死の茫漠たるなかに、宇陀はあの情景を甦えらせている。闇の中にうごめく女性裸身——。一人ずつ、片端からとらえて、股間をまさぐってゆく義鎮の手の、肘の動きを。唇に蓋をされ、快楽と、疼痛と、入りまじった女の表情を。

女は眉をひそめていた。はっきりと、その頬は、舌を与えていた。

宇陀は、ほッと、最期の息とともに言った。

〈し、舌を……〉

〈なに、舌を？〉と、四斗米は急きこんで、〈その女、舌をなんとした？　おい、舌を、なんと……〉

どろんと濁った眼が白くなった。

「おい！」

思わず、四斗米は、常の声が出た。

宇陀は死んでいた。心ノ臓は止っていた。

〈舌を……はて〉

四斗米は、濠を渡って、局をさぐりたい慾望に駈られた。が、それは、宇陀の二ノ舞をするだけだ。せっかくここまでもさぐりだしたことを生かさねばならぬ。

そして、この場合。宇陀の顔をキザミ崩す必要もなかったのである。四斗米は闇に消えた。虫がまた鳴きだした。

三

「——くそ！　豊後の狼め、よくも考えおったわ」

赤鼠は、ぼりぼりと鼻のあたまを掻いた。

「女どもを密使に出す。秘密の書状は、女の隠しどころに、か」

にたりと、顔の下半分で笑い、

「それだと、失くすこともあるまいて。へたに持たせりゃ失くす。大事をとりすぎてもな。したが、あそこでは濡れて、墨がにじむじゃろに」

「知らぬのか、それを」

と、四斗米はしたり顔に、

「尋常の紙ではならぬ。何を使うたか知らぬが、舶載の紙には、羊皮、雁皮などを、うすくなめしたものがある。おそらく、そのような破れぬ紙じゃろ」

「だが、な」

「それに、さらに蠟でもかぶせれば、の」

「なるほど、それにしても、歩きでわからぬか？」

「おぬしと、いつぞや賭けをしたことがあったな。ソレ、娘の眼つきを見てよ、男を知っているかいないか」

「左様さ。半分ぐらい、当ったな」

「嘘を吐け。三分ノ一がよいところじゃ。女どもも、近ごろはなかなかに、腰のふりよう足の運びが巧みになってな。したかせぬか、とんとわからぬ」

「おぬしにはな」

おれはちがうという顔で、赤鼠は、

「おれにはわかるつもりだ。が、しかし、十一人の女を、一々サグルわけにもゆかぬ」

「やらねばならんさ」

と、こんどは赤鼠があおる立場で、

「一々サグレばよい」

四斗米は黙った。

困難を感じたのではない。人間的な慾望がふと浮んだのを見通されたようで、逡巡をおぼえたのである。

そこはお屋形の東郊で、長浜の七倍河原だっ

た。万一の場合の逃げ道は敵地へ潜入した忍者は常に考えている。この河原から三方へ走ることができる。

赤鼠は餅を食べていたが、ふと思いだしたように、

「――にはちの女か、十五六……というても美女ぞろいじゃし、年齢も同じごろじゃ」

「それよ、ただ、舌がの」

「ウム、舌がの……」

二人は黙りこんだ。宇陀の死という大きな犠牲を払ったにもかかわらず、密使の手かがりが少ないことが、密書の奪取の困難を思わせた。

が、とにかく十一人の女をサグラねばならぬ。

「海路と陸路と――おりゃ、海を〝張る〟」

「おうさ、おりゃ街道を」

二人は、暁闇の中を走りだした。

女たち十一人は、もとより途中を襲われる危険は覚悟している。

小菊一人のために十人が犠牲になるというのではなく、義鎮の命令というだけの行動だった。

飼い馴らされている女たちには、抗うことは許されない。

四斗米にまずサグられたのは、おあん、という女だった。本船へ渡る小舟が、半丁とゆかぬうちに転覆した。

他にも客が五人いた。おあんはおどろきから立ち直って、水を掻こうとしたとき、誰かが抱きついた。

男だった。護衛の侍ではなかった。助けてくれるのかと思うと、下肢のあいだに手が入ってきた。傍若無人な指であった。義鎮も荒大名だが、まだ嗜虐癖はない。慾情に駈られての指先は、いかにそれが稚拙でも、乱暴でも、まだ救いがある。

その指の目的は違った。

非情にも、何かをもとめていた。傷口から宝玉でもつまみだすつもりのように、残忍だった。その間はさして長いものではなかった。

しかし、おあんにとっては、死への道だった。

指がずっと抜きとられたとき、彼女の意識はなかった。

漸く、おあんの溺死体が引きあげられたとき、その〝指〟の持ち主は、弥次馬にまじって、死顔を見ている。

驚ろきのまま瞠目して死んでいた。

その次に四斗米が近づいたのは、美弥、という女。

これは二番船に乗った。老女が供である。船の中で人々は行厨をひらいた。網代の弁当箱、割籠という。誰かが胡椒をふるのが、海風で美弥と老女のおもてに吹きつけた。

「あれ！」

思わず顔をふったが、眼がしみた。

「ひや、これは、悪いことをしましたな」

その老人はひどく恐縮して、竹筒の水を手巾に湿らせると、

「どれ、眼を洗うて進ぜよう」

美弥の両眼を拭ってくれた。老女は自分の眼がしみて、それどころではない。胡椒で充血したのが、ひどくいたいたしく、老人はくどく詫びている。

船は杵築湾に入ってまた客を乗せたが、船が出たとき、老人の姿は消えていた。恐縮して下船したのであろう、と老女は言った。老女の眼は、投錨前にきりきりと痛み、介抱しようとした美弥の裾のなかに、老人の手が忍びこんだのを、知らぬ。

四

三番船では、さらに奇妙なことが起っていた。船が鵜糞ノ鼻をまわるころ、おびただしい蟹が、船上に這いのぼってきたのである。

潮のせいかわからない。

「ひゃア、こりゃたまらん。船頭、なんとかせぬか」

五匹や十匹ではないのだ。船上は、蟹でうまるかと思われた。

三番船は夕方に出る。そのあたりまでくると、海上も黄昏れていた。

その騒ぎで、海へおちた者がある。女力士のように肩の張った中年の女だった。その主人らしい若い美しい女は、蟹に裾のうちに入られて、あられもない恰好で失神していた。

すべて混乱の中でのことである。

翌日の船にも、きれいな女が乗っていた。

これには、屈強の武士がつき添い、寸時も眼をはなさない。それがあらぬか、この船は、無事に国東半島をまわり、豊後灘を乗りきった。

船便といっても、領内だけのことで、周防へゆくには、中津から筑前の回船で赤間ノ関へ行き、そこから三田尻通いに乗らねばならない。

交通には不便な時代だ。筑前の東北一帯の地豪は、そのころ大内氏の被官になっている。相良遠江の花尾城の例を見てもわかる通りだ。これが、義隆への使者なら保護して貰えるが、逆だから、侍たちはやつさなければならぬ。

その中津の網元久兵衛の木小屋で、二人は雲水ごしらえになった。

「やつしも難かしいの」

「頭を剃るのがたまらん」

「なに、二年もたてば元通りに生えるわさ」

その四人目の女はお吉といった。お吉は、目の前にあらわれた雲水に驚いて、

「あれ、もう、やつしが出来ましたか」

「御覧の通り、ちょっと拙者とは気がつきますまい」

「ほんに……で、木田さまは」

「やつは手間どっております。へたなやつで」

お吉は、母屋から木小屋へ入っていった。

窓がないから、昼間でも暗い。そこに二人の侍が、髪を剃りかけたまま倒れているのを見て、

「あっ！」

仰天したとき、ふわりと、黒い布が頭から被さった。黒染の衣であった。

もがくうちに苦しくなった。上半身が息苦しく包まれて、下半身を風が吹いた。その冷たい下肢に男の手が動くのを、お吉はぼんやりと感じたまま、二人の侍と同じように眠りにおちていった。

五人目のお玉という女が、やはりサグられたのは、この中津より半里手てまえの今津泊であった。

小舟が漕ぎ寄せてきて、

「府内からの急使でございます。お玉ノ方とやら、お出でか」

お玉は何ごとかと舷からのぞきおろすと、

「御案内します」

と、いう。若い漁師であった。

お玉には屈強の武士が五人も付き添っている。これまでにないものものしい守護ぶりであった。小舟は一同を乗せると、船足重く漕いでいった。小舟には限界である。

入江には漁船が数艘泊っている。その中から突然、一条の縄が、海蛇のように伸びてきたのは、浜まで二丁という距離に来たときであった。

舟は走っている。縄はお玉の髪にからみ、あっと思う間に、お玉は舟からはじき飛ばされたように、水面へおちた。

が、いま一条の綱が水面をすべるように走りお玉の足に巻きついた。静かな入江に、けたたましい悲鳴がつんざいた。

「舟をとめろ」

侍たちが狼狽の声をあげたときは、もう十数間離れていたのである。お玉のからだは足を天にあげ、逆さ吊りになった。真っ白な下肢が二本、水面から、突きだしたのを見ると、侍たちは息を呑んでしまった。

その水面に、さざ波のよせるように、男の顔が出た。侍たちの舟は十間ほど離れている。その面前で、逆さ吊りになったお玉の隠しどころを、臆面もなくのぞきこんだのである。

指が理不尽にもそこにわけ入るのを見て、

「彼奴め！　なんたるまねを」

「ふ、舟を早く、あれへ」

だが、いつの間にか、呼びにきた船頭が消えていたのである。

気の利いたつもりで、一人が櫓に飛びついた。一漕ぎすると、なんと、ぼろり、と櫓べそがぬけおちたではないか。

あざやかな切り口を見せて。

はじめて、忍者の罠にはまったことに気がついて、侍たちが飛びこもうとしたとき、素早く、充分にサグリ終えた海坊主の顔がにやッと白い歯を見せて、波間に沈んでしまった。

侍たちが漸く泳ぎついたときは、むざんな姿のまま、お玉の息は止っていた。

さかさまに吊されていたのだ無理もない。侍たちには、眼前に展開された事実が、どういうことなのか、かいもく見当がつかなかった。

ただ、泳ぎついたとき、二艘の漁船のあいだに、ぴんと張られた細綱に逆さ吊りにされた玉藻の、異様にきれいでなまめかしい——凄艶といっていいであろう、白いふとももにつけねに、さざ波にゆらぐあえかな藻草が、強烈に目に灼きついたことである。

五

船頭に紛したのは赤鼠である。お玉の茂咲をかきわけあらためたのは四斗米である。

二人はその直後、宵風を巻いて、豊前下毛街道を乾へ——走っていた。

〈おぬしのほうは、サグッてか、赤鼠〉

〈おうさ。みんなあらためた〉

〈無いのか？〉

〈無い〉

〈面妖じゃ〉

〈卒爾あれば、おぬしのほうであろ、四斗米よ〉

赤鼠はにたりとして、

〈おれのほうは、指をもてあらためただけではない。二人がかりじゃ〉

〈はて？〉

〈うひひひ、セガレとな。セガレも無いというたわな、うひひひ〉

〈こやつ、ぬけ目ない〉

〈役目じゃ、醜女であろうとも、やったろ。美いだけが得をした。それだけのこと。おぬしのサグリは手ぬるすぎる。さざ波忍法もよいがな。あれでは、ぬかりがあるかもしれん〉

そう言われてみれば、心当りがある。

〈六人、ぜんぶサグリしてかい〉

〈六人？　いんにゃ、五人じゃぞ〉

〈たわけな！　六人じゃ、一人ぬけたぞ〉

〈ウム……〉

〈まだ間にあう、走れ〉

一日のおくれをとりかえさねばならなかった。

二箇の影は夜風に乗った。

そのころ、十一人目の女——小菊を乗せた赤間船は、海上六里吉田に入っていた。

赤間ノ関は、いまの下関。早鞆ノ瀬戸で出発が遅れたのは、さざ波忍者にとって僥倖といわねばならない。その次に寄ったのは、宇部である。ついで周防灘を一直線に横断して三田尻に着く。

三田尻の港に船が入ってきたとき、

（あれが約束の……）

と、見やった。港の中に突兀として、巨岩が突きだしている。高さ三丈。烏帽子岩とも屏風岩とも呼ばれている。

小菊は頭がやけに重く、熱を感じていた。忍者として、からだを鍛えてから、こんなことはなかった。寒中でも水中に一刻を耐えることができるようになっている。

（どうしたのかしら……）

食物が悪かったのかもしれぬ。少し前に、岬をまわったとき、物売りが来て、餅や柿を売りに来た。すぐに三田尻、という安心感が、つい餅に手を出させたのだ。

まさか、その餅の中に、毒物がひそませてあったろうとは。

船からおりると、もう立っていることも耐えられなかった。

（少し休めば……）

岩にのぼるのは、どうせ夜でなければ人目に立つ。岩の上に凹みがある。そこに入れておくことになっている。

港の木賃宿へ休みに入った。横になると、もう起きられない。高熱を発し、おこりにかかったように、がたがた顫えが来ている。

彼女のあとから、入ってきた客が——老人だったが、仔細ありげな顔で、

「わしは、医術の心得がある。どうも疼気らしい

の、診て進ぜよう」
親切に申し出でた。白髪白髯に蔽れた老爺である。
小菊は、礼を言った。忍者としておのれの身を救えないのは哀しいが、しかたはない。
木賃宿だから、はた目もある。破れ屏風をひきまわしたなかで、やおら老人は診察をはじめた。舌を診、額の熱を計り、胸に耳をあて、心ノ臓の動きを聴く。そうするうちに小菊は、しだいにこころよい眠りにおちていった。

六

老人の手が裾をひらいたのも、したがって知らぬ。下半身も診断するというのか。家のうちは暗くなっていた。隅の一角だから、よけい暗い。うつるのを恐れて誰も病人に近よらないのだが、この場合、幸いだったろう。老人の手は、小菊の陰阜をまさぐり、泉かられいの蠟封じの羊皮紙をとりだしたのであった。
それだけではない。役目を全うした喜びが、その老人——すなわち四斗米に、忍者の身を忘れさせたのであった。
毒物でもって高熱を発した小菊のおもては赧らみ、汗が吹いていた。
唇を半ばあけ、皓い歯がかちかち鳴っている。半眼に閉じて、苦しげに、やや眉をひそめたところは、異様に、男の気をそそったのである。
これが尋常の女ならば、そんなことはなかったろう。くノ一忍者だと思うと、異常に気をひかれた。胸の白さも、乳房のふくらみも、そして、下腹部からふとももへの、肉のしまり工合も、四斗米にとっては、たまらなく得難いものに思えた。
あるいは、あのときの赤鼠の言葉が、潜在意識になっていたのかもしれぬ。
四斗米は、暗がりと屏風を幸い、小菊の下肢におのれを容れた。
もとより、忍法をもって、仮現を立てることは忘れぬ。本身は快楽をむさぼり、かれの影だけが、診料に余念ないかのように。
四斗米の慾望は、さざ波忍法にみすみす楽しみ

を捨てた。五人の女の分も加わったようであった。
須臾にして、歓喜がもたらされた。仮眠をかけられたまま、小菊もその恍惚は与えられたのである。ひしと熱っぽい四肢をからめてきた。
絶えて久しい快感であった。くノ一におのれを没入してきた小菊にとって、その快楽はすでに遠い過去のものだったはずなのに。
熱にうるんだ眼が、うつろにあいた。四斗米は、はげしく唇を吸った、口中に舌がなだれこんできた。愛らしい女の舌とも思えぬその情慾のあえぎに、四斗米は判然と、宇陀の言葉を思いだしている。
(これか、なるほど……ううむ、たまらぬ)
ひとたびおちたまま、四斗米は、ふたたび逸物の怒漲を知った。その刹那、かれは、忍者のおのれを忘れた。ワザの緊張が溶けた。
「——やあ、何をしくさる」
突然、濁み声が聞えた。忍法が溶けるや、木賃宿のおやじに不埒な交媾が見えたのだ。
血のいろが、けむりのように海中にひろがり、さ

「ふていやつだ、医者じゃと!」
「病人をよいことに、なんちゅうことをしくさる」
「ぶち殺せ」
小菊の美貌には、老いも若きも、気を惹かれていたのだ。激昂した男たちが、どっと襲いかかってきた。
四斗米は一跳した。
小菊のからだから飛び離れるには、しかしそのとき、彼女の恍惚と同時に、かれもまた二度目の、絶頂感に達したのである。
その瞬間が、かれの〝敗〟になった。
唸りを生じて飛んできた棒が腰に当った。誰かの杖であろう。四斗米は窓に飛びつこうとして、どうと倒れた。
白刃が見えた。乱世だ。男ならたいてい刀を帯している。左右から白刃が迫った。その白刃を逃れられない。一瞬に判断したとき、かれは右のやつを蹴上げざまに、左の白刃にぬっと左腕を突きだした。

ずばっと、左腕が飛んだ。すさまじい噴血。その血を紅膜として、おのれをかくし窓に飛びつくつもりであった。

ために、密書の蠟丸は右手に握っている。四斗米の失敗は、そのとき、小菊の忍法を失念していたことだ。小菊もまた恍惚からさめている。

片腕をいさぎよく捨てることによって本身を生かし、右手の蠟丸を生かす——そのための思いきった行動も、小菊の覚醒のまえには無駄だった。

誰の刀を奪ったか、血の霧をまとって一跳した刹那、

「お待ち！」

凛然たる声とともに、残りの右腕が、密書を摑んだままずばっと血を噴いて、おのれから飛び去ったのを四斗米は知った。

窓は、板の上げ蔀だった。凄まじい跳躍で板蔀があおられ、血まみれたからだは、俵でもほうり出すように外へ——一足二足で、潮入りであった。両腕を失った四斗米のからだを、ふくれあがった潮が呑みこんだ。

ぎ波は異様な臭いで石垣を洗っていたのである。

そして、雲ノ忍衆四斗米のからだは遂に浮き上ってこなかった。

女忍小菊の体液にまみれた蠟丸は、陶ノ隆房の入手するところとなったのであろう。

幻の女

一

河原は霧に閉されていた。潺緩たる流れの音が、初秋の暁闇を冷え冷えとさせて、未練気な夜のいろに応えていた。東の空はすでに明るみかけていたが、山蔭は暗い。河面から湧き出る濃霧は、渦を巻き、重くゆったりと流れて、その二人の武士をとらえた。

「——聞えるか、兵庫」

「ウム……あ、聞えた」

風はあるようにも思えなかったが、その笛の音は、霧のなかに途切れ勝ちに、聞えてくる。

嫋々と、噎ぶような余韻は、濃霧に漉されて、ひときわ情感をそそるかのようであった。

尾和兵庫介は、馬を止め凝っと、霧の河原を透かし見た。

もとより、見えぬ。ただ漠々たる乳白色の霧、霧、霧……厚い霧のかべが暁の河原を占めている。

「ちいっ」

焦だったように、兵庫介は馬腹を蹴った。

「おっ、気をつけろ」

三輪右京が、あわてて、

「川へ突っ込むぞ」

それに応えようとしない。栗毛をあおって、濃霧の中へ溶けこもうとしている。

「怖れを知らんやつだ」

右京もしかたなしに、馬を進めた。これは漆黒の三歳駒。栗毛のあとを追うのだから、足もとは心配ない。

盲滅法に走ったのではなかった。その証拠に、笛の音が、しだいにはっきりと聞えてきたのである。

（戦場馴れしているやつじゃからな）

右京は感心したように首を振った。

膂力といい、胆力といい、才覚といい、右京は兵庫介に一目置いている。これは意識したくないことだが、家柄もずんといい。

横笛の音は、二人の男の胸をかきたてるように、あるいは高く、あるいは低く、むせぶように、訴えるように流れてくる。

この暁の河原に、ひとり笛を奏でる者は誰か。

（ふむ……こりゃ、兵庫の言うのも本当らしいぞ。夢ではなかったとみゆる）

右京は肚裡に呟やいて、

（どんな女か。女に惚れたことのない兵庫の気を惹いたやつ……）

興味が湧いてきた。

椹野川の上流の河原である。右手は姫山。姫ノ河原と呼ばれるこの界隈は人家はない。霧の中から笛が聞えてきたので、道を下ったのだが、それというのも、兵庫介の話をたしかめるつもりで、

半ば揶揄の気持だったが、笛の音が間近くなってくると、空想がふくれあがる。

朝霧のなかに、ひとり横笛をもてあそぶ佳人の姿は、逞しい戦国武士の情感をいやが上にもかき立てる。

栗毛は速い。兵庫介の想いに応えるように、河原を走る。暁闇の濃い霧のなかだから、まるで、雲の上を疾走する天馬のように見える。

「おい、待て待て、速すぎるぞよ。おい、兵庫……」

その声も聞えたかどうか。

笛の音は一層、はっきりと聞きとれてきた。と、濃い霧の渦が、ふいに強風に吹かれるように流れて、何やら赤いものが透けて動いている——それが炎のいろだと知ったのは、さらに馬を進めてからである。

「焚火か？」

「うむ」

栗毛は止まっていた。

兵庫介は岩蔭から凝っと前方をのぞきこんでいるのである。

「なんとした、あの火は？」

「叱っ！」

ただの焚火ではなかった。

たしかに笛はそこから聞えてくる。しだいに霧が霽れてくるにしたがい、その焚火を囲んで数人の影が動いている。はげしい動きだ。踊っているのだ。焚火を囲んで踊り狂っている影は、明けやらぬ夜のなかで、あたかも火焔地獄の鬼を思わせた。

「な、なんじゃあいつらは……」

「声が高い」兵庫介は、視線をはなさずに、「尋常の百姓ではないな」

「というて、牢人の群れとも見えぬ。近辺の山賤か、ひょっとすると盗賊かもしれん。退治するなど酔狂をおこすまいぞ。去のう、去のう」

「待て、よく見ろ！　あの焚火の中を……」

兵庫介の声には真摯なひびきがあった。右京は言われて目を凝らしたが、あっ、と思わず叫びを漏らしている。

二

笛を吹いているのは、女ではなかった。が、その燃えさかる焚火のなかに、仄赤く火明りに照らされた女体が浮び上ったのである。

正しく女体。

石ころの河原に丈余の丸太が突っ立てられて、焚火はこれを囲んで燃えている。

丸太には一人の女が吊されている。両手を高々とあげているように見えるのは、手頸を縛った縄が丸太の頂点から吊しているのであった。

まだ、火は点火されたばかりなのであろう。

霧が溶けるにしたがい、はっきりと見えてきた。

女は裸身ではなかった。蟬の羽のようなうすい衣を身に纏い、京風の綾帯を前で結んで房を長く垂らしていたが、紗か羅のうすものは、まるで着ていないにひとしかった。

女のみごとに成熟した乳房も、ゆたかな腰のふくらみも、何もつけていないもののように露わであった。

そのまわり、直径一間にみたない粗朶の輪は、いま火の輪となって、女を焼こうとしている。

羅衣に燃えつくまでに間もあるまい。

朝霧に流れる、笛の音は、佳人の手すさびどころか、地獄火を煽る、鬼のそれであった。

このさまを見れば、その笛の音も情感のこもったものではなく、陰微な調べであることに二人は気がついた。聞手の感じ次第で、施律はどのようにでも聞えるものだ。

高い音はあくまでも高く、低い音はかなしいほど低く、不協和音は一種、異常なほどであったが、その異常さのゆえに、奇妙な強烈さで、耳を搏った。

炎の舌はちろちろと燃え上るにしたがい、霧を溶かすだけではもの足りず、しだいに風を呼び、勢いを増して、女の足に近寄ってゆく。

「ひ、火焙りとは……ムゴイことをする」

右京が舌を引き吊らして、

「去のう、われらの知ったことではない」

豪勇を誇る戦国武士も、こんな私刑は見るに耐えない。

だが、兵庫介は眼をそむけぬ。

「去にたければ去ね」

「えっ、おぬし……ま、まさか、あの女が、話の……」

それに答えぬ。きびしい横顔だった。猛禽類を思わせる高い鼻、斧で削いだような頬のあたり、毛虫のような眉といい、きっと真一文字に食いしばった唇——精悍な顔である。

その下瞼が、ひくひく痙攣しているのだ。

それは、口に出す以上に、右京の言葉に答えていたのである。

（なんということじゃい、こりゃあ大変なことになったぞ……）

右京は惑乱する脳裡に、兵庫介の話を思い出していた。

一昨日のことである。

兵庫介は鹿狩りに出た。郎党小者など五人を率いて、この姫山附近に馬を走らした。

初秋のよく晴れた日で獲物は尠くなかった。猿や、兎、雉、鼬（いたち）など面白いように獲れた。山が迫って、川巾は広く、河原から熊笹の斜面がつづいたり、竹藪が川面にかぶさるようになって、風趣もある。

「まるで、おれのために飼ってあるようなものだな」

そう言って兵庫介は上機嫌だった。

だが、狩をやると、慾が出る。一日中駈け廻って子兎にもありつけぬときは、松鼠一匹でもよいと思うが、獲物が多いと、

「鹿はいないか、鹿は」

希みがふくらんで、

「鹿を担いで帰らぬことには、尾和兵庫介ともあろう者が、もの笑いじゃ」

「まことにまことに」

甲作という家来が、お土砂をかける。

若い。血気盛んな兵庫介である。栗毛を駈って、川沿いに遡った。しだいに山峡がせばまり、

木立が深くなる。日蔭が深いのは西山のせいだと思っているうちに、あたりは黄昏れてきた。

「若殿、もはやそろそろ、御帰還なさいませぬと……」

老臣の生沢伴蔵が促したが、

「なに、まだ日は高い。鹿はたしかこのあたりに居ると聞く。なんとしても、今日は射止めるぞ」

「日暮れになりますと、せっかくのお腕前でも、ソレ、夜目遠目にては……」

「うるさいの。つべこべ申すな。帰りたければ爺だけ帰れ」

「そういうわけにはまいりませぬわい。どこまでもお供つかまつる」

「ならば、勢子になれ。向う谷へまいって、鹿を狩りだせ」

言いだしたら、あとへは退かない兵庫介の気性はよく知っている。

「やれやれ、この年齢で勢子になろうとは思わなんだわい」

ぼやきながらも、兵庫介のお守役でむつきのころから育んだ伴蔵は、自分の伜のむずかりを聞くように、小者を促して、急坂を昇っていった。

勢子の効果があったかどうかわからない。

兵庫介は竹藪を通りぬけて疎林に入ったとき、一頭の巨大な鹿を見た。

「よき獲物」

いささか気が昂ぶっていたのは否めない。矢をつがえる間も遅しと、切って放した。鹿は次の瞬間、美しい斑白の線をひいて走り出している。

三

「しまった！」

あせったための失敗だ。兵庫介は矢筒から間髪をいれず矢を抜き出してつがえる。ひょうッと切って放つ。

ほとんど機械的な動作であった。

乱世に生を享けた武士の武芸は、常に実用的であり、実用性の如何がすべてであった。兵法（剣法）にしても、叩き斬り、突き刺す、鎧の合わせ目、隙間を狙う、足も斬るし、股も突き上げる。

殺せばよいのだ。

後世のように、見栄もていさいもない。梃（竹刀）という軽便なものが創始されてから、剣法は堕落したと、泰平の世に実用流を鼓吹した平山行蔵などは喝破している。

馬なども、見場よく乗るより、いかに早く走らせるか、足腰で馭して、両手で大太刀や槍をつかえるかが問題とされている。

したがって騎射も、かたちは問わぬ。剛弓をもって、十間の距離を一気に駈けぬきざまに適確に放ち矢数三本を最低とする。これはこちらが静止の場合に効果を顕す。敵の騎馬が疾走してくるのを射落すのに、前者をよくなせば、容易のはずである。

待望の鹿を見た兵庫介は、一ノ矢、二ノ矢を失敗ったが、

「居たぞウ」

叫びながら、馬腹を蹴って追いすがりつつ矢つぎ早に切って放した。

矢は鹿の角を掠め、肌を掠め、立木に突き刺さったり、草にすべりこんだ。

速い。茶褐色の物体は樹立の間をあざやかに縫いつつ、逃げて行く。

（くそ！　あやつは仕止めねば……）

疎林の梢に透けた空はまだ余光を残していたが、林の中はすでに昏い。

鹿は悧口にも樹立の深いほうへと逃げてゆく。徒歩では追いつけぬから少し遠廻りをせねばならぬ。しだいに距離はひらいていく。

谷を渡り、山を廻って追ううちに、遂に、鹿の姿は見失ってしまった。

「くそ！　逃げられてしもうたか」

諦めきれなかった。

諦めはよいほうだ。が、狩となると違う。あのみごとな四肢、偉大な角を持った鹿は一度逃してしまったら、もう二度と逢えないような気がする。

（なんとしても探し出さねば……）

走り廻っているうちに、深い谷に入ってしまった。

谷には渓流が白く泡立っている。奇妙なかたちで流れの上に突き出した岩棚が見えた。

廂をなしている。

「や？……」

兵庫介は眉をひそめた。

そこに奇妙なものを見たのである。

丸太と竹と萱の小屋である。太い猛宗や真竹の柔軟さを巧妙に使いわけて柱と屋根の梁にしていたし、竹皮のすじ裂きを網代に編んだものや、萱や笹でもって、外囲いを作っている。

一見、浮浪の者の棲家と見れる。が、その造作には、特徴があった。

風格と言い代えてもいい。自然の竹木の利用度に伝統と一定の法則が窺えたのである。

（山賤ではない……）

誰であろうと、その小屋の者たちなら、あの鹿の行方を知っているかもしれない。

見たことがあるかもしれぬ。

馬をおりて小屋に近づいた。

「誰か居るか」

声をかけたのは、五つ六つあるその小屋のどれもが、ひそりとして無人と見えたからである。

返事はない。

人影もない。

兵庫介は重藤の鞭で蓆の垂れ戸を開けてのぞいた。

中は枯草が敷かれ、何やらけものの脚や尻尾が転っているだけだ。

次のやつには、木刳りの椀や薦の円座が見えた。

河原の石を集めて、竈が築いてある。石は焼けていた。散らばっている岩魚の骨も、さほど古いものではない。

乱世に家を失い、郷里を捨てた漂泊の民が、この峡谷に仮の宿を営んでいたのだ。

どこに行ったのか。不在なれば聞くもない。

もうすっかりあたりは暗くなっている。兵庫介はしかし諦らめるつもりはない。こうなったら、夜っぴって探すだけだ。

河原を去ろうとして、何気なく、ひょいと上を

見ると、厳峭の上の闇に、ちらと白い影が見えたのである。

四

暗闇の中にうごめく、まぼろしのような白い影であった。普通なら見過したかもしれぬ。

兵庫介の注意を惹いたのは、その影が、ふっとかき消すように消えたことだ。

「おい、おぬし……」

声をかけたときは、まだ半信半疑だった。

白い影は夜風にかき消されたかに見えたが、崖の傾斜を駈けのぼったとき、その夜気のなかに、微かながら、ある芳香が匂った。

(女の匂いだ……)

幻覚ではない。

確信させた。

兵庫介の若さは、もう鹿のことも、郎党らのことも忘れている。

(こんな山中に……)

かれの姿を見て避けたのは何故か。一層兵庫介は興味をおぼえた。

「おい、逃げることはない。わしは、阿知須の尾和兵庫介だ、チトものを訊ねる……」

呼ばわったが、答える声はない。

闇の一点に灯が見えた。亭々たる杉林の中である。近づいて見ると、蓬庵であった。

浮世を逃れた世捨人の、孤り影のように生きた庵か。乞食僧の読経三昧の仮の棲家でもあろうか。

河原の掘立小屋の対照も奇妙といえる。

常の者なら、かかる山中のいぶせき蓬庵の奇妙な灯は、無気味に感じこそすれ、興味を起す余裕もあるまい。

が、放胆で逞しい体躯と若さにあふれた戦場往来の兵庫介は恐れるものがない。

ますます、好奇心に駈られた。

濡れ縁に近づいた。

「お内か?」

声をかけた。

「どなたか、在せられてか」

依然として返事はない。

が、人がいることは確かであった。観音開きは蝶番が毀れ、傾いた隙間から洩れる灯がちらちらと動いている。

だけでなく、得もいえぬ香りが、漂よい出てくる。

兵庫介は一千二百貫の知行とり尾和備後守の舎弟で、素姓は良い。育ちの良さは気の荒い戦国武士でも、香のたしなみがある。

(伽羅だ……)

頷いた。

「入りますぞ」

観音開きが軋んだ。

一穂の灯のもとに、青い香煙がゆらめいている。

彫像のようにそこに端座した人影があった。

尼僧であった。白絹で頭を包んで衣の袖を合わせ、ひそりと坐っているのである。その手には珠数が持たれているが、読経しているとも見えぬ。

「かかる山中に、独り庵を結んで居るのは、何ぞいわれがあってか」

はじめて、その声が聞えたように、尼僧はこちらをむいた。

綾絹のかげに、ゆたかな瓜実顔が見えた。若い。この場の雰囲気のせいもあろうが、妖しいまでの美しさ。細く高い鼻梁の影が観音菩薩の像に見るような、深い慈悲をたたえていたがその小さく、花びらを思わせずにはいない紅唇は、やや受け口に、男心をそそるものがあった。

一見相反するような顔の造りが、かえって奇妙な調和をもって男をさそったのである。

「……」

ほとんど、感動に近いおどろきで、兵庫介は、息を呑んだ。

尼僧の表情には、この突然あらわれた精悍な若武者に対して、別段の驚愕も狼狽もあらわさなかった。

その切れの長い眼がまたたくと、肉慾的な唇から意外な言葉が洩れた。

「お帰り下され」

「……」
「ここは……お武家のくるところではありませぬ」
「うむ、それは……」
「お帰り下さいまし」
尼僧は眼を閉じた。
その言葉の冷ややかさが、しかし、かえって、若者の心をとらえたのである。
読経のさまたげになるかのように、けがれから眼をそむけるような、悟り済ました表情が、兵庫介に反発させたともいえる。
「鹿を追って道に迷ったのだ」
「……」
「かかる山中に、独りホトケに仕えるとは、まことに殊勝ながら、仏の道とは、おれのような難儀をしている者を、救うことにあるのではないか」

五

ちらと、尼は眼をあげた。蠱惑的な光りが走った。

荒削りな戦国武士の心を、それはとらえた。
兵庫介はづかづかと尼のそばへ寄ると、ムズと手をつかんだ。
反射的に、ひっこめようとした。が、そのまま、手をまかせて、
「お帰り下さいまし……」
尼は言った。思いなしか、さっきの強さは無く、語尾はふるえ、声には、潤いがにじみでている。
「帰らぬ。慈悲観音の情け、受けたい」
片手が、肩をおさえた。
「なりませぬ……」
「何がならぬ？　おれの男は、もはや猛っておるわ」
荒々しく、衣を脱がしている。話は早い。
現代人のセンシビリティは無い。男は女をもとめ、女もまた男をもとめて楽しむ。生きていることの実感は、性の歓喜にこそあることを——殊に乱世の兵燹は、教えている。
ぐいと三衣を剝ぐと、うで卵を削いたようなつるりと滑らかな肌が、灯かげに浮き上る。
なまなましい白さ。
若い女の体臭が、甘酸っぱく、男を誘う。
だが、尼は、喘いだ。
「ひ、火が違いますっ」
その言葉は、しかし予期以上の美しい肌に眩惑された男の耳には聞えなかったらしい。
三衣の下には、翠羽のような、肌の透けて見える羅衣をまとっただけであった。
そのかたちよく盛り上った胸乳も、くびれた胴から、ゆたかにふくらんだ腰、男の情慾に応えるすべを知っている太腿の肉付きも、すべてが、期待におののいていた。
だが、手は抗った。兵庫介の逞しい胸を、肩を、突き放そうとして懸命になっている。
男の息吹きをさけて、顔を振っている。苦しげな表情。きゅっと眉根に皺をよせて、固く眼を閉じ、拒んでいるさまは、兵庫介そのものを嫌っているというより、自分の女の性と戦っているようであった。
「拒むまい」
と、兵庫介は、女の唇をもとめて頬ずりしながら、
「おれは、ひとたび目をつけた女は、必ず思いをとげる男だ」
羅衣がむけた。ぴりっとどこやら裂ける音がした。
が、男の荒々しい手は止まぬ。女はたちまち全裸にされてしまった。腰のものも、仮借なく剝ぎとられた。
一穂の灯のもとに、雪の肌が神々しいばかりにあらわれた。
兵庫介が、白絹の尼僧頭巾を剝ぎとろうとしなかったのは、女を扱い馴れた手順である。
まず、秘所をあらわにする。いかなる女でも、気の強い者でも、恥部を男の眼に曝したとき、その意地も、膂力も、そして、時には百人力と称われる処女の膝の力も、春陽に照らされた雪のように、もろくヒラクのである。
頭は尼僧包みしたままで、からだは裸身——

異なすがたにしたことによって、さらに兵庫介の情慾は煽られた。

女の肌も燃えていた。

「いとしいぞ」

吐く息も熱く、唇に唇をかぶせ、強く吸った。

あれほど拒んだ女が、意外に容易に、舌を与えたのが、不審といえばいえる。

そのときに、用心するべきであったかもしれぬ。が、そのことは、女にかけては自信のある男の自尊心を満足させるものだった。いやたとえ自信のない男でも、裸身にしたという安心感が、そして、羞恥のヴェールをかなぐり捨てた女の赤裸々な情感には、自惚れざるを得まい。

尼僧の舌は、それまでの持戒のきびしさの反動であるかのように、たちまち、男の情熱にこたえた。

甘い唾液と、うねりの舌と、そして、柔らかい弾力に富んだ受け唇は、痺れるような快感のなかで、女のいのちの部分を連想させずにはいなかった。

舌と唇はねっとりとした感触で巧妙に動き男のいのちを羽花桃仙の境地に吹きあげずにはいない妖しい技巧を、見せたのである。

兵庫介の舌は、とらえられ、弄ばれ、歓喜の呻きを洩らしている。

嘗つて知らなかった女の唇の動き。

いつの間にか主導権は女の手に移っている。兵庫介が眼を閉じたとき、女の手は、素早くのびて、香炉の中に突っこまれたのを知らぬ。

もしも、この場の妖艶な情景を目撃する者があったら、女の奇怪な行為に首をかしげたにちがいない。

女は、巧みに、舌唇をうごかしながら、香炉の灰をつまんだ二指をおのれの乳首に——

はらりと灰が乳首を蔽った。

「ああ……」

女は呻いた。

そして、意外に強い力で、兵庫介の頭を抱えるようにして、乳房へずりさげた。否、おのれの燃えたからだを、感に堪えぬ如く打ち顫わせながら、ずり上ったのである。

兵庫介が、濡れた唇を乳首にあてたのは、この場の成り行きとして、きわめて自然であった。

そして、いやが上にも燃え上らせられた女体は、しとどに濡れて、男を容れるはずだったのである。

事実、兵庫介の唇は、乳首を含み、右手は、汗ばんだ春草の丘を這って、女のいずみに触れていた。指は、濡れた。

豊潤な若さの象徴のように、しとどであった。兵庫介の逞しいいのちを待ち焦がれているかのように。

だが——

かれの記憶は、そこで終っている。

乳首を含んで、吸った口中に、ある芳香を伴った苦みがひろがったと思うと、すーっと気が遠くなって——

兵庫介が正気に還ったのは夜明けであった。

ある山の中腹に横たわっていた。眼下の流れに旭光が光っているのが、一瞬、極楽に来ているのかと疑わせた。

その流れが、椹野川の支流鰐石川であり、そのかなたにひろがった家並みこそは、山口の都だと気がついたのは、大分経ってからである。割れるように頭が痛んだ。

「やあ、あそこにござるわ」

「やれやれ、生きてござったか」

家来たちが、急斜面を駈けおりてくるのが見えた。

六

異常な一夜の出来事は、悪夢としか思えない。誰に話しても信じまい。

(——あの女……妖怪変化とも思えぬ)

あの目、あの声、唇の動き、熱い血汐のかけめぐる肌の生き生きとした感触。ただの柔らかさではない。しこしこと、手に応える弾力も、男にとっては最上のものであった。

大魚を釣りおとした悔み、憾みが、

(もう一度、探し出さねば)

と、兵庫介を駈りたてたのである。

この周防山口の都は、中国すじ七ケ国に勢力を張る二位ノ殿大内義隆の膝下で、尾和備後守は、十人衆に数えられる重臣の一人だ。

兵庫介はその舎弟。部屋住みだから時々のお召しがある以外は、自由の身だ。閑はある。

「誰にも話すまいと思うたが、いかにも無念だでのう」

と、一人にだけ、打ち明けた。幼な馴染の三輪右京だ。

「信じまいな」

「信じられぬて」

右京は、からからと笑って、

「おぬしだから、信じられぬ」

「こやつ、兵庫介を嘘吐きだと申すか」

「いんにゃ、おぬしほどの男が、そこまで女を攻めながら、やり損うということがあるか」

「それがあったのだ。あの尼御前は、いったい……」

「狐狸のたぐいかの」

「かもしれぬ。が、のう、裸にむいたのだ。尻尾はなかったぞ」

「尻をさぐってか」

「うむ……つるりとして、得もいわれぬ丸みよ。やちはしっとりとしてのう……あんな狐などあるものか」

「ふうん、老ぼれ尼の遁世なら無い話ではないが、申すほどに美い女ぶりの尼御前が独り庵を結んでの。尼はまだこころみたことがないが、女の髪の一毛だにないのも、またおもしろいと聞く。どうだ、青い頭を抱いたときは？」

「青い頭か……はて、それは触れざった。頭巾をしたままでな、首からしたを裸にしたゆえ」

「やれやれ、奇妙な恰好だな……したが、夢にしては、何やら生臭い」

「であろう、夢ではない。おれは必ず捜しだすぞ」

「わしも手伝おう、幸い非番じゃ」

夕方から二人は、昨夜の道をたどることにした。

時刻も同じころあいにしたのは、陽の加減で山

や渓は様子が違って見えるからである。頭痛は治っていた。

家来は連れなかった。話しても信じまいし、口さがない下郎に嗤いものにされたくなかった。

夢とは思えないことが、もう一つある。

家来たちがかれを探し出したのも、偶然ではない。

谷間で一人の妙な男が、教えてくれたという。武士でも百姓でもない。旅商人でもない。山賤のような風体だったという。

ともあれ、あの女は逃さぬ。

一昨中山谷を駈け廻って探したが、あの谷には出なかった。

鹿を追う者山を見ず、というが、その諺通り、方角も山の高低も考えずに追ったのだ。

記憶を呼び醒まそうと思ったが、どうしても思いだせぬ。山は深く入れば入るほど、見も知らぬところへ出た。あの谷も、あの奇妙な小屋も、そして、あの蓬庵も、あの尼僧も——

兵庫介の前には、あらわれなかったのである。

そして朝。

乳色の霧が渦巻くこの河原に、笛の音を聞いたのである。

傀儡囃子（くぐつ）

一

火は風を呼んだ。風は火に応えた。囂々（ごう）と唸り、飄々と吼える火魔は、生きもののように河原で荒れ狂っている。

哀れな犠牲は、その炎の輪のなかで、

「あっ、あっ、あっ、……」

苦しげに身をのけぞらせて、炎をさけて、狂いまわっている。

いかにもがいても、両手は頭上から縛られている。熱気は足もとから襲ってくる。粗朶を焼く炎の先は火ノ粉を散らして蛇の舌のように、跳び上り、燃えつこうとする。

ゆたかな黒髪は、悶えて狂ったように顔を振る

ごとに、おどろに舞い、火ノ粉を拒んだ。が、ちりちり、毛先は焼けはじめている。焦げついては消え、ちりちりと巻き上る。

（笛を吹く佳人……）

と、二人が思ったのは、間違いであったがその火焔りの女こそ、かれらの想像に答えるものであった。

とはいえ——

佳人、と呼ぶには異議があるかもしれぬ。

風にひるがえり、じっとりと汗ばんで吸いついた羅衣の下には、みごとな肉体がもがいている。

深窓とか、みやこぶりとか、優美などとはおよそ正反対の、野卑な、発剌たる肉体だった。

狂いまわる四肢の肉づきといい、その健康さといい、青白い上臈女房たちの風にも耐えなげな、美しさとは全く異質のものであった。

緋のほそ帯一つの、羅衣から洩れるゆたかな胸乳、太腿のまるみも、はっと息詰まるほどの凄艶さだった。

漸く我にかえって、

「し、死ぬぞ」

と、右京は言った。

馬をあおろうとして、

「兵庫、あの女……あの女か？」

「む……」

苦悶の表情は、先夜の歓喜とはちがっていたが、しかし、同人にはちがいなかった。

「髪が……む、頭巾をかぶっていたからな、尼ではなかったのか」

「みごとだ」

右京の言葉は、その女体への率直な感動だった。

「救わねば」

兵庫介は、栗毛に一鞭くれた。

疾風のように、火刑に駈せよったのである。

「卒爾すな」

叫びつつ、右京もこれにつづいた。右手が太刀を抜き放ったのは、この場の事態が、どうせおだやかには済まないと見きわめつけたからだ。

二頭の騎馬が、突然、霧のなかからあらわれた

ので、火刑を見まもっていた者たちは騒然と腰をあげた。

笛を吹いている男のほかに、二三十人の男女が、とりまいていたのである。

子供もいた。老人もいた。いずれも、小さな刀を差し、山賤ともつかぬ異風体であった。

それらの面前に、栗毛が泡を噛んで駈けよる——

「やめろ！　火焔りなど」

河原石を蹄で蹴散らしながら、ぱっと火中に飛び入る。粗朶火がぱっと舞い上る。

抜き討ちに女の手頸を吊した縄を切り放し、

「乗れ！」

と、促した。

右京が抜き放った大太刀をふりかぶって、

「退け退け、猪ノ子の丸焼きでもするつもりか、たわけども」

「やあ、汝りゃ、何するぞい」

男たちは手に手に刃を閃めかした。

あまりにも突然だったために、狼狽が統率を乱した。

女は、いましめを解き放されたことが、まるで信じられないかのように呆然としている。

地獄火のなかで、突然、桎梏から解放されたことが、まだ、はっきりとは認識できないようだった。

「ええい、早くせぬか」

大刀を口に咥えると、女のからだを横抱きにする。

栗毛は走りだしている。

火の円陣を突っ切り、河原を一気に駈けのぼって、だらだら坂を山へ——

「あ、やるまいぞ」

刀を持った者はもとより、女子供も、わあと喊声をあげて追いすがってきた。

剽悍な若者が、

「どこへ失せる」

前壺へ飛びついてきた。

「退け！」

蹴放した。

馬の面前に大手をひろげたやつは蹄にかけ、まっしぐらに走る。

その背後から、河原石がびゅんびゅん音をたてて追ってきた。二つ三つ、肩や腕に当った。

馬にも当ったらしい。はげしく嘶いて、二度棒立ちになった。すべり落ちなかったのは兵庫介の手綱さばきの巧みさである。

背後で、絶叫がつんざき、怒号、罵声、悲鳴が渦を巻いたのも、もう振りかえろうとはしない。

しゃにむに、栗毛の馬腹を蹴って、走る、走る。もう石は飛んでこなかった。

連中の中へもろに馬首を突っこんだ右京は、大太刀を自在に打ち振って、当るを幸い、薙ぎ払い、斬り下げ、阿修羅のような働きだ。

人も馬も全身、真っ赤に返り血を浴びて、右に左に馬を走らせながら、兵庫介を見やった。

漆黒のゆたかな髪は草むらを掃き、失神したような女体は、もう抗わなかった。天空をゆくかのような馬上に身をゆだねている。

その騎馬が疎林のなかへ消え去るのを見ると、右京も大太刀を風車のようにふりまわしながら、河原から川中へ。

あとに、河原には点々と血がしたたり、手や足が散乱していた。

二

樹々のみどりが二人を包んでいる。夜に濡れた露草の褥も冷たいとは感じなかった。

ことに火焔地獄から逃れてきた女体には、むしろ冷え冷えと気持がよかった。

黒髪も幸い先端がちぢれたくらいだったし、羅の衣も裾や袖が焦げた程度で済んだのは、兵庫介の飛びこんだのが早かったからである。

もう少し遅ければ、焼け死んでいたろう。

「――名は？」

と、聞いても答えぬ。

「なぜ、火に焙られた？」

その問いにも、黙っている。

唖ではないことは、すでに知っている。

「あの笛を吹いていたのは、おまえたちの長（おさ）と見たが……」

「……」

「奴の名は何というぞ」

「……」

答えぬ。

凝っとその眼は、深いいろを湛えて、蒼穹を見上げている。キラキラと光っているのは涙か。何の涙かわからぬ。

山猫のような、妖気じみたものが、その眼にはある。表情もそれだった。いや、からだ全体の感じもそうだ。

適度に豊満な肉づきながら、敏捷でしなやかで、男心をとらえて放さぬ魅力があった。

煤を拭ってやると、透き通るばかりに蒼白い皮膚があらわれた。

蓬庵の中で悶え、うごめいた裸身である。夜のなかでいぶし銀のような沈んだ光りを放っていた肌は、春陽の中で、乳いろに光った。

なまじ、焼け焦げの羅衣が、中味のゆたかさを、健やかさを、あらわに見せている。うず高く、盛り上った二つの乳房は、こうして身を横たえている場合、たいてい両側に弛んでおちているものだが、皮膚がぴっと強靱に張っているせいか、円錐型の中心は、まっすぐ天を指している。茱実のような乳首が、息づいているのも、男の胸に、先夜の無念を甦らせた。

あのとき、あれほど拒み、なんらかの手をつかったのだが、こんどは、逃げようとしない。

助けられた恩を感じているのか。

しかし、そこにも、一点の疑いがあった。

（よく火傷を負わなかった……）

と、思う。火ノ粉だけでも、多少の傷は残るはずであった。

かれが横抱きにしたとき、その肌はしっとりと濡れていた。

蹄にかけられて、幾つかの小桶が割れとんだが、異なことに、火焙りにしながら水をときどきかけていたのか。小桶からかける様子はなかった。まわりの者が、水を飲んでいた。口を含んで、霧を噴いていたのかもしれぬ。

「――なぜだ？」

火焔りにしながら、焼き殺すつもりはなかったのか。

先夜の不思議な行動といい、益々、奇怪だった。

何も言おうとしないのも、若者の心を焦躁させた。

池の畔りであった。名知れぬ池。一丁四方ほどの碧潭に雲が写っている。白い雲の流れ。外界の一切の騒音を隔絶した山中に、若い男女が二人きりでいるということが、自然に情念を盛り上げてきたようであった。

羅のうすものを、まとっているといっても、ほんの申し訳であった。さらに焦げた上に、疾駆する馬上で、梢の下枝や灌木のとげなどで裂けたりほころびたりして、見るかげもなく破れたところから洩れる肌を、あえて隠そうとせず、手ののびたところにある黄ろい花をつまんでいる。

「――女」

と、言い、兵庫介は、ごろりと、かぶさるように、顔をのぞきこむと、

「――昨夜、いや一昨夜だったな、あのつづきじゃ」

と、抱いた。

唇。

唇は記憶していた。甘い唾液。だが、すぐには燃えぬ。あの舌の動きも、歯のおののきも、唇のぬめりとした性器の感触も、女体が燃える度合に比例していたようである。

情慾は、異性との口吸いや抱擁によってそそられるのか。からだをつらぬく情感に駈られて、唇が唇をもとめるのか。

兵庫介の唇と舌は、しだいに、女の情感を呼び覚ました。男のいのちが兇暴なまでの慾情を感じて荒々しく女体を扱うと、女も、あらあらしく鼻孔で呼吸をして、しがみついてきた。

女体は、青草の褥で生々しく躍動し、うすく静脈の浮いた乳房がぶるぶる揺れた。

舌と唇の動きが、恥部を連想させたのも、奇異としない。女のそこは、全くかれの予想を裏切らなかったのである。充分に、期待にこたえた。

四肢がからみ、しなやかな腕にも、ゆたかな腿も、かれをしめつけて、悶えた。

白い肌膚は、いつか紅らみ、汗を噴き、たまぎるような叫びとともに、女は何度か弓のように身をのけぞらした。

三

官能の疼きに耐えかねて、ほとばしらせる悲鳴は、歓喜に惑乱した女の意識上にはない。

「あっ、あっ」と、間歇的に咽喉の奥で叫んでは、身をのけぞらし、臀部を狂ったようにうねらし、転げまわった。

そのかぎりでは、先夜の、腹に一物ある媚態ではない。

眠っていた官能に点火され、身も世もなく悦楽の淵に身を投じて悔ない、奔放な野性の女――

「お、思うた通りじゃ……」

感きわまって、兵庫介は、恍惚の中で、口走る。

女陰は、舌唇と同じように自在に、かれの灼熱したいのちを、撫でさすり、強く、しめた。合歓の時は長く、その至福の思いは時の経つのを忘れさせた。

里の女にはない情熱だった。

京から来ている上臈女房姫君などにも、もとめられない烈しさ。

女が、口をきいたのは、あと始末をしてからだった。

女は、おのれの口を拭って、兵庫介をきれいにした。きわめて自然な動作だったのである。

「うれしい……」

「そうか、真実、そう思うか」

「あい……」

「ならば、悔んだか、先夜のことを」

女は黙った。

「おれに変りはない。おれの心をわからぬほどの、おぼこではあるまい」

「知っていました」はっきりとそう言ったが語尾は苦しげに濁って、「でも……おまえさまとは」

「なんだ」
「こうなっては、いけないのです」
「なぜだ？　好き合うた男と女が、楽しみをもとめるのが、なぜ悪い」
「掟があります……」
言ってしまってはっとしたようである。
兵庫介は聞き逃さぬ。
「掟とは、なかまの、か？」
「――あい」
「われらと交わってはならぬというのか」
「あい……」
それだけでは、不遜に聞えると思ったのかあわてて、女はつけ加えた。
「特に山口の御家来衆は……」
「こりゃ面妖な。この近在の武士も百姓も、二位ノ殿の家来ならざる者があろうか」
「あたしたちは違う」
ふいに昂然と、女は眼をあげて言う。
「それは、そうかもしれん」
「あたしにはよくわからない。御屋形お傍近く仕える方には……」
合歓してはならぬとする掟とは。
「そのいわれを聞いても答えまい。まあよい。それにしても、何も毒を嚙ますには及ぶまい」
ふっと、女の顔が嗤ったようである。
「のませたのじゃない。嗅いだだけ」
そう言われても、記憶があいまいだ。
「妖しの術をつかう。話に聞く、幻術のようなものだな。まだ、時折、頭が痛むぞ」
幻術を生業とする連中だ。そういわれれば、あの掘立小屋も少々変っていた。
二位ノ殿たる大内義隆の側近を嫌うということは、敵対を意味している。
（はて、こやつら、因幡からの乱波か？）
反射的にあの声が、脳裡を掠めている。
「火が違います」
そう叫んだ。
人類がけものと違った点を、火をつかうことにあるという。その美しい炎も、一たん陋習を好む大衆の中では、見失ってしまう。階級の違いは否

定できない。にしても、そのものを焼き、煮る……。その生活は必需なすべての点で火を異にせねばならぬ。
賤業に携っている者が多い。賤業にもいろいろある。
「そうか、その掟がきびしいのか。だが、先夜は、他に誰も居らなんだ。誰にも気がねせず楽しめたのではないか……」
言いさして、はっと気がついたのである。
「そうか、火焙りもおれのせいか」
「……」
「それではなおさらだ。が……そなたは掟を守った。おれを容れなかった。掟で成敗されることはあるまい」
「でも、おまえさまが、あたしを裸に……」
「ははは、裸にしただけでもいけないか」
「いいえ、見ている者がいたの」
「えい、誰もいない……そなた、忍びノ者の眼を阻かってのことか」

四

先夜の、中途で熄めねばならなかった情火の反動のように、女体は、燃え狂った。白雲を浮べた蒼穹と碧潭と翠緑の山中は、ある意味では六尺四方の密室にひとしい。若いからだが息もたえだえなまでに、いのちをせめぎあい、恍惚をもとめ、陶酔におのれを浸すのを阻むものは何もなかった。
自由に飛びまわる小鳥の囀りも、男女の交歓を祝福しているようであった。
そのおおらかな情景も、天空を横切る一颯の鳥影が、二人に翳りをおとすように黒い不安を孕んでいたのである。
歓尽きて――
女体に残る余炎が潮の退くように冷めてくると、しだいに麻酔が消え、痛みが甦るにも似て、その黒い影が女をとらえた。
「ねえ、おまえさま」
と、烈しい眼でしがみついた。

「うむ。兵庫と呼べ。尾和兵庫介だ」
「兵庫さまか。あたしをどこかへ連れていって！」
「なに、急にどうしたことだ」
「何処へでもいい、あたしはもう、なかまのところへ帰れない」
真摯な眼の光りであった。牝豹の挑むような熾烈な青い炎を感じた。
「おれとこうなったことか」
「――なかまは……おまえさま方とは平に口もきけない身分だから」
「かまわぬ。そなたは焼き殺されるところだったのではないか」
「でも……」
「恐がることはない。恨みに思うならば、手を貸そうぞ」
「いいえ、あのお処刑は……懲しめなの。だから、死なない」
火焔りしながら、霧吹いていたのはそのためか。
「懲しめにしても、おだやかではないわ。第一、先夜はおれと何もなかった。罰を受けることはない」
「でも、掟は……なかまのほかの者と口をきいてはいけないと」
かれが想像したよりも、事情は複雑なようであった。
「小面倒ななかまだな」
「恐い……こうなったことがわかったら、殺されます」
「よし、来い」
決断は早い。
ひたすらに、兵庫介を頼りにする女に、愛しさを感じた。
育ちのよい女たちにはない執着である。その異常なまでの感情は、野性的な情熱に通じる。
兵庫介はひらりと栗毛に飛び乗る。手を貸そうとする前に、女も背にまたがる。鞍を必要としないようであった。
「走るぞ」
栗毛は嘶いた。はげしく尻をはねて、空を飛んだ。

河原から、盲滅法に駈け上って来た山である。地ノ理を弁じたのは、西方の眺望を得てからだ。
若い体躯は、いのちを燃焼したかに見えるほどのまぐわいのあとでも、疲れを知らなかった。そうそうと山谷を疾駆して、山口の城下へ入ってきたのは、小半刻ほどの後。
山口には控え屋敷がある。知行地の阿知須から出仕したときなどのためだ。
東山の通りから烏帽子屋町すじへ入ったとき、ふっと、馬の歩みが早くなった。
別段の気配は感じなかったのである。
いささか、おかしいと思い当ったとすれば、往来の者が、誰も不思議な顔をしなかったことだ。
「ここだ」
屋敷の前に来て、馬をおりようと振りかえったとき、
「あっ……」
背後に、女の姿はなかった。
乗っているとばかり思っていたのである。まるで、かき消したように、昇天したように、女は消えていた。
「落ちたか？」
ふっと、軽くなったときに落ちたのか？
だが、落ちたのなら、声をあげるはずだ。悲鳴もない。
（逃げた？……）
とは考えられなかった。考えたくなかった。
あのときの情感と、そして、かれを頼らねばならなくなった、その環境が、自ら逃げだすはずはない。

五

「どうした？女は」
右京は酒の椀から顔をあげた。
もうかなり酔っている。
「今朝からずっと、飲みつづけで」
と、下郎が言った。非難をこめている。
「伴蔵どのはじめ、みんなしてお捜しに参りましたが、右京さまは、なんのすぐにお戻りあろうわ

さと、坐りこんで……」
「ははは、どうだ、おれが申した通りではないか。どこにもけがはあるまいが。チクト女の臭いがこびりついているくらいじゃ」
くんくん犬のように鼻を鳴らした。
「おかしなやつだ」
と、兵庫介もどっかり坐って、椀をつかんだ。
「飲むか」
「のどがかわいた」
「遠慮なく、飲め」
と、提子をとりあげる。
「こやつがこやつが、おれが家の酒ではないか」
「ははは、美味い酒だでな。おぬしに飲ませるのが惜しいほどだ。やれ、きれたわ、おい酒がないぞ、主どのが飲みたいそうじゃ、ははは」
酒がくると、注いでやってから、自分のも並々とあふれさせる。
「まず、祝盃」
「なんの祝いだ」
「女よ。あの肌じゃ、しこしこして、こたえられなんだであろうな、うふふ」
「莫迦ばかり申しておる」
「誤聞化すな。ソラ、赧くなった……いや、どうした？　蒼いぞ、さっきからそう思っていたのだが、何を沈んでいる」
「いや、別段……」
「首尾がようなかったのか」
「いや、抱いた」
「であろう。それで女は？　あの塩梅では、おぬしに頼ってくるはずだがのう」
それに応えず、兵庫介はぐいと酒椀を干して、
「――別れた」
「ウム……惜しかったな」
「……」
「一度、味を見ただけで別れるとはな。勿体ない。おれがあとは引き受けたのにのう。ははははは、おれも奴らと戦ったのじゃからな、それくらいは……」
「そうだ。おれが代って礼を言う」
「なんじゃア水くさい」

豪快に笑いとばすと右京は、
「おぬしだけなら助けるものか、あの女の肌は助ける値打ちがあると見たゆえの。あんな惚れ惚れするような肉づきは、去年の秋に抱いた唐人女以来はじめてじゃ」
「唐人女」
「そうじゃ、よい女じゃった。そういえば、あの連中も、なんじゃら、どこか違うたのう。唐人とも違うが……」
「うむ、妙な連中だ。きびしい掟があるそうな。掟ゆえに火焙りに……」
そのとき、小太鼓の音が聞えてきた。
トントコ、トントン、トントコ……太鼓だけではない。合の手に坎々たる鼓の音。それに笛の声がつづいて、しだいに近づいてくる。
「――なんだ、あれは」
「もの売りであろ。蓮の実菓子を売り歩いている唐人の笛に似ているな」
「女はいるかな」
「見て来よう」
気軽に右京は腰をあげた。
兵庫介の様子に、何やら気がかりなものを感じたのだ。女の笛師でもいれば呼びこもうと思った。
裏門から出て見ると、築地塀ぎわに、三四人の異な風体の男たちが、あるいは腰をおろし、あるいは突っ立って、音楽を奏でている。
笛、小太鼓、鼓、それに何やら見馴れぬ弦楽器である。琵琶の柄を長くし、腹板を小さくしたものだ。
派手小袖に軽衫で小さな刀を差し、笠の下に斑ら頭巾でおもてを隠している。
（傀儡だな……）
女が一人。斑ら頭巾は同じだが、笠はなく、寛濶な広袖は花文様を摺箔したもので、チラチラと陽を反射しているのは、金糸が用いてあるからだ。
傀儡女らしい、淫靡な踊りだった。
片手に扇、片手に紗の布をひらひらさせながら、大きく股をひらき、足が宙を蹴って、くるくるま

わる。
頭巾から洩れている双眸が、妖しくきらめいて、客を誘う。
小さく紅い玉虫の唇が半びらきになっているのも煽情的だった。
〽いとしの若衆の
小鼓は……
澄んだ声で唄いだした。
傀儡(くぐつ)たちは笛の者以外は、一せいに声を揃えて、ホッヒャトウロ、ホッヒャトウロ……と、合ノ手を入れる。
弥次馬が集まっている。
小供が多い。この山口の都では、音曲は盛んだった。領主の義隆が多くの公郷上臈姫君を集めて管弦舞楽に明け暮れている。
非常識なばかりに、遊興に没入して政治(まつりごと)を省ないから、下々もまたこれに習うのたとえ通り、武士も町人も百姓も、遊び好きになっている。
したがって、他国や田舎ではもの珍しい異風とあやしの人形つかいなどで客を呼ぶ傀儡女の、舞いと音楽もきわめて、普通の興味しかひかないらしい。
〽いとし若衆の
小鼓は
締めつゆるめつ
ゆるめつ締めつ
ちちたほつほ
なるかならぬか……
ちらっと、女は右京を見た。
ぞっとするほど媚のあふれた眼だった。
地を蹴るように、脚をあげて一回廻するとき、腿の奥までのぞけた。女身は、そこに何もつけてはいない。かッと築地塀を灼いた午後の陽が、余照をあてて、ゆたかになめらかな肉の盈ちた腿のつけねの、仄黒い苗(なえ)を見せた。

六

右京は生唾を嚥(の)みこんだ。あまりにも強烈な淫舞であった。火焙りの女のみごとな裸身が、まだ目に残っているのだ。兵庫介との山中での情交を

描いて、自棄酒に近い飲み方をしていたのだし、若い体躯には、かっかっと血が燃えて、薪にたとえれば、燧石(ひうち)の火花だけで燃えつきそうになっている。
傀儡女は踊りながらちらちら、右京に秋波を送ってくる。
歌詞もよく聞いていると淫らで猥褻な文言だ。小鼓にたとえて、男色の行為を諷している。
男色は当時、変態ではない。乱世の常態だが、ここに、この山口の都では、それがはげしい。
先般、フランシスコ・ザビエルが来たとき目のあたり男色(ヅドミ)を見て、神の御心にもとる行為だとはげしく非難したことは西教史に詳しい。最初の山口訪問の際、義隆を怒らしてしまったが、それは多く、このことに由縁している。
美しい傀儡女が、男色を諷して舞うのだ。そのしなやかな手も指も、動きの一つ一つに淫らなさまを表現している。
歌につづいて、男たちは、おどけた声をあげる。
ホッヒャリホッヒャリ　ホッパイヒヤロノヒイ……
女は、さらに舞いながら、波に乗ったように、それとなく右京に近づいてきた。
〽これサ若衆の
その肌は
触れりゃ滑りそ
滑りゃ触れなむ
ちちたほっほ
なるかならぬか……
女の眼が、右京をとらえた。じーんと胸に滲みいるようであった。この戦さ好きの豪放な男が、妖艶な女の眼にとらえられるとは、本人も意識にない。
われ知らず、足がふわふわと雲を踏むように動いている。
にこりと女の眼が笑った。
右京も、にやりとした。自分では気がつかない。ひらりと手をかえし、肘をあげ、女にあわせて舞いはじめている。
小太鼓を打っていた男が、

〈ソレ、罹ったわな……〉

と、面垂虫のなかで、呟やくように言った。傴僂頭巾とも呼ばれる笠の両端から下げるのと、両耳のうしろで端を結び、半面を蔽うもの。正しくは面頬の一種だ。

声は、布にくぐもって、明瞭に聞きとれぬ。なかまだけにはわかるのか。

〈月乃のお得意じゃ、傴僂忍法《雲ノ舞》きれいに罹ったわえ〉

〈うひひ、ソノ目ニ魂ヲ吸ワレナバ雲ココロ無クシテ帷ヲ出ズルニ似タリ……とな、お娑に聞いたことがあるわえ〉

〈月乃はお娑の気に入りじゃったでナ……〉

小太鼓を緩急よろしく拍子打ちながらの対話であった。

右京の耳には、もとより聞えぬ。聞えたとしても、意味はわからぬ。ただの声でしかない。

その傴僂女——月乃は、舞いながら、右京の手をとり、妖しく笑いかけて、胸をうねらせ、腰を振る。

その一つ一つの所作は、下卑て淫猥なものであったが、女の容姿がきわだって美しいせいか、卑猥さを感じるよりも、楽しく、目を奪われて、見物たちはうっとりと陶酔してしまう。

小太鼓のしらべが急調子になると、女はあざやかに身を寄せて、抱きついた。朱唇が一瞬右京の唇に触れ、チロリと舌がそこを濡らして掠めた。

だけではない。

「今宵、戌ノ刻、普門寺で」

囁いたではないか。

はっとした、右京の胸を、ゆたかな胸がつと押した。

女体の烙印か。右京が迷夢からさめたように瞠目したまえを、女は、ついと離れて、なかまのところへもどった。

ひときわ高く鼓が打たれ、弦のひびきが空に立ちのぼるようにうすれて消えた。

傴僂女の踊りは終っていた。

「さあサ、皆の衆、ズンと張りこんで下されや」

鼓の男が、笠を裏がえして、見物の前をまわった。

「これこれ、さんざ目の法楽をして、タダ見は狡いぞな。景気よう投げて下されや、銭が少ないと、もう二度どこのあたりには来ませぬぞ」

おどけ声に、見物はげらげら笑って巾着の紐をゆるめる。

呆然としていた右京も、あわてて、懐中をさぐろうとしたが、ふわりと女は近寄ってくると、

「おまえさまはいいの」

と、言った。

「待っていますえ」

にこりと笑って、もう帰りはじめている。

もう右京は完全に魂を抜かれて、ぬけ殻のようになっていた。一行が笛の者を殿りに、立ち去ってゆくのを見送っていると、ぽんと肩を叩かれた。

「どうした、右京。呆けた面じゃぞ」

「あ、兵庫か」

「なんだ。いつまでもどって来ぬと思うたが、傴僂ではないか。あんな舞女にうつつになっていたのか」

「ば、ばかな、そんなことはない」

右京はあわてて、

「このおれが。ははは、ただ、妙な踊りゆえ、ちょっとな。酒だ酒だ」

その琥珀いろのとろりとした酒の面に、傴僂女がしなやかに身をくねらして見えた。

くノ一香

一

馬上から消えた女。

兵庫介の胸に不可解な謎を残した女は、そのころ、城西半里ほどの糸米沼に居た。

糸米沼は兄弟山、鴻ノ峯のはざまを流れる糸米川に近く、一面に葦の生い茂った古沼である。洪水のときには、川と沼はつながってしまうが、日ごろは、沼の周辺はじめじめとした低湿地帯で、冬になると寒鴨の群れで埋まるほどになる。

手づかみで採れるほどだから、子供など、つい深入りして沼に落ちる。水底が泥になっていて、沈んだら助からない。このあたりで、子供が居なくなると、

「死人沼だ」

と、目安をつける。

一辺沈んでしまうと、ほとんど浮かび上らぬ。厳寒には水面が凍結し、雪を乗せるときも、危ない。道と沼との区別がつかなくなるからだ。薄氷が割れて沈むとなおわからない。

一夜で水面はもと通りに凍りつく。

春が来て、氷が解け水温むころから梅雨にかけて大雨があると、そんな死体があがってくることがある。人骨が流れだして来たりする。

死人沼と呼んで村人は近づかない。

気のせいか、このあたり死臭が漂っているようであった。古沼特有の澱んだ臭気もある。行倒れ人などを捨てる場所と心得ている者すらあった。

この臭気のよどむ古沼の周辺が、凄まじいばかりの蒼い光りに彩られて浮き上った。十三夜月であった。

町なかでは宵ノ口でも、郊外になると、もうぷっつりと人通りは絶える。

ケケケツピーピー、と、夜を裂いて声がする。子鴨が飛んでくるのだ。まるで、月に恋がれるように、夜空に羽音がした。

「――鴨は夜が明けると増えておる」

こう言ったのは嗄れた声である。

沼の土手に生い茂った藜が揺れた。

「忍びノ者のようにとらえどころがないとよ。ことに、宿所さだめぬ傀儡どもは、と」

忍びやかな笑い声になった。自嘲を含んでいる。風が出て、その声を吹き消した。

藜の斜面に幾つかの影が動いている。

「傀儡々々と蔑すみおって……われらの恐ろしさを知らぬやつばらに、ずんと思い知らしてくれねばならぬ」

「ねいねい」

「それにしても、裏切り者の成敗が先じゃ。花乃の血で刃を染めるがよい」

花乃。

それが、兵庫介との一件の女の名前らしい。

老人の傍の男が、ぐいと、縄をたぐった。縄の先に、人間がくっついている。

両手を頭上で縛られた女――蒼月のもとに、長々と仰臥している。その下半身は水の中にある。

白い肌が蒼く光った。

男が縄をたぐったのである。ずるずると、女体は水から出てくる。縄をゆるめるとまたするりとすべって水中へ――

昼間だったら、古沼の汚ない灰色に濁ったさまが見えるのだが、蒼月のもとでは、ただとろりと凪いだ水面でしかない。

花乃の裸身は、さながら十三夜の月に誘われて出た人魚のようにも見える。

(――もう駄目、こんどこそ……)

花乃は月を仰いで、哀しげに訴えている。

(ああ、神さま、仏さま、あたしは悪いこともしていないのに、なかまの手で殺されなければいけないのかしら……)

傀儡は、仏教から疎外された者である。

神はある。神農様と百太夫である。このことについては以後に述べる。その神の力も他へ対してのみ効果があるのであって、なかまのしおきはすなわち、傀儡の神への供事にほかならぬ。

もう、兵庫介は助けには来てくれない。

兵庫介の剣では、及びつかぬことを、花乃はよく知っていたのである。

ただの傀儡たちだけなら、兵庫介の勇猛でなんとか斬りぬけられる。

が――

(忍者だから……傀儡ノ忍法には、誰もかなわない……)

二

兵庫介が気がつかなかったのも道理。

花乃を〝消した〟のは、傀儡忍法にほかならなかったのである。

烏帽子屋町に折れる角に亭々たる銀杏の樹が道を蔽っている。兵庫介の馬がその下を通りかかっ

たさい、ひらりと銀杏の葉が一枚おちてきた。
まだ落葉には早い。
花乃が、ふり仰いだ刹那——
その葉が、ぴたりと口に貼りついたのである。
あっ、と叫びも洩れぬ。息が詰ったかと思われた。
次の瞬間、彼女のからだは宙にあった。頭上から下った縄が、まるで蛇のように、彼女に絡んだのである。そのまま、すーっと樹上に引き上げられてしまった。
もしも、兵庫介が気配を感じて、すぐに振りむいたとしても、花乃の姿は、見えなかったろう。その傀儡忍法《雲井ノ梯》は、瞬間に、適確に行われている。
この忍法達者が、あの姫ノ河原に居たならば、確かに、花乃の救出はスムーズにはゆかなかったろう。
あの場に忍者はいなかった。
傀儡の男女すべてが忍者ではない。後に述べるが、この一団の中で忍者と呼べるものは十余人。いささか心得がある者を含めても三十人を出ない。
かれらは、ある目的のために、城下へ潜入していたのである。
そして、その目的が、かれら漂泊の民をこの山口近辺へ運んできた。
花乃の行為は、この、
「傀儡一党」
の目的を阻むものと睨まれたのである。
放浪の一団を、統制するものは鉄の規律でしかない。傀儡女が、肌を切り売りするのは、中世以来の常道である。それはあくまでも、売る——鬻ぐ。幾ばくかの銭との引き換えに於てなされる。傀儡女の商売だ。
取引であれば許される。
花乃が、兵庫介に肌を売ろうとしなかったことが、すでに、傀儡の掟に背反していたのだ。
あの忍法によって、兵庫介との交合を自らさけたのは、花乃の精一杯の好意といえた。
蛇のように執こいなかまを、頭領の性格を知る

が故に。
そして、山口潜入の目的を忘れたわけではなかったのである。
だが、女の智慧は、所詮、血も涙もない頭領と十人衆の容認するところとならず、火焙りを宣告されたのだ。
せっかく助かって——人並みの倖せが訪れると思ったが、
(あたしは、なかまから逃れることはできない……)
と、諦らめるしかなかった。
頭領は「土蜘蛛」と呼ばれている。それだけだ。姓か名か。渾名か？　由来は知らぬ。この一団を統率する者の責任と栄誉の象徴である名にはちがいない。
姓ではない。なぜなら、傀儡は賤民であり姓はなかった。
「頭領」
もぞもぞと、別の男が草をかきわけてきた。
「もう一人の男は月乃が引き受けまいた。戌ノ刻に埒あけまする」
「よかろう。そやつ三輪右京というたな。で、兵庫とやらのほうは、誰がゆく？　夢乃か雪乃か」
「夢乃が如何かと思いましたが……」と、古沼の女身を見やって、「いっそ、花乃にやらしたら如何でござりましょうか」
「花乃に！　たわけたことを」
「御懸念(ごけねん)……」
「あたりまえじゃ。木蒐曳(つくひき)が木蒐(つく)に引かれると申す。天竺の諺にもあるわ、蜜人(ミイラ)とりが蜜人になる、とな。花乃は、あの兵庫めに肌を許している。男も女に惚れている。二人を合わすれば、ふたたび、われらのもとには」
「このままでも、掟によって処刑に果てさせては、惜しゅうござる」
「——やむを得ぬ」
憮然として頭領土蜘蛛は、
「われらの目的の癌になるよりは、よい」
「されば、夢乃にくノ一変形なさしめたとしても、成功は半々」

「ただの暴れ者の兵法つかいではないか、兵庫めは。われらの忍法あれば、恐るるに足りぬ」
「万一、を慮りまする。花乃の口から、忍法のことが洩れておりますれば」
「じゃとしても」
「彼奴は一兵法つかいなれども、家中の忍者にでも頼みおるやも」
「……」
「花乃も充分、悔いておりましょう、いま一度の役をさせなば、その心底もわかりまするて。さらには、もしやり損じたとしても、処刑の手間がはぶけるだけのこと」
「蛇に蛙をくれてやるようなものではないか」
「甲羅を着せればいかがなもので」
「なに？」
「女を、女でなくするのでござる」

三

頭領土蜘蛛はまじまじとその男を見た。かれの片腕で、夜叉と呼ばれる男だった。

「――女でなくする、か」
と、うなずいた。
意味はわかったらしい。
「はい。さすれば、花乃は、いやでも戻ってまいりまする」
「――なるほど、な……よかろう。やれ」
土蜘蛛は納得した。いのちを助ける。が、これは、女にとって、死以上に残酷な刑罰だったのである。
若者が火を熾した。
その火でクナイが焼かれるあいだ、花乃のからだは水の中から引き上げられた。
初秋とはいえ、夜の沼は凍るように冷たい。下半身は冷えきり、触れると、手まで凍るようであった。
「花乃」
と、耳に口をつけるようにして、夜叉は言った。
「――処刑をせねばならぬ……」
「助けて……」女の白い唇があえいだ、「死にたくない……」
「掟を破ったことを、悔いているか」
「あい……」
「ならば、いのちは助けてくれる」
「う、うれしい……」
「条件がある。そち、兵庫介を殺れ」
「え?!」
愕然とした。ぽっと血の気が甦ったおもてが、また凍りついたように蒼ざめた。
「兵庫を殺らねば、許されぬ」
「……」
「いやなら、死だ」
「やる。やるから助けて」
「よし、誓うか」
「あい……」
「よかろう。だが、そのままでは許されぬこと、傀儡女たるそちも知っていような」
夜叉は、親線を点じ、焚火を見、それから花乃を見た。その眼は、冷酷な強い光りを宿していた。
「よいな……そちのやちをフサグ」
「え?! そんなっ」
「せねばならぬ。ひとたび裏切った者を、フサギもせで信ぜよというても通らぬ」
恐怖が美貌を歪ませた。
花乃が否むも何もない。すでに準備ははじめられている。
そのことを行うには、下半身の感覚がないうちのほうが慈悲であった。
クナイが着赤に灼けている。
傀儡女の長老、モグサのお婆と命ばれる老婆が呼ばれてきた。
「縫うのかえ」
「縫え」
土蜘蛛の声には、一沫の感傷もない。
お婆は、花乃を見、花乃の下半身を見、それから、その皺々の手を恥部にさしのべた。
「ああ……」
女体がよじれた。不安と恐怖で、鳥肌が立っている。

お婆の皺深い顔は、どんなことを思っているのか、表情も変らない。

その手は股間をまさぐり、大陰唇に触れている。淫猥なそれではない。枯れきって死界に在るような老婆なのである。が、指は生き物のように、陰唇を、陰核を味わっている。

味わうという語は適切でないかもしれぬ。が、それは色慾の場合にのみ用いられるものではない。いうなれば皮革の職人が、細工のために味見しているにひとしい。職人たちは舌で味わう者もある、強靱さを見るのだ。

老婆は、指先で丹念にその柔らかさ、厚さを見たあと、耳の上からひょいと針をとりだした。

糸は馬の尾である。

「さあ、フサイでやろうわえ」

「あっ、堪忍して！」

花乃はもがいた。

まわりの目は冷たい。一片の憐愍の情を持たないようであった。

夜叉が顎をしゃくった。若者二人。野駒というのと、すくべと呼ばれる男。すくべとは藁の袴の意である。

足を二人がおさえた。

「歪げろやい」

老婆は焦立ったように唾を飛ばした。〝職人〟が制作意慾をそそがれたときの不快な様子であった。

二人が足くびを握って大きくひらいて膝を立てる。モグサのお婆はその前にうずくまった。

四

針に心はない。柔らかい肉ひだを左右と縫いあわせてゆく老婆の手つきは、さながら神技というべきだった。

ほとんど痛みはなかった。

傀儡女は痛みや苦しみに耐え得る。そのゆえではない。老婆の手にかかると、その運針は、雲を縫うように、音もなく痛みもなかった。氷のように冷えきっていたせいもあろう。

膣口は完全に閉されたのではない。

小竹をさした。節抜き二寸、直径四分に充たぬ小竹の巾は、いうまでもなく、僅かに小用を弁じるのみである。

その余はびっしりと縫い合わせた。

みずふきという中年の男が、土器にみみずを盛ってきた。

縫い合わせた個所に、みみずを塗りつけた上に、灼煙のクナイをあてた。

ジュジュッ!! 烈しい音とともに、異様な臭気が夜気を濁して立ちのぼった。

花乃の口から、たまぎるような叫びが奔った。

老婆の耳は、その声を聞かぬ。その鼻は、嗅覚も喪っているようであった。

が、野駒とすくべは思わず顔をそむけている。

みみずの灼ける臭い、陰唇の焦げ溶ける臭いが、もろに顔を搏ったのである。

絶叫は、はたりと熄んだ。

女は悶絶してしまった。

「や！ し、死んだぞ」

すくべが頓狂な声をあげた。

「いひひ、騒ぐではないわえ。気を失うただけじゃ」

「ほんとうか」

「このほうが、仕上げ易いわな」

あるいは、花乃にとっても、倖せであったかもしれない。

彼女の陰唇は、そのキメのこまかく、感度の高い柔ひだを一面のべたりとした皮膚と化してしまったのである。みみずの体液がどういう作用するのか。あるいはハンダ付けの塩酸の役をするものであろう歟。

この異常な手術は、解説すれば、永いが、実は数弾指を出でていない。

モグサのお婆は、蓬髪をうるさげにかきあげて、

「温石を」

と、言った。

それは手術が終ったことを物語っている。

クナイを焼いた火に、蛇紋石がすでにほうりこまれていた。真赤に焼けている。

鉄棒でかき出すと、草むらが青白く炎をあげた。暫く夜気で冷やしながら、繃帯でくるむ。これを、花乃の恥部にあてる。

小竹はそのまえにひきぬいてある。

残忍酷薄な手術は終った。

温石にて、ただれた部分をなずること四半刻。

漸く、花乃が正気にもどったとき、彼女は、女の機能を喪ったおのれのからだの変化を知らねばならなかった。

女忍の唯一の弱点である〝おんな〟を喪った中性の忍者が、ここに誕生したのである。

花乃は、もう涙も出ない。

いまは、役目を仕止げて、フサガれた部分をヒライてもらうしかなかった。

「役目をしとげれば」

と、夜叉も言った。

「傀儡女忍たるの証しとなる。もう一度、おんなに還してやる」

「あい……」

そのようなことが出来るか。

『傀儡協晨洞』なる古文書によると、可能らしい。ヒラクには萱の嫩きを用い、呼気に口伝あると。その後の出産も支障ないとあるが、口伝を必要とするほど難事なれば、失敗もまた尠くなかったと思われる。

だが、追い詰められて生れもつかぬ不具とされた花乃はその一すじにすがるよりほかはない。

（兵庫介を刺す）

傀儡女忍に還る、というより、一人のおんなに還りたかった。

「行くがよい、花よ」

土蜘蛛の言葉に促されて、花乃はふらふらと立ち上る。誰やらに与えられた薬草を嚙みながら。

十三夜の月は、戌ノ刻の近きを示していた。

この時刻、尾和屋敷から出た三輪右京もまた月かげを踏んで歩きだしている。

五

普門寺は鴻ノ峯の山裾にある。北に山を背負い、山々の城下を一眺に俯瞰しているので見晴しはいい。大気の澄んだ秋の夜、十三夜月は皓々として下界を照らしていたが、城下の屋並みは朧ろな底に沈んで、夢のように鎮まりかえっている。

（来ているかな……）

若者のような胸のときめきを感じた。

荒事ではひけをとらぬ武者も、色恋となると、からきし初心だった。

右京のような男にとって、色だの恋だのとの煩悶は笑止の沙汰。女はただ寝転ばせて、猛りの麻須羅夫を慰さめればこと足れりとしていた。あいびきだの、ひそかごとだのと、纏綿たる情緒の駈引は性に合わぬ。

こうした思いははじめてだったのである。

（悪くはない）

傀儡女を買うのははじめてではない。

が、こうした媚笑に合歓してのひそかごとは、嘗つて知らぬ。

傀儡女が、下賤の娼婦たるにも関らず、古くから貴顕の遊興の対象にされたことは、文献にいとまがない。

摂政関白の極位にあった藤原道長も、傀儡女を好んだことがその詩にも見えるし、大江匡房の紀行文は殊に傀儡の生態を伝える貴重な文献で、その奇怪な容色に一段の興味をおぼえたことが行間に読める。

いささか煩に渡るが、傀儡に就いて記しておかねばならない。

その一つは、遠く中近東のジプシーの一種族がシルクロードを流れて支那に至り、さらに朝鮮にわたり、日本へやってきたとするもの。高麗ではこの異邦人を広大族、白丁族と呼んでいた。日本のいわゆる〝隠首〟の対象となった者の多くはこれより出ている。

宗教芸術などの外来文化は多く奈良朝に渡来しているが、傀儡の源流と見てよい。

くぐつの名がはじめて文献に現われたのは万葉集である。巻三の「潮かれの三津の海女のくぐつ持ち、玉藻刈るらんいざ行きて見む」

とある。

この「くぐつ」については、学者の説の別れる

ところで、あるいは、くぐつとは蔓草の編んだ籠とする者と、久具という草を組み綴ったものとする者とある。

どちらも、編み籠のようのものという点では一致している。

そして、海人――漁師、海女の使用したものであることは、万葉の歌詞を読んでわかるが、それが、どうして、人形使いの代名詞に転じたか。

橘守部は、こう考察している。

「――海人の子が獲物を納るる具となしつるにて、即ち久具綴の義なるべし。傀儡は箱の中より様々の偶人を出して俳優をなす。彼の海人の子が魚具、海松、諸の獲物をいるる久具綴の心ばえに相似たり……」

木偶人形をつかうにその久具綴を利用したから、かく名づけられたのか、人形の箱を胸から吊し掛けているのが、久具綴に似ていたから、しだいにそう呼ばれたのか、判然としない。

守部の考察は、傀儡を、傀儡女から発したものとして、次のように続けている。いささか飛躍すぎた論理であるが、

「――歌の題に岸頭傀儡など言ひて駅路の遊女のことなり。これも貴賤となく老若となく郷人旅人何人も嫌わず容れて相交る、彼の海人の久具綴の何物をも納るに基きて此の文字をも久具都とは訓みたるにや……」

これではしかし、遊行の娼婦をその生態ゆえに傀儡女と呼んだというふうにとれる。

何人も嫌わず容れて相交るから、何でも容れる道具で呼ぶ――さしづめ、共同便所とか郵便ポストとかいう類になる。

いささか、歪んだ見方といわねばなるまい。

むしろ、「くぐつ」が人形の意味になった経過から判ずべきであろう。とすると、この移民たちが、久具綴を利用したか、その人形遣いの箱の様式が久具綴に酷似していたか、いずれかより、かく名づけられたと見るほうが真に近い。

西欧のジプシーも女は売色をすることは著聞だが、老幼男女の大家族と放浪する一団が、一部にすぎない女たちの売色行為によって総称とされることはまずない。

これは、周知のように、かれらの芸能の代表的な〝人形遣い〟を指したものに由来すると見てよい。

大江匡房の「傀儡子記」によると、

傀儡子者、無二定居一、無二当家一、穹廬氈帳、逐二水草一以移住、頗類二北狄之俗一、男則皆使弓馬一以二狩猟一為事、或双劍弄二七丸一或舞二木人一、闘二桃梗一、能二生人之態一、殆近二魚竜曼延之戯一、変二沙石一為二金銭一、化二草木一為二鳥獣一、……

傀儡子なる者は、一定の住所を持たず、山林に茅簷（ぼうえん）を構え水辺に竹戸を営んで、北狄にも似て、萍のように漂泊しているもので、男はみな弓馬を用いて狩猟をし、あるいは双劍七丸を弄し、木人を舞わせ、石を銭に又は草木を鳥獣に変えるなどの奇術を使ったというのである。

六

したがって、大陸の放浪民族にして渡海、移動してきた者すべてが、傀儡と呼ばれたわけではない。

欧州のジプシーも、永年の間に中近東の国々の動乱天災戦争など興廃によって、定着民族も混ったろうし、増減常ならず、分裂したり、流離のうちには、また一定の地域に土着した種族もあったであろう。

本朝へ移動してきた者たちも、その例に洩れない。

おのおのの得意とする技芸でもって、生活の糧とするのは当然で、漂泊の民の米塩の資を得る手段は、大古から今日に至るまで変らない。

すなわち、前記の手品奇術の類いと、卑俗な舞いと音楽――これらは雑戯と呼ばれた。

伎楽も舞楽も、七八世紀に支那の隋・唐の文化とともに入ってきたものだが、発生的には支那の独創ではなく、アッシリヤ・ギリシヤ方面の影響が濃い。伎楽などでは特にそれが顕著である。

西域地方を通り、支那を経由して、さまざまな音曲に彩られて伝えられた雅楽を、散楽と呼ぶ。

現代の雅楽にしても、わが国古来の久米舞、五

節舞、倭舞などを源としているが、外来楽によって肉付けされ改められ、平安時代の風によって大成されたことは疑いない。

新興国たる大和朝廷をかたち作ることに懸命であった。天平時代は、これら外来音曲技芸を貪婪に拾捨選択したが、その捨てられたものを総じて散楽と総称した。

この散楽が、すなわち平安時代以降の猿楽になり、今日の「能」になるのである。

常に、主流から除かれたものは、雑戯とされるが、支那では百戯と呼ぶ。

手品、曲芸、軽業、人形舞わし……などである。すなわち、傀儡まわしたちは、雑戯を持つ意味に於て、外来芸能の最も本流といっていいかもしれない。

一部の者は、この新しい島国で、朝廷にとり入って定着し、身分を得た。雑戯の継承者たちは、あくまでも、放浪の習性を子孫に伝えるしかなかった——

その定着したい例が、秦氏に見られる。

応神帝のころ、百済を経て百三十余県の移民を率いて来た秦弓月（はたのうづき）の子孫は朝廷の信任を得て、外来舞楽を司る家となった。

ジプシーに音曲の素質があることは、知られている。朝廷の威令を飾るには、恰好であったろう。秦河勝の子六人は四天王寺の楽人となり、二人は奈良に入って大和猿楽の基礎を築いたといわれる。この大和秦氏から金春が出、観世が別れた。

雑戯をもって生業とした者を、こうした連中の中の脱落者、無能者と呼ぶのは少し酷であろう。かたや朝廷に仕え、かたや漂泊して門附けし、辻で銭を集め、女は売色という天地雲泥の差の生活にも、ジプシーの誇りがあったかもしれないし、朝廷殿上人らの温和な性向には、相容れない、幻妙不可思議の術や、凄絶酷烈な刀抜軽業が、

「外法なれば」

と、遠去けられたとも思われる。

前にあげた、舞楽、伎楽、など比較的穏やかな音曲を得意とする者が宮廷楽人として拾われたこ

とから見ても、以上のことは推測に難くはない。

前記大江匡房が見聞した石を銭に変じ、草木を鳥獣に変えるなどの奇妙な術は、後世「幻術」と呼ばれたものである。奈良時代には、その術者を「呪師（のろじ）」と称った。天星陰陽（ぼく）を卜し、吉凶を判じたが、そのウザの種々は、今昔物語に散見する通りである。

まぼろし——幻術に就いては後に述べる。

ともあれ、この雑戯と売色をもって放浪する人々が、傀儡と呼ばれるようになったのは、雑戯のうちで、最も容易で、手軽で、村の辻でも船の中でも稼ぎができる木偶人形つかいが、あたかも戦前の紙芝居のように、子供らの興味をひき、普遍化した故であろう。

その傀儡のうち売色をする女たちが、傀儡女である——

ものを容れる久具綴が売色女を形容していると見る説は、やはりいささかふざけたものだといわねばならない。

大江匡房はさらに記している。

——能人自女則為二愁眉啼一、粧二折腰歩一齲歯笑、施レ朱傅レ粉、倡哥淫楽、以求二妖媚一、父母夫智不レ誡……

こうした血脈のこうした環境の女は、刺戟をもとめる男たちにとって、興味がある。

折腰の歩み、とは後世にいう柳腰である。三輪右京は、あでやかな舞いのたびに、ちらちらと洩れた腿の白さを思いだした。

月の滴く肌

一

普門寺の石段下に馬をつなぐと、右京は、何の警戒心もなく、昇っていった。

この寺は菩提寺ではないが、家中に由縁があるので、時々来ている。

境内の勝手は知っている。昼間しか来たことはないが、幸い月が仄明るく照らしている。

山門を入って左手に有名な瘤榎がある。五ツ抱

えもある巨木で、上方は枯れて、落雷で裂け目が出来ていたが、去年、暴風のとき折れて、三丈ほどになっている。

幹に無数の瘤が、しがみついているし、洞がある。無気味に黒い口をあけていた。

「来ていないな、まだ……」

時刻に少し早い。

見まわした眼に、右手の井戸のあたりに、ちらと影が動いたように見えた。

「……」

違った。木の葉でも流れたのか。風が出ていて、梢が騒いでいる。

歩きだそうとして、何気なくもう一度見た眼に、井戸のあたりを、草箒で掃いている小坊主の姿が見えた。

瞬間、右京は、ぎょっとした。

山門を入ってきたときは、誰もいなかったのである。

木の陰に居て見えなかったのか？　かれが視線をむけたのは、井戸に動く影を感じたからだ。

その小坊主は、あたかも、この月に浮かれて井戸から出てきたかのように見えた。

右京は、ものの化とか妖怪とか信じない男だ。つかつかと近づいた。

小坊主は気がつかないものの如く、しきりに草箒を動かしている。

「これ、月夜の掃除か？」

右京の声は皮肉をこめている。

「山寺の夜掃除、魔性と思われるぞ」

「はい、掃除をしなければなりませぬ」

小坊主は奇妙なふがふが声で顔をあげた。

少年ではない。皺だらけの顔——

一瞬だった。坊主は顔をそむけた。草箒がサラサラと地を撫でる。

「古井戸の中もな……」

右京は、眉をひそめた。耳を疑った。坊主は、また顔をあげた。

「女人をお探しかね？」

「——うむ。見かけたか」

「あっち……」

坊主は草箒をあげた。

境内の裏のほうである。杉林が黒々とした闇を澱ませている。

礼を言って右京はそちらへ行きかけた。

（妙な坊主だ……古井戸の中も掃除するだと？）

気になった。

ひょいと振りかえった。とたん、思わず右京は驚ろきを洩らしている。坊主は、古井戸へ入ろうとしているではないか。

あまりのことに、凝然と立ち竦んだ右京に、皺だらけの顔が、挨拶でもするように向いた。

ニタリと笑ったようである。青白い顔。

辣韮のような頭が、するりと、沈んだ。

右京は顔色が変ったのが、自分でもわかった。

放胆さでは誰にも劣らぬと自負していたのが、この奇怪なさまを目のあたりにして、足が竦むようであった。

「馬鹿な！」

おのれを叱った。

「め、目の誤りだ……そんなことがあってたまるか、おれは、夢を見ていたのだ、夢を……」

十三夜の月が、境内を夢のように見せている。仄暗い木下闇。山上の古寺という条件が、幻覚を生ぜしめたのか。

「どうかしているぞ、右京。妖怪なぞ、あるものか」

かれは古井戸に近よろうとして足を止めた。

月明りに透すようにして、地上を見た。思わず息を呑んだ。そこには、歴然とあの草箒のあとが印されていたのである。

二

そのとき三輪右京が古井戸へ走り寄らなかったのは、慎重の故ではない。もとより、まぼろし忍法を見抜いたわけではなかった。と言って、ただに怯懦というわけでもない。

右京が怯懦なら、そのまま、寺から駈け出したろう。

嘗つて知らなかった妖異さに、

（まやかしか、現実か）

あっちに女が待っているといった言葉を実証することが、この疑問を解決すると見たのである。

古井戸に近寄らなかったのは、右京の運の強さともいえる。その意味は後にわかる。

居た。

木下闇に白いものがぼう、と浮んでいると見えたのが、それだった。

裸身ではない。が、蟬の羽のような紗の衣をまとい、脇息に身を倚らしていた。

樹間に、鹿皮を敷き、ゆたりと脚をなげだしている。

艶な姿体であった。まるで、春の宵に夜桜見物する姫御前のあで姿のように。

(嘘ではなかった!……)

すると井戸に入っていった坊主も幻影ではなかったのか。

右京の頭は極度の混乱に包まれた。

(ええい、糞! なんちゅうことだ……)

地団駄踏む思いだ。

もともと単純な戦国武士。理詰めにものを考えるのは面倒くさい。

「女、約定通りだな」

つかつかと近寄りながら、右京は故意に磊落に言った。

女は、にっと、笑った。

手に酒盃がある。

「待ちかねましたえ……」

「おまえだな……あやかしではないな」

「あやかしかもしれない」

白い咽喉をそらせて、けらけらと笑った。

「おんな!」

「月乃と呼んで」

挑むように、上半身をくねらせる。

厚い胸が——閨にこそ頼みある女御かな、と、ものの本にもあるように、ゆたかな胸乳が、妖しく揺れた。

「月乃、まことにそなた……」

「ほほほほ、あやかしかどうか? このお酒飲んで見るかえ」

素焼の盃に並々と琥珀いろの液体を注いで、

「契りのしるし」

「まどろこしいわい」

ぱっと、右京は払いのけるや、

「肌で誓え」

と、肩をつかんだ。

誘ったのは、女のほうである。

無節操な傀儡女。一夜の歓楽をもとめただけといえばお互いが愉しむだけで問題はない。右京は、無骨な掌に肌の柔らかさと、温みを知ると、あの煽情的な、露骨すぎるほどの踊りを思いだした。

くねくねと動く腰や、ゆたかに盈みたふとももの滑らかさ、すんなりと伸びた脚の美しさも、山野にきたえた女だけが持つ活々とした情感であった。

くるぶしを見せることも、はしたないとされた上﨟姫君たちにはない、みずみずしい女体——

その、弾む肉体が、いま、かれの手の裡にある。

はげしい息づきであった。

「月乃、楽しもうぞ」

男の手は、乳房をつかんだ。

「ああ……」

紅唇が歪み、悲鳴に近い、せつない声が洩れた。荒々しいまでの行為である。熱い息を洩らした唇を噛むように男の唇がこれをとらえ、膝は内腿を割ってすべりこんでいる。

女の胸は大波のようにうねり、男の膝にしたがって、下肢をひろげると、熱く濡れた谷間は、灼熱し怒漲した雄根を迎えるに吝かではなかった。

受け入れた瞬間、月乃は、たまぎるような声をあげた。

故意か、自然の叫びか。男に馴れたはずの傀儡女が、もしも無意識の叫びだとすると、右京の逞しさの故であろう。

はっはっと急わしく短かい呼気で、月乃は身をのけぞらせ、あさましく身をふるわせながらしがみついてきた。

そこには、何の作為もないように見えた。

おのれのおとこに狂喜したとしか見えなかっ

三

傀儡女の誤算は、そこにあった。

ただ、猛々しい武者としか、右京を見なかったところは、彼女の、ひいては傀儡一族の失敗といえる。

売色を業とする艶麗な傀儡が、孤閨に耐えていたのではあるまいし、短かい交接で、かほどに燃え、狂うのは不思議である。

はじめ、それが男の情感を誘う偽態と露ほども気がつかなかったのは、右京がうといせいではない。

女のなかで吼えんばかりに荒れまわる玉茎をやさしくくるむように、淫ノ水のあふれるのを感じれば、右京ならずとも疑惑を解く。

男の通弊か。弱点か。女ひとり熱をあげて打ちこんできたと自惚れたとき、警戒は弛む。愛しさが、隙となる。

その隙が狙いだったのである。

だが、演技は半ば真。心の一点を固く支えた上

た。あるいは右京の自惚れか。

しなやかな腕は蛇のように、男の首にからみ、下肢が、毛脛に巻きつく。すべすべとした脚は強靱な反りと奇妙に柔軟な動きで巻きついた。

きりりっとしまった女の臀は弾力を見せて、大波の打ち小波のかえすにも似た、快美の動きで、男に応えた。

野性の肌はいかに白くとも、贅肉とたるみを知らぬ。月乃は幾度か怒濤の頂点から奈落へ誘われ、突き落され、しぼるような陶酔のなかで恍惚を味わった。

男はしかし、それに合わせるには、逞しすぎた。女体がしとどに濡れても、その情感には溺れぬ。道義人情、地に陥ちた乱世は、自我をたわめることを自ら拒んでいる。兵燹のなかに産声をあげたような右京が、情意というものを、おのれの体内だけの燃焼と充実と恍惚によってのみ知る人間だったとしても、誰が咎めることができよう、たとえ神の名を以ってしても。

で姿体風情にその意をあらわす。意のままに情感を支配するつもりが、いつのまにか、そこに溺れてしまう。

月乃は、おのれを支えようとしながら、からだの底からこみあげる官能の疼きに耐えられなくなっていた。

(——ああ、この男……まだかしら?)

戦場往来の武者には、その行為のうちにも隙はなかった。

戦場でも、逃げまどう女をとらえて木蔭、草むらに引きずりこむのは、珍らしいことではない。

血のしたたる首級を腰にぶらさげ、刃こぼれした刀の血膏を片手にぎらつかせながら、女を犯すのだ。

楽しみながらも、おのれを失うことがない。夜の山寺に誘われた右京が、月乃の肌に溺れないのも、戦国武者気質と見れば別段、異とせぬ。

が、その行為が頂点に達したとき——一弾指の弛緩があるはずだ。

狙いはそこであった。

月乃は、すでに、確実に三度おちた。ふかい奈落にのめりこむような争い難い感覚に身をゆだねたい慾望と、

(負けてはいけない)

傀儡一党の使命を甦らしては、必死に争った。

右京は、そんな女の表情が、抗いが楽しいようであった。

雄根は、疲れることを知らず、倦むことを知らず、萎えることを知らぬ。

間歇的な女の叫びと、悶えと、恍惚の表情が、そして、涙すら光った双眸が、漸く、鉄の男の情感を盛り上げたようであった。

だが——右京の性感は、頂点をきわめずに終っている。

かれの欠陥ではない。

この月下の野合には邪魔な、ある気配を、四辺に感じたのである。

それは、人の気配というには、隠微であり、通常なら、五官に感応するはずもない、夜風の微かなそよぎ、草の匂いの流れにすぎなかったかもし

れぬ。

忽然と現れ、幽然と消えた古井戸の怪が、そのひそやかな気配を陰魅なものに感じさせたとしたら、これは傀儡忍法（この場合、外法と呼ぶほうがいい）の失敗というべきであろう歟。

せっかくの、月乃の努力も、その一瞬に、徒労に終ったのである。

「や？……」

きっと、顔をあげた右京。

月乃の虚ろな眼にも、そのときの右京の姿は、かれらの罠にはまらぬ、狡智な蝮の、かま首を擡げるにも似て見えた。

失敗、と知ったとき、月乃は次の行動に出ている。

髪に隠し持った小さな刃を、さっと一閃したのである。

右京の咽喉笛を掻くように——

瞬時の油断もない戦国武者は、身をのけぞらせるや、たっと草を蹴ってはねた。

巨躯である。忍びのワザは知らぬ。辛うじて三尺、月乃の剣に夜気を裂かせる効果はあった。

交接なかば。虚しい剣の流れのあとに、男の偉大なものを月乃は見ている。視界を、それを熱したままのかたちで、おどりあがった。

火のような——その赧らんだ亀頭の先端から白い粘液が一条の線を引いた。

おのれの股との間につながった粘い糸が、羞しい匂いで一瞬、月乃を搏った。

「計ったな！」

飛び退りざまに抜刀した右京は樹下にきっとなって四囲の闇を睨んだ。

月乃の手から小さな刃が飛んだ。右京の胸へ。

愚然とこれは一打に払いのけている。

火花が散り、腫毛を焼いた。刃金の灼ける臭いが夜気を染めるなかに、女の姿はかき消すように、消えていた。

四

刃と刃が嚙みあった一瞬の火花は右京の目を奪い、軽捷な女忍を頭上の梢に飛翔させることも、

間余の草むらに没入させることも可能であった。

忍者ならば、そのくらいのことは、誰でもできる。

右京が度胆をぬかれたのは、次の瞬間、ひらりと鹿皮の上に飛び移ったときであった。

足もとが、ぐらりと揺れた。

まるで、大地が亀裂を起したような——

鹿皮を誰かひっぱったような感じ。そうではなかった。鹿皮がふいにむっくりと身を起したのである。

「あっ!!」

仰天した眼の前で、にょっきりと鹿角が動いた。

巨大な鹿が、角をふりたてて身を起したではないか。

「ま、まさか……」

おのれの眼を疑った。

妖変、剝製の鹿が生身に変じるのならまだわかる。一枚のうすぺらな敷皮となっていたのが、なんとして、身を起したか。

大鹿は、その健やか四肢ではね上った。巨大な角をふり立てて、突進してきたではないか。

立ち上りはしたが、驚きのあまり口もきけぬ。

右京は辛うじて身を転じた。かれが、剛刀を、おのれのものとして、鹿に向ったのは、樹立ちのなかを三転したのちである。

鹿は、はねた。

猛然と突っこんできた。

「くそ！　魔性め」

右京は、身をのけぞらすや、かっと角をつかんだ。

頭を振る閑もあたえぬ、片手斬り、ずばっと首へ入った。

意外なほど軽い。すぼりと鹿の首が胴から離れた。力があまって、右京はよろめいた。

胴から奔しる鮮血——

奇怪なことには、鮮血のかわりに、どっと黒いかたまりが噴きだしたのである。

「……?!」

一つではない。愕然とした目の前に、二つ、三

つ、四つ……吐き出された黒いかたまりは、草むらにおち、木の根にあたり、鞠のようにはねるや、びょんと、そこに立った。およそ六個。

自ずと半円を描いて、右京を取り巻いたのは、いずれも、筒袖軽衫に籠手脛当に身を固めた影。信じられぬ光景であった。

が、これは眼の前で起った。

（夢を見ているのか……）

これをしも幻覚と思わねば、気が違うかもしれぬ。

（鹿は？……）

首を斬った鹿。

鹿の姿は見えなかった。あわてて、刀を見た。血膏に確認を見ようと思ったのである。

無情な十三夜月は、刀身に血のあとを見せなかった。そのおもては、姫ノ河原での乱闘のあと、すっかり手入れをしたままの、美しい光沢で月を写していた。

鹿を斬ったのも幻覚か。

右京は恐怖を感じた。おのれの眼に対してである。

ふたたび見まわした。黒影は十幾つに増えていた。

右京の額に汗がにじみ出た。刀をかまえてはいたが、常になく、重い。かれを取巻いた黒影が魔性めいて見えた。

「くそ！　こんな、馬鹿なことがあるか！」

百千の軍勢にも恐れぬ右京も、じわじわと迫りくるこの無気味な影には、足が竦んだ。斬るは易い（と、思われた）が、魔性なれば、斬っても、斬っても、倒れまい。人間の鍛え得る以上の力というものに対して、神変不可思議に圧倒されてしまう。

じりじりと輪をちぢめてくる影から、ざわと、潮騒のような息吐きが聞えた。

〈ふふふ、三輪右京とやら、観念することじゃ〉

〈ふふふふ、念仏でも唱えるか〉

〈ふふふふ、それとも、オラショを唱えるかの〉

低い、陰にこもった声であった。笑いの波が夜気にかげろうのように揺れ、無気味な影を一せいにゆらめかした。

五

さきに述べたように傀儡は外来種族の一部であって、その存在価値が、散楽に代表させるのは、それまでの日本に、この種の音楽舞曲がなかったことを物語っている。

だが、奈良朝から平安朝にかけての人々のイメージに、傀儡師という言葉とともにその奇嬌な行動が印象深かったのは、ただに散楽のゆえではない。

もっとも散楽という語には、当時、広い意味が含まれている。正確には〝散楽芸能〟というほうが、いいかもしれない。

後世の〝能〟の原型となった舞楽、所作、物真似――等のほかに、曲芸、幻術を含んでいる。

物真似や所作や舞いは、どこの国、どの民族にもある。家なき放浪の民が、生きるために、投銭を乞うた曲芸、そして、インド魔術に発する幻術こそ、人々に恐怖と奇異の眼を瞠らせたのではあるまいか。

無知蒙昧な人々の目には、曲芸と幻術と、物真似を区別して考えず混沌たる一つの現象としてただただ恐怖に近い眼をむけたのではないかと思われる。

散楽が総括的に称されていたことは、正倉院御物の弾弓を見てもわかる。

散楽の図があって、それには、笛や太鼓や腰鼓や琵琶を弾じている者、踊っている者などが描かれているほか、鞠か玉のようなものを幾つもほうり投げている者や、現今の中国曲芸の一つである、長い棒を肩で支えて、上に童子を何人も乗せているのや、両肩に二人が乗り、さらにその上に一人、またその肩の上に一人――

この図の人物は奈良朝の風俗をしているが、周知のように、支那や朝鮮の服装を無批判に採り入れた時代だ。日本で行われたことを描いたものかどうかは判然としない。が、多分、かれらがこれに近い技術を持って、まわったであろうことは、ほかの文献を見ても、およそ想像はつく。

「続日本後紀」には、時の帝が御所の庭で近衛府に命じ、音声を奏せしめ、弄玉、弄刀子をさせたことが記してある。字面でわかるように、曲芸だ。

この弄玉の図が、「信西古楽図」にある。

これも服装は唐風で、十本の両刃の短剣を口から噴きあげ両手で交互に投げあげているところなぞ、現今のそれと変らないし、弄剣のほうは、長剣七本を同じように扱っている。回転させる剣の、柄頭を頭ではね上げている。また神娃登縄弄玉とあるのなぞ、二本の棒を物干のように立て、左右からななめに支えて、一本上に渡したところを高足駄の童女が二人お手玉をとりながら渡り、一人は火焔を捧げている。

このほか、吐炎舞といい火炎を口から出しているのや、左右二つの壺を置き、一つには童子が入り、一つのほうから出かけているのや、剣の上に臥ていたり、猿が輪をくぐりぬけるなど、いずれも、現代中国インド魔術でもお目にかかる曲芸だ。

この二つ壺の〝入壺舞〟と称するものなぞ、茶碗伏せの、支那人が最も得意とするところ、先ごろまでデンスケ博奕にその名残りをとどめていた。

この信西古楽図なるものは、平安末期に描かれたもので、いわゆる信西入道として知られる藤原通憲が描かせたものとされている。

保元平治の立役者ともいうべき人で、源義朝とともに勝利を得ながら、後に殺されている。博覧強記で、嘘を描かせる人ではない。

右の図は曲芸が大部分だが、前に述べたように、無知な眼には、この入壺舞なぞや、弄刀子、火焔吹きなぞ、幻術に近い。

判然たる区別はなかったにちがいない。中には、馬の口から童子が出てくる、腹ぬけの図などがあるのを見てもわかる。

この散楽百戯が一口に、雑芸といわれるようになったのは、これらの〝ワザ〟が、その継承の困難と、難事な幻術ほど素質を必要とするゆえに、年月を経るにしたがい容易な曲芸、物真似、舞、滑稽な所作などが主なりわいとなってきたのであろう。

「梁塵秘抄」には、〝よくよく目でたく舞うものは〟として手傀儡をあげているのは、いわゆる傀儡が、木偶人形を舞わせるものを主体とするに至ったことを物語っている。

すなわち、難事な曲芸を含めて〝幻術〟をつかう傀儡が少くなっていた。足利時代に入ると、品玉、輪鼓、六玉、独相撲、独双六、無骨・有骨、木偶まわしなどの芸をひさぐ者たちと、唐術ともいわれる曲芸・手品・幻術・呪咒を専らにする者（その比率からすれば、十%にも充たなかったであろう）たちとに、わかれていたのである。

六

その幻術。

当時は、〝まぼろし〟を怖れ、〝外法、外術〟と称われた。いうまでもなく、外来を意味するほかに、神道仏教を、本然とするところから、理解の範囲を超えるもの、教理の不可解なるものを邪教として排斥した。外法という言葉に異端者への憎しみと恐怖が含まれている。

インドのバラモン教徒が行う「外術」から仏教ルートによる東漸の過程に古代支那の「道教」が用いる仙術、方術が加味され、はじめ呪師が病気治療や雨乞、卜占に用いたのが、しだいに宗教を離れ生業に堕してきたのは、こうした場合の自然である。

宗教が多くの信頼、信仰を得るには、超人的な神仏の力を示す以外にない。古代ほど、その傾向が強いし、現代でも〝奇蹟〟をもとめる愚民のために、〝奇瑞〟が演出される。

前記の刀を呑んだり、火渡りしたり、人間や牛馬をバラバラにして、再び甦えし、あるいは雨を降らせ、目前に山川を現出するなどの奇怪な術で目をくらませたのである。

しかし、これらのワザはいずれも、一時の目の錯覚を巧妙に利用したにすぎない。

呪師の巧緻な目くらましによる「外法、外術」が、〝まぼろし〟として人々を畏怖させたこと

は、源氏物語にも出てくる。桐壺に「たづねゆく、まぼろしもがな、つてにても魂のありかを、そこと知るべく」

幻に「大空を、かようまぼろし、夢にも見えこぬ魂の、行方たづねよ」

まぼろしはまぼろしを現出する人、呪師、方士の意である。外術は幻術と名が変り、呪師にして朝廷に仕えた者は陰陽師と名づけられ、野に在る者は、幻術者、術師と呼ばれるに至る。巫女を使うようになる。はじめ神道のかんなぎであった巫女も時代の変遷とともに、多様の形態を持つ。歩き巫女の類いである。傀儡女のなかで歩き巫女は、ただ色を売るだけではなく、幻戯らしきものを行うのだ。

その幻術のいろいろが古書に出ている。中古記には、陰陽師の安部晴明が、紙に、鷺を描きひょいと空中に飛ばし、三条大宮で道満法師を捕えたことが書いてある。

「今昔物語」にも多い。呪文を唱えて草の葉をひっ千切って投げると、蛙の上におちた。と、蛙は、巨岩を啖ったように押し潰されてしまった、という。

また、さる法師が下駄や草履を、呪文で犬に変化させたり、馬の肛門から入ったと思うと、口から出たりした。

また、ふぐり抜きのワザもある。陽成帝の御代という。信濃のくにの郡司の妻が、外術をもって院の御所の道範なる者の睾丸を抜きとった。

生菜生花生魚の術も「幻術」に属する。

瓜売りが四五人木蔭で休んでいると、一人の老翁が通りかかって、

「美味そうじゃな、わしにくれぬかな」

と、手を出した。

「銭がなけりゃ遣れぬわい」

「そうか。では、わしの瓜を食べるとしよう」

そこらに、散らばっている瓜の種にサラサラと土をかけると、前をまくって小便をかけた。

「なにするぞ」

瓜売りが仰天するのへ、老翁は、

「肥しじゃわな」

と、笑っている。

すると、まことに肥しが利いたように、ムクムクと土が盛り上り、芽が出、双葉が見るみる生長して、本葉を出し、枝がのび、葉が茂り、花が咲き、あれよあれよと瞠目するうちに、みごとな瓜が生ったではないか。

老翁はにやりと笑うと、その一つをもぎとって食っている。

「美味い、美味い、こう沢山出来てはとてもに食いきれぬ。さあ、遠慮なく食べなされや」

「それでは、味だめししようかい」

瓜売りたちは争って手を出した。食べる。美味い。タダだと思うから、浅ましく、みんなして平げてしまった。

「ははは、タダより安いものはない。大層美味い瓜であったわい、わしらの瓜よりも……あっ、無い！」

数荷の瓜が一つも無くなっていた。そして老翁の姿も、もうそこらに無かった——

七

幻術なるもの、まぼろしをあざやかに具現せしめ得るワザといってよい。ものごとを理詰に考えることのなかった当時にあっては、その附会する言動風体如何によって、神示とも仏罰とも威かすこともできる。

源氏物語のほかに、「金葉和歌集拾遺」にも雑上に、おきつしま、雲井の岸を行きかえり、ふみかよわさん、まぼろしもがな——元輔。

外術は七日、なる言葉もあるが、まぼろしノ術が、一般に驚異と憧憬すらもたらしたことがわかる。

これら幻術は、室町時代から戦国時代に至って、伊賀甲賀その他の忍びノ者に採り入れられ、忍びノ術を多様にし、乱世の興亡を操つるに至ったのである。

いま。

天文二十年秋——周防山口に忽然とあらわれた傀儡一党が、ひそかに伝承された、その幻術を駆

使して何を行わんとするのか。はしなくもあの傀儡女花乃と尾和兵庫介との交情の余波を受けて三輪右京は、山口の郊外山腹の古寺に於て、この傀儡忍法を目のあたりにせねばならなかったのである。

そしてこの十数箇の黒影は？

手に手に忍び刀を閃めかした黒い輪――これは現実に傀儡どもなのだ。

〈どうした、お侍〉

影の一人が言った。

〈オラショは知らぬかえ〉

オラッショとも言う。吉利支丹の「秘蹟手引抄」にある。すなわち祈念、祈禱の意で聖書の意もある。

当時、フランシスコ・ザビエルがはじめて布教してまわり、いまでは数千人の信者が山口周辺に居る。

「た、たわけな！」

と、右京が吼えたのは、吉利支丹ではないという意味か、揶揄的な言葉への反撥か。

「う、うぬら、木偶踊りでもやっていろ」

〈ふふふ、木偶は、そちらじゃ〉

すると、みんな、それに和した。

〈木偶はそちらじゃ〉

奇怪な傀儡忍法を見たものは、それを他に伝えることは慨わぬ。背後には死の淵が暗く口をあけている。

幻術の奇怪さは、現実との区別がつかないことにある。

どこまでが、夢幻の目くらましで、どこからが、現実か。

あの巨大な角を持った鹿は、目の錯覚か。首を斬ったのも。あのすぼりと斬れた手ごたえも?!

〈木偶はそちらじゃ……〉

ざわざわと笑い声に、影は揺れた。

草も木も、笑っているようであった。夜が笑っていた。笑い声は、右京の耳を聾し、気を狂わせたようだ。

「くそ！」

もはやこれまでだ。

豪放な武士だ。神経戦には耐えきれない。

「こい！　ウジ虫めら」

大喝すると、つと剣をひいた。

退いたのではない。誘いの剣さばき。呼気が誘った。鉦子が草に触れる、右京が半歩退る――その虚を衝くように、一箇の影が奇妙な声を放って飛びかかってきた。

「おう！」

地摺りと見せた刃が、さっと上った。

忍び刀を振りかぶった男を掬い斬り――おのれの跳躍力で逆唐竹割になる寸前、かッと、刃が火花を散らした。横合から飛来した礫が、刀身にぶつかったのだ。

手裡剣だ。手がしびれた。影はふたたびもとの戦列にもどっている。

息つく閑も与えなかったのである。次の影が飛びかかってくる。これをさけて、逆側の敵の面前へ攻勢に出たのは、集団の敵へ向う反射的な乱れ剣であったが、それはいしくも、理にかなっていた。

一刀分身、八方乱曲の基本は、常におのれを敵の視線の集中点からそらすにある。

多勢の敵の目にとらえられることは、呪縛されるにひとしい。目の前は、即、兇刃の乱撃をもたらす。

はじめ、十数箇の影は、右京を呑んでかかっていたにちがいなかった。

右京の手並みは、他の傀儡のなかまから聞いている。

姫ノ河原での乱闘である。その勇猛ぶりを忍衆が聞いて、古寺におびき寄せたのだ。

忍衆十三人に囲まれては敵すべくもないと思われた。

八

〈なかなかにやるな〉

一人が感心したように言った。

〈時刻が移っては、面倒になる。早く舎利にしてしまおうぞ〉

〈おう！〉

黒影は一せいに声をあげ、おそろしい早さで交互に飛びかかってきた。さながら、蝙蝠の群れ飛ぶような、奇怪な飛翔であった。閃々と刃は右京の五体を掠めた。

この乱刃はむしろ、右京に幸いだったかもしれない。軽捷という点が、足軽の群れとは違うだけで、この混然たる死闘は、右京を飛剣で仕止めることはできなかったからである。

傀儡忍衆の一人一人は——それは一羽あるいは一匹と呼ぶほうがよかったかもしれぬ。

さながら、怪鳥が、するどい爪か、嘴でもって、襲い、一撃に失敗しては、こちらの刀尖が届かぬところへ飛翔し去り、転じてはまた襲いかかってくるように、十二箇の影が、一糸みだれぬ迅速さで、前後左右から、飛びかかってくるのだ。

一瞬の呼気をあやまれば、何人かが確実に傷つく。神わざに近い軽捷さであり、間の置き方であり、飛び来り飛び去る方向の適確さ。十二人の呼吸の間は、さながら、リモコン操作を受けているかのようであった。

いかに速いとはいえ、十一人の飛び交う間は息がつける。右京には息つく閑もない。

かれが、暫しの間この怪鳥どもとわたりあうことができたのは、戦場往来の強者だったからだ。それにも限度がある。

(死ぬか！)

絶望が胸を刺した。

死から逃れる道は一つしかなかった。

このチームワークの破綻のみが、一縷の救いだ。一糸乱れぬ集図行動を破るのは難い。ひとつ間違えば、死に至る。万に一つの可能性でも狙うしかなかった。

決断した刹那、飛鳥の影が眼前を蔽った。右京の剣は、その兇刃を薙ぎ払う余裕を持っていたのである。が、身をひねるようにしてそれを受けた。忍び刀はかれの右肩のつけ根を貫ぬいた。

この策戦は、たしかに成功した。

傀儡忍者の刀法は、飛び斬りには例外なく斬り下げる。瞬時に意外な動きを示した右京の剣に、とまどいを覚え、気勢をそらされながら、小手をはいえ、白昼のようにはいかぬ。傀儡忍衆の混乱の中から、しかし、二人追いすがってきたのは、小手返しに斬った。あとの男が手裡剣を連打した。

耳を掠め、腕に刺さり、腰に突っ立った。右京は激痛に目が眩んで堂ッと倒れた。一転、二転、草むらがふいに口をあけたようであった。底知れぬ奈落に右京は転落していった。

返しざまに刺した。

かく、詳述してくると、高速度フィルムで写したように緊迫を欠くが、死を賭けたこの彼我の行動と白刃の閃きは、すべて一弾指の間を出ない。右京のほうに、決断から行動まで計算されたとしても、傀儡忍者には反射的な斬撃刺突にすぎない。

果然、神秘とさえいえた怪鳥の飛交は、一瞬に崩れたのである。

右京がよろめくと同時に、かれを刺したやつは次の男に刃に背を割られ、その男は右手の男の刃を浴び、後なる者は、左手からの刃を受けて、絶叫と噴血と、失慮の声が、そこここに噴いた。

あまりにも整然たる飛交ゆえに、反動は大きかった。血の顕きは、予期以上の混乱を生んだ。

右京が忍び刀を抜きとって、乱刃のなかを転び逃れたとき、十三夜の月を雲が隠した。幻術ではない。偶然を、神助というなら、右京の心懸けに嘉さるべき点があったのか。

樹下闇はさらに濃くなっていた。夜目の利くと

忍秘・濡れ褥

一

三輪右京を古寺におびき出したのは、右京を仕止めるだけの目的ではない。二人寄れば三人前五人前の力を発揮するであろうことを慮っての策略にほかならぬ。

月乃が右京を誘って仕止め、その隙に、花乃が兵庫介を討つ。

蜜人とりが蜜人にならぬようにと、膣口をふさ

がれた花乃は、急に容貌も変ったかのようであった。

（――もう女ではない……）

夜叉の狡智は、まるきり望みを失くしてしまわない点にある。

成功すれば、〝おんな〟に戻れる……その微かな望みが、慕情を裏切る行為に、花乃を赴かしたのである。

戌ノ刻。

花乃は尾和の屋敷に滑りこんでいる。

屋敷は広い。数年前から山口城下の屋敷は、時代の流れにさからって、寝殿作りに還元しているのが多い。

八幡船をかって明国沿岸を荒しまわり、倭寇として恐れられた大内氏の武威も、栄華のはてに倦怠が来ている。義隆は二位の兵部卿に昇りすっかり公卿づいている。

詩歌管弦に明け暮れ、能舞台をしつらえ、能楽師を招くなどして京を逃れ来た公卿上臈たちの機嫌をとるだけでなくおのれも天上眉に白粉を刷き口に紅をひき、刀にさわろうともしない。檜扇や中啓をいかに自然に持つかのほうが関心事だった。

したがって、山口城たる築山屋形は、防塞であるよりも、京風の寝殿作りで、御所を模している。

主人がこういうふうだから、家臣たちもそれにならう。濠をめぐらし、矢狭間、矢倉、切り落し、忍び返しなど具備した武家屋敷を、濠を埋め、轅門とし、牛車の往来を速かならしめ、寝殿作りにする。

室町時代も末期には武家生活の必要から、寺院建築の書院風がとり入れられるなどして、いわゆる武家屋敷に移行している。

この天文時代といえば、上杉謙信や武田信玄、今川義元などが思い浮べられる年で九州中国すじには、大友宗麟、竜造寺隆信、毛利元就らが擡頭の機を狙っている。

もっとも戦国時代らしい時だ。武家屋敷の形態と風俗も武門ならざるべからざる時代に、周防の

山口では、長袖風に還り、公卿遊びに余念がないのだ。

武士たちが寝殿作りに起居するなど時代遡行も甚しい。

尾和の兄弟は硬骨漢だから、

「主君のお好みに合わするが、真の奉公か、武辺たる者、長袖ぶりは迷惑至極」

と、言い張って屋敷の変改なぞ考えもしない。

兵庫介は湯に入っていた。

檜の香り高い湯殿である。

「右京め、何処へ行きおったか、今宵は飲みあかしだなどと申していたくせに」

「はい、お屋敷へ戻られませんだようで。嘉助が、白石の三曲り辺でお見かけしたうしろ姿が、右京さまのようであったと」

「三曲りといえば、あれから先は田圃で山路にかかる。鴻ノ峯に夜登りするとは面妖だな」

「全く、あの方のなさることはてまえどもにはわかりませぬわい」

甲作のそんな語気には、兵庫介の無暴をいさめる調子もある。

「手に負えぬやつさ」と、兵庫介は笑って、「そこが、やつのよいところよ。それにしても鴻ノ峯とはな。普門寺にはゆかりの墓もないはずだ」

「左様でございます。あの通りの気まぐれの方ゆえ、ひょっとすると……」

背中の糸瓜が止った。甲作は兵庫介の巾広い背を流しながら、饒舌っていたのだ。

侍女も居るが、兵庫介はこんな場合湯殿に女を入れるのは嫌っている。

「ひょっとすると？」

「オラショでございますよ。普門寺の裏谷に教堂（えぐれしや）がございますな」

「教堂は今小路ではないか」

「はい。あのほかに、裏谷には病人や物貰いなどを集めているところがございます。天竺の坊主が面倒見てくれるそうで、病人なぞはすぐによくなるそうで」

「うむ、それなら聞いておる。普門寺の末寺であったのが、ずい分と前から無住で立ち腐れになっ

ていたのを、天竺坊主が手に入れて病人溜りにしているとな」
「はい。あれでござりませぬかい」
「右京が？……」
「どうもな、こう申してはなんですが、右京どのは、女好きで」
「ははは、男で女嫌いが居るものか。おれなぞも大好きだ」
「はい、それは……でも、右京どのは、そのイカモノ食いで」
と、甲作は眉をひそめた。

二

たしかに傀儡女を、れっきとした武士が弄ぶのはイカモノ食いにちがいない。
が、それもそれなりの面白味がある。藩中の男たちは、京下りの上臈姫君や女房などに興味をおぼえているが、兵庫介や右京から見れば、
「武士たる身が蒼白い人形のような女の尻を追いまわして、歌だ、蹴鞠だなどと、見てはおれん、そんな閉には、草鹿（的）でも打っていたほうがいいわい」
と、豪語していた。
兵庫介は、花乃の肌を思いだした。正しくイカモノだ。が、なんと、味のよかったことか。異常な環境の異常な女は、男にとって好奇心をかき立てられる。
生命力にあふれた女体は素晴しかった。
「――イカモノ食いも、また楽しいことよ。それがなんとして、教堂へ？」
「悪い病いでも感染されたのではございませぬかな。下司な女どもは、たいてい病気持ちで……」
「聞いたら怒るぞ右京が」
「ぶるぶる、それは阿漕というものですって、和子、お殿さまも仰せられます、右京どのは、チト無遠慮に過ぎるゆえ、あのようなお方と交遊なさいますることは、世間の思惑もあり、お屋形への聞えも……」
「申すな」
はげしく、兵庫介は遮った。

「右京は、またとない朋友じゃ。悪口叩くともはや許さぬ」
「はいはい、そうまで仰せまするなら、何も申し上げませぬて」
甲作は、せっせと糸瓜を動かしはじめた。
（――悪い病気か……）
瘡気か楊梅毒か。傀儡女というだけで、そう疑ってかかるのは哀れではないか。
花乃のあの健やかな姿体には、一点の不潔なものもない。
「こりゃ、甲作、汝れはいつから天主の信者になった」
「とんでもないこと。わしゃ祖父の代から一向宗で」
「ならば、坊主の言葉に瞞されるな」
湯殿から出ると、下帯ひとすじで、のしのしと、寝所に入ってゆく。
隆々たる筋骨に、汗が光っている。
湯殿と母屋は渡殿でつながれている。夜風が爽やかだった。
短檠のもとにしつらえられた褥にどっかと坐ると、瓶子の酒を盃にもそそがず、呷り飲みした。
「――甘露……」
ふうと息をついてごろりと横になる。
その手に柔らかいものが触れた。
「や、なんとした？」
温い女の肌がそこにあった。ぎょっとなって瞠目した。
「ほほほほ、あたし……」
仄明りのもとに、女の顔が艶然と笑っている。
「いつの間に来たのだ」
夢を見ているようだった。
かれが寝所へ入ってきたときは、影もなかった。褥へ坐ったときもである。足音もしなかったのだ。まるで、褥から湧いたように、忽然と、女体があらわれた。
「さっきから……」と、花乃はあえぐように言った、「待っていましたえ」
「おれを！　どこから入ったのだ、いったい……いやさ、さっきはどうして逃げたのだ」

「あたしのような、賤しい女、御家来衆に顔を見られたくなかった」
「たわけたことを。おれが好いというのだ。何を慮ることがあろう」
「でも……」
羞しげに身をくねらしている。
豊満な肌の温かみが手から、腿から、伝わってきた。湯上りの火照ったからだに、昼間の慾情が甦ってきた。
「よく来た」
と、言いざまに抱いた。荒々しい手である。狂ったような動きである。
抱き竦められ、烈しく唇を吸われると、女の肌の奥から情感は湧然と噴き上った。彼女の舌も、手も男の情念に応えた。
甘い唾液と舌のからみあいは、妖しく官能の淵に誘いこむ。男の手が乳房を探みはじめると、息もたえだえに、女体は燃え狂いのたうちまわった。
頭領土蜘蛛の手で、女たるべき身をフサがれたのが無意味なもののようであった。まるで、膣口を縫合されたことによって、その部分の官能の襞が、上半身に転位したかのように。口唇と乳房とに、性感が凝集されたかのように。
だが、男のからだは、それだけで満足せぬ。
掌にあまるふくらみを堪能するや、なめらかな凝脂の起伏を這って、秘所におりてゆく。指先が陰毛の丘にとどいたとき、
「……」
からまった舌が何やら叫んだ。それは言葉にならず、官能の呻きのように聞えた。
身もだえのはげしさも、あの狂熱を知る兵庫介には、それが拒否とは考えられなかったのである。
からみあって、横に倒れると、女体はしなやかに動いた。あっと思った。遮るひまのない、素早さであった。
兵庫介のいやが上にも怒濤した逸物は、女の口にとらわれていた。
生温く、情意に濡れた唇は、灼熱した男のいのちを含んで、弄んだ。それは、弄ぶというにふさわしかった。
男と女の情感には献身ということはあり得ない。意識の上でのみ愛の存在が云々されるだけにすぎない。花乃は男の慾望を満足させながら、その異常な行為におのれも快楽を感じ、いや、感じようとして没入しているのだ。

三

恍惚は早かった。花乃の狂態は、その烈しさのゆえに、正常な行為から受ける以上の快美感を与えた。花乃自身、その行為のあいだ、おのれを忘れている。自ら、情慾の淵に身を投げこもうとする気持が、裾をみだし、下肢をあらわに褥をみだしてとち狂った。兵庫介の眼には、まるで他人の情事をぬすみ見るにも似た昂奮を唆ったのである。
花乃がおのれも陶酔しようとしたのは、心の迷いを決するためであった。
（兵庫介さまを殺さなければ……）
なかまのところには帰れない。
傀儡女に生れ、傀儡女に育った花乃には、やはり、傀儡以外の生活はあり得ない。
なかまの一人に戻ることは、すなわち、女に戻ることであった。
罪を許されるには、土蜘蛛の命令を決行せねばならなかった。
おのれが陶酔することは、哀しみをまぎらせるためであり、兵庫介に快楽を与えることは、せめてもの、詫びのしるし。
あるいは深層心理的には、その陶酔の虚を刺そうという気ではなかったか。
花乃は否定する。
たしかに、兵庫介への愛は深い。一歩を譲ったとしても、その陶酔のうちに刺せば、兵庫介の苦痛は少くて済む。
花乃は身に寸鉄も帯びていない。
身辺のどこへ隠しても、目のある者なら、見破ってしもうからである。
刃でもない、針でもない、毒でもない。

彼女の武器は、指しかなかった。
兵庫介に早く恍惚をもたらすことになったのも、その指のわざ。
玉茎を愛撫するのは、唇と舌である。男を喜ばせるに馴れた指は、ソロリソロリと、ふぐりを逆撫でする。
口唇スナワチ筒ヲ含ミ、嬶手嫋々トシテ丸ヲ弄ス以テ巫山ノ夢醒メズト……唐書を飜案したと伝えられる「観牀三昧」に活写してある。
その筒——口中いっぱいに怒漲して、ぶるぶると絶頂感をつたえた。ふぐりをおさえた掌にはっきりと、それを感じると、花乃は、
（いまだ！）
と、思った。
いかなる豪ノ者も、この一瞬は小児よりも他愛ない。
ふぐりは掌中にある。これを一握すれば、梟がつく。
花乃の掌はわなないた。どくどくと音を立てて口中に流れこむ。兵庫介の歯のあいだから歓喜の声が洩れた。
ふるえる手に力をこめようとしたが、力が入らない。
百斤の宝玉でも献げたように、肘が痺れ、手がふるえた。
そのさまを見ていたように、
〈いまじゃ！〉
と、どこからか叱咤が飛んだ。
それは、花乃だけに聞えた。花乃の行為を凝っと見守っていた影が、どこやらに潜んでいたのである。
この恥しい行為を、見られた、というよりも、花乃の行動に看視をつけた傀儡のなかまの非情さが、かえって、花乃の手を萎えさせた。
（これ！　何をしている！）
陰の声は、烈しく、
〈いまじゃ、殺れ！〉
「あ、あい……」
うつつに答えたが、花乃の手には力が入らぬ。
射精は一瞬——数弾指の時が間誤間誤するうち

にいたずらに過ぎてしまった。
「あぁ……」
花乃は身をのけぞらした。
その口から、白いものが糸を引いた。
手をのばして、太刀を摑んだ。
その蔭の傀儡忍者には、花乃が抜刀しざまに兵庫介に斬りかかると見えたのである。
が、そうではなかった。
身をひねったと思うと、口をすぼめ、しゅッと、潮吹き——
口中に吸い取った精液であった。濃密な白濁の液体は、噴水となって、天井の一角を襲った。
「……」
声なき声が奔り、男が一人、転落してきた。
「ぬッ、裏切るか」
白濁の液体は、その両眼をべっとりとふさいでいた。
盲いたまま、その男は抜刀しざまに、兵庫介に飛びかかった。
花乃が役立たずとなったことを知って、一刀を報いんとしたのであろう。あるいは土蜘蛛が、万一を予測して命じたのかもしれない。
その刃が、兵庫介のからだに触れるまえに、花乃の手から流れた光芒が、忍者の頸すじへ走っていた。

四

「これっ、どこへ行く」
尾和屋敷から走り出た花乃へ、兵庫介は追いすがった。
「待て、待たぬか」
「放して、あたしはもう……」
なかまのところへ戻れない。どうせ女に還れぬからだなら、兵庫介を討つ意味もなくなる。
これ以上、とどまれば、兵庫介に迷惑がかかるばかり。想いのすべてを振りきって夜の戸外へ走り出たのだ。
「待て、逃げることはない」
「いけない。わたしは、賤しい女、忘れて下されませ」

「忘れぬぞ、おれを助けてくれた」
「いいえ、あの男は、あたしを殺すつもりで跟けてきた者」
「なんと！」
「なかまの掟は恐ろしい、どうぞ、かまわないで」
「あのなかまとは」
「安芸の傀儡です」
「クグツ?!……やはり……」
「忘れて！　傀儡に関り合うと良いことはありませぬ。ああ、いまごろは、右京さまも」
「なに、右京の行方を存じているのか」
「あい、普門寺です。月乃というなかまが、昼間、お誘いしたのです」
「しまった！　さてはあの舞女が……」
兵庫介は切歯した。
「早く救けに行ってあげて、十人以上も居ます」
「おう！　行かいでか。甲作！　甲作！　馬曳けい」
走りだそうとして、
「そなた、名前もまだ聞かなんだぞ」

「花乃」
その一言が最後の言葉になった。
兵庫介が馬腹を蹴って走りだしたあとから、家臣らも追っ取り刀で飛びだしてくる。
花乃は破れ築地のかげから、濛々と砂塵を蹴立て去る騎馬を見送った。
「おさらば……兵庫さま」
悲しみを秘めて、傀儡女の花乃は、闇のなかに消えていった。

普門寺まで一気に駈けつけた兵庫介は、石段を駈け上りながら、
「右京！　右京！」
はげしく連呼した。
返事はない。颯々たる風の声が梢を渡るのみである。
山門をくぐって境内に入ると、古井戸のあたりに人影が見えた。
小坊主だった。黙然と草箒を動かしている。
「これ、坊主……」

遠くから声をかけた。
聞えないのか。掃きながら、古井戸のほうに遠去かってゆく。
「おい、つんぼか、ちょっと訊ねたいことが……あっ?!」
右京が見たのと同じ光景であった。その小坊主は、古井戸の前で、ひょいと振りかえった。にたりと、白い歯が笑った。その才槌頭の小兵さといい、蒼白くうすべたい感じの容貌といい、妖怪を目のあたりしたような無気味さであったが、それが右京に二ノ足を踏ませたのであるが、兵庫介は怖れを知らぬ。
「おい、どうした?」
近づいてゆくと、小坊主はひょいと身を転じた。
古井戸をまたいだ。するりと沈む——才槌頭が揺れて、見えなくなってしまった。
「なんと！　面妖な……」
さすがに足を止め、兵庫介は、あたりを見まわした。境内は森閑と鎮まりかえって、まるで深山にでも入ったようであった。
花乃が変化していた谷の尼僧の無気味さも事情がわかれば不審はない。
亡霊など気の迷いだと理窟では思っても、雰囲気しだいで胆が冷える。放胆な兵庫介も、二ノ足を踏んだ。
が、それは数弾指にすぎなかった。兵庫介は地を蹴って走り寄っている。
古井戸をのぞきこんだ。と
とたん、背後にさっと黒い影が飛びかかったのである。

五

その影は、杉の木蔭から出てきたのか、井戸の蔭から出たか、暗がりから生れた、夜のかけらのようであった。
小さな刃が、その手に閃いた。
兵庫介の背へ——
あまりにも的は大きかった。兵庫介は遅しい。背巾は広い。万に一つの失敗もないはずであっ

た。刃がたとえそれたとしても、からだごとぶつかって突き飛ばせば、もろに古井戸へ落ちる。
背後からの殺気に、しかし、兵庫介は反射的に身を躱していた。
「しゃっ！」
抜き討ちの一刀。
しゅッ！　と箭風を発して、手練の刃が背後を一颯した。
血の音がした。すさまじい血しぶき。視界がふさがった。
一陣の夜風が血の雲をたなびけて、瞬時にそやつの影は迅った。
たしかに、斬ったのである。
兵庫介の手は、そのすぽっと首が胴から断たれる手ごたえを、快く感じたし、たしかに、血しぶきを見た。
奇怪、一たん、宙に飛んだ首が、走る影の胴を追い、ぽとりと、もとの首の座におさまったではないか。
「あっ！……」
慄然となった。足がその場に釘づけにされてしまった。
小坊主には重すぎる才槌頭が、奇妙な安定感でかれが唖然としている間に、たちまち木立の中へ駈けこみ去った。
「なんということだ。この寺は、まやかし寺ではなかったが……」
夢ではないか。
まぼろし……かれは太刀を見た。刃にはうすく血が乗っている。斬ったのは確かだ。
だが、死体を捜すまでは、安心はならぬ。
「右京！　どこだ……」
木立のなかへ入って行こうとするうしろから、
〈ここじゃ……〉
そんな声がした。
右京に似た声であった。
「右京？……」
〈――ここじゃ〉
また、返事があった。
声は、古井戸でした。

声だけではなかった。井戸から、にょっきりと首が出ていた。あの才槌頭だった。青い頭から広い額、削げた頬、奇妙な顔いっぱいに血がしぶいている。
鈍く光った眼がにたりと笑ったように見えた。
「ぬッ、化性が！」
兵庫介の手裡から鎧通しが飛んだ。
首は消えた。鎧通しは、眉間にぐさりと突っ立ったはずであった。
ふたたび、井戸へ引き返そうとしたとき、
「和子、和子！」
石段を家来たちが駈け上ってくるのが見えた。
「和子、なんとなさいました」
「右京が来ているはずだ、探せ」
「ここに……方丈でございますかい」
「わからぬ。裏手のほうまで、見てまいれ」
「血が……」
袖と、胸もとに返り血がしぶいている。
「ウム。斬って捨てた。魔性……」
と、言いさして、
「いや、魔性じみた、奇怪なやつでの……」
井戸を確かめるまでは、眼の迷いを信じたくなかった。が、その井戸のなかには首がおちているかどうか、夜のことで判然としない。
「首を、な、斬りこんだはずだが……」
そこへ住職が出てきた。
これは八十近い老翁で、眠りを醒まされたことに不機嫌な顔だった。
右京のことを聞いても、
「知らぬな」
と、首を振って、
「浄域たること弁えさっしゃれ、争いは許しませんぞ。どうも近ごろ、南蛮人が来おってから、気風が悪しゅうなりおった。釈尊をないがしろにするのみか……」
「和尚。説教を聞きに来たのではない。朋友が殺されているかもしれぬのじゃ」
「墓の相談かの」
「そうではない。傀儡どもの罠にかかったらしい。和尚、心あたりはないか」

嘘ではあるまい。あの小坊主の変化が、傀儡の奇怪さの証左ともいえた。

悄然と、石段をおりてきた兵庫介が、馬のところにもどると、丁度、山裾を黒い影が足音もなく通りすぎてゆくのがみえた。

「おい、待て！」

「……」

影は素直に立ち止っている。

郎党たちもわらわらと取り囲んだ。その影は反抗もせず、

「神のみめぐみを……」

と、胸のところで手をあわせた。

黒い僧衣を着て、頭頂は剃りこぼちている。これは、ぼるとがるの宣教師だったのである。

魔笛若衆

一

三輪右京の消息は杳として知れなかった。翌朝、郎党らがふたたび、普門寺に入って井戸を調べたが、首はなかった。

念のために、水を汲みあげてみたが、血首が沈んだ気配もなく、澄明な清水だったという。

「――おれが夢でも見ていたというのか」

「いえ、左様なことは。ただ、別条なきまま……」

「夢かもしれぬ。だが、右京は……」

「手を尽くしております。三輪の郎党ども、類中がたへ報じ、手わけして城下はもとより、湯田の外まで界隈探しておりますれば、一両日中には、なんぞ吉左右が入るものと」

「ついでに傀儡どもにも気を配れ、城下に居るやつは、どやつでもからめ捕るのだ、手向えば斬れ」

一日経った。

消息はなかった。もう隠してはおけなかった。上司にことのしだいを述べたが、あの魔性の変化は話しようがなかった。

その翌日のことである。

城下采女ノ辻、研師十兵衛の見世の前に馬を止めた若侍がある。

連銭葦毛の馬もみごとなら、鞍も螺鈿黒漆の立派なもので、佩いた太刀も黄金作りだ。

けばけばしく、派手で人目に立つ美しい若侍――といっても、もはや二十歳にはなっていよう。

艶やかな前髪が、かえって薹の立った若衆の感を深めるが、顔立ちは整っている。

ほそおもてにうすい眉、観音像のように切れ長のはっきりした眼、紅を塗ったかと思われる唇。ほそくきわだって高い鼻――冷たいほどととのった顔は、

（築山殿お好みじゃナ）

と、世間では噂する。

清ノ四郎といい、中国すじ七ケ国の守護大名そして二位ノ侍従大内義隆の寵童上りで、寵臣相良遠江守武任の小姓になっている男。

その衣裳から、太刀から馬から、すべて義隆の下賜になるものであろう。

供の武士二人に馬の口取り、草履持ち下郎はい

「ありませぬな」

と、和尚はむしろ腹立たしげに、

「あの連中は、百太夫とか申す、怪しげなものをあがめておってな、とんとわしらの説法に耳を傾けようとせぬ、罰当りどもめ。そなたらも、左様な心がけではろくなことはないぞよ」

「八大地獄に陥ちまするかな」

と、漸く兵庫介はいつもの磊落な調子をとりもどしたようであった。

「それ、そのような心懸けが、悪いと申すのじゃ、いったいおことらは、現世の栄華をどのように思うてござるのか。尽未来そのような心映えでは……」

和尚の話を聞いていると夜が明けるかもしれぬ。

そのあいだに、甲作たちは境内をくまなく捜したが、他に人影とてはなく、あきらめて戻ってきた。

走跡もないとなると、これ以上探しようはない。

（花乃が嘘をついたのか？）

ずれも対蹠的、壮強躯幹、膂力自慢の者である。
清ノ四郎が馬からおりると、目ざとく見つけて、
「これはこれは、お出でなされませ」
肥った男が、転るように出てきた。
研師十兵衛である。
「わざわざお運び下さらずとも、仰せつけあれば、参上仕りましたのに」
「いや、そこまでまいったついでじゃ。かまうな」
「名誉でござりまするて。さ、どうぞ、どうぞ」
「いや、見世先でよい」
と、清ノ四郎は横柄に言う。
主の恐縮するのを計算にいれている。
「そこは端近でござりますれば」
「なに、すぐに出るゆえ。別段、強いて需めたいものがあるのではないから。道すじではあるし、チト、眼を楽しませようと思うただけのもの」
「ではござりましょうが」
「よいよい、かまうな」
若い弟子が奨める藺草あみの円座に、清ノ四郎はふわりと腰をおろした。
この時代はまだ商売店舗が後世のような形態をなしていない。
研師はいわゆる刀屋の先駆になるが、店すなわち見世棚で、ことにこうした生産売買は、職人の仕事場が往来に面しているといったほうがよい構えである。
杉の板張りの栗いろに鈍く光る床で弟子たちが、あるいは刀を研ぐ者、あるいは鞘師と交渉している者、あるいは拵えの塗りを補修し、柄糸をつづくる者、鍔や鎚りを磨いている者等が、急しげに立ち働いていて、預り物の太刀、打刀、槍、薙刀などが、あるいは穂先だけのものなど、奥にずらりと並べてある。
見世先近くの壁に陽の入り工合をさけて掛け据えてあるのは、売物であろう。
新品もあるが、多くは古いものだ。
当時、しかるべき侍は、刀匠に発注して打たせるのが常態で、遠国近国を問わず、そうしたのである。

研師が仲介するのは、古品にかぎった。
武士なら誰でも一応、研ぎの心得は必要とされていたが、近ごろ、ことにここ山口は、西ノ京と称されるほど、京から殿上人——公卿、上臈姫君の移住する者が多く、風俗は華美を競い優雅に流れるようになって、太刀なども、斬るという機能を忘れて細身を帯ぶ者が増え、刀身の美しい光沢を尊ぶ気風が浸透してきたことで、研師の見世は繁昌している。
円座に坐った四郎は、
「ちかごろ、おもしろい品は出ぬか」
と、壁に目をやった。
「はい、左様でござりますな、粟田口のちょっとしたものが二腰ほど入りましたが」
「御番鍛冶か」
「一腰のほうは、国綱で」
「この身には、チト過ぎものではないかな」
「いえ、滅相もない。こなたさまのお腰となれば、喜びませいでか」
「これ、十兵衛、いつから立売の口上おぼえたぞ、ははは、研ぎの腕が鈍るぞ、はっははは」
とりおろされた反りの深い厚重ねの太刀をすらりと抜くと、表情の少ない、のっぺりした顔に三白眼が、異様に輝きはじめた。
美しい白面のしたに隠された残忍さが、じわじわとにじみ出すようであった。

二

刃裏、おもて、中心などひと通り改めてから、清ノ四郎は、
「——これか」
と、主に聞いた。
他人には意味のわからぬ言葉だ。
十兵衛の眼はちらりと左右に走った。
一瞬狡猾ないろが、そのたぶたぶに肥えひろがった顔を掠めた。
「いえ、これは、物はよろしゅうございますが……無骨すぎますようで、暫時お待ちを……」
十兵衛は奥へ入ると、細身の太刀を持ってきた。

鞘皮巻の優美なものである。
「豊後の助綱でございます」
周防の二王清綱から秘伝を盗んで豊州二王を唱えた刀工であった。斬味は「八幡割り」の異名がある。兜の八幡座を真っ二つにしたいわれがある。
「豊後の？」
と、四郎は十兵衛に念をおした。
「はい、豊後の」
「……」
頷いて四郎は中身をあらため。思いなしか、形式的な目になっていた。
「貰おうか」
あっさりと言った。
「代銀は、これだけとってくれ」
革の大巾着をどさりと投げだして、
「多くても少なくも、知らんぞ。あとでつべこべ申すなよ」
にたりと冷たい笑いを残して出てゆくのである。
「はい。いつもお蔭を蒙っておりまするゆえ、左様なことは」
十兵衛はぺこぺこして送りだした。
そのとき、弟子の一人が、裏口からそっと出ていったのを十兵衛は気がつかない。主と客の応待をちらちら横目でぬすみ見ていた男である。
秋の日があわただしく暮れたころ、清ノ四郎は築山屋形外の相良遠江守控え屋敷お長屋で、その太刀を調べていた。
金無垢狂い獅子の目貫をはずして、目釘を抜く。中心の銘を見るのではなかった。
柄をさかさにして、とんと、軽く打つと紙片がすとっと落ちた。
隠し文である。
清ノ四郎は開くのももどかしく目を走らせて、
「む……いよいよだナ」
頷いた。
と——
その文の上に、はらり、あるかなしかの埃りが落ちた。室内の浮塵か？　清ノ四郎の顔にそのとき奇妙なうすら笑いが泛んでいる。
隠し文をひろげると、裏がえしにそこに置いた。静かな動作に見えた。が、次の瞬間、清ノ四郎のからだは鞠のようにはねていた。
はねざまに鞘走らせた鎧通しが、ぶすり天井を刺して——
清ノ四郎は部屋の隅に飛んだ。
（——手ごたえ……）
凝っと三白眼が見まもるうちに、すーっと朱の紐を垂らしたように刀身が濡れた。
血だ。
切羽から柄をたどって、ぽたッと、隠し文の上に血の花がひらいた。
（やった……ざまを見ろ）
美しいおもてが、残忍な笑いに、うっそりと歪んだ。
あわてるふうもなく、隠し文の血を拭って懐中にすると、はじめて黄ろい声をあげた。
「出合え！　出合い候え、くせものが忍び入ったるぞ。出合い召され」
お長屋は棟つづきだけでなく、前後に同じような構えで建っている。まだ宵の口だし、非番の者がくつろいだばかりのところだから、
「何事ぞ」
「清ノ四郎が声じゃ」
「大事出来か」
追っ取り刀で駈けつけた。
「どうした？」
「くせものじゃ、天井にな。盗人であろう、仕止めてくれたわ」
と、四郎は涼しい顔で顎をしゃくった。
天井に突き刺さった刃を、見上げた。
「これは、おてがら」
「おぬしが他出していた間に、忍びこんでいたのであろ」
「容易ならぬ。誰か天井裏に上ってみろ」
「下人を呼べ」
その声の下から、さっと、長押へ飛び上った者がある。これは〝猫〟と呼ばれる下人の久造であった。

隅のズリと工匠が称する天井板をずらして暗い屋根裏に消えたが、みんなが固唾をのんで見まもるうちに、ひょいと、その山猫のような尖った顔が出た。

「誰も……居ませぬ」

と、いう。

「居ない？　そんな、ばかな」

清ノ四郎はかたちのいい眉をひそめて、

「これだけの血だぞ、逃げられるはずがない、よくみろ」

「はあ……」

紙燭の淡い明りをたよりに、這っていったが、

「お、いましたッ」

三

頓狂な声であった。一同は思わず、鯉口をきって、

「居たか！」

「逃すなよ」

ズリ板の下にどっと集ったのは、逃げだしてきたら、一刀に斬って放つ気がまえだったが、

「ほ、ほ、こやつ……刺されていたわい、ほれ」

おどけた恰好で、猫ノ久造がぶら下げたのは、一匹の老鼠ではないか。

「――ねずみ？」

清ノ四郎自身が、唖然とした。

「まさか……」

「まさかと仰せられても、現にこのように、へい、こやつがちゃんと串刺しにされておりましたもので、へい」

みごとに、腹から背へ、するどい刃のあとであった。毛のぬけた汚ない老鼠は、もとよりこときれている。するどい歯も、半ば折れたり抜けたりしているのも、年齢を思わせ、まるで、老人のような顔に見えた。

いやな気持だった。

侍たちも、拍子ぬけして、

「ははは、これはしたり」

「なんとのう。四郎どの、四郎どのよ、なんとおみごとじゃったな」

「まことに、お腕前」

「天井裏の鼠を一刺しするとは、なかなかにわれらの真似できぬところ、さすがは四郎どの」

「殿のお目がねにかなう腕前じゃナ」

「左様左様、泰山鳴動して鼠一匹……だとしても、ナ」

ほめているのか、けなしているのか。美貌の寵童には、生理的な反撥がある。殊に清ノ四郎は、朋輩はいうまでもなく、家中から白眼視されていた。

清ノ四郎は、蒼くこわばった頬をひくひくさせていたが、

「逃げたな――」

と、独り言のようにいい、

「このおびただしい血を見られよ、老鼠一匹の血ではあるまいが」

なるほど、そう言われてみれば、いささか多すぎるようであった。

だが、こういう場合の群集心理で、がやがやと笑いとばすばかりで、真面目に見ようという者がいなくなる。

「まことに、鼠をくせものと見あやまったらしい」

と、清ノ四郎は苦笑にまぎらして言った。

「お騒がせした。お引きとり下され」

自分が嫌われていることは、誰に言われるまでもなく、自分で知っていたのである。

みんなを送りだしてからふと疑がついた。

下人の猫ノ久造の姿が見あたらない。

呼んだが返事がない。厨へまわってみた。井戸端にもいなかった。下人の部屋をのぞいて見た。この男、数日前に傭ったばかりであった。土地の者ではない。長門の生れといい、軽捷で働き者らしいというだけで、素姓はわからない。清ノ四郎が、土地の者を傭わなかったのは、かれの疎外感による。

居間へもどってくると、いつの間に来たのか、一人の女が坐っていた。

畳を汚した血をしきりに拭いとっている。

「お、楓か。いつきた」

「はい、ただいま」
清ノ四郎は迷惑そうに、
「左様なことは、こなたがせずともよい。婢女がいたす」
「はい。でも、この臭いは、早くに始末しませぬと……」
お屋形の局に仕える女であった。
「痛みいる。その手が汚れては、浮舟ノ局にわたしが怨まれよう。さ、あとは婢女に命じるゆえ……やつめ、どこに行ったか」
「――お月見ではありませぬか」
楓はそう言ってから思いだしたように、
「すっかり忘れていました。お局さまが、月見の宴に是非にとのことで、お招きに」
あわてて居ずまいをなおして、両手をつかえている。
愛くるしい顔立ちだし、その挙措も、やわらかい。が、清ノ四郎は、これに微笑を与えるだけの冷静さを欠いていた。
「あいにくと、気分悪しきまま、お言葉に甘えては、かえって座興を削ぐゆえに。遠慮いたすと左様に伝えてくれい」
「はい……では、お伝えいたしまする。でも……」
ちら、と怨じるように見上げる。
羞じらいをこめて、訴えるような瞳の潤みが、ふっと、この男の冷酷な胸に影を投げた。
清ノ四郎は目をそむけて、
「この血のこと、口外無用だ」
「あい……」
帰れ、という意味にとれた。
楓が、心の通じないことに、哀しみの眼を伏せて去ってゆくのを待ちかねたように、四郎は二階棚から高蒔絵をとりおろしている。
中から取り出したのは一管の横笛であった。

四

松の影が、動いている。地面にくっきりと影は濃い。
外に出ると十六夜月が昇ってくるところであった。

清ノ四郎は笛をおもむろにかまえると、静かに吹口をしめらせて、吹奏しながら歩きだしている。
相良屋敷を出ると、今市の通りになる。乾から巽に走る大路は築山屋敷の大手前に至る。
築山屋形は現在は山口市堅小路になっているが、そのころは竜服寺から祇園社に及ぶ宏域で壮大華麗さを誇っていた。
中興の祖大内弘世以来、十世、二百余年間大内氏の覇府として栄えてきている。
起伏に富んだ小丘には豪奢な寝殿造りが、対ノ屋をひろげ、矢倉を四方に立て、矢狭間も切ってあったが、義隆は近時公卿の風を好み、城と呼ばれるのをきらい、矢倉をすっかり取り払い、寝殿の檜皮や丹塗り、さては白砂に気をつかう殿上人の道楽な気風が、邸内の池泉にも樹木の姿も、どことなく優美にしているようであった。
嫋々たる笛の音が流れてくる。
このみやびな屋形の、美しい十六夜に、その笛の音も、その吹き手の清ノ四郎の優雅な姿こそ、まことにふさわしい点景であったが、この美しい夜の裏がわで、修羅の刃が研がれていたことを知る者は少ない。
いや、現に――
妙なる笛の音いろを、遠いものに聞きながら、一箇のいのちが断末魔を迎えていたのである。
お長屋の端になる天井裏の一隅だった。
その梁の交叉したかげに、うごめくものがあった。
「う、う……」
うごめくたびに、黒髪が、さらさらと掃草のように埃りを払い、蜘蛛の巣にからんだ。
苦悶のあまり、胸をかきはだけ、われとわが胸をかきむしっているのだ。
ゆたかな乳房が、波のうねりのようにあえぎ、ときどき、びくッと痙攣した。
うねりと、呼吸のせわしさが、間隔をちぢめ、苦しい痙攣が一きわ激しくなった。
その断末魔のもがきのうちにも、使命感は忘れないのか――いや、それは無意識のうちに作用し

ているのであろう。
それは忍者だけが持つ、超人的なほどの克己心にほかならなかった。
するすると、梁の上を、何かすべってきた。
〈——香乃よ〉
黒い影。
灯りも持たぬ。
が、その眼には、闇にうごめく、女体が見えるようであった。
〈しっかりせい。先ほどはよく耐えたぞ〉
その影は言った。
女忍はうつろな眼を半眼にあけた。闇の中に光る双眸を見た。
〈——ど、銅太、かえ……〉
最後の気力をふりしぼった女は、
〈よく来ておくれだ……〉
〈おう〉
〈あたしは……切れない〉
〈……〉
〈やっておくれ〉
〈香乃！　しっかりせいや〉
〈駄目……おまえ、やっておくれ……〉
息も絶え絶えだった。
女体はまたうねった。
凝っとそのさまを見ながら、影は——猫ノ久造こと傀儡ノ銅太の眼には、むしろ嗜虐じみた光りすら点じられている。
〈そのつもりで、来たのじゃ〉
と、その眼は言った。
いうまでもなく、さきほど老鼠を見せて誤間化したのは、この傀儡女忍者の存在を糊塗するためだったのである。
〈うれしい……これで、あたしも傀儡くノ一を全うできる〉
〈そうだ、女忍の死ぬるや、くノ一より常に還るなくして死ぬ。掟じゃ〉
〈あ、あい……〉
〈婢女のとめ、のままで死ね〉
〈あ、あい……〉
〈それでよし。最後に一言。隠し文の文言はなんと？〉

〈読めなかった……〉
死に臨んで、女忍の言葉は真実であったろう。はげしい失望に、銅太は、頬をふくらませ、唇をわななかせた。
〈犬死じゃ！〉
ぴしっと鞭うつような叱責だった。

五

忍びノ道に寛容はない。すべては忍のきびしさに貫ぬかれている。
いま、まさに死に赴かんとする女忍に対して、銅太の言葉は、たとえ傀儡忍衆の掟とはいえ、あまりにムゴい。また、それに甘んじるのが、掟を知る者の義務であった。
〈あ、あとを……〉
頼む、という女忍香乃の言葉に、
〈頼まれよう。汝れは、死ね〉
銅太は、ぎらりと指刀を抜くと、左手をもって、香乃の下腹部に這わせた。
〈刺されながら、よく耐えた。風の串刺し、天っ晴れじゃ〉
その死出の旅に与えるそれが餞別であろうが、銅太の左手は、その巧みなワザを指頭に見せて、香乃を愛撫してやっている。
そこには、忍者同士の役目上での非情さの底に流れる親近感、運命への憐れみがあった。
たちまちにして、香乃の声は苦悶から歓喜のそれに変った。
その声が、ぷっつり絶えた。香乃は死んでいた。
その顔は、苦悩はなく、快楽に弛んだ恍惚の表情で——
その息が絶えたとき、銅太は、冷静非情の忍者にもどっている。
右手の指刀（掌のうちに隠れ、時に口中にも含まれる、小さなもの）をもって、サクリと、香乃の顔を切った。
サクリサクリ、と小気味がよいような音を立てて、香乃の顔は切りきざまれてゆく。

婢女のとめ——実は女忍の香乃であることを永久に消さねばならぬ。

血刀を縦横にふるい、サイの目にきざんでゆく銅太の顔は、能面の大飛出のように歪んではいたが、それは常人の苦悩とは、かなり隔ったものなのだ。一片の感傷もすでにない。

（隠し文だ、隠し文を……）

サイの目きざみが終った銅太の耳に嫋々たる笛の音が聞えてきた。かれは、ふたたび、梁をすべった。

明月に浮れた上臈姫君の手すさびとも聞える笛の音は、寝殿の簀ノ子（廊下）に張られた宴の席にも聞えてきた。

「誰やら雅びな音いろにござりますな」

前の関白二条尹房が、こう言って、義隆を見た。

「まことにのう」

すかさず、右大臣一条兼冬も口をはさんで、

「さだめて佳人でありましょう、今宵にこそふさわし」

「趣好で、のう」

ふわっふわっと、義隆はふくらみのある妙な笑いかたをした。

どちらにでもとれる言葉であった。ほそい目に何やらある感情が動いた。

近来ますます肥って、顔のはばがひろがっている。本人が望んでいたように、色も白くなっていた。戦場を疾駆していたころの面影はなくなっている。

その色白の顔にうす化粧をし、額に天上眉、宴の座にある他の公卿たちの真似をしているのだが、どことなく、そぐなわぬものがある。

大内弘世以来、中国に冠たる武将の生地がやはり時折、顔をだすのだ。

といっても、いかつい顔ではない。

もともと大内氏には、朝鮮の血が流れている。

説によると、百済の斉明王の流れともいい、また任那国王爾利久牟王よりきたともいう。すなわち、王の子淋聖太子、欽明天皇の御宇本朝に来りて、周防のくに佐波郡多々良浜に居住し、種々の

珍宝を献ず、因りて姓を多々良と賜り、後、移りて吉敷郡大内畑に居る。現在の山口東郊の大内村がこれだ。

弘幸の後を継いだ弘世が、周防長門二国を領して、山口に城を築いた。

代々、気宇壮大であったことは、中国の辺境二ケ国を領有するだけにも関らず、永楽銭数万貫と珍重な唐品の数多くを幕府に献じたり、京師で豪遊して一時の耳目を驚かせたことなどを見てもわかる。大内氏の存在を公卿の頭に叩きこんだ。

その子義弘は、その献金と船舶の保有量などから、和泉のくにを拝領して堺の商権を掌握した事も益々、海上の権益を一手におさめることになった。

八代将軍義政のとき、いわゆる応仁の大乱に際して山名宗全に党し戦艦七百艘、兵二万を以って細川勝元軍に対抗したのは、義弘より四代目の政弘である。

さらにその子義興は、十代将軍義植を援けて戦艦七千、兵十二万三千余を率いて入洛し、自ら管領となって十一年間政権を執ったほどだ。その威力をかって、中国は備後、安芸、石見を、九州は豊後、筑前を併せて、こんにちの七ケ国の太守にのし上った。

これら戦艦というのは、せいぜい百石どまりの武装船であるが、その兵力も水軍の半ばは、いわゆる八幡船、唐人から倭寇と恐れられた連中だったのである。

——大内義弘の時に倭の海賊朝鮮に渉りて全羅道の海辺を犯す。朝鮮王之を防ぐ能わず、即ち倭寇と和をなし、其賊船に王の璽印を出し、期を約して来らしめ、賊船の大小を計って財を与ふ。其財物を得て、海港に拠りて異邦人と相遇うて交易をなし、彼我貨利を得て互に相親しむ、云々——

と、「南海治乱記」に見える。まるきり劫掠のようだが、これは誇張されている。銀山の開発により、交易を行い、値が折り合わぬときのみ、刀槍を握ったと、大内氏の記録ではいう。その辺りが、真に近いのではないか。大内氏の祖先が、朝

鮮の王族の末裔という説も、当時の交易に大いに利点となったろうし、そのために、その説を鼓吹したと思われるふしもある。

六

かくて、大内氏の勢力が、足利時代の初期から、隣接諸国を圧し、隆々たるものであったことがわかる。

名実ともに、大々名となったのは、幕府から勘合符を下賜する権を委ねられたことだ。

度重なる倭寇に悲鳴をあげた明国では、勘合符一百通を幕府に送って、正規の交易船の証とするように要請してきた。時の将軍は三代義満だ。金閣寺で有名な男だが、交易のことはかいもくわからないから、大内氏に委託したのだから、笑止だ。

海賊に海上警備を委ねるようなものだ。初め一百通のが、四代義政のときは二百通に増えたが、これもそっくり任されている。

これを私船に利用し、勢力下の倭寇に与えて、ぴんはねするなど、大いに稼ぎまくっている。財、山と積まれるのも当然だ。その上下ノ関で通行税をふんだくる。明人の著わした「海寇図説」にもちゃんと書いてある。長門を通過するときは抽分司官の検分を受けねばならぬと、あちら式に書かれているが、これは税関の役人のことだ。こうして、儲けるだけ儲けたのだからたまらない。「大内家壁書」によると、馬一匹十五文、犬一匹十六文となっている。その上銀山の開発によって、領内から、良質の銀が産出したのだ。

天下は戦乱で疲弊している際に、これだから、富有にならないわけがない。因みに、勘合符の勘合船は、後の豊臣秀吉による御朱印船の先駆をなす。秀吉が、前例に習ったのである。

あれやこれや、周防の山口は金銀のうなるみやこと称われ、まるで砂糖にたかる蟻かなんぞのように、京の公卿たちが、所用にかこつけては陸続と下向してきた。

乱世にあっては、富と兵。富裕さと軍備がすべてだ。公卿たちはすっかり山口が気に入って、

「西ノ京」

とすら呼び、その上、遷都のことまで真剣に討議されるというありさま。

この一事を見ても、富裕ほどがわかる。

足利十代将軍義稙も一時将軍の座を追われたとき山口にきている。義興の力によって京へ帰り、復位しているのを見ても、いかに勢力強大だったかがわかる。

荒廃の京を去って山口に流れてきた月卿雲客上臈姫君たちは、もう帰ることを考えない。

歴代のうちでこの義隆のときが最もピークで、二百余年に培われて安定して勢力とありあまる金銀は血の一滴まで泰平の逸楽に馴れた殿上人にとっては、まことに長安の都に遊ぶ心地がしたことであろう。

義隆が、位階は従二位、官は太宰大弐兼兵部卿にして侍従という、当時の武将としては夢にも考えられない高位にのぼったのも、多分に父祖代々の、堂上方へもたらした幸の見返りといえよう。

義興のときには、七ケ国に勢力をふるっていたが守護としては五ケ国。それが、義隆のときには、七ケ国全部の守護となり、世間から、九分一ノ殿と呼ばれるようになっていた。六十余州の九分の一を差配する大々名の意である。

貿易で儲けただけでなく、自領内に銀山が開発されたのだから、まことに濡れ手で粟、富裕はさらに輪をかけた。

――弘安年間の周防の大内弘幸時代、嬌者に誇り、石州より出る所の白銀を以て、領国に行う……

と、「三貸図彙」にあるし、「大内義隆記」によれば、

――石見の国、犬田の郡に銀山の出来つつ、宝の山となりければ、異朝より是を聞き、唐土、天竺、高麗の船を数々渡しつつ……

と、ある。

それまでの我国は銀の輸入国だったが、これから銀を輸出するようになったのだ。

それやこれや、大内氏の勢力強大を物語るものばかり、当時の君臣関係が、きわめて素朴な功利

性に依っていたことを考えれば、金銀が勢力拡充の近隣蚕食と大国の安定をもたらしたことは明白だ。

淫夢ふかく

一

こうして、勢力はゆるぎのないものになり、武威が異国までとどくようになると、その交わるところの公卿の真似をしたくなったのが義隆の悲劇のはじまりだ。連綿たる大内氏の繁栄に終止符をうつことになろうとは、雅びな生活に眩惑された義隆に気がつかない。

——朝暮公卿衆の御交り計りにて、詩歌、管弦、月雪花の御遊興のみに、御心を移され、自ら武道捨てさせ給い、弓馬、兵術の御稽古聊かもおはしまさず……

と、「吉田物語」の著者は非難をこめて記している。

さて——

説明が長くなったが、その名月の夜である。殿上人上臈らを招き宿老功臣らを侍らせて、珍味佳肴を飲食し、詩をつくり、月にまつわる唐詩や古今の歌など、知識を衒いあう、月の宴にとって、ふさわしい笛の音いろだったのである。

義隆の意を、その目まぜで聞いたのは、寵童の安富源内だった。

若髪の匂うような美童である。

まだ十六になったばかり。しなしなと女のようなからだつきや、ほそい頸すじや、紅い唇、小心なおどおどした眼もとなど、女性ではないかと疑われるほどのなよやかさで、このところ義隆の寵は、源内にふかい。

義隆が異常なほどの（というのは当時男色は常態だから）衆道癖は後に述べるが、一時は花の如き寵童二十数人を侍らしたといわれるほどだ。

清ノ四郎は、紅顔褪めやらぬころ、寵を一身に集めている。

相良遠江守に下賜された後、不慮のことあって、生れもつかぬ不具になっている。

安富源内の恩寵ぶりを眺める四郎の肚裏にどんな思いが案じられていたか。

いま、その四郎が笛を吹きつつ、逍遥しているのは、うつぼ池の畔りであった。

高く低く、月に訴えるような、歎くようなその嫋々たる音色は、聞く者の胸をしめつけて流れる。

そして、その音いろは木霊のように、また笛を呼んだのである。

同じ旋律であった。

木霊のかえるような、その笛の音を聞いたとき、清ノ四郎は、三白眼をすばやくあたりに走らせている。

さり気ない様子で築山をまわり、塀外の祇園の社にもっとも近いあたりまでくると、笛を口にあてたまま、ぱっと何やら投げた。

「……」

礫であった。

笛の音がやんだ。

清ノ四郎の耳は、それを確めつつ、おのれの吹奏をやめぬ。

その間に、旋律の乱れはなかった。

何くわぬ顔で、悠々と立ち去ろうとしたとき、木ノ下道を安富源内が小走りに近寄ってきた。

「——四郎どのか？」

闇を透し見た。

「ム……四郎だが」

笛を口から放して、木ノ間洩れる月光のもとに出てきた。

蒼月に半身を照らしだされて、笛を斜めにかまえ足をとめたところは、月の精が現われたような色若衆である。

源内はむねを衝かれたように、棒立ちになり、頬を赧らめた。

寵童としての愛らしさこそないが、玲瓏たる美しさは、同性に弱い源内の心をつかんだ。

「あ……」と、源内は口ごもり、「お呼びでございます」

「わたしか」

四郎は、凝っと源内を見て微笑した。
少年はまたぶるっとした。
「わたしをお呼びか」
「は、はい」
「殿の御用は、わたしにはないはず。わたしは近習役とは名のみ、御文庫の仕事ばかり、清ノ四郎は、ちかごろでは紙魚ノ四郎よ」
「さ、左様なことは」
少年は返事に窮して、おろおろしながら、
「遠江守さまのみか、お屋形さま御所望あらせられまして……」
「ふん……御屋形はそなたであろう」
「……」
羞恥が少年の頬を火のように染めさせた。
「この四郎に御用ではなく、笛に御用であろう」
「アノ、それは、笛の上手には、前ノ関白さま、右大臣さまはじめ、みなの衆ただただ、うっとりとされて……」
「わたしは、そなたにうっとりとする」
左腕をのばすや、片手抱きにして、四郎は源内の唇を吸った。
突然のことで、源内は逃れるひまはない。抱かれると、かっと上気して、夢中で唇に応えていた。
が、四郎の真意は奈辺にあったのか。源内は身もだえしてすがりつくと、ふいに、豹変したように、冷たく突き放してしまったのだ。
「笛の御用なれば参上しよう」
すたすたと大股に歩きだしたうしろ姿には、義隆の寵童と口を契った、ばかりとは思えない、憎らしいほど平静な足どりであった。
源内は熱い頬をおさえ、惑乱したまま、あとから小走りに追った。膝にふるえが残り、わくらばの道をゆくように、足が宙に浮いた。
へ——男と男か……まるで、この世に女が居らぬような、たわけた奴らよ〉
呟やく声が、樹上にあった。
風が木ノ葉に囁くようなひびきとふるえを持った声である。
するすると、幹をすべりその影は月光が斑を描いた径におりたった。
これは、猫ノ久造こと、傀儡忍者銅太にほかならなかった。
〈——馬六は、けどられずに跟けたか？……〉

二

夜さりノ馬六——やつしの名は仙市である。研師十兵衛の弟子になってサグッていたのはそれだけの意味があったのである。清ノ四郎と十兵衛のやりとりに不審を抱いて尾行したのはこの男だ。
馬六から銅太へ、銅太から香乃へ、傀儡忍者の組織は巧妙な連鎖をなしている。
香乃が天井裏にひそんで太刀の柄に秘められた隠し文を見つけたのには、こうした影の鎖りがめぐらされていたのである。
清ノ四郎が、笛の合図によって、礫を塀外へ——祇園ノ社の近くへ投げたのを目撃するや、
〈あれだ〉
馬六は、梢から梢へ、夜鳥のようにはねた。
外の笛のぬしは——
竹ノ皮笠に、赤い面垂布を下げて、目ばかりだし、人形箱をぶらさげた傀儡師。
礫文を拾うや、さッと闇に走る。
（ぬ！　逃さぬ）
馬六は塀から飛んだ。
あるいは、ただこれを討つだけなら、なし得たかもしれない。
馬六を激昂させたのは、そやつが、傀儡師に扮していることだった。傀儡忍衆を諷する意味はなかったろうが、じぶんたちの表芸を扮装に利用されていることが、かっとさせた。
その〝傀儡師〟をおさえて、吐かせるとともに、目にもの見せてやらねばならぬ。が、忍びたる者、いずれも一すじ縄ではゆかない。
責め問いして自白するとは思われない。できるかぎり、隠密な尾行で、敵の組織を突きとめる。それが先決であった。
討つだけなら、銅太と二人してかかれば、かなりのワザを持つとしても、難事ではなかったろう。

馬六が、そのことを口惜しく感じたのは、五丁と行かぬうちに、〝傀儡師〟の行方を見失ったことである。

（しまった！）

悟られたか。

そんなヘマはやらぬつもりだったが、相手はよほどの腕を持つやつか。

馬六は焦った。

伊勢小路から後河原の浅瀬を渡り、烏丸に入ると、右へ折れ、左へまわって、唐人街へ出る三辻で、たたらを踏んだ。

（奴……どっちへ行ったか？……）

唐人街といっても支那人ばかりではない。朝鮮人もいる。当時は、明国と高麗百済などである。

交易が盛んになるにつれて、異国船に碇泊するものが多く、唐人たちも滞在の必要があり、また山紫水明で女の情がこまやかな日本を愛して、帰化を申し出る者も尠くなかった。

こうした唐人たちは、場合によっては、交易のさいの通辞になるし、ことに唐土の習慣で親子類中など信頼するから、交易もスムーズにゆく。

義隆は保護を与え、お国ぶりの反りかえった青瓦の屋根の家の建築を許してある。

この唐人街あたりで、〝傀儡師〟は忽然と消えたのだ。

馬六はこれと目をつけた一軒に忍びこんだ。唐人の家は勝手が違う。屋根瓦はすべるし、床下がない。忍者の七方出にも、唐人風は含まれていない。言語も、六十余州の方言を会得するだけで精一杯なのだ。

唐人語にまで手はまわらぬ。

馬六は手裡剣を握りしめながら壁に沿って奥へ進んだ。庭には、墩が置いてある。陶器の艶やかな肌は、月光に鈍く沈んだ光沢を放っていて、軒端には鳥籠がぶら下っている。

馬六はそっと、窓に近よった。

鉄をまげた喜ノ字格子、唐風れんじともいうが、そこから灯が洩れている。

名月を愛でる習慣は本朝も唐土も異ならないのか、それぞれの家で何やらさんざめきが聞えていたが、この家だけか、無人のようにひそりとしている。

にせの〝傀儡師〟と、この唐人町の対照は不可解であった。どういうつながりがあるのか。かれの尾行に気づいて偶然に隠れ場所をもとめたにしては、あざやかすぎた。

もっとも、この一見、接点を見出せないようなところが、忍びノ者の狙いかもしれなかった。

その喜ノ字格子から中をのぞいた馬六は、

（あっ！……）

と、あやうく声をあげるところだった。

天井から吊された玻璃の絵どうろうが美しく、淡い明りをふりまいている。

山水や花鳥を鮮やかな色で描かれた四面が中の灯で浮き上って、天井にあたる部分は碧いろで切子になっているせいか、揺れるたびに半回転して、海の底のような透明の碧い光りか天井から壁にかけて、ゆらめかすのである。

その妖しいまでの光りに彩られた室内に寝台が据えてある。

黒檀であろうか、みごとな重ねの浮き彫りで邯鄲の夢を描いてある。

寝台の上に、うごめくものがあった。

屈折する光線の加減で、そのうごめくものが、女の肌であり、全裸であることを知るまでには、ちょっと時間があった。

それを知ったとき、馬六は忍びノ身たることを忘れたようであった。かれが、忍びノ者の緊張から、凡愚な若者に還ったことを証明するのは容易だ。

はじめ庭を這って軒先に近づき、さらに窓をのぞきこんだにもかかわらず、鳥籠の小鳥は、眠ったように動こうとはしなかった。

いま、馬六の男の血が、かっと燃えあがるや、小鳥が、ばさばさと羽音を騒がせて、チチチッと、啼きはじめたではないか。

忍者が、凡愚な人間に還った姿。小鳥の本能に、それは反応したのであろう。

（叱ッ、こやつ……）

馬六の手から、ぱっと、何やら粉がふりかけら

れた。
小鳥は、くくッと、羽をふるわせてもがくと、ふいに、動きをやめ、おとなしくなった。止り木から、病巣が剝がれ落ちるように、ぽろりと落ちた。

三

裸女の動きは、まるで男の眼を意識しているかのようであった。
もしも無意識の動作ならば、淫夢のしわざであろうか。それとも、馬六の眼が卑猥に歪んでいたのか。
女は、悶えていた。
寝台を軋ませて、転々としている。ゆたかな胸が波をうってうねり、切ない叫びを断続してあがる。
夢を見ているのであろうか。淫らな夢か。
おのれの肌を愛撫してもだえるさまは、男の眼を平静では居らせなかった。
女はひとりでいるとき、あるいは夢のなかで、自由を楽しむ。実に大胆で放恣なすがたをするものだ。
日ごろ慎しみ深くしているのが、解放感のなかであらわれるのだろうか。
馬六も忍者である。なかなかのことではおどろかない。女の裸身を見たからといって、ただちに昂奮することはない。
にもかかわらず、その寝台の、ひとり寝はかれを惹きつけ、男の血をそそったのである。
馬六はちらりと振りかえった。
小鳥はもう、羽も動かさない。
戸は開いた。馬六はするりと忍びこんだ。
女は気がつかない。
「あ、あぁ……」
せつない声は、まるで、馬六を呼んでいるように聞えた。
馬六は、そのとき、完全におのれが忍者であることを忘れている。
忘れさせるなにかを、その姿体と、その声は放っていた。

馬六が、そのことに気がついたのは、女が大きくひらいた下肢のなかに吸いこまれるように沈んで、さしたる時間を経たぬうちだった。
なめらかに白い肌には、匂いがある。
麝香か、沈香か、あるいは動物の何やら媚薬なのか、馬六は女のからだに沈むと、須臾にして、官能の火をかきたてられた。
妖しく動く肌は、そのうねりのごとくに、男の愉悦を煽り、狂おしい感覚に、かれを誘なってゆく。
「ああ、うれしい！」
女は呻いた。
おかしなことに、そのときまで、馬六は女を、日本人とも唐人とも区別しなかったことである。
そこにあるものは、ただ、女体だった。
馬六は女のからだに溺れ、その官能の沼が、底無しの古沼であることに気がつかなかった。
かれの喜悦の波は、何度盛りあがり、そして何度放出し、どれくらい時間が経ったかもわからなかった。
美しい絵どうろうの灯が、目のなかで点滅して揺れ、虹のように流れ、水たまりに浮ぶ油のようにぎらぎらっと光り——その光りがただ白一色になって、眼の裏が灼けつくような感覚に溶けていったとき——
馬六のからだから精気という精気のすべては噴きだし、出し尽していたのである。
紙のように真っ蒼になった馬六の顔を見て、女はけたけたと笑った。
〈かかったね、忍法《野ざらし》ノ内、裸根すぐり……このまま、死ぬるがいい〉
馬六の表情には苦悶はなかった。
恍惚の果てに、だらりと唾液を垂らし、白眼をむいたまま、すでにその呼吸は止っていた。
全身から血ノ気が失せ、あの若さが、百歳の老人のように枯れて、皮膚は皺々となり、紫斑が見る見るうちに浮いてきたではないか。
女には何の変化も見られなかった。
いうなれば、その血のいろ美しく溶けさせた肌は輝やき、一層、ぬめらな艶あぶらをたたえて見

えたことである。
ばさッと長い黒髪を振って女は寝台から起き上った。
〈ホホホ……これだけ可愛がってもらって極楽へ行くのだから、有難く思うがいいよ、地獄へ行くかもしれないけれど〉
女は素早く、衣裳を着はじめた。
これはなんと、あの派手な傀儡師装束の支度ではないか。
あの礫文を受けとった〝傀儡師〟はこの女忍にほかならなかったのである。
笠をかぶり、面垂布(めだれ)までさげて、支度がととのうと、女忍は、馬六のからだを曳きずって軒先の大瓶のなかに無造作に投げこんでしまった。
きゃしゃに見えるからだでも、重いものを持ちあげるワザがあるのか、軽々とした動作であった。
この唐人街では隣近所の交流がない。それぞれ、商売仇で、対抗意識があるだけでなく、唐人特有の、警戒心である。自分も他家をのぞかないが、他人がのぞくのも許さない。異郷に来ているのも稼ぎのためだから近隣相和する閑を持たぬ。隣家で何が起ろうと、関知しないのである。
その〝傀儡師〟が、裏門から消えたのを目撃した者はいない。

四

十六夜月は、ここにも照っていた。
都濃郡富田郷の若山城である。富田城ともいう、陶ノお屋形とも呼ばれている。
そのあるじ、陶安房守隆房は、月見の宴もせず、一帖の絵図をひろげて、しきりと駒を動かしていた。
赤い駒と黒い駒が並べてある。
絵図面といっても小さなものではない。方五尺あまり、ごわごわの紙にかなり精巧に書いてある。
山、川、森、土地の高低、川には深さと巾まで記され、さらに淡彩がほどこしてあった。
隆房は駒を動かしている。

中央の屋形の見取図は、それを見る者には由々しいことにちがいない。
これは築山屋形と、山口の城下の絵図に相違なかったからである。
駒には、それぞれ名前が書いてある。
杉伯耆、杉豊後、内藤下野、相良武任、香川遠江、江良丹後、宮川甲斐等々。
屋形の中にあるのは、赤い駒。
これを取巻いているのが、黒い駒。
隆房の名は、黒い駒で、他のそれよりも大きい。
赤い駒にも大きなものがある。これにはただ三字〝お屋形〟とあるだけ。
それだけで、しかし一目瞭然であった。
これは山口攻めの考究ではないか。
月の美しさも、秋の夜風も、この隆房にとっては別段の興を起こしめる力がないらしい。
駒を動かしながら、それが戦さの陣配りなのに、さしてさし迫った表情に見えないのは、この男の持つ特色であろう。
顔のせいもある。
小がらで、色が白い。眉がうすく、額が広い。ほとんど抜け上がっているようで、髪もいささか茶色を帯びている。
切れの長い一重まぶたが、重たげであった。
が、眠いのを耐えているのではない。この男の表情にすぎない。
時々、その瞼がびびッと痙攣した。上瞼にふるえが走ると、それが波動するように、こめかみに青筋がのぼり、半面がきゅきゅッと歪む。いまでいうところの顔面神経痛であろう。
陶ノ隆房のこれが持病といえた。
若年からその気があった。
隆房は、その陶という名前が示すように、唐人の血が流れている。
説によると、吉敷郡陶邑に居たから名乗ったので、由来大内氏の門葉だというのだが、地名と住民の関連は当今ほど粗雑ではない。
土地と姓氏とは密接なつながりがあり、その名前しだいで、出世もし、蔑すみもされた時代だから、簡単には地名を名乗るということはない。

ことに帰化人の村であれば尚更、そこには排他的なぬきさしならぬものがある。

大内氏の一族は多く、宇野、右田、小野、それに大宮、鷺頭などが知られた名前だが、陶氏もその分脈だ。右田氏から、さらに分れたという人もいる。よくはわからない。

思うに、陶邑（すえむら）の女が、大内氏の誰かの寵を受け、その子が取立てられて、陶邑を領有するに至ったのではあるまいか。

腹は借りものながら、やはり血の尊卑は、ことに豪族にあっては無視できないものだから。

数代前のことはさておき、陶ノ隆房は陶氏の一族で向田紀伊守の子に生れ、幼名五郎といったが、性悧発にして玲瓏玉をあざむく美貌のゆえに、伯父（母の兄）陶尾張守興明入道道麒の養子に貰われた。

道麒に子が無かったわけではない。それも男子。

さらに、美貌でことのほかすぐれた子であったと「陰徳太平記」は伝えている。

名を義清という。大内義隆はその美貌を愛でて稚小姓にしていた。

その、名流でもあり、主君の寵童でもあった義清であるのに五郎が道麒の子となり、さらに義清の変死後、義隆の寵童となったのには多くの謎が秘められている。

五

陶ノ五郎が元服して隆房と名乗ったのも、義隆の一字を下賜されたものであることは誰でもわかる。

主君の名を頂戴するというのは、大変な名誉であり、主従の関係を密接にするものだが、戦功もたてぬ幼年に、元服のはなむけとされたのだ。この主従の情交のほどもまたしのばれる。

義隆が異常なほどの男色家であったことはかれに実子がないことでもわかる。

また先ごろはじめて本朝に西教を伝えたフランシスコ・ザヴエルが、男色の罪悪を糾弾し、その説教があまりに烈しかったために義隆の機嫌を損

じ、そのことがザヴエルの保護を弱める結果になったことは、「日本西教史」の説くところだ。

男色の風はかならずしも、武門ばかりではなく、僧門にあってむしろ常態とされていたが、当時の公卿もその風が尠からず、上下に悪習が瀰漫していた。

神道はこれを知らず、仏教では罪悪としなかったから、行なっている人々も、むしろ自然な慾望だと思っていたらしい。

ザヴエルの指弾がなければ（あった後もつづいているが）問題とするにたりない風習だったのである。

大内氏の勢力のほどは前に述べた通りだが、義隆の代が最もピークで、安逸に流れた生活が、さらにこの現代人の良識では変態とされる風習に拍車をかけたことは否めない。

小人閑居して不善をなす、の類かもしれない。

義隆がいかにも陶ノ五郎を寵愛したかに就ては、有名な逸話がある。

いささか、逸話的、後人の作為を感じるが「大内義隆記」所載するところを一応信じてみたい。

義清の死後、五郎に意を傾けた義隆は、山口の屋形から、富田へ時々通ったという。

まだ寵童としては召さず、したがって純粋な同性愛だったわけだ。

山口から富田というと、およそ九里、この道を通ったというのだから、いかに想いつめていたかわかる。皮肉に見れば五郎のテクニックと狡智が窺われる。

むろん、女が男を待つのではない。主君だから、途中まで出迎える。

やはり雰囲気を重んじたろう。途中に松ケ崎というところがある。そこまで出迎えて某寺に一泊ということになる。

領主のお成りだから、坊主どもが丁重にしないわけはない。さまざまな精進料理で、いや、酒肴も出して、二人の情感を手助けたことだろう。

思いのたけをなよ肌にそそいで、夏の夜は無情に明けたが、情交の深さのゆえか、五郎は眠りからさめない。

半ば紅唇をあけて、まどろみにある五郎の寝姿は、いよいよ愛しく思われたのであろう、義隆は起すのも不憫とそのまま山口に帰った。と、いうところから見ると、義隆がまだ部屋住のころかもしれない——が、そうすると、年齢的に少しおかしい。十四違いで、二十二の時義隆は家督しているから、ぎりぎりに見ても五郎は八つということになる。

八つくらいで同性愛の対象はちょっとおかしいとも思うが。

ともあれ、義隆は山口へ帰ると、きぬぎぬの歌を詠じて、五郎のもとへ送った。早馬で届けさせたのである。公卿などの情交の風習である。

その歌として伝えられているのは、

もぬけなりとせめて残らばうつせみの
世のならひとも思いなすべし

と、いうのだ。

うつせみは、空蟬で、現身にかけてある。空しき恋、いつまでも一緒にいたいが、そうもできないのが世のならいだ、許してくれ、心はそなたにある、という意味だ。

ちょっとできすぎている話だし、作為が匂うといったのは、漢書に、断袖、ということがあるからだ。

佞幸伝に、

「董賢字聖卿、哀帝立拝二黄門郎一、寵愛日甚、常興レ上同臥起一、嘗共昼寝、賢偏藉二上袖一、上欲レ起、賢未レ覚、不レ欲レ動レ賢、廼断レ褒而起」

南史の梁宗室伝にも、簡単ながら出ている。

董賢という寵童と寝たあと、帝が目ざめて起きようとしたが、袖が董賢のからだの下になっている。

起こすのも不憫だからと袖を（多分、錦繍の）切って起きた、ということで、この〝断袖〟といえば男色のことをさすようになった。

余談になるが、武将や僧侶の逸話には、こうした盗作？　もしくは翻案みたいなものが非常に多い。

美貌な女が尼になるために、焼鏝で半面を焼いて漸く入門を許されたとか、大谷刑部の膿を石田三成がすすって恥をかかさなかったとか。

後者などいかにも三成ごときに刑部ほどの者が関ケ原で与力したのがおかしいとし、さらに刑部が業病だったという点からひねりだしたものらしい。

というのも、これも故事があるからだ。吮疽之仁、という。魏の人呉起が、部下の兵の疽の膿を吸いとってやったりしたので兵はいずれも大将呉起の馬前に一命を捨てて悔いなかったという。

これからひいて、東鑑にも、源頼朝の敗走のところで疵を吮う云々が出てくる。

さて、話が横道にそれてしまった。逸話の作為性は別として義隆が五郎を、かくほどに寵愛していたのは事実であろう。

また、五郎が、義隆をそれほど惹きつけていたであろうことも、推測に難くない。というのは、後々まで、義隆は五郎——安房守隆房の逆意を信じなかったからだ。

忍秘戦さ駒

一

いま、一穂の燈火のもとで、家人郎党も遠ざけ、一帖の絵図をひろげて、布陣、軍の進退をしきりに考究している隆房は、若年のころの美貌こそないが、大内氏筆頭の重臣にして徳地三万貫を領し、安房守の身分にのしあがっている。

その恩寵ある身分にしては、隆房のこの夜のすがたは奇ッ怪といわねばならない。

攻めるのは築山屋形である。

外敵の侵入に備えての兵法というのならわかる。

が、黒駒に書かれた名前は、江良丹後や宮川甲斐であり、この布陣は隆房が総大将となっての築山屋形攻めをあらわしているではないか。

謀叛の軍陣であった。

十六夜月にも心動かさないのはそのせいか。

風が入ってきたのか、ふうッと、灯が消えかけた。

「……？」

灯はまた、点いた。

油がきれたわけではない。不思議なのは、安房守の鬢髪が一毛だにゆれなかったことである。

肌に夜風は感じられなかった。

灯だけが妖しくまたたいて、消えかけたのだ。

「――なんとしたことか」

呟やいたとき、ことり、絵図面の上で駒がひっくりかえった。黒駒である。

裏は赤になっている。

つまり、隆房のほうからは、味方が敵になったのだ。

ぎょっとした。

おぼろな闇が四囲に迫ったなかから、

〈――お邪魔でござったか〉

奇妙な声がした。

「う……」

隆房は佩刀を引きよせた。

闇を睨んだ。

「だ、誰だ、そこにまいったのは！」

どこをむいていいかわからない。闇の声は四囲から湧くように聞え、とらえようがなかったのである。

〈てまえでござる〉

「う……おまえは」

隆房は、ほっとしたように、肩をおとした。

が、刀は引きよせたまま、

「――影、か」

と、うめくように言った。

〈は……〉

「影だな、たしかに？」

〈見えまするか、てまえが？〉

「いや……」

〈見えねば、てまえでござる〉

奇妙な問答だった。この影の声を最初に聞いたのはいつだったか。はじめから、影はかれの意表をついていた。

隆房が弓を引いているとき、その声がした。

〈――御自慢のようだが、的にあたりますまい〉

と、その影の声は言ったのである。

ひろい的場で、近くには誰も居なかった。にもかかわらず、その声は聞えたのである。

幻聴と思った。が、苦笑しながら、弓を引いたのが、一矢も当たらなくなった。

いつになく、よく命中するので、実は気味悪く思っていたところなのだ。

急に当たらなくなったのは、どういう作用かわからぬ。

三十本ばかり引いてことごとくそれたとき、また声がした。

〈おなげきなさることはない、もう一度、ひかれよ。こんどは黒芯を射るであろう〉

あきらかに幻聴ではなかった。そして、その言葉は正しかった。

急に的に入りだした。一矢もはずさなかった。

気味悪くなった隆房は、故意に、黒丸の外を狙った。

が、これも、黒の中芯を射ぬいている。

真昼の陽のなかで蒼白になった隆房の耳にさらに、その声は聞えた。

〈今宵参上仕る。御用命あれば仰せつけ下されい〉

その夜、忽然と寝所を訪れた、その声のぬしは、

〈そなたさまの心中、われらにはわかり申す、望みをとげられるがよい、この忍法をもってお助けしよう〉

はじめて、その妖異のワザをの深奥にふれた思いがした。

心中を見ぬかれているのは、否めない。むろん、猜疑しなかったわけではない。が、その、猜疑する心中まで見透されていたのだ。

「報酬は？」

と、隆房は聞いている。

「黄白か？　それほどの幻妖不思議なワザがあれば、金銀は思いのままであろうが」

〈――むろん、銭ではない〉

「では、なんじゃ、なにゆえ、わしに手を助ける」

その問いには、ふわふわと、気味悪い笑いがかえってきただけであった。

〈こと成れば望みを申す。それが条件じゃ。いかが、わしのワザがほしくはないか？〉

二

誰の胸にも秘密がある。

おのれだけの思考を、他の目でのぞかれたのは誰も好まない。

その闇の声——影なき影は、陶ノ安房守隆房の心中を見透していたのだ。

もっとも、隆房の行動から推測すれば、目のある者ならおそよのことはわかる。

隆房が義隆に対して逆意を抱くようになった動機は相良武任という成り上り者との確執、身分上の争いに依るとする説が現在では定説になっているようである。

が、それだけではなかったのである。

相良姓だから、〝落ちゆく先は九州相良〟こと肥後人吉の出かとも思われるが明確な記録はない。九州人であることは、間違いない。

筑前の武家に生れたが、幼年より仏門に入った。別段の意味はあるまい。一家から一人僧になれば三代栄えるという俗信の時代だ。

僧堂は乱世にあっては唯一の学問の場だから、名僧ならずとも有識者として重宝される。

武任はことに達筆であり、博覧強記、その上、躯幹雄偉、どういうきっかけかわからないが、義隆の家臣になった。

祐筆である。義隆は文学にあこがれが強くなっているから、武任を重用した。

——才覚発明にして巧言令色を専らとせしかば、次第に立身して大内家の政事、彼が胸懐に出ず……

と、「陰徳太平記」にある。

短時日のうちに出世して、遠江守に任じられ、いつの間にか重臣の一人にのし上ってしまった。

何しろ、頭は切れるし博覧強記だし、腕は立つしするから、帷幕にあって、薀蓄をかたむけられると、誰も太刀打ちできない。

戦場往来の武将には、

「孫子の兵法では」

とか、

「三国志演義は、ただ物語的興味で読むには勿体のうござる。戦さの用兵に大いに役立ち申す」

などとまくしたて、おのれより知識がある者には、

「左様に仰せられても実戦では違うな。それがしが豊後の大友勢と筑紫野に於て戦いし時は」

とか、

「竜造寺、大友、島津、この三大名の弱点と申すはそれぞれにござるもので、これは私見じゃが、猛虎にも泣き所と申そうか、馬の乗りかたにも癖があり、その隙を突けば……」

などと、どこまでがほんとうかわからないが、見たことのない者は、煙にまかれてしまう。

義隆自身にもむろん責任がある。

長幼の序を重んじ、功臣の序列をきちんとしていれば問題は起らないが、繁栄にあぐらをかいて、趣味が変ってきたから、逸材の評価が違ってくる。

武任が心映えの良い者なら、それはそれで価値はある。

この武任に向って、堂々と駁論するのは、陶ノ安房守一人という状態になってしまったが、武任は、譜代の重臣ことに昔は義隆と断袖の仲であったという隆房とことをかまえてもつまらぬと思ったのだろう、手を変えて、下手に出てきた。

まずおのれの娘を風流にこと寄せて、拝謁させた上で、

「陶ノ安房守の嫡男長房を婿がねにと望んでおりまするが」

と、申し出た。

義隆は名だたる好色漢だ。

男色のほうが好きで異常な執心があるが、初もの食いなら、夜昼を問わない。

「なるほどな」

二人の確執には気づいている。

それも名案だと思った。

「考えて置こう」

と、気を持たせておくと、武任は、花ノ宴にことよせて、義隆の台臨を仰ぎ、白昼の休息に娘に枕の塵を払わせた。

記録によると、嘗つて義隆が手をつけた数百人の男女の誰よりも美しかったという。義隆はお初穂をつんでいい気持になったから、機会を見て、その意を通じさせた。

隆房は色を変えて怒った。

「成り上り者の相良ごときとは縁組はでき申さぬ」

先にも述べたように、大内家の一族か譜代の重臣でなければ、拾好がつかないのだ。

そうでなくとも、その増長を憎んでいる相手だから、

「せっかくの仰せではござるが、きっぱりとお断り申す」

と、使者の杉豊後と青景越後に言った。

三

あるいは、相良は二股かけていたのかもしれない。縁組が成ればいいし、成らなくてももともと。仲介した義隆の顔がつぶれるだけで、したがって隆房がうとまれることになろう。

どちらに転んでも損はない、と計算したのではなかろうか。

だが、この計算は少しはずれた。

義隆は色恋以外ではあまり激さない性質だ。

近来、ことに堂上衆との交通が深まり、公卿がっているから、大様で寛濶で風流を最上とするようになっている。

もしいま、かれを怒らせるとすれば、寵童を奪うことぐらいであろう。

さて、この計画が狂って、義隆が隆房をさほどうとむ様子もないのを見ると、武任は、さらに悪智恵をめぐらした。

隆房の所領にケチをつけはじめた。

東大寺と興福寺の荘園を横領しているというのだ。

これは事実。が、南北朝の争乱以来六十余州が乱れて守護や支配の区分が不明確となり、豪族の

擡頭で勢力範囲をそれぞれ自領にしてきたのだから、いうなれば、ありふれたことだ。一般的な慣習でも、それを故意にほじくりかえして是非を論じられては困ることが人間社会には沢山ある。

闇米を買っては物価統制令に反すると知っていても、良心を痛める者はいなかった。だが、法律を持ち出せば、違反にはちがいないのだ。

「彼奴！　いつぞやの仕返しをはじめおったか」

安房守隆房は怒った。

「いっそ討ちほろぼしてしまうがよろしいと存じます」

家臣たちも常々、腹だたしく思っていたところだから、主人をけしかける。

陶ノ安房守隆房の動きおだやかならず、と聞いて遠江守武任は義隆の袖にすがった。

まともに軍勢をむけられてはかなわないのだ。山口には家臣も少数しか連れてきていない。

こんな場合に、名君なら、採取選択に誤りがないのだが、すっかり長袖衆になってしまっているから、もっとも穏便な方法をとった。

「一時、所領へ戻るがよい」

と、武任を筑前に帰してしまった。

これは、隆房からいえば、主君が肩を持って逃してやったことになる。

ここで、義隆が、武任に全面的に詫びさせるか、隆房に討たせてしまえば、しこりは残らなかったかもしれない。

隆房は、腹を立てた。当然であろう。

「お屋形が彼奴を庇いなされた」

ことであり、

「虫ケラの命を助けて、譜代のおれをないがしろになさる」

としか思えなかった。

隆房も狡智をもって寵を一身に集めた男だから、どうしても考えが陰湿だ。

隆房といい、武任といい、さきの清ノ四郎といい、どうも登場してくる人物が、考えも行動も陰靡でじとじとしているが、これはひとえに、義隆の異常な衆道が醞しだした臭気といえる。

隆房のこの変態的な性癖が、悲劇の駒を進めた

といわれてもしかたがない。

義隆の楽天性は、自分に都合の悪いことはすぐに忘れてしまうことだ。

こうした性質は、めぐまれた環境に生れ育った、苦労知らずに多い。たわむれの言葉や行動が、他に与える影響に気がつかないのだ。

隆房が義隆に含むところがあったのは、心ない悪戯に発している。

男色の契りも長くなると、正常を欠いてくる。二十年ほど前のことであった。

同衾の喜悦のなかで、義隆はいった。

「愛しゅう思うぞ」

「わたくしも……」

「いのちをくれてやりたいほどに」

「わたくしも！」

「まことか」

「ああ、恨めしや、この胸のうちを……胸を断ち割ってお見せしたく存じまする」

「それほどまでに」

つと、義隆の柔らかい手が、隆房の股間に触れて、

「これを……わしにくれるとか」

「はい、あげませいでか」

「わしだけのもの」

「はい。上様だけのもの」

「その証しを見たい」

「差しあげまする……」

恋は熱病という。男女の仲も、同性の場合も変りはない。いや、同性なればこそ、異常に烈しくなる。燃えさかる情炎のなかで、少年が何を言い、何をもとめたか、その言葉に責任はあるまい。五郎はうつつであった。

（念友なる証しを！）

義隆の行為もたしかに異常であった。

（余人には渡さぬ）

言いざまに、鋭利な小刀で、隆房の男根を切断したのである。

四

憎しみではない。愛のあまりの行為だと思えば、怨みも当初は少なかった。睦めての後、さすがに悔じた義隆は、出来うる限りの手当てをほどこし、知行を増し、関銭、船積みなど種々の利権を与えて、謝意を表したという。

当座は隆房も納得した。熱情が踏みはずしたと思えばいい。我慢も出来た。歓楽も永く、若少より味わっていたゆえもあろう。

隆房が不具になってから、義隆の寵がうすれたのはしかたがない。

隆房が、不平を鳴らさないから、いつしか年月とともに、義隆も自責の念がうすれてくる。

こうして、念者としてのわりない仲はふた昔の過去のものとなって、陶ノ隆房は、重臣筆頭の地位にある普通の主従にすぎなく見えた。

相良武任（さがらたけとう）のような男が出てきて、義隆のほうでは、そうした事件を忘れてしまっている。

夫婦の仲でもそうだが、うまくいっているときは、看過できた異性のことが、憎々しく思いだされてくるという塩梅で、隆房が武任の事件によって、男根切断の恨みを燃えたたせてきたのも、人間として自然の感情といえよう。

そのことに気づくべきであった義隆がのほほんとしていたのも運命か。

隆房が、清ノ四郎を使嗾するようになったのも、共通の感情からの結びつきによる。

清ノ四郎も、遠江守武任の、これは嗜虐癖によって、逸物を切断されている。

主君の寵妃との密会を発見されて、受けた罰であった。

もっとも、自ら手を下したのではない。猿ノ彦という忍者にそれをなさしめた。

彦は、主命を拒み得ず、刀をふるったが、そのことによって、かえって、四郎の奴僕たることを希うようになったのも皮肉なことであった。

山奥で拾われ、相良家の陰ノ臣であった忍び雲ケ峯の鹿又に預けられ、一人前の忍びノ者となれた彦は、いうなれば、猿から人間になった。相良家に受けた恩は三度生れ変らねばかえせまい。

猿男にも、人なみの慕情が、四郎の美しさに動いた。その熱情は、恩義を超えた。

同病相憐れむ感情の結びつきと言ったが、厳密には、陶ノ隆房が、四郎の武任への怨恨を利用しようとして、誘ったのである。

すなわち、四郎が、研師十兵衛より密書を受けとったのも、隆房のためにほかならない。

隆房は相良遠江守が逃亡したと知ると、同じく遠江守に意地悪をされて憎んでいる重臣の杉伯耆守重政と内藤下野守興守の二人を呼び、

「お屋形のなされよう、あまりと存ずる。相良ごときを信頼なされ、われらを遠去けるさえ剰つあるに、奴を逃しなさるとは。このままでは、いつわれらの身が危くなるやもしれぬ。かくなっては、決断いたすほかはなし、われらも軍備を増し、近国の毛利、大友を誘うて、烽火をあげては如何かと存ずる」

二人が即座に賛成したかどうかわからない。

尠くとも、その可能性はあると見ぬいたのであろう。隆房は、病気申し立てをして、おのれが城へもどった。

都濃郡富田郷若山城である。

そして、それきり、何があっても、山口へは出ない。しきりに、劃策していたのだ。

これを優柔不断ととったのか、相良遠江守はのこのこと山口へもどってきて、また大きな顔をしはじめた。

その一挙手一投足、すべて筒抜けにわかるから、隆房はあせらない。

かれは、いたずらに日を送っていたのではない。整えるものは整え、打つ手は打って、吉左右を待っていたのである。

清ノ四郎が十兵衛より受けとった隠し文、それこそ、隆房が期待のものでなければならなかった。

眠り毒花

一

「――影か？」

陶ノ隆房は、いくらかの腹立たしさと、待って

いた者が現われたような、ほっとした声で、

「今宵あたり現われると思うていた」

〈ほ……さきほどの様子では……〉

と、影の声は、皮肉な調子で揶揄するように応えている。

〈そのようにも見えませなんだが〉

「……おもてには現わさぬ」

〈なるほど、用心深い〉

「して用件は？　あちらの返事があってか」

ふっと灯がまたたき、小さな炎は、ほとんど消えそうになった。

その溶暗のなかに、花びらが散ってくるように、ひらりと紙片が舞いおりてきた。

陶ノ隆房の鼻のさきである。

隆房は片手でそれを受けとめながら、上を見た。

紙片をおとした者の影を見ようとした。

〈ふふふ、どこを見てござる〉

声は背後から聞えた。

「苦心の隠し文、早よう披見なさるがよい」

「う、うむ」

肚裡を見透かされた隆房は、闇のなかでちょっと赧くなった。

書面は、れいの隠し文である。

――同じ巣にかへりしかひの見えぬかな

いかなる人の手ににぎるらん

それだけであった。

うすい紙をおしひろげて見ると、短冊になっている。金箔散らしだが、小さく折りたたまれたので、金粉が散っている。

これは、万一、他の手に渡ったとしても、秘密の文とは気づかれないためであろう。

「ふむ……」

隆房はうなずいた。

「御苦労であった」

それから経机に寄ると、さらりと何やらしたためた。

「返し文」

〈は……〉

「十兵衛とやらのもとへ、な。もしも、あちらへ

の〝風〟がなくば……」

〈てまえが〉

「頼む」

隆房が絵図の前にもどると、足音もなく黒い影が経机から一書をつかんで消えた。

ほとんど、ふた呼吸するほどの短かいあいだのことである。

隆房は背後に目があるかのように、

「急ぎだ」

と、付け加えた。

(承った……)

その返事は、かなり遠くから聞えたのである。

翌日の午後、隆房は小姓一人を供に連れただけの平服すがたで、馬を走らしていた。

海岸沿いに四里たらずで江泊になる。滝口岬の松林をはずれると、隆房は馬からおりた。

秋風強く、松籟が颯々と鳴っている。

誰の目にも、隆房の平服すがたは、浩然の気を養う遠乗姿に見えた。

義隆に対して、隆房の行動があらわされたのは、今年の二月、大内家代々の氏神である水上妙見の大祭の大頭役をつとめることになっていたが、病いを口実に出席していない。

隆房の憂色の原因は、多少なりとも、重臣らの間に知られていたが武任のほかに、かれを危ぶんでいるのは冷泉隆豊くらいのもので、義隆もあえて口に出せば紛糾を招くだけだから、看過している。

かれの思慮も公卿的になって、当らず触らずにしておれば、時が解決すると思っているらしい。

いま、隆房が主従二人という気楽な姿なのは、気晴らしの散策と見えたのである。

小姓が漁師に命じて、小舟を出させると、隆房は馬をおりて乗りこんだ。馬はなぎさに近い松につないだ。

一衣帯水、ほとんど二、三丁で舟で楽しむまもなく、向島の渚に着く。

いまの防府市の三田尻、中開港をかたちづくる向島である。ここに江良丹後守興房の別墅があ

る。

隆房の訪れは不意だったので、江良丹後守は驚いたが、急いで屋形に招じ入れた。

「おかまいあるな。別段の用事はない。気散じに訪うたまでのこと」

大声で快活に言う隆房の様子に、丹後守は何やら悟ったようである。

別墅は牛ガ頸の小高い丘にある。右に西泊の岬と湾の舟入りを見、前面に遠く周防灘の水平線に紫紺にかすむ宇部岬が見える。

「いつ参っても景勝の思いをあらたにする」

隆房は機嫌がよかった。

丹後守の家来は、抜身の槍を横たえて塀の内外を見まわり、胡乱の者を近づけぬように気をくばっている。

二

美しい女が、酒肴を運んできた。

しとやかな物腰、手つきである。瀬戸内の朝凪の水面を見るように、静かな顔立ちも悪いもので

はなかった。

運び来たって、立ち去るうしろ姿を見送って、

「逸物じゃの」

隆房は微笑して言った。

待っていたように丹後守は、

「で、ござろう」ほやりと頬を崩して、「近ごろ、めずらかな掘出し物でな、ずいぶんと楽しんでおります」

「あちらには御覧に入れぬことだ」

「……」

目があった。隆房は、また微笑した。

懐中から、れいの反古短冊をとりだした。

無言で渡す。

「なにか?」

丹後が読み下すのを、凝っと見ていたが、

「——同じ巣に……の」

「……?」

「御存知であろ、それは、源氏からとった歌じゃ。槇柱……」

「存じているが、この歌は、誰が?」

「豊後よりまいったもの」
「豊後！　大友が……」
「左様」
それで唄の持つ蔭の意味もわかったようである。
豊後の大友義鎮といえば、若年ながら、九州を三分する勢力の一つで、その猛将ぶりは、中国すじにも聞えている。大内義隆が文弱に流れているせいで、一層、畏怖と期待を感じさせるのであろうか。十年もたてば九州全土、大友氏のものになろうとさえ噂されていた。それに比べると、安芸の毛利元就はまだ、鋭鋒をあらわしてはいない。
が、一方の雄であるのは間違いない。
眼のある者なら、南の大友と、東の毛利が大内家にとって、警戒すべき存在だと気づいているはずであった。
「――直筆であろうか、大友の」
「多分……」
「――同じ巣にかへりしかひの見えぬかな、……これは謀叛のムダを意味しているのではあるまいか」
「わしはそうは思わぬ。――いかなる人の手にぎるらん……と、これを案じているのじゃ。つまりは、保証であろう」
「なるほど」
「われらに一味して、軍勢に合力したもの、甘い汁だけ吸われてはかなわぬ、と、こういう意味に、源氏を借用したのであろう」
「なるほど。ことわりでござるの」
「されば、まず、確約いたすためにも、条件を呈示することじゃ、それがしの考えでは、御舎弟の晴英どのを迎えて、大内の名跡を襲わせる……」
「それは」
と、江良丹後守は、眉根に皺よせて、
「それでは、大友に併せられる怖れがござるぞ。義鎮は歌の道も心得ているだけではない大した荒武者、時によっては、猛猪も意外に俐口に立ち廻る。廂を貸したつもりが気がついて見ると、母屋まで……」
「ふふふふ、そこに抜かりはない。初めから大友

の勢力は利用するだけと考えておる。晴英どのは、木偶よ……」
「はっははは、なるほど、そうなくてはかなわぬ。やはり安房どのの才覚」
「晴英どのは、われらがよきように教育申し上げる。もし成らねば、そのときは、ふふふふ」
「はははは、したが、安房どのの教育あらば大内の血脈に目ざめることでもあろう」
「左様、天下にも名目が立つ。それが狙いじゃ」
万全の策であろう、と、隆房は、髭のうすい唇もとをほころばせた。
大内の血脈――
これにはちょっと説明して置かねばならぬことがある。
大友義鎮の母に就いて異説がある。大友系譜を豊州雑誌本で見ると、義鎮のところに、〝母大内義興女。とある。義興は義隆の実父だ。が、末尾に〝或ハ母ハ伏見貞常親王息女ト云々〟と付記してあり、晴英のところには、同じく〝母大内義興女。としてあり、右傍にイニ母伏見殿と注記がある。また、群書類従本に拠る「大友系図」では、義鎮の母を〝坊城藤原源氏〟としてあり、義長（晴英）の母同義鎮となっている。
どちらにしても同腹である点ではひとしいが、河出書房版の日本歴史大辞典には、大内義興の女のほうをとってある。
陶ノ隆房が名目上からも、晴英を迎える案をたてたのは、この場合、すじが通っている。
系図というものは、出鱈目が多いので信じ難い。武将の家系がいずれも、源平藤橘のいずれかの出になっているのを見ても、その作為がわかる。おれの先祖は百姓だとか、漁師だとか、商人だとか、僧侶だとか、正直に書いている者は一軒もない。
氏族が重んじられた時代、腕一本槍ひと筋で城持ちとなったあとで、捏造したのが多いからだ。豊臣秀吉でさえ、あれこれこじつけて、天皇の落胤説さえある。多くの系図が、徳川時代になって、世の中が落ち着いてから作られたので、出鱈目が多いわけだが、他に典拠がなければ、あるものを

と、褒めそやして、
「大友の猛虎も、疑いを解くでござろう」
打ち笑った。
「一首つかまつりました」
隆房は矢立の筆を懐紙にさらさらと走らせた。
「腰折れでござる」
「さて……」
走り書きながら、流麗な女性的な字であった。
知るやいかに、すえの山風吹きおちて
もろく樗の散はてんとは
丹後守の眼は、さらに輝いた。すえは陶である。樗は大内だ。
「まずは前祝いに一盞……」
と、家人を呼び立てた。

陶ノ隆房の忿懣はいかにおおらかでぬうぼうになった義隆でも、気にかかっているはずだ。普通の武将なら心利いた者を身辺にひそませるはずである。
が、義隆にはその気持はない。

一応資料にせざるを得ない。

三

いうまでもないが、義隆の甥に当る大友晴英を名目的にせよ大内の後継者に据えるという案は、天下の聞えがよい。つまり、隆房が義隆を弑逆するのは、私怨ではなく、天下の政事のため、邪を払い、正に戻す為であるという大義名分が通せるのである。
（おそろしいほど、頭の切れる人だ）
江良丹後守は、まじまじと隆房を見た。
かれはこのとき、背すじに冷たい水を浴びせられたように慄然としている。
後に思えば、このときの恐怖は、故なきではない。こと成ったのちに、丹後守もまた隆房の兇刃に果てる運命だったのである。
そのときはしかし、神ならぬ身の知る由もない。
むしろ、頼母しさに見えたことだ。
「御方策に卒爾はありませぬの」

妖異の忍者「影」のサグリは、義隆とは別のところから、その草カマリが派遣されていることを報告している。
「誰だ、そやつは」
と、聞いても、
〈判然としませぬ。われらの至らなさではござるが……彼奴らの忍法も、あなどり難い〉
忍者を使嗾しているきれ者は誰か。
相良遠江守武任の息のかかった者かもしれないし隆房の失脚によって得をする者であろう。
（香川遠江か？　岡部左衛門太夫かな？……冷泉隆豊あたりかもしれぬ）
見当をつけた。
「そやつ、かならず突き止めよ」
と、先日「影」にかれは強く要望している。
「遠江の手なれば、四郎が目耳に感じるであろう」
〈さて、出来るかな、あの若衆。色でもってたぶらかそうにも、ナ。忍びたる者、口がタテに裂けても吐くまいよ〉
「固い貝でも、死ねば口をヒラクぞ」
〈ほ……言わっしゃる〉
ふわふわと、小莫迦にしたように嗤って、
〈死んでから口をヒライても、ものの役には立ちませぬて〉
道理だ。
〈固い女の肌を無理口説きしてヒラかせるこそ楽しみなもの。死んで肌を舐めても犯しても楽しゅうはあるまい〉
「くだらぬことを申すな」
〈難かしいと申しておる。われにワザあればとて、彼にもある。素人なれば口を割らする手もある。が、忍びノ者はいかなる若忍とても、このワザに耐え得る……〉
一々道理だから、隆房も沈黙せざるを得ない。
ともあれ、こちらにも、敵の目が、ワザが伸びているのだ。
昨夜、「影」が、義鎮の短冊をもたらしたとき、隆房が猜疑したのはそのためである。
この丹後守の別墅に来ても、気を許せなかっ

た。

細心の注意が必要だった。

隆房の身辺ばかりではない。隆房の陰にこもった行動には、お人善しの義隆以外、誰でも不安に感じるのが当り前で、大内家筆頭の重臣が叛旗を立てるとすれば、自ら、参画与力する者が出るであろうことは当然、憂慮された。

隆房と日ごろ親しかった江良丹後守や宮川甲斐守の身辺に、お屋形に取り入る者や遠江守に近しい一派の忍者の目が光っていると見るのは、あながち、取越苦労ではない。

九分ノ一殿といわれるほどの大々名、従二位兵部卿にして侍従を兼ねる高位の者を毒そうとするからには、これくらいの細心さは必要だ。

いや、それでも、まだ足りなかったのである。

四

酒を飲んでいるうちに眠くなった。

「われらの城とちごうて、酒のいろが一段と冴えているようじゃ」

と、隆房は、腫れぼったい眼になって、

「卒爾な仕儀なれど、いさか険が重とうなったような」

「ははは、これはうれしいことを仰せられる。御身さまにさほど信じられたとは、丹後ちかごろうれしく存じる。褥の用意をさせましょう」

江良丹後守は近習に早速、休息の支度を命じた。

乱世である。いかに同じ家中でも他家へ行って午睡を楽しむなどとは、よほどに心安い、信じきった仲でなくてはできぬことで、丹後守の喜びは、大仰すぎるようだがもっともなことであった。

そうした主の心情まで、計算に入っていたかどうか。

左様、これは忍法《仮睡》のワザにかけていたのである。

酒中に、秘薬が入っていたのか、縁先の茂みのなかに、ワザを掛ける目が、指が、あったのか。わからない。

設けられた褥に、なだれこむように隆房は身を

横たえた。

まことに、こころよい熟睡(うまい)であった。

いや、厳密には、まことの熟睡といえなかったろう。眠りは肉体がもとめるものではなく、人為的になされたものだったから。

隆房は、その仮眠のなかで、女の映像を抱いている。

その顔は、さっきの——丹後守の女にまぎれもなかった。

(——温かい……)

温かい靄にくるまれている。春の花の野に寝ころんでいるような気持だった。けだるいこころよさが四肢に光ちている。日ごろの緊張から解き放たれたような、楽々たる気分だった。

白い花の匂いも、こころよかった。隆房は目をひらいた。

(何の花だろう……美しい)

花の名前が思いだせなかった。

ちかごろ、花などに心を奪われたことがなかっただけに、妙に気になった。焦った。

そして、その名前は、胸の底にあるはずなのに。

(はて……どうしたことだ? 思いだせない、たしか、これは……)

その眼のまえで、花はゆたかにひらき、たわわに花弁を重く垂れたと思うと、すーッと近寄ってきた。

艶然と笑う——花は女の顔になっていた。

あの女だった。

(お逢いしとうございました)

女は言った。

こぼれるばかりの笑顔である。その眼には燃えやすい、情火が、あやしくゆらめいている。

(はて、そなたは……)

(丹後の妹でございます)

(妹御?)

おかしい、と思う心は働いていたようである。

(あい……)

と、しおらしい。

黒髪がうなじから背を蔽って、羞じらいにしなしなと身をくねらすたびに、さやさやと床を掃い

た。

（——丹後に妹御が居ったかな？）

ほほほほ、と小さく笑った。ひら、と白い蝶の舞うように、手が口のあたりにうごいた。

隆房は恥ずかしいが、この女に心がかたむくのを感じていた。

（そなたほどの美しい妹御があれば、誰も捨てはおくまいに）

そんなことを言ったようだ。われながら歯が浮くような言葉。風流めいた気持になっていたのか。

（——武任ごときの娘ではなく、そなたならば、侍の長房にこそふさわしい……）

（うれしゅうございます）

（いずれ、長房にひきあわそうほどに、富田へ来られよ。ここから、僅か四里たらず……いや、ことが済んだ後に、来たがよい。わしが九分一ノ殿と拝められるようになれば、そなたも存分に栄華ができよう……）

五

意識はなかったのである。すらすらと言ってしまった。

抵抗も後悔もなかった。さわやかな気持であり、そして、それは目の前に実現するようであった。

（——まあ、うれしい）

（そなたは、次の世の北ノ方じゃナ……）

（でも、築山ノお屋形には、沢山の武者がおりまするゆえ）

（われらにも、一騎当千の荒武者ぞろいだわさ……）

（どなたさまが、与力なされてか？）

気がつくなら、この段階であったろう。隆房には抵抗がなかった。

女の手を握り、女の乳房のまるみを、感触を味わっている。侍の嫁にするというのだから、矛盾しているのだが、本人にはわからない。羽化登仙の気持というのが、この場合あてはまるかもしれない。

（——まず、江良丹後、宮川甲斐……内藤興守もな、杉重政もな……）

（御家中ばかりかえ。近国の被官大名衆は？）

（おうさ、豊後府内の大友義鎮もよ、ははは大軍を送ってくるわ）

（まあ、ほんとうに?!）

（ほんとうじゃ）

（信じられませぬ）

（真筆の文がある）

（でも……）

（源氏の敵じゃが、意は通じておる。義鎮の筆跡……）

（その文とやら、いずこに）

（ここにある）

さきほど丹後守に見せた隠し文である。丹後守が目を通して合点したあと、また匂い袋に入れてある。万一を慮ったのである。

（——いい匂い）

と、女はいい、すばやく読み下した。

（まあ……大友のお屋形かどうか、花押もござりませねば）

（ははは、われらの秘めごとゆえ、明らかには書かぬ。が、ちゃんと、ソノ道を通ってもたらされたもの。間違いはない）

（あい……）

（大友ではわしの心底を危ぶんでいる。ことなりし後に、大内の所領は誰のものになるか、とな。それが気がかりとは、すなわち、合力の気が動いたという証左じゃ。あとは条件しだい……わかるか）

（わかりまする）

女は、こっくりと白い頤いをひいてうなずいた。

すべてを話してしまったことが、弛緩した神経にも、微かな疑惑を生ぜしめたようであった。

（そなた……いまの話、忘れるがよい）

（あい……ほほほほ、忘れましょう、ほほほほ……忘れましょう）

忍びやかな、しかし、艶然たる笑いが遠去かる。

（これ、どこへ行きやる？）

隆房は手をのばした。空をつかむ。靄は地熱の噴き上げる湯気のように。隆房の全身を包んだ。かっとなった。

「これ、待ちやれ」

はげしく叫んで、隆房は、はっと目がさめた。

「あっ?!……」

ぎょっとした。

目の前に、男の顔があった。

「――いかがなされた?」

江良丹後守だった。心配そうにのぞきこんでいる。

全身が汗にまみれ、心ノ臓が荒く波をうっている。沈鬱に蒼白い顔が、茹でたように真っ赤になっている。

「御気分が悪そうな」

「いや……」

「何やら、大層うなされてお出でゆえ、急ぎまいってみたが……悪い夢でも見られてか」

「夢?……」

隆房は呆然とした。

夢か?

はっとなって、匂い袋を見た。しごきの紐を開いている。ない、大友義鎮からの隠し文、苦心の末、入手できた短冊はなくなっていた。

「しまった! 眠りのワザにかけられたわ」

「なんと?!」

丹後守も狼狽して、

「いったい、誰が、左様な……」

「疑ごうては悪いが、おぬし、あの、さきほどの女性、これへ呼んでたもらぬか」

「え、渚を、渚がなんとした。まさか……あれが」

「ともあれ、呼んでたもれ」

丹後守も蒼くなった。

「渚を呼べ、渚はどこじゃ」

別墅である。さして広くはない。

その邸内のどこにも、女の姿がないとわかってから、女忍であることを、合点しなければならなかったのである。

「あの、隠し文が、御屋形の目にふれると申し開きはきかなくなるぞ」

「ええい、口惜しや、透波とは知らざった。漁師の娘にしては、美しすぎるとは思うたが……」

丹後守は切歯して、

「かくなる上は悠暢しておれぬ。ただちに軍勢をそろへ、城がためいたさねばなるまいぞ」

周章狼狽するさまに、隆房はふと、頼りなさを感じながら、

「あの文言じゃ、短冊のことでもあるし、たとえ、女忍が、何を言おうとも、申し開きはできるが……」

隆房も、ともあれ、富田へ帰って兵を集めることにしたが、かれが丹後ほどあわてなかったのは、(影が……とりもどしてくれるかもしれぬ)

忍者「影」のワザと、その組織力が頼みだった。

忍法一夜葬

一

「まだ遠くは行くまい、能うかぎり探しだせ」

江良丹後守は家人郎党を四方に走らした。

隆房よりも、かれのほうが、血眼になっていた。小心さもある。が、何よりも、おのれの別墅で起ったことでもあるし、かれは隆房のように「影」――忍者は飼っていない。

泰然として居られない。

家来どもは、近在の地理に明るい。向島一帯、郷ケ崎、本村、洗川、小田、牛ケ頸、タズノ鼻など、地頭らを集め、連絡をとって、網を張った。

相良遠江守の〝手〟だとすると、女忍は山口へ走るにちがいない。

ここから山口までは、およそ五里、一衣帯水ながら、海に囲まれている小島のことで、

「捕えるのはわけはない」

と、豪語した家来たちも、秋の夜の白々あけには、絶望の色を濃く、疲れた顔に刷いてきた。

常識的には、山口への道は、三田尻から乾へ上るのが最も近道で、故意に山陽道を小郡へ出て、これから、椹野川沿いに朔行するかだ。後者なら、二倍の道のり、

隆房も、その直後、別墅を辞去している。一応の手を打つためであった。

丹後守が得たわずかの手がかりは、中ノ浦の漁師が、

「そういえば、妙な婆さまを、乗せたわな」

漁師は夜釣をしていたのである。浜へ着いたとき、見かけない白髪の老婆が磯に立っていた。白い着物が濡れびしょで、亡霊を見るような無気味さだったという。

乗せてくりゃれ、という。砂金の包みも魅力だったが、何よりも、断わればとり殺されそうで、魚のことなど忘れ、舟に乗せたという。

大海湾を横切り、赤石ノ鼻をまわり、岩屋ノ鼻をすぎ、老婆の申し出通り吉敷郡の宇部岬に舟を着けて、

「着きやした」

船の舳に老婆は白い影をうずくまらせていた。が、老婆は動かない。よく見ると、老婆の生身は溶けたように消え、白い衣だけが、人がたに、うずくまっていたのである。

どこで消えたのか。遅い月が出ている海上だったが、恐怖に虚ろな眼は老婆からそらされていたのである。

「ひょっとしたら、赤石ノ鼻あたりで、降りたのかもしんねい」

と、漁師は思いだして言った。

大海湾を横切った秋穂の岬である。最も渚に近く舟を寄せたし、そういえば、白いものが海中を流れてゆくように見えた。

「なんだか、妙な夢を見たような気持ですて」

漁師は、口にするのもいやな様子だった。

赤石ノ鼻というのが、江良丹後守には頷けた。

「あるいは……」

と、思った。

宇部に上ったと見せかけて、秋穂の半島から、北上する。大海山と向山のはざまをぬけて、山陽道の四辻から鋳銭司の扇田、奥畑と山峡をぬける路がある。間道である。忍者ならば、この路を通ったのではないか。

それを裏書する死体が発見されたのである。

赤石鼻と小さな湾をはさんだ筈倉の浜から、干潮のあとに、男の手が出ているのを子供が見つけて大騒ぎになった。

すぐさま砂を掘りおこしてみると、全裸の男の死体が出てきた。喜八という村の男。飲んだくれで、始末におえない男だったが前夜破船の傍で酔い潰れていたのを見た者がある。

「忍者に殺されたのだ」

丹後守の家人たちは口々に言った。

着衣を奪うためだったにちがいない。家人たちが、着衣の柄などを聞いている傍を、一人の旅僧が、網代笠を傾けてゆっくりと通りすぎた。

二

喜八の垢じみた着物を着た男は、その日の夕景には、奥畑から高倉山の麓を北へ急いでいた。

山といっても標高千尺あまり、小路は竹林を抜けている。

その男は竹林の路で、人気がないと見ると風のように走りだした。

と、ぴしり、と笹の折れる音がした。

背後である。最初の音は気に止めなかったのだが、また、ぱしッと、激しく音がした。はっ、と、男は足をとめた。

背後をふりかえった。

目の前で、猛宗の太いやつが、ゆらゆらと揺れながら、倒れかかるのが見えた。

「……?!」

人気はなかったのである。

その竹の切り口が、いま刃を走らしたように、生々しいのが、かれの目をとらえた。

さっと手を懐中にいれたのは、武器をつかんだのであろう。四辺に目をくばりながら走りだそうとしたが、ばさっと、はげしい音とともに、前面の竹が、行手を阻んだ。

同じように、三尺ほどから、数本前後して倒れかかったのである。

前後をふさがれてしまったのだ。

一瞬、立ち竦んだ男の耳に、

〈ふふふふ、行けまい、動けまい〉

あざける声が聞えた。
〈男のなりはしても、その腰、その脚、その胸…
…変化にはいささか修業が足りぬな〉
「何やつ！」
口走った声も、女に還っていた。
〈名前か？〉
と、小莫迦にしたように、
〈申しても知るまい〉
「……」
〈知らぬやつに申し聞けるだけ無駄なことよ。ただ、申したきは、汝のくノ一忍法よりもこの傀儡忍法が勝っておるだけのことよ……〉
「クグツ!!……」
〈あきらめるのじゃナ、女忍と見ぬかれただけでもすでに、汝の負けじゃ〉
「なんの！」
女忍の足もとから、一瞬、白煙が、噴きあがった。
それは、いかなる忍法の手練か見究められなかった。
女忍の片脚が倒れ笹をタッと蹴上げたようにしか見えなかったのである。白煙はさながら股間から噴出したように見えた。
その煙りはたちまち、女忍を包みこんでいる。
常の武士ならば、追求もここまでであったろう。
次の瞬間、女忍の姿は、空を飛んでいたのである。
頭上の竹をつかむや、反動を利用して、二丈の高みへ——大きく弧を描いて飛んだ女忍は、ぱっと次の竹へ。竹から竹へ飛び移って遠去かるのであろう。
太い猛宗竹も先端はほそく、女忍の弾みにしたがって、大きく揺れる。適確な飛翔は一跳に五間は走る。
だが、兇々しい傀儡忍衆の眼は、それを看過しなかった。
何本目かにつかんだ竹が、撓ると見えたがそのまま、ざざーッと、笹むらを騒がせて倒れたではないか。

さすがに女忍。途中で、ぱっと、次の竹へ移っている。が、それも地上三尺を、ななめにすぼりと切られていたのだ。
一たんは、飛び移って免かれたものの、二ノ竹を剪られては、三ノ跳躍に移ることは出来ぬ。女忍は、すさまじい勢いで、落下してきた。
それでも、さすがに、地に降り立ったときは、猫のようなしなやかさでひらりと土を踏まえて立つ。
刹那！　笹が宙を走った。輪笹であった。
背後から、すぼりと、女忍の首に絡んだ。何条もってたまろう。がくんとうしろに引き倒されていた。
「あれえエ」
その声も半ばで、消えた。
一瞬、息が詰ったのだ。一瞬ではあったが、僅差が勝敗の別れ目になる忍者の死闘である。
女忍はぴたりと押えられていた。
はじめて彼女は、咫尺のあたりに、そやつの顔を見た。
これは傀儡忍衆の夜叉にほかならなかった。
ぎらぎらと野獣のような眼が、射るように光った。
〈どうじゃ、往生したかい……〉
かわいた笑い声が、女のおもてを搏った。

三

唇が追った。口臭が強い。忍者は普通、口臭体臭を不可としている。敏感な鼻には、記憶されるからである。草カマリの時、腋臭のために発見された者もある。
夜叉はために、薬草を常に嚙んでいた。が、利き目は少なかった。体質であろう。忍者には不向きな体質といえる。が、傀儡忍衆に生れ、育ったかれとしては、忍者になることは宿命であった。
その口臭をさけて、女忍は顔を振った。
「あばれるな」
夜叉は、笑っている。
絶対の優位にある。女忍の手並みをすでに知ったからである。

「見たぞ、汝れは……雲ノ一党だな」
「……」
「雲ノ衆……ふふふふ、隠すより顕わるるは無し……」
「……」
「雲ヶ峯の鹿又が汝れの師匠か？　あの《撥ね竹》のワザ、鹿又が秘伝と聞いた」
「たわけな！」
と、女忍は、はじめて、笑った。
悔蔑をあらわにして、
「竹飛びのワザなど、忍ノ者なら、誰にても出来るものを」
「ははは、左様に言い張るのが、いっそ、白状したようなものじゃ。それで、はっきりしたわ、雲ノ忍衆を使うは相良遠江……」
「うッ！」
女忍はすり抜けようとした。いや、すり抜けた。が、がくんと、ひきもどされた。髪が竹にからんだのである。
夜叉のワザは、一竹を以って髪にからみ、容易に、これをひき倒している。
大の字に仰臥させられた女体に、ふたたび夜叉は重なった。
女忍の口から、たまぎるような叫びが奔ったのは、夜叉の唇がむきだされた乳房に嚙みついたからである。
乳房に走った疼痛は短かかった。
が、その部分から、さながら、痺れの秘薬を注入されたように、半身が動かなくなった。
嚙まれ、しゃぶられたのは右の乳首である。なのに、痺れは左胸部からひろがった。左半身が知覚を喪い、動かなくなっていた。
「ふふふふ、傀儡忍法《片身殺し》場合によってはこのまま、一生不具にしてやってもよい……」
「う、う、う……」
唇も痺れていた。顎が動かぬ。右の眼だけ涙がにじむのが異様だった。
「さあ、出せ。いやさ、どこにある、陶と江良が逢うて何を話したか……おそらくは謀叛の談合……」

「……」
「その証拠を奪ってきたに相違ない……さもなくば、あれほど、苦心して走跡をくらますこともなかったはず」
表情は変らない。が、その眼の動きにはっきりと狼狽があらわれた。
「どこに隠してある？」
動けぬ女忍の肌を、夜叉の手は容赦なくまさぐってゆく。
双の腋窩の茂みをさぐり、下腹部の深い谷間へおりていった。その部分は女忍にとって恰好の隠し所とされている。百人が百人、そのかたちは違う。その機能もまた、微妙な差がある。陰唇の形象、膣口の深度、同人にしても、若いときと年数を経てからでは、また違う。女忍になるまえと、なってからでは、その隠し所の機能を発揮することを習ったことによる相違が生じるのは当然であろう。
夜叉の手は、充分、それをサグルに妙を得ていた。
指は、濡れると寸伸びしたように、奥へ入ってゆく。
女忍は身をよじった。痺れた半身は動かず、右手が、右脚が、悶えて狂おしく動いた。笹をつかみ、土を蹴った。
その指は、しかし、濡れた柔襞を楽しんだのではなかった。
楽しむならば、もっと時間をかけたはずである。
奥を究めたのか、指はすっと引きぬかれた。
その指を、ちょっと嗅いで、ふわと唇を卑猥に歪めた。
そのまま、指は女忍の髪のなかに突っこまれた。
髪は濃い。たっぷりとある。男に変じて、こまかくまとめ髷に結ってあった。
無情な手は、これをかき乱した。荒々しくさぐった。

四

もとより、着衣も見た。漁師の粗衣である。襟

のふくらみも引き裂いた。帯は縄である。潮香のしみた縄帯を切りほぐして見たが、証拠になるようなものは何もない。

一片の紙も出て来ない。

「はて、あるはずだが……」

あせりが洩れる。

「やい、女！　どこへ隠した」

鼻の穴を見た。耳の穴を見た。無い。夜叉の手は、女の口をつかんだ。まるで、山猫の口をひき裂くように、上顎と下顎を力をこめて開けた。必死に歯を食いしばっていたからである。

義歯ははめていた。ぴたりとはまっている。強引にそれをはずした。材は黄楊だ。中がくりぬきになっている。

だが、その中に何もなかった。

失望が夜叉をとらえた。

「くそ！　どこへ隠しおったか」

あたりに隠すひまはない。一挙一投足、見逃してはいない。

「どこかに持っているはずだ」

夜叉が見るところは、まだ一つ残っていた。

かれは女忍をうらがえしにした。すでに女体は一糸もゆるされてはいない。夕暮の竹林のほそ路に、白い肌が異様なほど美しい。その美しさに魅了されぬだけ、夜叉は忍者として優秀だったはずである。

うらがえしにされた女体は、こんもりと盛り上った臀部を夜叉の目の下にうごめかしている。

夜叉は眉も動かさず、仏師がおのれの作品を検討するかのような、冷静さと、毛すじほどの損傷も逃さぬ眼力を以って、下肢を左右におしひらき、陰靡な谷間をのぞきこんだ。

そこに、しかし、隠されたものはなかったのである。

かれは、確かめるに、目のみでなく、指頭を以ってしている。

そこにも無いとすれば、もはや、隠すところはない。

「吐け！　女！」

手だてを尽くしたいまいましさで、

「吐かさぬとあらば、吐かして見せるぞ」

「……」

「いのちがいらぬのか？」

「……」

「まだ、その若さで、死急ぎすることはあるまいにの」

「……」

女忍は、その言葉が聞えぬもののように、固く眼を閉じている。

「くそ！　眼にもの見せてくれるぞ」

夜叉は女体をぐいと抱き上げた。

竹が縦横に倒れて、笹の交錯が、さながら逆茂木のように横たわっているのを、身軽く、飛び飛びに走りだした。

径からそれて、傾斜を登ってゆくのである。竹林を出ると、草の丘だ。茂り放題の夏草に蔽われている。

夕暮の空では鴉が群れていた。

「いやな声だ……」

鴉は、かすれた声で哭いている。暮れ残った水色の空に、その声がひびいて、深山のような無気味さを漂よわせていた。

「それにしても……」

これほど、おびただしい鴉の群れを、夜叉は見たことがない。

蝗の大群が襲来するのを昔見たことがある。それほどではないにしても、何十羽もの鴉が死人の声を聞かせて乱舞するさまは、尋常ではなかった。

「なにかある」

山犬の死骸でも見つけてのことか、と思った。

その鴉の動きを凝っと見ていたかれは、かれらの狙う獲物の位置を計った。熊笹の斜面をすべるようにしておりると、あやうく、崖から落ちそうになった。三丈ばかりの、きりぎしになっていたのである。

もしも闇夜だったら、傀儡忍衆とはいえ、足を踏み滑らせていたにちがいない。その崖下では異様な光景が展開されていた。

一頭の牛が横たわっている。まだら牛である。

その首のふとさから見ても、よく肥えた体躯であることがわかった。

いや、生きているときは、と言うべきであろう。その肥躯は、すでに皮を剝がれ、むざんに骨を露出していた。刀をふるって肉をえぐりとっている男がいたのである。

黒い僧衣（カンガ）をまとった巨きな男だ。頭頂を剃りこちている。これは一見してわかる、ぼるとがるの宣教師にほかならぬ。

神の恩寵（ガンチャ）を説き、地獄（インヘルノ）の恐ろしさを説く南蛮坊主が、しきりに牛の肉を切りとっているのだ。

このあたりに、牛が孤り来るはずもなく、病死したのを捨てたわけでもあるまいから、盗んだか、購うたか、ここまで曳いてきて、屠ったのであろう。

肉を得るために。

作業はすでに終りに近いらしかった。かたわらの大籠に、血のしたたる生肉が山のように盛ってあった。

「ふむ、南蛮人のめしか……」

それだけだった。

それ以上の興味は示さぬ。無縁のことには首を突っ込まぬ。傀儡忍衆は目的のためにだけ行動するのである。夜叉は女体を抱えたまま、鴉のかしましい声の下を、登ってゆく。

五

夜叉が女体をおろしたのは、高倉山の中腹赤松の林であった。

そのあたりすでに昏い。夜叉の眼は、四辺の明暗に合わせて瞳孔の開閉が自在に行われるのか。常人でもむろん、瞳孔にはその作用がある。忍者は、その生命の機能を特殊な訓練によって、想像以上のものにしているのである。

かれが、その女体を置く場所を選んだ理由は後にわかる。

樹齢二三百年と思われる巨松の根方に女体をおろした。

うつ伏せに置いたのである。

女体は、いまだ半身の麻痺がなおらぬのかされ

るままだった。

巨松は蛸の脚のように根瘤を盛り上らせている。その根の数ヶ所に、女の黒髪を小わけして、緊縛した。そのわけかたは、《八方絡み》と称される。丁度の頭を根と根の間に据えられて、八本のわけ髪は八方へ伸びている。

したがって、頭を一寸動かすことも出来ぬ。

夜叉のワザならば、この半身不随の女体を動けぬようにするには、指一本あれば、ことたりるはずであった。

これほどの緊縛はなぜか。

雲ノ忍衆の一人と看破された女忍は、もはや生ける屍であった。この束縛から解放されるには、頭の皮を剝ぐか、松の根をひきぬくか？　これ以外は、髪を切断するしか手はない。

この、逃れるすべはない女体に対して、しかし、傀儡忍衆の手だては、残忍であった。

夜叉はひらりと、はねあがった。抜討ちに、忍び刀を閃めかした。

二閃。二尺あまりの枝がおちてきた。

太さ腕ほどもある。切り口は、斜めに削がれて、するどく尖っている。

夜叉は、うつ伏せの女体の下肢を無情におしひろげた。ぎゅっと、骨が哭いた。

腿と腿のあいだにその太枝をいれた。左右の脚を思いきりひろげた間に、突っ張ったのである。

股が裂けるばかりのところへ渡したのだ。

たちまち太枝の両端は、髀肉を破って突き刺さった。

「うっ……」

痺れた舌をも動かせる激痛であった。

半身、動かぬ。動く右脚だけは耐えようとしながら、しかし、ある限度までは、すぼまざるを得なかった。

苦痛の呻きを、夜叉は冷然と見おろして、

「どうじゃ、こたえるか？」

「う、う、……うっ」

「ふふふ、これはトバ口じゃ、こんなことでは済まぬぞ……」

「……」

「傀儡忍法、うけてみろ。耐えられるかどうか、じゃ」

夜叉の声には、嘲けりがある。

それは、忍衆としての経歴がもたらした自信であった。

両脚くびを、草縄で別の根方に縛ると、もう夜叉のすることはなかった。

「ひと夜じゃ、ひと夜……」

女忍に言うのか、おのれに言い聞かせるのか。

夜叉はその場にごろりと横になった。

いびきこそかかなかったが、須臾にして、眠りにおちた。

昨夜は、向島から脱出したこの女忍の捜索で手わけして徹宵費したのである。夜叉はおのれの手で捕えたことに満足しながら、眠った。

その眠りの度合を計っていた女忍は、せめて自由の利く、右手で夜叉の脇差を抜きとろうとした。

届かぬ。髪を斬ろうにも、腿の突っかい棒をはずそうにも、片手だけでは如何ともすべはなかった。

そのもがきのうちに、女忍は、異様な感触をおぼえている。

股間であった。

(——こんなときに……)

何やら動いている。

男の指のような——だが、そうではない。そんなはずはない。手の届かぬところに、夜叉は眠っている。女体の秘所をまさぐるものは誰か。誰もほかにはいない。が、その部分をくすぐるものがあったのだ。

六

身動きならぬ。固着させられた女体を、そのものは、犯そうとしていた。夜叉が女忍を緊縛するのに、うつ伏せにしたのには、理由があったのである。

「あ……」

痛みとはちがう。

その感覚は、羞恥をともなった、快感といってよかった。

男が女を犯すように、そやつは、はじめ陰唇をくすぐり、亀頭にも似たふくらみを以って、かきわけるように、むくむくと頭をもたげてきた。

八方縛りの髪は、ゆとり、僅かに五分。彼女の視界に入るものは、ただ、松の根っ子と、生い茂った草であった。

夜の赤松林。異常なその感覚に抗するように、目が夜光虫の煌きを発した。

そのとき、夜叉がもしも目ざめていたならば、その眼の光りの異常さに気がついたであろう。

女忍の眼は、一方だけ光ったのである。

右眼だけが——

しかし、たとえその現象を目睹したとしても、夜叉が異常さに気がついたかどうかわからぬ。

左右の眼光の相違はあくまでも半身の不随のあらわれと見たかもしれないから。

女忍の光る眼は、必死だった。

視野の範囲で、何かにすがるように、何かを探している。人間は、五体五官の機能がたとえ最後に一つしか残されぬようになっていても、その一つで救いをもとめるのだ。

その眼が、しかし、そこに見出したものは？

草が動いていた。

その動きは、あまりにも、秘所に触れる〝何か〟の動きにひとしかったのである。

それは、見る見るうちに、草の間から、姿をあらわした。

ゆらゆらと、かげろうの燃え出ずるような、あるいは波布の頭をもたげるような——得体が知れぬということは、無気味さと、ある期待と不安——それが性的な場合、強烈なのはいうまでもない。

彼女の光る眼が、やがて、そこに見たものは、奇妙にも、男のいのちにも似た、松茸だった。

それは、彼女の見ているまえで、にょきにょきと頭を出し、恐るべき速度で、膨脹していったのだ。

異常な、というだけでは済まぬ。

恐怖を、それはともなった。

なぜならば、彼女の目に映じる姿と、その同じものが、彼女の股間に、成長の逞しさでもって、わけ入ってきたからにほかならぬ。

はじめて、両ノ腿に尖り枝をもって突っかい棒をあてた意味が判然としたのである。

松茸は、女体を犯すや、わが意を得たように傲然と膣内に漲り、不逞なまでに固く、膣壁を圧した。

暗示もある。目の前の松茸が、際限なく巨大になってゆくのが、即ち、男根の雄偉そのものを思わせたのである。

暗示だけではない。松茸は、女体に狂喜したように、うねり、悶え、狂い、乱舞しているようであった。

女忍は耐えた。

おのれの官能に点火されるのを拒んだ。拒むのも、しかし、限度がある。狂喜し、乱舞する松茸の動きは、女忍をも、ただの女にひとしい喜悦をもたらさずにはいなかった。

眼がうるみ、鼻腔がひろがり、切ない喘ぎが唇をふるわして洩れた。

咽喉の奥で、ひくひく喘ぎつつ、女忍はもう、情火のなかに投じて悔ない気持になっている。半びらきの唇から、白く濁った唾液がずるずると流れ、草を濡らし土にしみていった。

その唾も止ったのは、躍動のたびに、雄根は、さらに巨大になってゆくからだった。

羞恥を通りこし、快楽きわまって、苦痛と恐怖だけが、彼女を占めてきた。

どれくらい経ったか——

もとより見当もつかぬ。

おそろしく長い時間のようでもあり、また一刻と経っていないようでもあった。

が、夜はすでに白み初めていた。

ここに縛られたのは、まだ夕景だったはず——その夜の経過も、記憶にない。あるものは、恐怖と苦痛だった。

股が裂かれるような痛み。彼女の目のまえの松茸は、もはや、口に入れることすらかなわぬ巨きさになっていた。

それが見えるだけ、夜が明けてきた。

苦痛は、緊縛の草繩をゆるめるほど、下肢をふるわしている。

七

「——どうじゃ、こたえたかい」

耳のそばで声がした。

夜叉であった。いつの間にか起きたのか。

「ふふふふ、傀儡忍法《一夜茸》存分に味おうたかい」

そう言うと、かれは小さな壺をとりだした。耳をつかんでぐいと顔をねじあげると、件の壺を鼻先に近づけた。

「は、はい……」

麻痺が溶けたようであった。

「——申すか？　いやなら、もそっと……」

「あ、言います、言います」

人が違ったように、哀願の叫びを奔らせた。苦痛が、すさまじい勢いで、下半身をしめつけたようであった。

ただの痛みではない。恍惚感というにはあまりにも強烈で、倦むを知らぬ。相手が、人間ならば、こうした真似は出来まい。天然の菌糸をして急速に成長せしむる忍法など、雲ノ忍衆の理解の外にあった。野を走り、谷に仮寝の夢をむすぶ漂泊の傀儡、その忍衆にのみ伝承された秘法か。

たとえ、彼女が、話しには聞いても、その効用には合点しなかったろう。信じられぬ。信じられぬことが、起っていた。女体に恍惚をもたらし、その果てに、体内に荒れ狂い、息もたえだえに、狂わしめていた。

この苦痛が、もはや、とりかえしのつかぬものに至ると知っていたら、よもや、女忍は自白することはなかったろう。

傀儡忍法《一夜茸》は、ひとたび女陰を犯したとき、再び抜ける能わざるものだったのであった。

亀頭に当る蓋、帽菌類と称われる所以のその部分は、膣内で膨脹し、絶対に抜けようがないまま、さらに、何ものにも負けぬ生命力で、ひろがるば

かりであった。やがて限度を超えたとき、女陰は裂け、女体を死に至らしめて悔いないであろう。
だが、その苦しみに耐えることは、彼女には出来なかった。
「あ、あ……あっ、ゆ、許して！　もう、あたしは……」
「申すのじゃ、盗んできたものはどこじゃ」
「め……」
「何?!」
「め……」
「め?……眼か、眼玉を?」
はじめて、眼光の差異に気づいたのである。
眼の光りが片方だけ生きていた。すでに、麻痺は解けている。にもかかわらず、左眼は死んでいた。
「め！　これかっ」
なぜ、いままで気がつかなかったのか。
夜叉はおのれの迂濶を嗤いたかった。
かれの手は、容赦なく、左眼を襲っている。それは、冷たく、固かった。

瞼にはさまれて、一見、眼玉と見えたのは魚鱗の裏がわから、黒眼を描いたものであった。小さな鶉の卵に接着してある。
夜叉の指は、それを、容赦なく押し潰している。中に紙片が小さくまるめられて入っていた。
注意ぶかく、慎重にひきだした。
夜は明けようとしていた。赤松林に霧が流れこんでいる。そのうす明りのなかで、夜叉ははっきりと、歌を読みとった。豊後の大友義鎮から、陶ノ隆房にもたらされた、謀叛の返書である。
「やはり……同意か」
義鎮が動くか動かないかは、二ノ次であった。
これは隆房の謀叛を物語る証拠であるにちがいない。
「ふふふふ、陶め、おれの手に入ったで、命びろいしたようなものじゃ、遠江の手に入らば、いかにのんびりの二位ノ殿でも、軍勢を差しむけること必定……」
夜叉は件の密書を懐紙にはさみ、革袋に大切におさめると、もう、ことが済んだという顔で足音

もなく、その場を離れた。
女忍を一瞥もせぬ。
する必要はなかったのである。かれにはわかっていたのだ。一夜茸の猛威を。狂喜と陶酔をもたらした後に女陰を裂いて、すでに死に至らしめていることを。
その苦悶のさまを物語るものは、彼女の口が、草を土を噛んでいたことだ。両手の爪は、剝がれ、無惨というも甚しい。
一夜茸が、その生育活動を熄めたのは、女体が死んだときである。女体を死に至らしめるや一夜茸もまた枯死してゆく。
昨夜の鴉の群れが、女忍の死体を発見するのも、時間の問題であろう。
すでに、傀儡忍衆夜叉の影はそのあたりになかった。

黒い渦

一

油の臭いがしていた。爽やかな秋の朝を汚すその異臭は、廃寺の軒を黒く煤けさせ、飢えた山犬どもをすら辟易させる。
鉄鍋の中で焦げているのは、牛の肉であった。焦げる臭いで慕ってくるのではない。天井から吊された血のしたたる生肉の臭いが、山犬の食慾をそそるのか、近くの谷で無気味な遠吠えを聞かせ、深夜など、兇々しい牙をむいて襲撃してくる。
廃寺——そう言っては、この宣教師に叱られる。教堂（えぐれしや）と呼ぶ。
ここは鴻ノ峯の西ノ沢。れいの普門寺の隣谷である。
こうした教堂は、山口の城下に数ヶ所あった。
豪商が提供してくれた、立派な屋敷もあるし、寺を改造したものもある。

この見すぼらしい廃寺を活用したのは、布教活動の一つである。病気治療のためであった。

布教活動が、身心の病める者を突破口として浸透してゆくことは、洋の東西を問わず、古今を通じての常道である。

塀も破れ築地で、四通八達だ。神に救いをもとめる者は、随時来れというわけであるが、兇暴な山犬も、赤児の柔らかい頬肉の味を知っている野良猫も隙を狙って入ってくる。

竈で、鍋をかけている僧侶は、夜叉が目撃した牛の肉を切りとっていた男である。

「もし、伊留満(いるまん)さま」

中年の女が、両手に草鞋を穿いて、這いずってきた。

「昨夜から何も食べておりませぬ、何とぞ、食べものをめぐんで下されませ」

「おお、オマエ、神ノ御子デス、神ガ御恵ミ下サレマス、教堂ニ行キナサイ」

たどたどしいが、ともかく通じる。

いざり女が、本堂のほうへ行くのを見送って、あわてて、鍋から焼肉をとりあげた。

「あ、熱つ、ちぇっ焼けすぎたわい」

「ジョアン、半焼けだというたではないか」

別の坊主がのぞいた。

これは神父のゴメス・デ・トレス。伊留満は修道士の意で、ジョアン・フェルナンデスという。

二人とも、ザヴエルに従って渡来したものである。ザヴエルが、最初、京を本拠地にしようとしながら、この荒廃のさまになげき、「日本に於ける最も有力な王は、やはり山口王（大内義隆）だということを洞察し、一方ミヤコには、信仰の種子を蒔くに足る統制なきこと」（ルイス・フロイスの「日本史」）を見ぬいて、山口を布教活動の場として、義隆に〝十三箇の貴重な珍品〟を贈って、布教の自由と、信者獲得の許可を得た。

ザヴエルは平戸へもどったが、ゴメスとジョアンを残して、布教に専念せしめたのである。

二人は、ここ暫く、肉にありつけなかった。大内義隆は、かれらを〝南蛮坊主〟と呼び、仏僧の概念で遇したから、四ツ足を食するとは思わな

い。

前記「日本史」にはこうある。

――周防の国の首都にして、人口多く富貴の町、山口に到着した、その王は大内殿と称し、当時日本諸国王中最も有力で、官邸調度の華美壮麗は、他の追随を許さざるものがあった。従って、その生活は自由奔放で、又、かの自然に反する厭うべき罪悪（男色）に堕していた……そこで、師（ザヴエル）はフェルナンデスをして、予て日本語に翻訳して書き留めさせておいた帳面から、世界の創造及び神の十誡の部分を読み上げさせた。説法は進んで、日本人の陥っている偶像崇拝の罪から、ソドム（男色）の罪の所に来て、かくの如き人は、豚や犬やその他理性なき禽獣にも劣るものだと論じたとき、この点が痛く領主の気に触れたと見え、明らかに新宗教に対する激怒嫌悪の表情を示した。この部分の朗読が終るや否や、かの貴人に合図して、直ちに一行を退去せしめた。領主（義隆）は一言をも発せず、一行は黙々の中に退出した。フェルナンデスは、領主は一行を惨殺しはしないだろうかと考えた……

危害は加えなかった。

義隆が、神の怒りを恐れたからではない。不快ではあったが、南蛮（この場合スペイン）との交易の可能性を考えていたからであろう。商取引には敏い。

こうしたことがあってから、二度目に、漸く布教を許したのだが、義隆にしてみれば、男色を禽獣にも劣ると批判する坊主が、醜怪な四ツ足の血肉を欲するとは、理解に苦しむところであった。

フェルナンデスとトレスはしたたか牛の肉を平げると、漸く、満足した。ラテン種族の陽気な笑いは、満腹感と無縁ではない。

「さ、神の子が腹いっぱい食べたかどうか、見てまわろうかの」

二人は、本堂のほうへ歩きだした。

その姿を、方丈の陰から凝っと見ていた者がある。犬のような眼だった。

二

眼は草の間に光っていた。さっきの女いざりだった。

「ふん、四ツ足を喰った口で、天主とやらの恩寵を説法していれば世話はないやね」

唾を吐くように、こう言った。

二人が入ってしまうと、いざりは、ぴんと足を伸ばした。顔をぺろりと撫でると、膿と垢にまみれていた顔が、一皮むけたようにきれいな、若い女の顔が出た。

これは、傀儡忍衆、女忍の雪乃だった。

夏草の生い茂ったなかを、若鹿のように走って、破れ築地から飛び出していった。

トレスたちは気がつかない。

本堂から厨房にかけて、回廊の下や、窩った石階や、倒木に腰をかけたりして、貧しい身なりの男女が、一椀の汁をすすっていた。

雑炊である。雑穀に塩味を利かせただけのものであったが、満足に食事をすることもできない人々にとっては、有難い。

ことに病人などは、乱世では親子の間でも手当てがゆきとどかない。尊族卑族の別なく山中に捨て去ってくることも珍らしいことではなかったのである。

そうした老人や病人などが、この教堂を頼ってくる。

男も女も、雑然と交って寝そべっていた。子供もいる。乳飲み児を抱えた女もいる。

その中に、とろんと黄ろい眼を宙になげた男がいた。

着衣はずたずたに切り裂かれて、血と垢がこびりついている。

病みほうけて、髷も結わぬ乱髪がすさまじい。げっそりと頬の肉がおちているので知人でも、気がつかないであろう、これは、三輪右京の変り果てた姿だったのである。

普門寺境内で、傀儡忍衆の乱刃から逃れたものの、崖から転落し、気を失った。

夜露で正気にかえったときは、完全に気がふれていた。転落した際に頭を強打したためであろう。

気ふれで、全身朱に染まっているのだ。たとえ、兵庫介が見てもわからなかったかもしれない。

目は心の窓という。陣窩な表現を借りないまでも、眼が個性の要素であることは誰も否めまい。

話がそれるが、アメリカに凶悪な強盗で、役者ウイリー、と渾名される者が居た。

俳優上りでメークアップが巧く、強盗に入るときは、老人に化けたり、女装したりして、手口やアリバイで疑われても、目撃者は誰も証言できない。まさか、と思うのだ。ところが、あるレストランを襲ったとき、目撃者の黒人が、面通しに来て、凝つとウイリーの眼を見つめていたが、

「この男です」

はっきりと証言した。ウイリーはその証言で二十年の懲役になった。

いかに巧緻をきわめた扮装も、眼の色と、その生きた光りまでは変えられなかったのである。

右京の眼は、あれほど逞しく、行動力そのものだったときの光りを失い、生ける屍としての虚ろなものになっていた。兵庫介が見てもわからないであろうとは、この故である。

だが、さすが、傀儡女忍には、わかったのか。

雪乃は、宙を飛んで走る。

夜はすっかり明け放たれていたが、山口の城下はまだ人通りが少ない。その街の外側を、雪乃は、風をきって走った。

普門寺の石段下を通って東へ——

半里ほどで七尾山の麓に至る。そこからさらに十丁余で桜ケ池がある。この地方、江良ノ郷で桜畠と呼ばれている。

江良の名によってわかるごとく、もとは丹後守の知行所であった。代々、この地から出ている。大内家譜代の家がらであったが、数年前から、些細なことで義隆にうとまれ、移封させられていたのである。

傀儡忍者とは、関係ない。

雪乃が、桜ケ池のほとりまでくると、

〈くノ一！〉

声が草むらからはね上った。

〈ゆき！〉

雪乃は間髪をいれずに応えた。
ほとんど休まずに駈けぬけてきたのである。雪乃は崩れるように坐った。草むらには、毒々しいまでに鮮烈な色で咲き乱れている彼岸花の傍らだった。
草がそよぎ、花びらが破れ、四辺に人影が浮び上った。

三

雪乃はあえいでいる。喜びがおもてに出ていた。役目を果したという自認と若さであった。
「見つけたよ、見つけたよ」
鬼の首でもとったように、雪乃は、叫んで、
「いたよ、天竺坊主のところに」
「やはり」
と、一人が応えた。
「たしかか？」
「ああ、見たよ」
「三輪右京に間違いないな」
「ああ、間違いない。でも……」
「なんだ」
「気ふれになっているようだ」
「ふむ……」
「半分、死にかけて、その上、気狂いみたいだよ」
それだけ報告すると、ほっとしたように、雪乃は水際から身を乗り出して、池の水を呑んだ。健康に咽喉を鳴らして呑んだ。
「さあ、頭領のところへ」
「あい」
土蜘蛛は林の中にいた。
夜叉をはじめ重だった者を集めて、何やら談合していた。
雪乃はわくわくしている。頭領と直々に話すことなど、一女忍にしては名誉なことだった。
その男は赤犬という名だった。
「頭領、雪が突き止めてまいりましたで」
土蜘蛛は、ふりかえった。眉根に皺がきざまれた。
「なんじゃ、急わしいぞ」

「あの、いつぞやの、猪武者でござりまする。三輪右京とやら申す……」
「それが何とした」
「あの、隠れ場を突き止めましたので。はあ、教堂でござりましたわい、糸米にちかい、天竺坊主の……」
「あの猪武者のことなら、どうでもよい」
「へ？」
「それどころではないわい。もともと、われらの目的の邪魔になるやつは許せなかった。殺さねばならぬ」
「そ、それゆえ……」
「もはや、済んだ」
と、土蜘蛛は、顔をもとへもどした。
それは、話の区切りを意味していた。赤犬は雪乃を促してひきさがった。
「おい、どういうことだ」
赤犬はきすぐれノお婆に聞くと、
「あれさ、夜叉どのが、よいものを持ってお出でじゃったのでの」
「ほう……夜叉どのかい、二位ノお歯黒首け」
「さあね、どちらにしても、この仕事は、この二三日がやまさね」
せっかくサグってきたことが無駄になった雪乃がしょんぼりしているのを見ると、赤犬は、背後から抱いた。
「行こうけ」
「どこへ？」
赤犬は黙って灌木の茂みへ顎をしゃくった。それで充分だった。傀儡忍衆の男女は、かれら以外のものを嫌悪して固く結ばれている。性慾は、しこりとならぬために、お互いに霽らす。
なかまは、見て見ぬふりをするのである。
たしかに土蜘蛛にして見れば、兵庫介や右京のことにかかずらっているひまはなかった。
「——陶ノ隆房が謀叛をおこすと、われらの役目は、おかしなものになってしまう。そのまえに殺ろうぞ」
「安芸では、われらの手練を信じておりまする」
「応えねばならぬ。二位どのの首級の重さだけの

黄金を毛利では用意しているわい」

四

「兵庫介どの、兵庫介どのはおざらぬかい」

尾和備後守の老臣、早瀬嘉兵衛が馬を駈って、阿知須から飛んできたのは、八月末のある夜であった。

「いかがなされました、この夜半に」

寝衣のまま起き出してきた小森弥藤次に、

「ええい、和子はいずこじゃ」

「あの……」

「度々のお使者も追い帰されて、お城へとんと姿を見せられぬ和子は、主君にはえらい御心痛じゃ、どこへ参られてか」

一気に飛んできたらしい栗毛の駒は、ぐしょりと汗にまみれていた。

「すりゃ、主君の御病気とは、まことでございますか」

「こりゃ、やい、まことか、とは何じゃ」

「あの、和子が、あの兄上が御病気などなさるはずがない、むりに帰城させようがための、冗談じゃなどと……」

「さすがは和子。いや、まことじゃまことじゃ。ともあれ、汝らがお付きしておって、何たることじゃ、是非とも今夜中には、この屋敷を出なさらねば」

「今夜？」

「そうだ、汝らも支度せい。わしが来たからには、和子の首ねっこに縄をかけても、曳いてまいる」

大変な権幕だ。

目のない下郎には、ただ老人の癇癪に見えたが、その切々の気魄には尋常でないものが含まれていたのである。

「御老体が、左様に仰せられても、和子には明朝御用がござります」

「なんじゃと！」

「豊後の大友家より御使者がまいられました」

「存じておるわい！」

「はい。さるために明朝、御城内で猿楽能が催されまする」

「存じて居ると申すのに！」

「主君御不快とのことゆえ、登城かなわぬ由お許しを乞いましたるところ、たってとあって和子が代りに参上仕る支度を……」

「じゃから、その必要はないと申しておるのじゃ。おっと声が高い」

声が高いのはじぶんの野太い声なのだ。

老人はもどかしげにいらいらしている。口さがない下郎小者も多いことで、何やら秘密がある様子、とは、早瀬にもわかる。

「ともあれ、和子を……」

その兵庫介は、右京の行方を探して、仁保というところまで行っていたのである。その山で山賊に斬られた死体が、似ているという情報をたしかめに馬を飛ばしていったのである。

早瀬嘉兵衛はなぜか、明朝も待てぬ様子で、

「お迎えにまいろう」

と、ふたたび、汗のかわかぬ馬に飛び乗った。

片手松明で走りだす。控え屋敷の侍たちも拱手しておれぬから、あわてて、馬を曳きだす。

十数騎の片手松明が、松脂の匂いと火の尾を曳いて、仁保へ走る。

さして遠くはない。一里あまりだ。

だが、嘉兵衛は老いの身を鞭打って、山中へわけいって失望せねばならなかった。兵庫介はすでに仁保にはいなかったのである。その目当ての死体が、右京ではないと知って、引きかえしていたのだ。

その朝——

築山屋形では盛大な猿楽が催された。

豊後の大友義鎮から使者が来たので、そのもてなしの宴であった。派手ごとの好きな義隆だったし、宴は、盛大にすればするほど権威を鼓吹できる。

九州の雄と、中国に冠たる義隆とは、勢力的には永年の好敵手ではあったが、戦乱に飽いた義隆は自ら戦さを仕掛ける気持はなくなっている。内政と文運の興隆に意を注いで、表面的には不可侵の和睦状態がつづいている。

この朝の客は、京から来たもので、将軍義晴の

上使だったと、杉岡就房の「吉田物語」にあるがこれは毛利家の事蹟を中心に書いたもので、誤謬が多い。第一、義晴はこの前年に死んでいるし、将軍職は五年前に子の義輝に譲られている。

このとき来ていた豊後の使者は仏僧だったともいう。

ともあれ、豪華絢爛たる猿楽は、義隆と重臣の気持を、浮き浮きさせ、身辺に迫る風雲に気がつかなかったことであった。

舞台も総檜の豪奢そのもの。鏡板の五葉も脇の若竹も色あざやかに、現世のいのちを謳歌している。

誰がこの長久の栄華を、一瞬にして覆えす魔手が襲ってくるのを想像できたろう。その若竹とがっしりと根を張り梢をひろげた老松のごとく、二位ノ殿の武運も栄華も、枯れることのない永遠のものと思われた。

五

正面桟敷には義隆が二位の殿らしく縹の直衣を着して、すでに酒気をおもてにあらわしていた。

公卿がっている義隆は、鎧の重さを忘れてすでに久しい。

上使をはじめ、右には前の関白二条尹房、右大臣（後の関白）一条兼冬、日野大納言資宣、前ノ左大臣三条公頼、権中納言持明院基規、左大臣兼関白たる二条晴通の若君三位左近衛中将良豊、その他堂上公卿上臈姫君女房などの客人、左には、直臣の冷泉隆豊、相良武任、鷲頭隆政、岡部隆景、天野隆良、黒川隆像――これらの隆の字の諱を見てもわかるように、義隆が信頼を置いている武将たちだ。いずれも千貫二千貫の知行で城持ちである。

さて、舞台の能が、番々取行われるあいだ、酒がまわり、ほろ酔いが座を一層なごやかにした。後世とちがい、上臈たちも、酒を飲んだ。もとより、なべて気品をむねとするから、下々のように、げすな酔態を示すことはない。酒はほろ酔いのためにあることを知っている。常に望めるだけ飲める状態にあれば乱酔して苦しむような莫迦げたことはしない。優雅こそ人の世の花とされている。

さて、世上の飢餓と病苦を忘れて、閑々たる風流事は、とどこおりなく進み、いま、舞台は五番物の小鍛冶で、小太夫という能役者が、シテの稲荷明神に扮し、幽玄な世界をくりひろげていた。

この浮かれた公武百官のなかにも、少数ながら、万一を慮る者がいた。

豪勇を以ってなる冷泉隆豊と、相良遠江守の腹心比恵藤内である。

藤内はれいの隆房との一件以来、山口へもどってきても油断なく、雲ノ忍衆を以って、遠江守の身辺を護らせていた。

雲ノ忍衆頭領鹿又（ししまた）が、舞台の小太夫に感じた妖気は、厳密には殺気と呼べるものであったかもしれない。

稲荷明神に扮した小太夫の動きに、鹿又は、ふと疑いを感じた。

〃心ヨソヘアラバ手ノ舞、足ノ踏ムトコロ、影ノウツロヒ出ズ――云々と古書にあるのは、忍法とは無縁のものであるが、舞台上の動作に一点の疑惑を感じた鹿又の眼は、はからずも、その意にかなっていたのである。

〈藤内さま、あやつ、いささか面妖にござるぞ〉

鹿又は、幕屏に控えた藤内に囁いた。

もとよりその声は他の者には聞えぬ。

「む……」

〈小太夫にしては、怪しいふしがござる〉

「――さぐれ」

藤内はほとんど聞きとれぬほどの声で、応えた。

〈万一のときは？……〉

「かまわぬ」

舞台の橋がかりから退ってきた稲荷明神に、突然、手裡剣が走ったのである。

一剣ではなかった。初剣は躱した。間髪をいれぬ二ノ剣は袖を掠めた。三ノ剣が、面に命中した。

面は音を立てて割れた。だけではない。するどい卍手裡剣は、ぐさっと眉間に突き刺さっていた。

「――やはり！」

藤内はその顔を見て口走った。

小太夫には似もつかぬ、精悍な顔をした男だった、

「乱波が入ったぞ、用心せい」

藤内はただちに、輩下へ命じて、屋形の内外、胡乱の者を探させた。公卿たちはもとより武将のほとんどが集ったのだから、従者が多い。身分も雑多である。綺羅を張るために、一時に小者を増やしたりもしているのだ。

〈探せ、胡乱の者あらばいかなる奴でも、ひっ捕えよ、逃げたら殺せ〉

うわべは、平穏な能楽の風流の刻が流れ、その底に、隠秘な忍者狩りが行われているころ、尾和兵庫介は、あの教堂で右京を発見している。

その端緒は、甲作にもたらされた情報だった。誰とも知らぬ、通りがかりの女性からことづてされたといって知らせに来た者があった。その女性が、傀儡女忍の花乃ではなかったかと推測したのも、後のことである。

ただ、教堂、とだけだった。仁保の兵庫介は甲作からそれと聞いて城下数ケ所の教堂をおとずれて右京を探しもとめていたのである。

そして、夜明けの光りのなかで、右京を漸く発見したのだ。

「右京、おれだ、兵庫だ」

欣喜した兵庫介の顔を、しかし右京は虚ろな眼で眺めるだけであった。

「なんとした、おれに気がつかぬとは……」

悲惨なその姿に、兵庫介の眼からはらはらと玉の滴がふり落ちた。

「神ノ思召シデス、祈禱（オラショ）シテイレバ、恩寵（ガラシヤ）ガアリマス……」

フェルナンデスのもっともらしい顔つきが、兵庫介を反撥させた。

「何を吐かす、外道め。まやかしの坊主が、そこのけい」

フェルナンデスを突き飛ばし、右京を背に負おうとしたとき、朝の静かな空気を乱すような潮騒にも似た喊声が、遠く聞えてきたのである。

地獄の門

一

佐波山頂に、唐菱の長旒を望見したとの注進があったときも、義隆は平然と盃を重ねていた。

唐菱は陶ノ安房守隆房の家紋である。

「まさか、五郎がの……」

と、打ち笑って、

「見まちがいか、さもなくば、威しの……」

文弱の徒に堕した義隆の感覚が、戦さとは迂遠なものになっていたせいもある。この楽しい刻を持続したい気持が、居並ぶ公卿たちはいうまでもなく、主君を見ならって管弦歌舞の風流の味を知りそめた武将たちをも、巻きこんでいた。

ある本には、――観世太夫を召して猿楽を催し、賓主、皆、笑壺に入る、計らざりき、漁陽の鼙鼓（へいこ）、近く、館外に迫らんとは。と、ある。

あるいは、最初の注進のとき、軍勢を糾合したならば、勝たぬまでも、戦さらしい戦さが出来たかもしれなかった。

当時の戦さである。佐波山まで奇襲しただけでも、陶ノ軍が先手をおさめている。堂々たる合戦をこそ、隆房としても望んでいたにちがいない。

が、法螺を吹き、喊声をあげ、おびただしい長旒や旗指物が丘の陵線をふちどってもなお、動き出す様子もないと見ると、もはや、遠慮なく、人馬雪崩れをうって押し寄せてきた。

「殿！　一大事にござりまするぞ、やはり陶ノ安房が軍勢五千余騎！　逆心おこしてのことと存じまする」

冷泉隆豊がおもてをおかして、

「急ぎ、御用意あらせ給え、こりゃ、皆の衆戦さ支度を！」

「待て、あわてるな、見苦し」と、まだ大様にかまえて、「安房には五千もの軍勢なぞあろうはずはない。よい加減なことを申してはならぬ」

「ええい、殿には、戦さてふものを、何と思召してか」と、隆豊はもどかしげに、「安房いちにんで

はありませぬ。紋どころより察しまするに……」
「他の者もか？」
「されば、徳地口は内藤下野、小幡左衛門、柿並小平太、羽仁中務ほか。防府口からは、江良丹後、宮川甲斐、尾和備後の面々と見うけまするわい」
「げっ！　それでは今朝、遅参者どもがぜんぶか！　す、杉伯耆は？」
「いまだ報ありませぬが、おそらく一味同心、後詰か、さなくば長州口にてもあろうか」
「大事じゃ」
はじめて、義隆は叫んだ。
「太刀！」
と、手をのばす。
心あるものには滑稽というしかない、こうしたありさまも、泰平に酔った人々だから、しかたがない。義隆の狼狽を見て、はじめて、腰を浮かした。
上臈姫君は泣きさわぎ、公卿たちは老いも若きも、冠を飛ばし、笏をなげうち、太刀よ長刀よと、口々に喚き立つ。袴を踏んであるいは転び、狂ったように瓶子の酒を口呑みする者、文字通り、手の舞い足の踏む所を知らぬ狼狽ぶりで、それは舞台の者も同じだ、笛や鼓をなげ捨て、転る鼓に足をとられて、転倒する。そやつに躓いて倒れ重なる。
それまでがそれまでで、優雅な起居動作だったから、死の恐怖が大津波のように押し寄せたとなると、救いようがない。
楠の歯を引くような注進は、寄手の進撃がすさまじく、要所要所をおさえた心憎いまでの采配で、一刻とたたぬまに、鳴滝坂から、矢田ヶ原一帯、おびただしい軍勢と喊声にうずめられていた。
義隆は、漸く重代の鎧を身にまとい、近習小姓らから女たちまで五装束。
寝殿に床几を据えて、うちかけ、黄金作りの太刀を佩くあいだも、義隆は、
「まさか、五郎が……」
と、呟やいていた。
かれは、おのれの過去の仕打ちを忘れていた。

武将としての過去はあれ、二位ノ兵部卿兼侍従の身分に酔って——いや、典雅な公卿になるためには、おのれの身についた武将の兇暴な血を、かえり血を洗い浄めなければならなかったのであろう。それはおのれ自身が、過去の荒々しさを忘れるに如くはない。そして忘れ得た。
唐菱の長旒と兵馬の喊声は、公卿から武将の過去へかれを引きもどしたのである。

二

義隆の趣味に合わせて、武を怠り、みやこ遊びに堕していた武士たちであったが、それでも陣鼓を聞くと、烏帽子や冠を、かなぐり捨て、銀箔捺した裼の直垂を脱ぎ、厩から痩せ馬を引き出し、弦に鼻脊をこする閑も惜しく、弓矢とって、屋形に馳せ参じる。
前記、吉田物語によると、人数を持ち候ほどの者は一人も味方仕らず——つまり大勢の士卒を召抱えるほどの大名は一人もいず、せいぜい三十騎くらいの小身者ばかり、というのだが、それほどではなかった。
だいたい大内方は、四千人前後だったようだ。
武装して、駈けつけたが、しかし、この希有の謀叛に遭って、動顚したのであろう、それぞれに人を疑い、胸襟をひらかず、意見百出して愚図愚図手間どり、反撃の機会を失ってしまったという。そのあたりがほんとうらしい。
まず、相良遠江守武任、二百余騎を以って、鰐石川に向った。
さすがにこうなると、事件の張本人だけに真っ先かけた。
つづいて鷲頭玄蕃隆政も同じく二百余騎で氷上縄手に向う。搦手には、岡部左衛門太夫隆景の三百余騎、冷泉判官隆豊もほぼ同じ軍勢を率いて祇園堂前に陣を張る。
天野隆良、黒川隆像、香川遠江守らはおよそ一千七百余騎を以って、築山屋形の前後を守る。
人馬東西に馳せ違って城中城下の騒動、鼎の沸くような騒ぎになっていた。
町人、工匠、百姓までが、城下近くの者は家財

道具を或は背負い、或は車などに積んで子の手を引いて逃げだす。避難民の流れは、激流の渦巻くように、城下の四方八方の出口へ殺到する。

義隆は、武装すると、近臣、同朋衆、女房らを侍らせたほか、宝蔵の扉を開かせて、宝物を広場に山と積ませた。

この時代――かなり後までも、戦さに分捕りはつきもので、劫掠や凌辱は、勝軍の特権とされていた。

雑兵らは、まずしかたがないとしても、将士までも、占領地の婦女子を凌辱することを愉しみとし、それは道徳的になんら制馭するものはなかったのである。これを抑圧されては、戦う気がなくなる。人間が最も原始的欲望のままに生きることを許された時代ともいえる。

強者は栄え、弱者は地虫のように死んでゆく。これとても乱世では、自然の摂理と信じて疑わなかった。

義隆の意図は、もし、敵勢が乱入してきたら、宝物に目を奪わせ、そこを押し包むか、反撃の矢を飛ばそうと考えたらしい。

それでも、ことに珍品は身辺に置かせた。

この中に、ザヴエルがもたらした〃十三の宝物〃も入っていた。

それは、大きく優美なる置時計（矢倉立か判然としない）、貴重なる三銃身の銃砲、錦襴の布、美しき結晶ガラス、鏡、眼鏡などより成っていた。

ことに銃砲には、弾丸をこめ、手の届くあたり、小姓に抱かせた。

相良、鷲頭らの先鋒が、気鋭の敵勢と槍を交え、惨敗を喫し、ために鰐石川を血河と化せしめて泡立てたのは、僅か四半刻の後であった。

敵勢が五千、味方が四千前後なれば、さしたる差とはいえない。

他国の城構えに比べて、堂上風に華麗な寝殿は、矢倉もなく、塀も低く、要害六具の備えもない。にしても、攻めると守るでは、この軍勢差はほとんど問題になる数字ではなかった。

鰐石川の戦闘が、ある意味では、勝敗の鍵でもあった。

緒戦の失敗が、屋形勢に及ぼした影響は尠くない。

ふいを衝かれた屋形勢と、かねてよりの逆意を、この一刻に賭けて、奇襲を敢行した陶の軍勢とでは、意気ごみからしてすでに違う。矢交ぜ、槍合わせ、すべて、寄手が強く、諸方の敗兵、三々伍伍、遁れ走って帰ってくる。

前衛がまさか、こうもだらしがないとは思わぬから、祇園堂前の冷泉隆豊の中備えは、布陣に手落ちがあったのであろう、搦手から疾風のように襲いかかった尾和備後守の槍騎隊に蹴散らされて、一たまりもなく敗走した。

この惨鼻凄絶な血風の渦巻きの外に尾和兵庫介は在った。

三

家兄の率いる精鋭が、冷泉隆豊の座陣を鎧袖一触に蹴散らしたことを兵庫介は知らぬ。

「右京、戦さじゃ。暫くここに居れ」

石段の下に横たえて、飛ぶように駈け上ると、小手をかざした。

陶ノ隆房が唐菱の紋どころをはじめ、江良、杉などの家紋と見てはじめて、それと知った。

「ううむ、この分では兄者も、一味同心か。道理で病いをかまえて登城せず、剰え、おれを阿知須に呼びもどそうとしていたのは、これか」

急ぎ降りるや、

「この分では、おれの屋敷も戦場になるわい、おぬし、勝敗の決定がつくまで、やはり河童坊主の世話になっているがいい」

右京をまた教堂に運ぶと、兵庫介は、刀の鐺をはねあげて走りだした。

その後ろ姿を見送って、庫裡のかげから、一人の女が出て来た。

別段、病気らしい様子はない。右京に近づいていった。

「右京さま……」

と、耳に口を寄せて囁いた。右京は、ふり仰いで女を見たが、記憶にないらしく、また虚ろな視

線をもどした。

もしも正気だったなら、その眼には驚ろきと好奇の色が掠めたろう。煤で汚してはいたが、先日の朝まだき、乳色の霧のたゆたう川原で、火焙りになっていた傀儡女——左様、花乃にまぎれもなかったからである。

「おいたわしい……あたしのために、こんなお姿になられて……」

花乃は、今朝、雪乃の姿を目睹したのだ。秘所は縫合されて、女ではなくなっていたが、かえって、勘が鋭くなっている。

（あの喜びようでは……）

右京を発見したのだと察して、この寺を訪れたのである。

もとより、兵庫介の前にも姿はあらわせない。右京が、気ふれでなかったら、近づくのはやめたろう。

「——何かの拍子に、正気にかえられるまでいい……お仕えしたい」

右京を愛する気持ではない。罪をつぐなうための奉仕。それは兵庫介への愛の変型といえるかもしれない。

非情冷酷に生きることが、傀儡忍衆に課せられた宿命であったが、いやそれならばこそ、傀儡女の宿命をふり切るように、なかまから離脱した花乃が、人間的になろうとするあらわれだったのである。

教堂の谷を出た兵庫介が、混乱の城下へ走って行くのをふと見て、

「彼奴！」

と、口走った者がある。

七尾山のほうから来た一団だった。男女とりまぜ二三十人いた。

「どうした？」

傍の男も足をとめた。

「れいのやつだ」

「ん？……ああ、花乃を」

それだけで意は通じた。

「殺るか」

「殺らねば」

二人が頷きあって走りだそうとする。

「待て、汝ら、何処へ行く」

土蜘蛛がひきかえしてきた。

「兵庫めでござる」

「知っている。わしも見た。よせい。彼奴らにかかずらっているときではないと申したはず」

「手間とりはしませぬて」と、赤犬はみすみす掌中の魚を逃す口惜しさで、「追いかけて、一撃ち……百と数えぬうちに」

「よせと申すに。汝らの気性、ついでにお屋形も討ちとる心算であろ」

「えっへへへへ、この騒ぎですって。屋形に唐菱どもが攻めこんだ際にまぎれこめば、何の雑作もいりますまいて」

「甘いぞ、見方が。義隆の身辺には、雲ノ忍衆が張っているわい。すでに影武者とも変じていよう」

「さ、それは何とも」

「たわけ、わしの目を信ぜぬか。呪師（のろんじ）の砂阿弥がまぼろしにも、それと出たわ。義隆は屋形のうちでは死なぬ」

「……」

「洞じゃ」

土蜘蛛の老躯を黄塵がさらった。赤犬たちも、その風に乗った。

四

怯気に犯された目と、勇気に左右される目とでは、同じ映象でも、神と悪魔ほどのちがいがあるものだ。なまなかなボクサーなら初めのラウンドで猛攻して畏怖させることが、試合運びをマイペースに持ちこめるように、初戦の如何が、合戦を支配する。

屋形側は、もはや、かなわぬ、とあきらめてしまって、

「奇は正に勝つとは兵法の真意にござりましょう、もはや、勝気これなくんば、武門の意地、総合戦に出でて、斬死つかまつらんこそ、武士のほまれにござる」

城門をすべて開き、はなばなしい斬り死を主

張するのは、冷泉隆豊、岡部左衛門大夫らであった。

だが、かれらのような勇武の者ばかりではない。いや、むしろ、いのち惜しみの屋形侍のほうが多い。

相良勢が初めに討って出たとき、足を挫いたなどと称して、義隆の傍にへばりついていた清ノ四郎は、

「わたくしは左様に思いませぬが……」

と、義隆の顔いろを窺いつつ、黄ろい嘴をさしはさむ。

一度、遠江守に与えた四郎であったが、その意見が、おのれの怯懦を陳弁してくれるとなると、地獄で仏だ。

「四郎は、なんと思うぞ」

「直答は恐れ入りまする。殿へ申し上げまする」

と、相良遠江守のほうをむいた。

遠江守は、苦々しげな顔で、うなずく。さすが荒大名も、敗軍の将となっては、いつもの我意をおさえるしかない。

「勝敗は、兵家の常にこそ候えば、一敗を以って勇気を挫き給うべきにあらずと考えまする」

「……」

「漢ノ高祖は、七十二度の戦いに敗れしも、烏江の一戦に敵を滅したではありませぬか。天運、すでに尽き給わずば、今日敗るるとて、明日は、勝利を得給うべし、一先ず御屋形を開きて、法泉寺に入り給い、陶に一利を与えて和睦を求めるが、上策と存じまする。彼、たとえ虎狼の心、猛しと雖も、もし累代の御恩を思い候はば、従うものと存じまする」

理路整然、黄口児とあなどっていた者たちも、顔を見合わしている。

義隆は、助った、と思った。

総合戦といっても、泰平の贅肉がつき放題について四体の動きも鈍くなった義隆には、自害しか手はないのだ。

「左様なる存念か。よきに計らえ」

と、下駄を預けた。

清ノ四郎は陪臣なのに妙なことになってしまった。

法泉寺は、大内家累代の菩提所で、築山屋形の西北方にあたる。

義隆とその家族は同朋衆、近習らに守られ、公卿や上臈姫などとともに、法泉寺へ移る。

このときはまだ三千余騎が残っていた。法泉寺から、獄ノ観音寺、求間持堂に配されていたが、一夜明けると、守兵は半分に減っていたという。

敗色に耐えられなくなった者たちが、あるいは逃亡しあるいは寝返りうったのだ。

もはや誰の目にも大内家の衰亡は明らかだった。

公卿らも昨日の栄華に変る悲惨にただおろおろするばかりだった。もはや残る手は一つ、陶の条件を容れて和睦するしかない。

使者には日野大納言資宣卿が立った。一方、夜にまぎれて、救援の軍を頼む早馬を石川に走らした。津和野の吉見正頼なら、義隆の危機を黙過すまい。藁にもすがりたい気持であった。

案じたごとく、日野大納言の和睦申し入れは、血まみれ武者たちに一蹴されてしまった。

義隆の申し出た条件は、一つ隠居すること、嫡男（ということになっているが義隆の血はひいていない）義尊を後嗣とし、陶、杉、内藤の三人を後見とする、という案であった。

後見というのは、義尊が幼ないから事実上政治の権を与えるということになる。

陶方では、れいの大友義鎮の舎弟晴英を迎えることに黙契がなっているから、呑むどころか、検討の余地もない。

「たわけな、戦さ半ばでござるぞ、由来和睦とは互角の勝負のときにこそ成るものでござる。長袖衆には武門のことおわかりなさるまじ、足もとの明るいうちに早々、お立ち帰りあって、二位ノ殿の首でも洗うがよろしかろう」

勝利に酔い、血に酔った荒武者たちの嘲笑を浴びて、大納言ともあろう者が、とんだ赤恥をかかされて帰ってきた。

その上、寄手の意思をはっきりと見せたのは、あの華麗な築山屋形を、まるで草廬かなんぞのよ

うに、いとも簡単に火を放ったことだ。
もとより、おびただしい財宝は分捕りされたのであろう。屋形を包む猛火と黒煙はたちまち初秋の天を蔽い、地獄の業火のように燃え上った。

五

ここに至っては、いのち惜しみの義隆も詮かたない。自害の腹を決めた。
それをとどめたのは、清ノ四郎であった。陶ノ隆房と内通し、義隆を憎んでいるかれが、自害をおしとめたのは、どういう理由か。
「まだまだ、諦め給うべきではありませぬ。いまだ、安全の地もございまする。筑前に落ちさせ給いて、再起あってこそ大内家の社稷を全うすること。お屋形の執るべき道にござりましょう」
と、おもてをおかして、自害を思いとどまらせたという。
野史には、この前夜、義隆と四郎は、〃懇ロナリケレバ〃とある。男色の間がらであったが、不興を買って、遠江守に下賜されたことは前に述べた。この記述が正しければ、死期の迫った義隆が、四郎の忠誠？ に感激して、ヨリをもどしたのか、惑乱した頭では、人にやったのを忘れてのことか、ともあれ、男色関係が再燃されたと見ていい。
だが、氷のような四郎の心情が、その寵愛に飜然したと見ることは容易すぎよう。おのれの保身というよりは、こうした陰湿な男の考えとして、最後の復讐。義隆を〃いのち惜しみの二位ノ殿〃という汚名を末代まで残すためと、最後には、おのれの手で、白豚のようになった首を苛み、掻き切りたいためではなかったか。
そのためには、雲ノ忍衆、鹿又らの目がなくなるまで義隆を生かしおかねばならぬ。
義隆も、まただらしがない。四郎に奨められると、簡単に短刀を手から放している。
だらしないといえば、公卿たちも、勝手なものだ。法泉寺にどっと敵勢が襲いかかってくると、もはや、義隆にくっついていては、同罪になるから、大納言資宣は、塀から天上眉の首を出して、

「如何に者共、月卿雲客、ここに在り、汝ら心あらば、陣を開きて、通せよかし」
と叫んだという。
乱世に公卿の権威もないようなものだが、言ってみるものだ。敵勢は、刃をひいて道を開いたのである。
公卿とその上臈女房姫君、ならびに従者たちは、われ先にと、寺から逃げだす。さんざん栄華をさせてやってこれだから、義隆も、全く、救われぬ思いだったろう。
もっとも、戦場馴れした冷泉隆豊はこれを見逃さない。
「味方、ことごとく討たれて勢い、すでに尽きて候。当山の後のみは、敵も未だ囲み候わず、此処より山伝いに長門の方へ落ちさせ給うべし、長門よりは筑前への道路もござりまする。筑前にて再起いたせば、豊後の御姉婿修理大夫殿もお力となり給わん」
と、奨めたという。
公卿の群れに交って近臣らとともに法泉寺を逃れたのである。
敵勢は公卿女房らが散ってから、寺内に乱入したが、義隆の姿が見えないので、また火を放ち、
「ちッ、彼奴、長袖衆にまぎれてぞ、追え」
切歯して追撃にうつる。
こうなると、もう公卿もくそもない。義隆と同心で、謀ったとしか思われない。関白も左大臣もあるものかと、手当りしだいに公卿を捕えたり斬ったりした。やんごとなき上臈姫君たちも、野獣の手で裸にひき剝かれ、路上といわず、草むらといわず凌辱される。
三条左前大臣公頼、二条前関白尹房もこの混乱の中で殺されてしまった。これほどの身分の人で、こんな死に方をした例は古今にない。いかに、混乱が凄まじかったかわかるのである。
たくみに、生きのびた人もいる。右大臣の一条兼冬などは、生命を全うして、京へ帰り、二年後には関白になっている。

六

もっとも、お公卿さんを惨殺した兵の名前も残っていないし、誰の軍勢かわからない。すべては混乱で片づけられてしまったが、義隆が落ちてからの山口は、近在の悪党、火事場泥棒が跳梁して、

——かかる時節を待って、引き剝ぎし、撃ち殺し、資財を奪い取り、民村に押し入り、町屋にふみ入りて、おさえて金銀を掠め取るなど、前代未聞のありさまなり——（陰徳太平記）

というのだから、前ノ関白は乱民の犠牲になったかもしれないのである。

ジョアン・フェルナンデスが目のあたりこの混乱を見て書いた書翰が残っていて、それには、

——此の戦争と言うのは、数名の武士（大名の意か）が領主大内殿を弑虐して、その国土を簒奪しようと企てた為に起ったのです。八日の間、山口の町は剣戟と兵燹に包まれ、その間に行われた標語というのは、生きる者勝ち、と言う事でした。復讐の目的で殺戮を恣にする者もあるし、掠奪を目的とする者もありました……

と、ある。トレスらもこのとき乱民に襲われているのである。

シュタインの「切支丹大名記」には、当時の山口の人口五万、とあるから、四百余年前の地方都市としては、想像外の殷賑ぶりだ。日本一の都邑と称される所以であろう。

この大都会が業火に包まれ、乱暴狼藉のかぎりを尽くされたのだ。死屍累々として阿鼻叫喚が火焔と煙りをあふり、醜状目を蔽うばかりだった。

義隆は川阿弥という同朋に背負われ女たちとともに宮野の妙喜寺へ落ちてゆく。もう家族もばらばらだ。

清ノ四郎はしかし、義隆に卑怯者の汚名を重ねさせはしたが、首を討つことはできなかったようだ。説が二つある。一つは、具足を脱ぎ捨てて、破れ衣を着、菅笠に面てを隠して逃げようとしたが、敵兵に発見され、農家の床下に逃げこんだ。柱にしがみついて出てこないので、雑兵は怒って、槍や薙刀で滅多突きに殺してしまったという。

いま一つの説は、途中義隆を殺そうとして、雲ノ忍衆に発見され、すんでに危ないところを、猿のような男が現われて何処かへ連れ去ったという。雲ノ忍衆の一人に、猿ノ彦なる者あり、遠江守の命令で四郎の男根を羅切したというから、あるいはその者かもしれない。

さて義隆の一行は追手を逃れて、西へ山越えして長門へ入った。綾木から岩永を経て、瀬戸崎に出た。日本海である。漸く助かったと思ってほっとしたことであろう。

一行は数隻の船を徴発して、筑前を目ざして漕ぎだしたが、数町にして突如、凄まじい颷風が吹き荒れてきたのである。

義隆らの船のへさきに、白いものがまといついたと思うと、するするとあがった。それが、女の裸身であることに気がつくまで、暫く間があった。その人魚のような女が、濃霧が生じた幻覚か、生身の女体か、判然としないうちに、一天にわかにかき曇り、波狼が天に吼えて、豪雨を呼び、強風これに応えて、すさまじい嵐となってしまった。

「やあ、奇怪な！　傀儡の忍法に《海浪颱風》のワザありと聞く」

君側に侍っていた雲ノ忍衆鹿又とその下忍らは、手裡剣を雨のように、女体に飛ばしたが、颱風はこれを虚しく宙に舞わせただけで身に一剣も受けつけなかった。その姿さえおぼろな暗夜の海上であった。

いまはもう、雲ノ忍衆に出来ることは、身を以って、人楯となり、義隆を守るしかなかった。

「漕ぎもどせ、岸へ」

腕の折れるかぎり漕いだ。漸く、深川の港へ入ったとき、義隆は、おのれの四囲の人楯が、雲ノ鹿又一人を残して消え去っているのを知った。波浪に呑まれたのであろう。へさきの奇怪な女忍もまた消えていた。

深川に降りたつと、大寧寺という寺に入って休息した。曹洞宗だ。住職は倚雪といい禅知識であった。

ここで義隆は幾分、冷静になれたのか、すでに脱出をあきらめて、辞世をしたためたという。

討つ人も討たるる人ももろともに
　如露亦如電応作如是観

と、あったというが、事実かどうかわからない。後人の捏造のようでもある。

最後まで供をした冷泉隆豊の辞世というのも残っている。

見よや立つ雲も煙もなか空に
　さそひし風の末ものこらず

と。これは、大寧寺に敵勢が押し寄せてきたのを、敢然と邀撃して左腕をつけね近くから断たれるや、方丈にとってかえし、右の食指をもって、肩からあふれる血どろをすくい、明り障子に鮮血淋漓としたためと伝えられる。

執拗な敵勢、すでに沢江と河内まで迫る、との報が伝わると、倚雪和尚は、義隆と二条左大臣の若君三位中将良豊ら四人を裏山の洞に隠した。

十間ばかりの深い穴で、入口は雑草が垂れてちょっと誰も気がつかない。

大寧寺を牙城として、冷泉隆豊と忠誠の臣数十名がここを先途に死闘半刻、遂に大半が討たれ隆豊は割腹し、余は八方へ逃れ去って、大内義隆最後の光芒も消えた。残敵捜索がきびしく三日にわたったのは、義隆の首級をもとめてのことであろう。

傷つき捕われた黒川近江守が、最後の奉公のつもりであろう、昨夜の嵐で、海中へおち給い、藻屑とならせ給い候と言い張って責め問いに耐えながら死んでいったので、漸く、陶の軍勢もあきらめて去った。

仙崎に避難していた倚雪和尚が洞穴へもどってきたのはその後である。

「みんな引き上げましたぞ、安心してお出なされ」

洞の入口で呼ぶと、良豊ら四人がのこのこ出てきた。

「お屋形は？」

用心深く、最後からと、言ったという。だが、待っていても出て来ない。不審に思って呼んだが返事もない。良豊と和尚は、洞の奥へ引きかえしたが、手燭の仄明りの中に照らされた義隆のからだには、首がなかった。

坐禅を組んだまま——首の切り口から、鮮烈な血が噴きだして、地下水よりも強くぎらぎら光って鎧にしたたっていたのである。

和尚はあまりのことに声も出なかった。恐怖は、ついいましがた切られたということだ。せまい洞は、人一人しか通れない。淡い魚油の明りとはいえ四人の目にもとまらず、誰が侵入出来ようか、和尚は、四人の誰かが下手人かと疑ったほどである。が、その首も、洞穴の中には見当らなかった。

奇怪というしかない。

ともあれ、義隆の遺骸を外へ引きだしてみて、人々は、はっと息を呑んだ。

その首の無い斬り口の血泡のぶつぶつとまだ噴きでているなかに、巨大な女郎蜘蛛が、手足をひろげて、凝っとうずくまっていたのである。

私見を許されるならば——あの傀儡忍衆の頭領土蜘蛛のこれは自讃をこめた悪戯ではなかったろうか。安芸の毛利元就のもとに運んで、その首級の重さに等しい黄金を手に入れてにたりと北叟笑んだ顔が目に浮ぶ。呪師が占った〝洞〟というのが、その間の消息を物語っているようだ。戦前、広島の郊外了円寺境内に首塚があり、義隆の首級が埋められていると住職が話していたが、原爆でどうなったか、戦後の地誌では全く触れてない。

貢

0093—110617—3828

くノ一秘図

著作者＝早乙女　貢

発行者＝土井　勇

発行所＝株式会社　青樹社

東京都千代田区三崎町二—六—七　郵便番号一〇一

電話東京二六一—九七六六・二六三—七二六七　振替東京六七六四八

印刷所＝有限会社　八光印刷

製本所＝土開製本株式会社

落丁・乱丁本はお取り替え致します

◈定価・発行日はカバーに表示してあります

又四郎行状記	山手樹一郎	六五〇円
殿さま浪人	山手樹一郎	五六〇円
虹に立つ侍	山手樹一郎	六五〇円
恋風街道	山手樹一郎	四五〇円
江戸の虹	山手樹一郎	六〇〇円
青春峠	山手樹一郎	五二〇円
仇討ごよみ	山手樹一郎	六〇〇円
生命の灯	山手樹一郎	六〇〇円
辻斬り未遂	山手樹一郎	六〇〇円
天狗くずれ	山手樹一郎	六〇〇円
恋名月	山手樹一郎	六〇〇円
ぼんくら与力	山手樹一郎	四〇〇円
和蘭囃子	山手樹一郎	四〇〇円
青空浪人	山手樹一郎	四〇〇円
青空の如く	山手樹一郎	四〇〇円
ぼんくら天狗	山手樹一郎	五二〇円
花のお江戸で	山手樹一郎	四〇〇円
ぼんくら千両	山手樹一郎	四〇〇円
スパイ武士道	池波正太郎	三八〇円
主水血笑録	柴田錬三郎	三八〇円
青雲を指す剣	南條範夫	四〇〇円
最後の伊賀者	司馬遼太郎	三五〇円
おんな無用	五味康祐	三八〇円
色の道教えます	五味康祐	五二〇円
総司はひとり	戸部新十郎	五二〇円
すみだ川余情	井口朝生	四八〇円
源平の古戦場を行く	鈴木亨	五〇〇円
戦国古城の旅	鈴木亨	六五〇円

好評発売中・青樹社版

空蟬忍法帖	早乙女貢	四八〇円
忍法紅絵図	早乙女貢	五二〇円
黒虫忍法帖	早乙女貢	五〇〇円
伊賀忍法	早乙女貢	四〇〇円
忍法くノ一	早乙女貢	五八〇円
山彦忍法帖	早乙女貢	四〇〇円
くノ一秘図	早乙女貢	四〇〇円
忍法赤い城	早乙女貢	四〇〇円
甲賀忍秘抄	早乙女貢	四〇〇円
女忍殺法帖	早乙女貢	四〇〇円
甲賀女忍記	早乙女貢	四〇〇円
忍法無情	早乙女貢	五二〇円
忍法系図	早乙女貢	五二〇円
忍法関ケ原	早乙女貢	五二〇円
風魔忍法帖	早乙女貢	八八〇円
相場師	黒岩重吾	五〇〇円
女予言者	黒岩重吾	五六〇円
二つの顔	黒岩重吾	五六〇円
檻を出た野獣	黒岩重吾	三五〇円
墓標との契約	黒岩重吾	三六〇円
渦の中の顔	黒岩重吾	三八〇円
舞台のない踊り	黒岩重吾	三八〇円
崩れた顔	黒岩重吾	四〇〇円
けものたちの砦	菊村到	四〇〇円
夜歌う男	菊村到	四二〇円
海の墓標	水上勉	三二〇円
春の波濤	水上勉	三二〇円
野の鈴	水上勉	四〇〇円
闇の臭跡	草野唯雄	五〇〇円
影の斜坑	草野唯雄	三八〇円

好評発売中・青樹社版

虚無の道標　森村誠一　五五〇円
幻の墓　森村誠一　四五〇円
蒼い高峰群　森村誠一　五二〇円
銀の虚城　森村誠一　四八〇円
むごく静かに殺せ　森村誠一　三八〇円
企業特訓殺人事件　森村誠一　五二〇円
挫折のエリート　森村誠一　三六〇円
古都殺人事件　斎藤栄　四〇〇円
爆破都市　斎藤栄　三八〇円
垂直の殺意　斎藤栄　四〇〇円
レコーディング殺人　大谷羊太郎　三八〇円
死を運ぶギター　大谷羊太郎　四八〇円
マンション殺人　西村京太郎　四〇〇円
鈍い球音　天藤真　三八〇円
死体置場は空の下　結城昌治　五〇〇円

壁が囁く　佐野洋　四八〇円
第6実験室　佐野洋　三八〇円
死神の地図　島田一男　四八〇円
0時間の男　島田一男　四八〇円
美貌の影　笹沢佐保　五〇〇円
透明の殺意　笹沢佐保　四〇〇円
さよならの値打ちもない　笹沢佐保　四八〇円
餌食　清水一行　四八〇円
覆面工場　清水一行　五二〇円
放火倒産　清水一行　四二〇円
死の三行広告　藤村正太　四〇〇円
ホステス殺人事件　西東登　四八〇円
鶯はなぜ死んだか　西東登　四〇〇円
深大寺殺人事件　西東登　四八〇円
サーキット殺人　高原弘吉　四八〇円

好評発売中・青樹社版

肌色あつめ　川上宗薫　三六〇円
落ちる実　川上宗薫　三六〇円
恍惚の刻　川上宗薫　四〇〇円
不倫の巡回　川上宗薫　三八〇円
官能の女　川上宗薫　三八〇円
七色の女　川上宗薫　三八〇円
危険な娘たち　川上宗薫　三八〇円
惚けはてて　川上宗薫　四〇〇円
めざめ痺れて　川上宗薫　四〇〇円
壁の耳　川上宗薫　四二〇円
渇きの日　川上宗薫　四六〇円
蜜月　川上宗薫　四〇〇円
魔女の館　川上宗薫　四二〇円
宗薫のへんな本　川上宗薫　四二〇円
愛戯　川上宗薫　四五〇円

露出願望　宇能鴻一郎　四〇〇円
交換旅行　宇能鴻一郎　四二〇円
肌ざんげ　宇能鴻一郎　四六〇円
官能旅行　宇能鴻一郎　四二〇円
男あさり　宇能鴻一郎　四五〇円
腕だめし　宇能鴻一郎　四五〇円

五日妻　泉大八　四〇〇円
愛好航路　泉大八　四六〇円
かけもち妻　泉大八　四二〇円
少女の薄化粧　泉大八　四二〇円
虚婚旅行　泉大八　四五〇円

おんなの地図　中山あい子　四〇〇円

好評発売中・青樹社版

一発勝負	新橋遊吉	四六〇円
競馬狂い	新橋遊吉	四〇〇円
非情の鞭	新橋遊吉	四〇〇円
黒い本命馬	新橋遊吉	四二〇円
競馬人生	新橋遊吉	四二〇円
競馬番外地	新橋遊吉	四八〇円
叛逆の勝負師	新橋遊吉	四二〇円
落馬の報酬	新橋遊吉	四二〇円
競馬行脚	新橋遊吉	四二〇円
競馬三銃士	新橋遊吉	四五〇円
警視庁ハキダメ一家	樫原一郎	四〇〇円
ニッポン警視庁	樫原一郎	四〇〇円
商魂	梅林貴久生	四五〇円
漢方療法	山田光胤	六五〇円
食餌療法全書	工藤禎	六五〇円

夜の噂	吉行淳之介	四二〇円
街の底で	吉行淳之介	四八〇円
コールガール	吉行淳之介	五六〇円
殺意の競合	黒木曜之助	四八〇円
背信の荒野	加納一朗	五〇〇円
あなたは挑戦者	中島河太郎	四八〇円
仁義の墓場	藤田五郎	四八〇円
無頼	藤田五郎	五〇〇円
走れ青春	若山三郎	四二〇円
叩きつけた青春	若山三郎	四〇〇円
見事な青春	若山三郎	四〇〇円
青春山脈	若山三郎	四五〇円